THE CENTRAL REVIEW

中央公論

3-1919

三月號

第三十四年第三號
第三百六十七號

大正八年二月廿八日印刷
大正八年三月一日發行（每月一回一日發行）

浪六先生新著（創業十週年記念名著出版の内）

裸體の人間

四六判上製美本
紙數四百餘頁
正價金壹圓八十錢
郵送料十二錢

内容目次一斑

●人間▲男女の不用意なる無意識中に祖先を告白す▲創世記の作者▲適化順序十一▲エデンの樂園と佛說▲水中より陸上へ▲飛ぶ鳥と走る獸▲適者生存

●人と魚▲人間界の悲哀と海上魚族の不安▲鰯の生存狀態と人の生活狀態▲一將功成萬骨枯▲弱肉强食▲野蠻の戰ひと文明の戰ひ

●人と猿▲直立猿人▲去闇就明▲木に登る人▲始めて火を知る▲優勝劣敗▲原始人類の棲息分布▲世界人種の代表者集合▲人の手

●人と鳥▲鳥類に於ける二樣の戀愛作用と人間の戀愛競爭▲原始以來の依然たる行爲

●原始的の男女▲有史以前の闇き男女▲單純なる生殖作用▲性慾と體質と食物關係

●男女亂交時代▲性慾の無制限▲刹那の抱擁▲幽かなる感情と朧げの選擇▲酋長と奴隸の原因▲一夫多妻の原因▲内親姦の各國例▲猶いまだ動物系の血を脫せず▲父は子の愛を知らず▲母系的の原因▲姦の父と七面鳥の父▲分裂の小部落

●血を以て女を奪ひし時代▲惨憺たる血祭りを以て女を得たり▲茫々たる原野に赤き血を彩られたる勇者の權威▲强者崇拜の女▲血は遺傳性の色彩▲本能的の潛在▲血の色と火の色

●女を財産とせし時代▲女を家畜に等しき財産として取扱へり▲姦通は盜賊の罪▲最も愛せる女を生きながら土中に埋む▲犧牲の虐殺▲父の愛せし女は悉く子に讓らる▲公然その女を競賣す▲後世の夫に對して妻の貞操なるもの▲鳩の愛と啄木鳥の情

●女の提供を禮儀とせし時代▲女を賓客に提供して相互の親睦を繼續す▲親戚兄弟の間に於ける女の自由交換▲兄の死後その妻に子を産ましむるは弟の義務とせり▲總ての女に寡婦なし

●一夫多妻の時代▲動物性の本能を發揮す▲無人島に漂著せし男女に道德の有無▲弱を去りて強に就く女▲野蠻の鬪爭法則▲一人の男にして數十人その多きは二三百人の女を有せり▲一夫多妻と一妻多夫▲婆羅門敎とラマ敎と釋迦の佛敎▲妻と妾と下婢の遠祖

●婚姻の基礎時代▲希臘のセクロップスと支那の堯舜▲掠奪式の諸婚姻▲暴力强姦式の諸婚姻▲漸く和姦式の婚姻▲媒酌婚姻の起源

●婚姻の賣買時代▲漸く男女の平均數に近づけり▲後世の商取引と等しき婚姻の賣買▲十一歳の處女なし▲親は娘を賣り夫は妻を賣る▲勞働に服して妻を買ふ▲年々一回の總婚姻▲日數を限れる夫婦

●一夫一婦の婚姻▲一夫一婦は人道より來れるか男女平均數より來れるか▲財産分配の關係より來たる一夫一婦▲戀愛と一夫一婦

●我帝國の太古▲貝塚と石器と土器▲竪穴と横穴▲先住人▲我々の祖神▲アイノ人とアイノ語▲我々の祖先は既に文化を得たる人類▲

文明の裝飾を悉く剝ぎ取りし「裸體の人間」こゝに出でたり製本また總ての無用なる粧飾を廢して趣味と實益の兩方面より內容を充實せしむ浪六先生三年以來の著書を人間あらゆる階級に薦む

初版
再版
三版四版
忽ち賣切
五版出來

蝦夷と熊襲と土蜘蛛と國栖▲高天原▲天神と國神▲日子と日女▲豐葦原の瑞穗國●我國の國民性▲天神の皇室と國神の臣民▲同一の言語と歷史を有せる同一の人種▲家族の膨脹せる國家▲祖先崇拜の民▲我國の神▲西洋のホームと我國の家庭▲家族觀念の結晶體▲陛下の赤子▲家の意味▲世界第一の深癖▲自殺▲はらきり▲剛健なる母胎●習慣力▲習慣と因慣と染慣▲數多の處女を裸體のまゝ體操せしめしスパルタの古昔▲德川家の大奧に女の裸踊り▲男女混合浴▲西藏佛教の古派▲我國に傳來せし密教中の立川流▲聖天の本質▲婦人の世界三大奇習●遺傳性▲原始的の遺傳性▲東西の性善說と性惡說▲醫學上の直接遺傳と隔世遺傳▲累積遺傳より來りし男女の大小强弱●戀愛史▲そもそも裸體の一局部を蔽へり▲羞恥の念を兆せり▲戀の萌芽▲神扉の開閉▲恥辱と忸怩▲人間は戀の動物▲戀に拂ひし多大の犧牲▲離れ難き感情と孤獨に堪へざる人情▲いづれの世にも不可解なる戀の生命▲いかなるところにも戀は潛む▲一夫多妻の戀▲一妻多夫の戀▲單純なる戀と複雜なる戀▲不倫中に潛める戀▲蠻風時代に優美なる英雄の戀▲伊邪那岐命と伊邪那美命▲日本武尊と弟橘姬▲松浦潟の化石▲男女相互の潛伏性▲去勢術▲戀の分量▲蟬太子▲生理的色情▲情死に於ける東西の差別▲奈良王朝時代の戀▲平安朝の戀▲藤原氏全盛期の戀▲源平時代の戀▲建武中興より足利氏時代の戀▲元龜天正年間の戀▲小野お通の淨瑠璃物語▲元祿時代の華奢風流▲近松門左衞門の心中もの▲情死多數の理由▲現代の美術眼▲現代の戀愛狀態●戀の罪▲姦通▲生殖慾の錯亂▲姦通に對する世界各國の復讐時代▲支那の姦通と儒教▲我國の姦通▲貞操と姦通●赤裸々▲衣服の粗密と美醜▲外皮の色彩▲人體美▲人體の典型標準▲男女の體質比較▲世界人種の體格順序▲我國民の矮小となりし理由●人の首▲羅馬のシーザーと我豐太閤▲首に關する俗諺の解▲額は心の索引▲絕對無比の巧妙▲五官の作用▲顏面の輪廓典型▲眉毛の標準と眉毛の諸說▲男子の眉と女子の眉▲眼の標準▲眼は人間の品位性行を現はせるもの▲眼の表情▲涙の解釋▲涙より生ずる人生の千態萬狀▲鼻の權威▲鼻の高低大小▲鼻毛▲耳の標準▲耳の解釋▲耳の諸說▲耳と長壽▲耳と幸福▲口と舌▲口の種類▲舌の味覺▲顏面の觸覺●人の頭▲五官機能の中樞點▲人間最上部の貴重品▲大腦と小腦▲男女の頭腦比較▲世界各國人種の腦量▲頭腦の使用▲頭腦の不完全▲大腦と年齡●人の質▲肉體と精神の關係▲人間の性質を推定すべき四大別▲多血質の解釋▲神經質の解釋▲膽液質の解釋▲淋巴質の解釋▲以上四質の觀察法●晝夜の人間▲晝の人間と夜の人間▲罪は闇きところに生ず▲夜間の罪惡▲社會的と個人的と二種の生活▲酒色の人▲男よりも女の大腦▲惡魔は闇夜より人を招く▲太陽の光線●文明病▲虛榮病▲誇大妄想病▲學問の中毒病▲肺結核

* * * * *

發兌
東京日本橋本石町
振替東京一七四四四
至誠堂



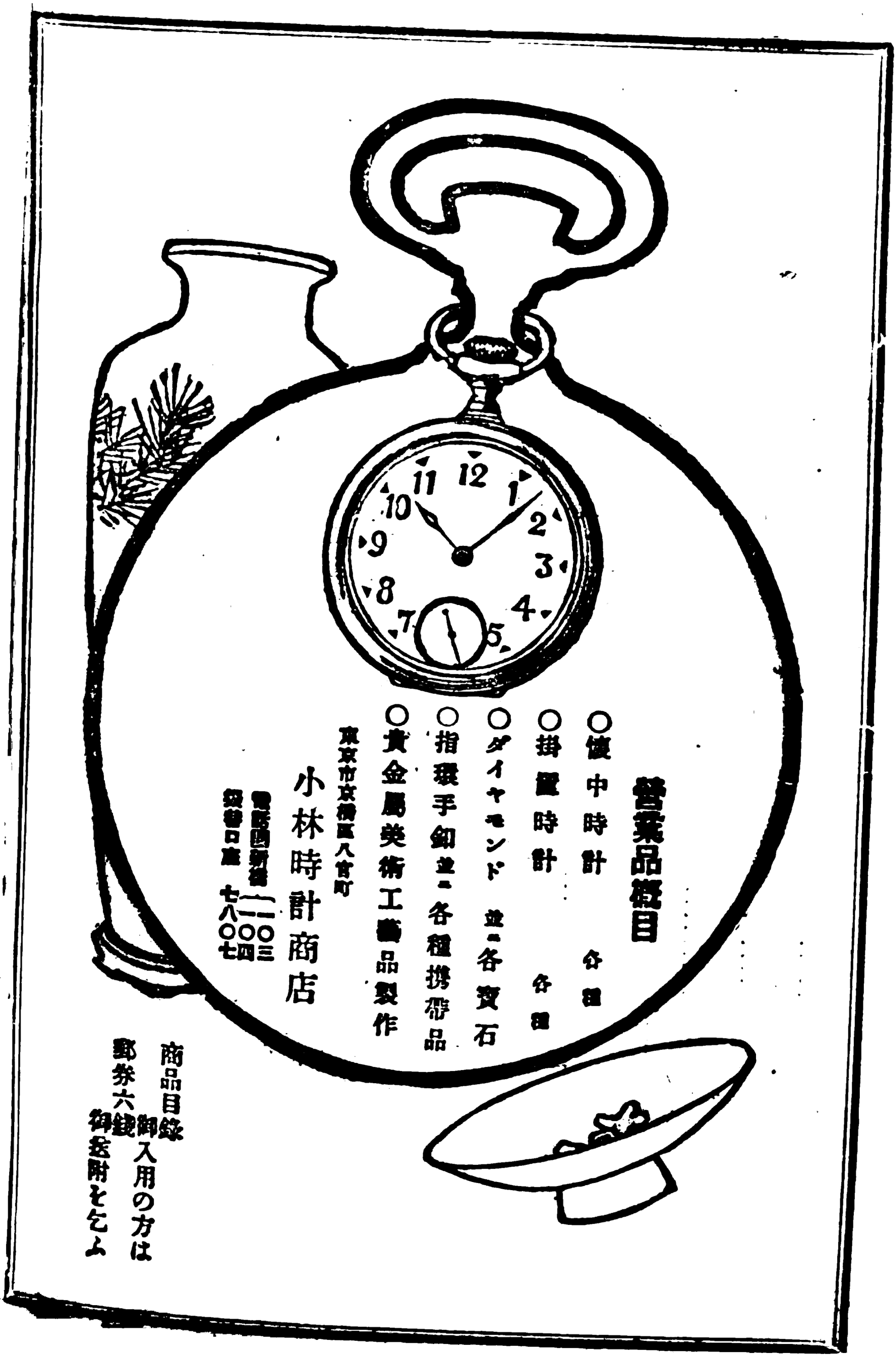


中央公論第卅四年三月號目次

▼公論

▼說苑




營業品種目
○懐中時計　各種
○掛置時計　各種
○ダイヤモンド並ニ各寶石
○指環手釦並ニ各種携帶品
○貴金屬美術工藝品製作
東京市京橋區八官町
小林時計商店
電話新橋　二一〇三　二一〇四
振替口座　七八〇七
商品目錄御入用の方は
郵券六錢御送附を乞ふ



SYLVAN LABYRINTHS
BY JOHN F. CARLSON

新電球發賣

拜啓嚴寒之候益々御清祥奉賀候每々特別の御引立を蒙り厚く御禮申上候陳者今回平素の御愛顧に酬ゆる一端として從來感じ來りたる不便不利を補充致すべく旁々各位の御勸告も有之左記新電球二種二月一日より發賣致し候に付き何卒多少に不拘御注文の榮に預り度奉懇願候なほ御一報次第說明書謹呈仕候

一マツダB-2（ビーツー）（晝光色）電球の特色（四〇ワット 六〇ワット）

特種青色硝子球を以て製し、晝光色を發すれども從來のマツダC-2（シーツー）（晝光色）電球よりは低燭力なると價格低廉なるを以てマツダC-2（シーツー）（晝光色）電球を使用する迄に嚴密なる色の鑑別を要せざる場合に適應す。

一マツダ、スパイラル電球の特色（二〇ワット 四〇ワット）（三〇ワット 六〇ワット）

弊社獨特の輪狀螺旋タングステン纖條を眞空球內に封入し、尖端の方面に最大燭力を有するを以て、局部照明に適するのみならず普通のマツダ電球よりは白色光を發するを以て、一般家庭用として推奬す。

追て近時技術上粗惡なる類似品販賣致居候間御購求の節は電球商標印御見落無之樣御注意被下度候

敬具

神奈川縣川崎町

東京電氣株式會社

販賣部出張所

東京出張所 銀座尾張町一 電話新橋長一〇五九 一三七二 一九三 三二一二

大阪出張所 西區阿波堀通一 電話新町長六三〇 長八九九九 八九九八

門司出張所 西本町三 電話長四六 六八二

名古屋 仙臺 札幌 大連 上海

國際聯盟に對する國民の覺悟

兎角の噂のあつた國際聯盟も、巴里の講和豫備會議に於て、どうやら物になりさうである。之は下相談に過ぎぬ、本會議での運命が如何なるか分るものかと冷嘲いて居るのは、我が日本の大宰相位のもので、歐米諸國の政治家は、極めて眞面目に又極めて熱心に、此問題に對して居ることだけは、明白疑を容れない。識らず、之に對する我が同胞國民の覺悟は如何。

國際聯盟に對して我國には三種の俗論が行はれて居る。第一は之れの成立は日本の爲めに損だといふ說、第二はよし出來ても歐米の二三強大國の我儘が小國の權利を蹂躙するだらうといふ說で、第三は從來の歷史に徵して斯んなものは到底實現の不可能なものだと觀る說である。

國際聯盟の成立は何故日本に損か。之れの成立の結果として著しく頭を抑へらるゝものは、秘密外交と侵略的膨脹とである。專制的官僚軍閥の徒に非ざる限り、國際聯盟を日本の爲めに呪ふべき謂れがない。若し夫れ大國の我儘が小國の權利を蹂躙すべしといふに至つては、是れ始めから國際聯盟の成立を信ぜざるに等しい。何となれば、國際聯盟はもともと小國の權利を無視する強大國の橫暴を制せんが爲に唱へられたものであるからである。而して所謂實現不可能說に至つては、第十九世紀に於ける國際競爭時代の變象に執着するの餘り、最近の世界に橫溢せる道義的創造力の活躍に眼を掩ふものと謂はざるを得ない。加之、現今益々密接を加へつゝある世界各國民の生活上の相倚的關係（インターデペンデンス）は、國際聯盟の精神的基礎の外、更に鞏固なる物質的基礎を供するものではないか。

國際聯盟は、今度の講和會議で一擧に完成すべしとは、固より望まれない。併し、之は眞面目に考ふべき問題であり、又眞面目に努力する丈の價値ある事業に相違ない。今度の會議で僅に其端緒が開かれた丈けでも、吾人は世界の平和のために大に慶祝すべき理由があると思ふ。

孰れにしても、大勢は定つて居る。飽くまで之に反抗するの決心あるに非ずして、唯譯もなく兎や角文句をいふのは、畢竟痩犬の遠吠に外ならずして、堂々たる日本國民の爲すべき事ではない。

中央公論



第卅四年第三號
三月號
第三百六拾七號

ナポレオンの人格と運命

中澤臨川

凡そ近代人のうちで、その人の生ひ出ちから終焉まで、殆んど日々の生活が一言一行も餘さず世に傳へられた者に、ナポレオンとトルストイがある。彼等の記錄やら評傳やらの出版は夥しいかずに上つてゐる。然し極端な稱贊と誹謗との的となつてゐるナポレオンの眞骨頭を知ることは材料の堆積だけではむづかしい。
わたくしは自分の好みに從つて彼の横顔を描いてみた。

一

わたくしは或る動機から、ふとしたことから――今ではそれがどんなはづみに起つたものか確かとは覺えてゐないほど極くつまらないそして氣まぐれな動機から、ナポレオンを研究してみたいといふ考を持ち初めた。それは兩三年以前のことだ。何でも或る音樂家の傳記を讀んでひどく感激してゐると、その書の或る條に、ふと有名な曲と關聯してナポ

レオンの名が出てゐたのが私の好奇心の起りであつたやうに思ふ。

動機が動機で、かうしたつまらない發作的のものであつたから、その時のわたくしの好奇心の色合も濃淡の度もたいてい想像のつくことだ。若しその時私の書庫にナポレオンに關する書物が一冊もなくて、私が手を延ばすだけで安價な欲望の手蔓にありつくことができなんだなら、私の氣まぐれな遊戯心はそのまゝ引込んだであらうと思はれる。

その時わたくしの求めたナポレオンはどんなナポレオンであつたかといふに、grande armée を率いたアウステルリッツの英雄でもなければ、ニーチェ式の「超人」でもなく、セント・ヘレナの悲劇の主人公でもなく、ジョセフィーヌを中心としたかずかずの情史の持主でもなく、金字塔下の「火の神」でもなく、あくまで常識主義の英吉利人に嫌はれ通した「コルシカの山師」でもなかつた。實を言へば、その時わたくしの狹い性向が、都合よく自分の思ふ型にはまるやうに誂へて拵したナポレオンは、一の精神的偉人としてであつた。エルフルトで一代の老詩人ゲーテを驚嘆させたり、ベエトーベンの樂曲の主人公となつたり、毛嫌ひの強いトルストイをあれほどやきもきさせたりしたところを見ると、この人には何か靈の方面でも偉きなものがあつたに違ひない。さうだ、それを自分は捜し當てゝみよう。當時わたくしは感傷的にこんな事を考へた――ほんの一時の氣まぐれではあつたが。

幸ひにしてわたくしの發作的好奇心を冷まさない程度につないで行くだけの參考書が私の手許にあつた。カーライルやエマーソンの稍やロオマンチックな物から、青年向の立志傳風の傳記などが。

するうちに私はだんだんつり込まれた。私の書齋には何時とはなしにナポレオンに關する評傳書が増えて行つた。然し私の待ち設けたものはなかなか形を現はさなかつた。頭の中にぼんやりと潛んでゐた幻想は、いつまでたつてもくつきりとした塊りとならうとはしないで、あべこべに重苦しく濁つて行つた。わたくしは期待のはづれた反感に、頭の中

のその重苦しい濁りを直ぐさまあてつけに主人公に振り向けて、トルストイ流の極端な卑下を彼に浴せることによつて、一時をごまかすことさへあつた。

とう／＼私の思惑は外れた。そして豫期の好奇心は全く裏切られた。私のしつこい發見熱のうすくなるにつれて、私の頭の中もからつと晴れて來た。するとどうだ！ 私の主人公の周圍に無理やりにおつ被せた鈍色（にびいろ）の霧が自然に切れて、明白にして偉大な彼の性格が、アルプスの絶頂のユングフラウの峯のやうな崇高（けだか）さで現はれ出すではないか。期待のはづれた私の失望は、それでもなほ暫くは未練にこびりついて、哀願がましい態度をさへとつてゐたが、それも永くはつゞかなんだ。その時のわたくしの心持は至て晴々したものであつた。穴庫のやうに暗くくすぶつた「精神」の世界から開放されて、白日の照る廣い「行爲」の野へ誘ひ出された眞の愉快が、私の總身を振はせた。私は自分の今迄知らなんだ世界に於てナポレオンを發見した。それからのち私は彼の身のまわりにこびりついた精神的の一の垢をさへ容せなんだ——彼の透明を汚すものとして。手段の爲めに彼のよく使つた宗教的虚禮に出喰はすたびにさへわたくしはいら／＼した。

わたくしは行爲の野にナポレオンを見出した。

* * * * * * * * *

ナポレオンは行爲と活動との天才であつた。

彼にはほんとうの意味での「精神的」なところは微塵もなかつた。彼は烈しい肉の魂にだけ生きた。彼が生れながらに授かつた、強い、はち切れさうな、自分自身でさへどうすることもできない行爲欲が、彼の滿身に巣喰つて、その開展と表現とを彼に強ひた。活動は彼にとつての必然性（ネセシテイー）であつた。彼の有した「權力意志」は、野心家の口實でも、哲學者の發見でもなかつた。

靈の魂に生きる者が自我の表現を思想に求めるやうに、肉の魂に生きるものはそれ自らの表現を行爲に求める。同じ生命力の異つた方面の現はれである點に於て、行爲は肉の思想であり、思想は靈の行爲であるといひ得よう。大自然から見るときに、思想が貴くて行爲が卑しいといふ判斷はできない。靈界の偉人のみが嘆美に値ひして、活動の天才が詛呪さるべきものだと思ふ理由がどこにありえようか。かやうな偏見が多少でも流布された原因は、一つは陋劣な野心家の僞瞞によつて英雄の名が汚されるからであり、今一つには末世の宗教が餘りに遁世的の思想に人を驅つたためであらう。公平に言つて、大思想家の生命が大活動家のそれよりも比較的永遠性に富んでゐるのは事實であらう。然しそれは前者が理想を目標とし、後者が現實を目標とするところからくる當然の差である。のみならず、所謂永遠性は世人の盲目的にそして些なからず僻見的に信じてゐるほど價値判斷の確かな尺度ではない。朝に生れて夕べに死ぬ羽虫のいのちが萬年も生きるといふ龜の生に較べて、果して嗤ふべきものだらうか。

お互に實世間的の小さな標準から偉人の價値を判斷することを避けやう。生れながらの天才にはおのづからその進むべき道が定められてゐる。それは彼等のどうすることもできない必然である。天才は火であつて、燃え盡すべき運命を有してゐる。その火を消す水はない。彼と同時代のベエートーベンが音樂に、ゲーテが詩に、それ〳〵行くべくして行つた道を、ナポレオンは行爲に於て探つた。實世間の小利欲と習慣とに從つて曲りくねるには餘りに強い彼等の自我は、生一本の道を「生命」の命ずるまゝに我儘に開發して行つた。立派なイゴイストだ。誰憚るところなく轉がる火の玉だ。さうだ、ナポレオンは決して小さな榮達の奴隷ではなかつた。なぜなら、いつも戰線の眞先きに立つて、命を行爲に賭けることを樂みとしてゐた人の魂が小利欲の塊りだと誰が輕はずみに決められよう。ゲーテやベエートーベンが自己的であつたといふ同じ意味に於て、ナポレオンも亦偉きな天賦の自己主義者であつたのだ。

ここでわたくしは所謂英雄の二類型を區別せねばならぬ。その第一は初めから行爲の天才として生み附けられた生粋の活動家で、アレキサンダアやシーザアやナポレオンや豐臣秀吉が之に屬する。(多くの野心家の狐が時々彼等の名を汚し、從て世の誤解を招くことがある)。第二は思想家の類型に入るべき人たちが、時勢の要求から已むなく推し上げられて、行爲の世界に英雄の座を占めるやうになつたもので、クロンウェルやワシントンやガルバルヂイや西鄕隆盛などが之に屬する。前者は自ら強いて自我表現を求め、後者は自我を殺して時代に順應する。前者は無謀な革命製造家であり、後者は自然に醸された革命の流に乘る人たちである。前者は自己的であり壓制家であり、後者は利他的であり民主的である。後者の尊敬されるのは洵によい。然し彼等を尊ぶと同じ理由を直ちにかへして前者を卑下するのは恐らく誤つた見方である。なぜなら、兩者は全く類型の違つた人間であるから。

再びいふ、ナポレオンは行爲の天才であつた。彼は天賦の活動家として生れた。こゝに彼の偉大な一生が始まり、そして其偉大な一生が終る。彼は、健康、果斷、忍耐、敏捷、聰明、能算、自信、利我、冷酷、壓制、魔力——そのほか活動家になくてならない凡らゆる性質を一つ〳〵完全に且自由に具有してゐた。その代り彼は活動家の妨害となるやうな、感傷、神秘、思想などの分子の僅かでさへ持ち合せなんだ。(そのくせ手段として用ゐるに必要なだけをとき〴〵最も巧妙に工面するとは知つてゐた)。或る愚かな傳記家は彼に詩的趣味の缺けてゐたことを正直に嘆いてゐるが、幸ひなことには、この獅子に小羊の血の雜つてゐなんだために、彼の崇かい野性は些しも汚されずに濟んだ。彼は徹頭徹尾透明な活動家であつた。

＊　＊　＊

彼の稍や短かい頑丈な脚の下には、小さく堅い足首があつた。胴は直立して張り出してゐた。頸は太かつた。一たいに小じんまりした精悍な體軀が、截然たる線で威嚴づけられた顏と頭とを戴せてゐた。大理石のやうに白い皮膚、きれ

いに並んだ皓い齒、堅く一文字に結んで居、澄んで鋭い瞳――これが彼の容貌の特色であつた。

殊に氷のやうに冷やかに透き通つたその眼には説明のできない或る奥深いものが潜んでゐた。そしてその唇はいつも命令の言葉を發するためであるかのやうに緊張してゐた。彼の有した大品の聲はとき〴〵人を驚かした。然し彼は決して激怒しなんだ。彼は概ね大理石のやうな冷靜を維持してゐた。彼はまた聲に出して笑ふといふことが殆んどなかつた。たまに洩すことのある彼の溫和な微笑は、それを惠まれた相手をして、一生火と戰との中に驅け込ませるだけの功力があり、或る場合には傷を癒すきゝ目さへあつたと傳へられてゐる。

境遇の力は恐ろしいものだ。無名の一士官としてのナポレオンには、殊更に人を惹き附けるだけの特色がなかつた。彼は伊太利人によくあるやうな黄色い顏色をしてゐた。痩せこけた小男が兩脚に大きな長靴を穿いた姿がをかしいといつて、彼を知つた小娘たちから「靴の中の一寸法師」といふ渾名をつけられたほど、彼は田舍じみた貧弱な青年であつた。あまつさへ彼は全身に渡る皮膚病で久しく惱まされた。夙く父を喪つてから、一人の母と七人の兄弟とをわが手一つで養はなければならない慘めな境遇に立つてゐた彼には、ろく〳〵自分の身の治療をする金さへなかつた。然し彼の運命はみる〳〵うちに拓けて行つた。第一執政官としての彼はもはや四五年前のみすぼらしいナポレオンではなかつた。痼疾に施された根本的の治療とともに、彼は殆んど別人のやうに變つた。祖先このかたナポレオン家を特色づけた純白がその皮膚に宿つて、その上に彼の有する人一倍の健康と元氣とが生々した血の香を漲らした。その健康と姿容とは、彼にとつて忠實なサクソン王國よりもつと貴い身上であつたやうに思はれる。彼はそれをどれだけ愛撫したかわからない。なぜなら、それ等のものは彼に自己滿足を與へたばかりでなく、彼の活動の第一の資本であつたから。

どれだけ彼が自分の容貌に注意したかといふとは、次のやうな彼の直話から知られる。彼はその皮膚の美を保つ爲に、

誰でも指一本突き込めないほど熱い湯の中へ長く漬つてゐた。それから多量のオードコロンを使つて手足を洗つた。その上でよく拭ひとつたあとに、からだ中を摩擦した。侍従の者に下着を着せさせた。之が彼の巴里での日課であつた。

彼はいつも純白で一點の汚れ目のない狹い絹のズボンをはいてゐた。彼の制服の上衣は赤い襟をとつた灰色服かまたは緑色の物であつた。晩年に彼は異様な皇帝服を用ゐた。

この短軀精悍な灰色服の人はいつも肥大な白馬に跨つて、約二十年間大歐洲の天地を震駭させた。彼の短かい、どつしりした、特徴のある足音は、乘馬靴から出る拍車の響を伴いて、歐洲の殆んど凡らゆる宮殿に、人も無げに鳴り渡つた。彼は行く先々で人を驚かした。墺太利皇帝フランシスでも、露西亞皇帝アレキサンダアでも、彼の前では小兒であつた。彼は羅馬法王を人形のやうに扱つた。彼は臣下の如く憐みを乞ふ、美しい、高徳な、プルシヤ皇后ルイザにさへ一片の禮を返さなんだ。彼はエルフルトで一代の文豪ゲーテを手玉にとつた。彼の面前では、古狐のタレーラン、も外交家のメッテルニッヒも戯畫（カリカチユア）の材料に過ぎなんだ。

二

ナポレオン、ボナパルトは西暦一七六九年八月十五日、コルシカの孤島に生れた。

コルシカはもと以太利の一領地であつたが、彼の出生の前年佛蘭西の有に歸したのであつた。そこへ落ちつくまでには、隨分永い鬪爭の時代が續いた。自由に生きんとする一孤島の人民と強大な隣國の威壓との間の斷え間ない爭は、歷代の愛國者の血を惜氣もなく流し盡して、「亡國」といふ大團圓に終つたが、其の間に殘忍にして復讐心の強い、そして戰鬪好きな民族性が築き上げられた。

然しボナパルト家は土着のコルシカ種族でなく、その父系から言つても母系から言つても、寧ろ生粋の伊太利人に近かつ

た。ナポレオンの性格と天才とは、心理解剖家の眼からは間歇的遺傳の異常な實例と見られてゐるやうに、久しく休眠の底に陷つてゐた古代羅馬の勇敢にして快濶な好戰國民の血が、偶々野性的なコルシカ人の剌戟をうけて復活したものであるらしい。テーヌの言つてゐる如く、『彼は感情の強烈であつた伊太利文藝復興の精神を其儘受け傳へたものである』。

彼はアレキサンダア大帝から東方征服の夢を借りたが、然し一生涯私淑してゐたのはジュリアス・シイザアであつた。彼はシイザアから戰術のかず〱を學んだ。彼はゲーテに、シイザアの最期を題材とした戲曲を書くことを奬めた折に斯う言つた、『若しその大望を實現する爲めシイザアに今少しの歲を藉したなら、彼は一層世界を幸福にしたであらう』と。

彼は冷酷ではあつたが、然し陰險ではなかつた。彼の殘忍な行爲と目されてゐるジャッフアに於ける捕虜虐殺も、アンジアン公の銃殺も、白日公然と行はれた。メッテルニッヒの鋭い眼に映つたナポレオンですら、『一たび目的を達した上は直ちにその敵を忘却する』人間であつた。ザアも墺太利皇帝フランシスも、弱者の用ゐる卑怯な詐計で幾度か彼を欺いた。英國は彼に對して寧ろ無殘で陋劣な態度を採つた。然し彼はいつも戰捷者の如く大帝の如き態度で寛大に彼等に對した。彼は畢竟するに「南」の英雄であつた。そして「南」を代表して、一生涯「北」の征服を企てた。歐洲の歷史は、ナポレオンの沒落を一期として、南北國民の勢力の轉換が行はれたと謂つてよからう。

ここに一奇とすべきは、佛蘭西に君臨し、そしてあれほどまでに佛蘭西人の血を沸かしたナポレオンが、その血脈中に一滴でも佛人の血を有してゐなかつたことである。彼は最初に全くの外國人として、然も被征服者の敵愾心を挾んで佛蘭西へ渡つた。彼はその時から漸く佛蘭西語を修業し始めた。しかも彼の佛蘭西語は晩年までとう〱完全の域に至らなかつたといふことである。

彼は伊太利遠征の時から、自分の姓に就き漸く伊太利流の Buonaparte を改めて、佛蘭西流の Bonaparte と書き

直し、自分が佛蘭西國民であるといふ決心を具體的に示した。

然し彼は生涯佛蘭西人と成り了せなんだ。殊に彼と巴里人はどうしてもしつくりと膚合が合はなんだ。あの古い大都市には眼に見られない一種の液體が隅々まで流れてゐて、街も巴里つ子と呼ばれるほどの者は其の一滴に染みて、あの甘酸つぱい邪淫の味をこゝろえ、そしてしな／＼と丸みを持つた氣風を體得するやうでなければならなんだ。然しナポレオンは生れからいつても、その境遇からいつても、かやうな氣風に馴染むに餘りにかけ離れてゐた。彼の生活動作の爪の先までかたくなで四角張つてゐた。彼ほど社交的に不向な者はなかつた。

彼は例の露骨な性質から、とき折佛蘭西人の悪口をついた。一八一二年にメッテルニッヒをつかまへてこんな事を言つてゐる。『佛蘭西には才はあり餘るほどある、しかしたゞ才だけだ、その下に性格らしいものは些しもない。主義はなほのことだ、……彼等は人の眼に立つて喝采されさへすれば滿足してゐる』と。まだセント・ヘレナでもかう言つた。『佛蘭西には賢い計畫を立てる人間は幾らもゐる、しかしいつも偉大な性格と勇氣を有つた人間が缺けてゐる』と。

實際その通りで、彼は佛蘭西人の弱點を骨の髓まで飲み込んでゐたために、それを思ふ存分自己の野心の犧牲に使ひ果したのである。大歐洲の覇權を握るといふ美名がどれだけこの國民の飽くなき虚榮心をそゝつたか、そしてその爲めにどれだけ彼等が高價な代價を拂つたかと云とは、チュマの『追想記』やド・ミュッセイの『近代人の告白』を繙く迄もない。然し莫斯科からの退却に、平氣で幾萬の自國兵の骨を蹈んで逃げ、あまつさへ敗殘の將士をば寒と飢との中に生きた屍として置去りにしたナポレオンをば、再び狂熱的にエルバ島から迎へた佛蘭西國民こそ、よく／＼因果な國民であつた。

實を言へばナポレオンには國民性の觀念が缺けてゐた。彼は巨大な世界人（コスモポリタン）であつた。そこに彼の强味もあり、また弱味もあつた。彼は敵國の傳統を解しなんだ。寧ろそれを無視した。彼は平氣できのふの敵を自國の兵隊の中へ混ぜて

使つた。彼が征露の敗因の一つは確かにそこにあつた。

* * * * * * * *

ナポレオンの父はカルロ・ボナパルトと言つて、コルシカの主府アヤッチョオの豪族であつた。彼は放漫で、贅澤で才氣の勝つた、押出しの立派な男で、しかも極端な野心家であつた。自島の獨立運動の非なるをみるや、われ一に佛蘭西政府に忠勤を誓ひ、系圖の立派なところから貴族の稱號を貰つた。彼は三十九歳で早死にした。

彼の母はラモリノといつて、人並優れて强健な、色艶のよい美人であつた。彼女は十五歳で夫に嫁してから八人の子供を産んだ。戰亂の間は夫に隨つて陣中を往來したほど健氣な女で、次男ナポレオンの生れるつい前日も山野を驅めぐつてゐたのだといふ。自分の道樂にばかり氣を取られてゐる夫をばた賴らないで、數多くの子供の世話は身一つに引うけてやつた。割合に早く夫に別れたので一時は家計に困難もしたし、其次男の無類な榮達と不思議な運命につれられては幾變化の生涯にも遇つたが、彼女はその間を雄々しくも乘り越した。彼女は派手な宮中生活に這入るやうになつてからでも決して皇帝としてのその子の名を汚すやうなことはなかつた。最後に彼女はナポレオンに隨いてエルバ島へも渡つた。

ナポレオンの多い兄弟は、彼にとつては概ね厄介なしろ物だつた。ナポレオンは彼等の凡てに背負ひきれないほどの榮位を與へた。彼等のうちの男は大てい王位を僭した。彼等はみんな馬鹿々々しく輕薄で放埒だつた——丁度泰平の世に古い名門から出る若殿原のやうに。彼等は皮肉にもこの點と、そして揃ひも揃つて威のある美貌の持主であつた點に於て、成上りの一代貴族らしくはなかつた。然し生の溺愛家であるといふ點にかけては、彼等とても彼等の偉大な兄弟のナポレオンには三舍を避けざるを得なんだ。たゞ彼は彼の偉大な天才の光を以て、その兄弟と共通に有してゐたいろいろの缺點を蔭にすることができた。

長兄のヨセフは初めナプレス王となり、後ち困難な西班牙王の位置に掛つたために、不幸な晩年を送つた。彼のたつた一つの趣味は女で、快樂と安逸とのほかには彼の求めるものはなかつた。政治や外交は彼の性格に合はなんだ。『ヨセフほど役に立たない男はない、然しあれでうい奴だ、彼奴は俺を愛してゐる』とナポレオンは言つてゐた。

弟のルシアンは一番確かりしてゐて、學問もあり性格もあつた。然し彼は心からの革命黨で、一八〇四年にナポレオンが帝位に卽いてからは、悉く反對の態度ばかり採つてゐた。

長姉のエリザは伊太利の一貴族に結婚したが、後ちにタスカニイの大公女に封ぜられた。有名なパウリンは二度夫を替へた。そして數知れない間男を有してゐた。彼女は當時の歐羅巴で絕世の美人として鳴り響いたものだつた。ボナパルト家の特色であつた線のくつきりした優華な横顔と魔力のある口元とが、いつも快潤で艶つぽい彼女の容を引立てゝゐた。(難をいへば、脚の少し短いのが目立つた)。

一ばん不幸な兄弟はルイであつた。彼は若い頃の花柳病がもとで、一生その爲めに苦んだ。彼は一八〇二年に皇后ジヨセフィーヌの伴れ兒ホルタンスと結婚し、その後和蘭王となつた。皇后が自分の腹に到底子の出來ないことを覺つたとき、自分の娘のホルタンスを皇帝に取持つて置いて、娘が孕んだと見るや直ぐルイに押し附けたことは、その當時から公然の秘密であつた。(その子は早逝したが、若し生きてゐたらそれを皇太子に引直さうといふ心がナポレオンにあつたらしい)。ルイもこの事情を知つて不快に思つてゐた。そればかりか、彼の妻の生み落した四人の兒が、彼の體質から言つても彼の胤でないことが讀める上に、歷代の不義の父親の名前さへ明らかに分つてゐた。その第三子が卽ちかのナポレオン三世で、その父は和蘭海軍大將のヴァーフエルであつた。

* * * * * * * *

ナポレオンは九歳の時、初めて父に伴れられて佛蘭西へ渡り、ブリアンヌの陸軍幼年學校へ入つた。それから巴里の王立士官學校を卒業し、一七八六年一月、十七歳で砲兵少尉に任ぜられた。學生時代の彼には取立てゝ書くほどのことはなかつた。たゞ勤勉で數學の好く出來る生徒であつたといふに過ぎない。

彼が若い士官としてヴァランス、オーソンヌなどの聯隊に勤務してゐる間に、佛蘭西の政界は次第に險惡な雲行を呈して來た。一七八九年には愈よ佛蘭西革命の序幕が開かれて、暴徒がバスチーユを占領した。彼の母島コルシカではそれ以前から既に革命運動が起つてゐて、亡命の志士パオリが二十年振りで英國から歸り、私かに同志を集めて畫策するといふ有様であつた。ナポレオンもその間に數度故郷へ歸り、多年崇拜してゐたパオリにも逢つて、自島の革命運動に參加した。一七九三年には、佛國の革命は愈々烈しくなつて、廢王ルイが斷頭臺で處刑された。そのうち、彼は故郷でパオリと合はず、多年彼の青春の血を沸き立たせた母島の自由にも斷念をつけ、一家を引き纏めて巴里へ遷つた。そして一砲兵大尉としてジヤコバン黨に加擔し、ロベスピエルに知られた。

一七九三年、ナポレオンはツーロンの陷落により漸く其手腕を認められ始めた。當時國會に反抗して叛旗を飜した南方諸市のうちでも、ツーロン叛亂は最も大仕掛のもので、英國艦隊の援助により氣勢を昂げてゐた。ナポレオンは砲兵司令官として其攻擊に參加したが、同市の再陷には彼の獻策が與つて力あつたと言はれてゐる。彼はその功により陸軍少將に榮進した。

すると其翌年、ロベスピエルが急に失脚して斷頭臺に上せられたので、彼も同志の一人として嫌疑を受けカレイ城塞に繋がれたが、幾ばくもなく許されて放浪の身となつた。その後總裁官バレスに知られ、所謂葡月の變には暴動の鎭壓に奇功を奏して陸軍中將にされた。

これが 1769—1795 の間に於てナポレオンの身のまはりに起つた出來事の輪廓である。その時彼は廿六歳であつた。

ナポレオンは生みつけられた天才であつた。然しどんな天才の芽でもが、やすやすと幹になり葉を延すものと思ふほど間違つたことはない。人間の性格は動的のもので、それが偉大であるほど變化が烈しい。天才の若芽が實世間の荒い風にもまれながら、遂に人生の眞只中に巨然たる「自我」の幹を樹立するまでには並ならぬ努力が要る。それは「生みの苦み」である。自己發見の戰ひである。多くの史家には閑却されながら、ナポレオンの幼少時にもかうした「嵐(スチュルム、ウンド、)と惱み(ドランク)」の一時期があつた。

國破山河在！。ナポレオンの物心ついた頃のコルシカは、丁度この詩の文字通りに、悲涼な亡國の氣が生々と全島を蔽ひ盡してゐる時であつた。彼のやうな鋭い少年の頭に、この光景がどんな印象を與へたかといふことは詳しく說くまでもない。彼は志士パオリに無限の崇拜を寄せ、併せてかやうな一國存亡の際に自分の父のとつた不信の態度に就いて少なからぬ不滿を感じた。彼が當時佛蘭西に對して有してゐた反感は強いものであつた。被征服者の屈辱と幼少離鄕の悲みとは、彼をして友達のできない淋しい學校生活を送らしめた。祖國の自由の夢はその後も永く彼の胸に抱かれ、彼はその爲めにたびたび故島へ還つて劃策するところがあつた。

若い頃のナポレオンを苦めたも一つの因素は、彼の一家の世計の困難なことであつた。父の死後家運の傾きかけた彼の故鄕には、健なげな母が大勢の子供をかゝへて彼是と心を碎いてゐた。わづか尉官の身空でありながら、彼はその收入の大部をさいて、兄弟の世話までせねばならなんだ。弟のルイを伴れて行つた頃は、從者さへなく、貧しい食事の支度まで自分で遣つた。服の保存をよくするためにせつせとブラッシュをかけることを怠らなんだとまで言はれてゐる。

その後も不遇にして巴里で放浪してゐる頃は、俳優のタルマといふ男から幾度か金を借りたりした。『古ぼけた帽子を眉深に冠り………不恰好でひどく汚れた靴をはいて』、『懶さうな不活潑な歩調で』街を歩いてゐた彼の姿を想つてみるだにをかしい。

あまつさへその頃の彼は病氣までした。オーゾンスの聯隊にゐた頃ひどく健康を害し、睡眠不足で、憔悴の度がはげしかつたといはれてゐる。

こんな有様で、彼は社交嫌ひになり、益々沈鬱になつて、閑さへあれば引籠つて讀書に耽つてゐた。彼は元來が勉強家で、歷史や地理などの物は殊に廣く獵つた。然しその頃の彼を最も強く引き附けたのはルッソオであつた。若いナポレオンが、どれだけロマンチックな感情を以て、あの畸形自然兒ルッソオを崇拜したか、そして仁徳(ヴァアチュー)の使徒を以て自ら任じてゐたかといふことは想像以上である。『おゝルッソオ、なぜあなたはたつた六十年しか生きなんだのか、德の爲めにはあなたは不窮であつて欲しかつた………』――こんな風に彼は叫んでゐる。彼はまた一論文の中で、叨りに野心の弊害を論じ、野心は蒼白き顏色と怖ろしき眼を有し、冷やかな笑を浮ぶる忌々しい怪物であるなどと言ひ、野心は世界の破壞者であると道破してゐる。（後年のナポレオンと比べて何といふ皮肉な對照だ！）。

然し、『ウェルテルの悲み』の間接の生み親であつたルッソオは、同時に恐怖政治を伴つた佛蘭西革命の精神的司道者であつた。彼の絹手袋の下には鐵(くろがね)の捕手錠があつた。で若きセンチメンタルなナポレオンは、政治の主義に於てはジヤコバン黨であり、純な革命黨であつた。

當時のナポレオンをよりよく知る爲めに、私は彼の情的方面を逸してはならない。青年にとつての戀は主義よりも食よりも大事なものだ。ナポレオンの初戀は、彼がヴァランスにゐた頃の出來事で、對手(あいて)はコランビエといふ下宿屋の

であつた。彼はセント・ヘレナでその頃の思出を物語つてゐる。『あんな無邪氣なことはなかつた。自分たちはちよい〳〵あひびきした。その一つは今でも覺えてゐるが、丁度眞夏の朝のことで、全く嘘のやうな話だが、二人は一しよに櫻實(さくらんぼ)を食べて嬉しがつたものだ』。

亡國の悲み、貧困の苦み、やまひ、ルツソオの誘惑、戀の甘味――かうした境遇に置かれた青年が行くべき道はたいてい決まつてゐる。次の一節は一七八六年に書かれたナポレオンの手記である。

『唯だひとり人中から逃れて、私は私自らと夢みる爲めに、そして私の憂鬱に全くこの身を任せる爲めに自分の部屋へ歸つた。今日はそれがどんな方面へ私を誘ひ出すのか？。死の方へ。私のいのちはまだ曙にあるので、私はもつと〳〵長く生きたいと思ふ。私はもう六七年國を離れてゐる。近いうちに國へ歸つて親兄弟に逢へたらどんなに樂みだらう。……然し私をして死を希望せしめる狂はしい考はどこから來るのか？。疑もなくそれはかういふ思想だ――「この世には爲すべきどんな事があるか？」。どうせ自分は死ぬものなら、自ら殺しても同じことではないか？。若し私が六十の阪でも越してゐたら、私は世の習慣を尊敬して自然が終りを完くしてくれるまでおとなしく待つもよからう。然し今私は不幸を經驗し始めるところで、私には何の樂みも無いのであるから、香ばしくもない私の命を支へたところでどうなるか？』。

こゝには懐疑に捉はれた、感傷的な、蒼白い青年がよく現はれてゐる。それがナポレオンであることを想ふことによつて一段の興味がある。

然し彼は死ななんだ。却て彼の體内に宿つた強い力はかうして感情の焰の中で知らず識らずの間に鍛へられて行つた。彼の感情は彼の鋼(はがね)の意志を赤め固める爲に燃やされた枯草であつた――束の間に灰となつて永久に再び燃えつかない枯草であつた――戀もルツソオも。

實世間の出來事はずん〳〵彼の空想を破つて行つた。多年崇拜してゐたパオリとの會見は第一に彼を失望さした。母

島コルシカの獨立の夢も瞬く間に消されたパルツソオに見た美しい革命の幻は恐怖政治となり、暴民（サンキユロツト）の出現となつて、夥しい血を彼の眼前で流して見せた。

やさしい若獅子はそろ〱と共本性を自覺し始めた。殊に理由のない嫌疑の爲めにカレイ城塞につながれて、僅かに斷頭臺から免れた一事は、彼の性格を急變せしむるに與つて力あつたといへる。彼は一時絶望の極で自墮落の生活に落ちてゐたが、その間に自我主義（イゴイズム）の芽は遺恨なく生長した。

ツーロンの略取と葡月の變とは彼をして自分の力を自覺せしめるに好き機會を與へた。ナポレオンの名は當時の巴里では既ち通りものになつた。その頃彼は得意げにジヨセフイーヌに書いた——

『運命の神は我と共にあり』と。

三

一七九六年ナポレオンは伊太利遠征軍の總司令官に任命された。その時彼は廿七歳であつた。同じ年に彼はジヨセフイーヌと結婚した。（彼女はボーアルネー未亡人で、二人の子供を連れ、ナポレオンよりは六歳の年うへであつた）

彼の伊太利遠征はモンタノツトの戰を振出に、カンポ・フオルミオの條約に至るまで、ロヂ、アルコール、リヴオリなど大小十八會戰を經たが、いづれも彼の光耀を増すための勝ち戰さであつた。

モンタノツトの戰の朝のことである。あちこちから集められた雜駁な佛蘭西軍隊が一つになつて、日の輝く高原をボルミダ河に沿つて進軍したときに、王朝時代からの老將軍の胸にも新米の兵卒の頭にも一樣にきらめいた新しい暗示があつた。それは彼等の頭上に一の偉大な新精神が支配しかけたといふことである。この信念は日を經るに從て軍隊と國民とを容易く彼の身邊に牽き附けた。そして一生渝らない心服と水火を辭せない忠義とが、彼の圖り知れない野心

を遺憾なく遂行せしめるに役立つた。彼のこの磁氣的魔力は、どこへ引きずられて行かうと『ナポレオンが我等の上に立つてゐる』うちは安心だといふ盲目的の崇拜に佛蘭西國民を驅つた。そしてウォータールーの戰に至るまで、彼は戰勝か死かをその國民に強いる術を解してゐたのである。

銳利な理智、くろがねの意志、無上の自信、超人的勢力——それ等にも增してナポレオンの天才を特色づけたものは彼のこの人格的魔力であつた。「天才」は解剖を無視し、記述を超越するが、然しその不可思議な力は直に近づく者の上に強く現はれる。

ナポレオンの周圍には帝王と猛將と奸臣と、そのほか凡らゆる種類の者が集つてゐたが、彼の威容はその中に立つて嶄然頭角をぬいた。彼等の崇拜と彼等の惡みと、彼等の不平と彼等の阿諛と、彼等の忠實と彼等の陰謀とが、彼の身邊にさま〴〵な光と影とを投げ合つたにも拘らず、彼から出る光はそれ等のものを打消した。そして千萬の人の運命が彼の思ふ方向に導かれた。彼の理想は彼自身のほかに出でなかつたが、然も彼の強い人格そのものが殆んど最高の理想かの如くに餘人には映じた。かの露西亞遠征の際などは、一日戰へばそれだけ佛蘭西の損失であり、且つ人命の罪惡的消費であるといふことが明らかに各人の理智にはわかつてゐながら、一巨人の魔手に把まれた弱い人間達にはそれをどうすることもできなんだ。日となく夜となく彼等はたゞ戰ひに戰つた。然も勇敢に、忠實に——最後まで。

ナポレオンは一見人の性能を觀破する銳どい眼識を有してゐた。一小隊の士官がその部下を知悉してゐる以上に彼は全軍に通じてゐた。そして全軍の將士は自分が彼に知られてゐるといふことを知つてゐた。誰々は今どこにゐるかといふこと、誰々は今何を爲しつゝあるかといふこと、誰はどこで戰つていかなる傷を受け、誰はどこでどんな功績を舉げたかといふこと——を彼が知り、彼がそれを知つてゐるといふことを彼等が知つた。幾戰場の間には幾萬の將卒が種々

と斃れて、新しい者が之に代つた。然し彼の知識と彼等の信頼とはより濃厚に改まつて行つた。彼の口から出る命令の中に自分たちの聯隊の名が呼ばれるだけでも、彼等には無上の光榮であつた。彼の唇邊に洩れる一つの微笑、輕い承認の徴し、一語一禮が、よく彼等の身命を捧げしむるに足りた。

伊太利遠征中の一挿話に次のやうなのがある。一大戰の前夕、ナポレオンが或る聯隊の前を通りかゝると、一人の兵卒が一歩隊伍から進み出して彼に聲をかけた。

『市民なる將軍、私は明日あなたがどんな方法で敵を打つかを知つてゐます。』

恁ういつて彼はナポレオンの胸中に秘した戰略を手にとる如く描き出した。

『默れ、馬鹿者め。』

彼は急いでそれを制止した。

閲兵がすんだあとで、ナポレオンはその聯隊へ使を立てゝ件の男を捜させたが、惜い哉かの偉才は一兵卒の服のまゝで斃れてゐた。彼は未來の一元帥を失つたのである。

ちやうどそれと同じやうに、將來ナポレオンのもとに偉勳を樹てた將軍たちは皆な低い列伍から拾ひあげられたものである。ランヌ、ベルチエ、オージュロオ、スタインゲルなどが伊太利遠征軍中より頭を擡げ出した。セント・ヘレナの最期に、ナポレオンの懷想は伊太利の高原を驅け廻つてゐたと見える。『スタインゲル！ダザイ！マッサンナ！』。かう彼は將軍達の名を呼びつゞけた。

ナポレオンの將軍中には勇敢な人物が多かつた。いつも長身兵を率ひて皇帝の傍にゐたオーヂュローは常に傷ついてゐた。彼は一生に二十三個所の傷を負つた。この猛將もナポレオンの前へ出ると、わけもなく怯ける

ランヌは勇將中の勇將であつた。彼は伊太利遠征の第一戰からナポレオンに知られ、以後まで皇帝を「きさま」と呼んでゐた親しい間柄であつた。彼はやはりいつも傷いてゐた。彈丸もランヌの骨は避けると噂されたほどである。シリアの戰に彼は頭部を打たれて倒れたので、とても助らぬと思はれたが、彈丸は彼の頭蓋骨を一廻りして皮膚に止まつてゐたといふ。それから間もなく彼は脚を打たれたが、此度は彈丸の方でいびつになつて脛のふくらみの處に止まつた。然し一八〇九年に遂々彼はエスリングンで大砲の犠牲となつた。

この時の伊太利戰爭ぐらひ著しい對照を現はしたものはなかつた。墺太利軍は整然たる隊伍を組み、兵士はみな白の制服に身を固めてゐた。之に反し佛蘭西軍は雜駁な寄合で、帽子を被らない者もあれば破れた靴を穿いた者もあつた。前者は老將揃ひで、後者は廿七歳の司令官を先頭に皆な同じ年輩の將校の寄合であつた。前者の古典的戰術に對して、後者には獨創的な新戰術があつた。

佛蘭西軍は殆んどお祭氣分で敵を薙いで行つた。彈丸は矢張堅たかつた、劍は尖がつてゐた。戰爭は生死の重大事であつた。それにも拘らず、佛蘭西軍はそれを忘れたかの如くに戲れた。

或時ナポレオンは參謀將校の幾人かと僅かの兵隊とを伴れてロナトとよぶ小さな町に差しかゝると、急に墺太利の大軍に包圍された。敵將は使を以て降伏を勸告して來た。軍使は當時の習慣に從て覆面のまゝナポレオンの面前へ伴れられたが、彼は殊更にその幕僚等に威容を整へさせて堵列して置いた。で、軍使の眼かくしが取れるや否や、ナポレオンは大聲に彼を叱りつけた、

『すぐおまへの隊長のところへ歸れ。そして降伏まで八分間の餘裕を與へるからと告げろ。おまへ達は現在佛軍の眞ん中にゐるのだ。既定の時刻が過ぎたら全く望みがないものと思へ。』

軍使は慌てゝ引歸した。墺將は驚愕のあまり二千の兵士と四門の大砲を以て降伏した。

年とつたウアームゼル將軍が降伏を餘儀なくされたときには、ナポレオンはこれを受けるために殊更にこちらからも一老卒を差し向けた。餘り若い者に帶劍を渡すことの屈辱を察してやつたので。

かうして一年半後にはカンポ・フオルミオの平和條約が結ばれた。彼は殊更に老外交家の度膽を拔く必要から、談判の席上にあつた高價な支那燒の茶器をとつて床へ投げつけた。

『余はかうして墺太利を撃つのだ！』

と言つて、彼はさつさと部屋を出て行かうとした。先方の使節等は慌てゝ彼を止めた。そして條約は彼の思ふ通りに突嗟に締決された。

彼は伊太利から澤山の掠奪品を持つて凱旋した――その中には有名な美術品が多くあつた。

伊太利遠征の中頃から彼の態度はめき／＼と變つた。彼は急に然も自然に王者の如く振舞ふやうになつた。革命黨に屬した將校中には「市民」的空氣が次第に軍隊から別かれるのを惜んだりする者があつた。偉きな力の自覺が湧然として彼の五體に漲るのであつた。彼は既に巴里の『法律家ども』を物とも思はなんだ。

彼は自分の運命に對する宗教的確信を懷き初めた。(アルコールの戰では彼は不思議な命拾ひをした)。この確信はその後次第／＼に押し進められて、殆んど迷信の域にまで達した。それは、彼の精氣のはち切れさうに漲つてゐた間は彼にとつて非常に有力な武器であつたが、一たん彼の精力が下り阪に向ふとともに、それが却て破滅の種となり、ある場合は彼の行動に喜劇的の色を帶ばしめるやうなことを醸した。

ナポレオンは國民歡呼の間に巴里へ歸つた。彼の名は世界的に喧傳された。市民は彼の爲めにいろ／＼な催しをし

た。外部大臣タレーランの夜會が最も豪華なものであつた。ダビッドが彼の肖像を描き、音樂家グラッシニが彼の爲めに歌つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

然し當時の佛蘭西は安全にナポレオンを容れる場所でなかつた。共和政府の基礎は甚だ不確實で、無能な總裁官たちの間には徒らに暗鬪が行はれ、そして深い恐怖と猜疑との眼が戰捷者の光榮を一人で荷ふ彼の上に投げられた。彼にとつては巴里は鉛の外套のやうに重苦しかつた。」

彼は虚名を以て滿足のできる男でなかつた。況んや健忘性な巴里人の間に、彼の名聲が所謂九日間の驚異に過ぎないことを彼は好く知つてゐた。

突如として佛蘭西國民の新しい視線がナポレオンの上に注がれた。三萬の精英と一萬の水夫と大小五百の船艦とが地中海の港に集められ、有爲な將校は一人殘らず網羅され、それに第一流の學者を加へた不思議な遠征隊が、彼に率いられて、一七九八年五月にツーロンを出帆した。之が有名な埃及遠征であつた。

先づ地中海のマルタを襲つて之を陷れ、運よくネルソン艦隊の眼をくぐつてアレキサンドリア港から上陸し、それからカイロへ還入り、翌年一月には土耳古征服の目的を以てシリアに進發し、遂にアークルに迫つたが、戰利あらずして已むなくカイロへ引き返した。そこで本國からの情報を得て、急卒に歸國の必要を感じたので、クレベル將軍に一部を殘して後事を托し、腹心の部下だけを連れて、夜陰にアレキサンドリアを出帆し、逃げるやうにして漸く南佛蘭西のフレジュに到着した。

この埃及遠征はいろ／＼な點に於て後年の露西亞遠征と似てゐる。第一にはそれが異國の風土人情を無視した無謀な

企であつた爲めに、二つながら失敗に終つたことである。たゞ前の場合は壯年の元氣に任せて起つた明快な失敗であつたが、後の場合は自己の運命と力量とに對する慢心が醸した暗い影のついた失敗であつた、といふ相違がある。第一には、二つの場合ともにナポレオンの最も暗黒な性格が曝露されてゐることで、彼は自己の安全と便利の爲めには、その部下を窮迫に陥れる如きことは全く平氣で行ひうるほどの冷酷な無恥を有してゐた。埃及では幾萬の兵士が沙漠の熱の中へ置去りにされたが、露西亞では幾拾萬の將卒が曠原の雪の中へ棄てられた。彼は天才的の大イゴイストであつたとともに、悪い意味の小イゴイストにも見えた。若しも何人かゞ敗殘の跡を固守するやうな義理堅い操持を彼に待設けるならば、彼はその人を迂遠な理想家と嘲笑つたであらう。彼の行動は彼自身の目的を完全に實現する以外には寸歩も出なかつた。彼は自己實現の偉きな目的に向て殆んど半ば無意識的に突進したとも謂へる。

從てナポレオンには犠牲の精神は露ほどもなかつた。彼はよく與へよく惠んだが、彼の與へたのは手段の爲めであり、彼の惠んだのは王公の弱者に對する自己滿足の遊戯に過ぎなんだ。彼が昔自分と親しくしまたは自分を援助して呉れた人たちに對してとつた比較的温い行動を、稀れなる謝恩の美徳の如くたゝえる史家のあるのはをかしい。

然し彼がともかく謝恩といふことを忘れなかつたのは彼の一生の美德であつた。彼は恩讐の念が非常に強かつた。どんなに輕微な侮辱でもが必ず記臆されそして必ず報いられたと同時に、どんなに些細な好意でもが滅多に忘れられたことはなかつた。彼はこの點に於て正しくコルシカ人であつた。彼の乳母は一水夫の女房であつたが、彼は自分の戴冠式に彼女を參列させ、廣い葡萄園や澤山の金を與へた上に、遺言狀の中にもこの貧しい婆さんの名が列ねられてあつた。一七九三年のコルシカ騒擾中に彼を危く敵手から救つて逃れさせた案内人の子のために、彼は遺言して一萬フランの金子を殘した。彼がブリアンヌの幼年學校時代に親しくした友達や、彼が一士官としてヴァランスやニースに滞在中恩顧を

受けた人達やは、殆んど一人も忘れられずに後年彼の殊遇にあづかつた。秘書官のブーリエンヌ、駐露大使となつたローリストンなどは彼の學校友達であつた。それからヴアランス時代の知人では、某は全權大使となり、某は知事となり、某は宮内官となり、某は郵便局長と成つた。その頃彼が最も深く恩顧を受けたコロンビエ夫人はその後拔擢されて皇后附の女官にされた。一生惡筆で有名なナポレオンに習字を教へたことのある老人でさへ、彼をサン・クルウの宮殿へ尋ねて行くと、心好く拜謁が許されて、

『おん身は余を立派な弟子にした、おん身に謝意を表せんければならぬ』

といふので、即座に千二百フランの年金が與へられた。かやうにナポレオンは王者の尊大と寛容とを以て遍く惠んだ。然し一度も犧牲は拂はなんだ。

他面に於て、彼はウエリントンの首級に巨大な賞を懸けた。とかく彼の邪魔となつたブールボン皇家の人々は、アンジアン公を初めとして片端からなぎ仆された。彼は恩惠の潤澤とそして復讐の威喝とを以て次ぎ〳〵に世間を驚かした。

閑話休題、ナポレオンの埃及遠征がどんな目的を以て企てられたかといふことに就ては、史家の間にいろ〳〵の說があるが、實際は今日でも一つの不可解な謎であるといふほかはなからう。

最も卑しく之を解する者から見れば次のやうにとれる。伊太利遠征から歸つて來たばかりの彼の周圍には、前に述べたとほり、總裁官たちの嫉視があり、且つ自在に彼の驥足を伸ばすべくまだ其時機でなかつたので、當時の巴里は彼にとつて甚だ居心の惡い場所であつた。更にその頃の政府の基礎は甚だ薄弱で、何時どう變るか分らない。而もそんな時に乃公を措いて誰が能く難局を收拾しうるものぞとの腹が彼にあつた。そこで彼は殊更に將卒の粹をぬいて外へ出で、

その不在中に本國政府がさんざく外敵に攻められて困つてゐるところを傍觀し、一方には自分は東方征服の偉勳者として凱旋した上に立派にその難局を料理し、一擧にして確實に佛蘭西の主人公とならうといふ下心であつたのだと。後にセント・ヘレナでの『回想錄』の中で彼自身が赤裸々にこの事を告白してゐるのが何よりの證據だと言はれてゐる。

然し、彼自ら或る場合に言つたやうに、彼の偉きな行動は内心より來る一種の聲によつて喚起される場合が多かつた。彼は殆んど意識せずに彼の耳朶に天來の使命の聲を聞いた。それは理智を絶したところの、然も不可抗な强迫的命令であつた。それを彼はどうすることもできなんだ。天才は之を授かつた者にとつては絶對の壓制者である。彼の小我は厭々ながらその命令に應ずることが多い。そんな場合彼の理智は小賢しくも彼の行動を說明(ジャスチファイ)するために、えて誇りがに小さな理屈を案出する。ナポレオンが埃及遠征の動機であるとして自ら附會した事由の如きはこの種類のものであらう。一體に人の告白といふものほど史實として當てにならぬものはないのである。

伊太利遠征によつて自己の生れながらの力を自覺し且つ實證した若きナポレオンの胸内には、今や消し止めることのできない偉きな火が燃え初めてゐた。彼の盛んな行爲欲は内から彼を攻め立てゝ一日も晏如たることを許さなんだ。この時彼を誘惑して、日がな夜がなうるさく彼の耳に囁いたえたいの知れない惡魔の聲は、『お前は世界を征服せよ』といふのであつた。彼のメヒストヘレスは執念深く彼に附き纏つて、彼をそゝのかし又脅かした。そして無暴で且つ無目的とも見える東方遠征の擧を彼に强ひるのであつた。

ナポレネンは幼時からアレキサンダア大帝に私淑し、殊に東方遠征の壯圖を大帝より鼓吹された。で、自己意識の曙に醒めた若きナポレオンの彈力ある胸の中に描かれた空想は、東邦征服と殖民、印度を中心とした一大帝國の建設といふ事であつた。彼は頭に頭布(ターバン)を捲き付け、自ら筆を執て書き綴つた新コーランを片手に捧げ、悠然と巨象に跨つて東方

の天地を濶歩する自分の姿を想像してみたりした。彼は世界的大帝國の建設者であり且つ新宗教の開祖であるところの自己を夢みた。而して彼が其遠征隊に幾多の學者を雜へたことや、埃及の主府カイロに於ていろ〳〵と遠大な平和的計畫を施設したことなどから察するときは、彼の遠征の目的が必ずしも一時的政略から發したものでないことが分る。

彼の世界征服の夢は一生彼の頭を支配した。後年に於て彼は露西亞を討伐し、尚進んで亞細亞征服の大計畫を續行しようと決心してゐたことは明らかな事實である。彼が失脚の一大原因とも見るべき永い無益な半島戰爭に彼があれほどこだはつてゐたのも、その目的は單に一英國の懲戒といふことでなくて、彼の世界征服に一番の邪魔物であつたところの英國の制海權を奪取しようといふのが主因であつた。

實際、埃及遠征といひ、後年の露西亞遠征といひ、ナポレオンの立てた雄圖が、常識といふ普通人の判斷から見て無謀とも誇大妄想的とも見える嫌ひがあつたにせよ、それを以て直ちに彼の覇氣をあざ笑ふことは愼まねばならぬ。天才の行動は我等の不合理を超越してゐる。我等の不可能は必ずしもナポレオンの不可能ではない。現に彼はさま〴〵の「不可能」を行つてゐる。彼の描いた世界征服の計畫が彼の非凡な天才によつても正當に實行しえられる事件でなかつたといふことを誰が判斷できよう。否な彼自身ですら、唯だ天賦の使命に餘儀なくされたといふよりほかに、自己の行動に就ての明確な知識を持たなんだのであらう。

然らば彼はなぜ失敗したか。なぜなら、彼の「使命」と「運命」とが沿はなかつたからである。彼は「天才」であつたと同時に「人」であつた。使命と運命との矛盾――そこから人間及び世界の悲劇が生れる。そしてナポレオンの使命が何であり、彼の運命がどんなであつたかを觀察するのが、この書の本旨である。

ともあれ、彼の埃及遠征の失敗によつて最も僥倖したのは英國である。

この遠征の副産物として、ナポレオンの未來の運命の上に與へられた見逃すべからざる一影響がある。凡ての軍事專門家の均しく認めるところによれば、この時の航海ほど非常な冒險はなかつた。萬が一にも英國艦隊に出逢はうものなら彼の軍隊は全滅するほかなかつたことは、彼の艦隊司令官ブリュイエーさへ覺悟してゐたところであつた。それを鵜の眼鷹の眼で捜し廻つてゐたネルソンの監視をくゞつて、無難にアレキサンドリアへ着いといふのは全く奇蹟であつた。彼は先づ巧みに英艦隊の間を脱け出してマルタ島を攻撃した。然るにこの島の防備は昔に聞えた堅固なものであつたのを、幸にその司令官が易々と買收に應じたので、佛軍は難なく上陸することができた。その間にネルソンは敵の行動を誤測してナポリへ向つた。ナポリから更に埃及の方へ追蹤したが、夜中知らずに佛艦隊を追ひ越して三日前にアレキサンドリアに着き、敵艦の影が見えないので慌てゝ引きかへすと、その後へ堂々とナポレオンの艦隊が入港した。更に彼の歸路はもつと危險なものであつたが、遂に敵に見つからずにすんだ。

かうした奇蹟的の出來事は、伊太利討征以來運命の寵兒を以て自任したナポレオンの信念を裏書して、いよ〳〵彼が力の自覺を確める材料となつた。で、この信念は齢と共に增長して、後半生には彼自らを一種の半神であると考へさせるやうになつた。彼は恁う言つた。

『不可能といふ語はたゞ愚人の辭書の中にあるだけだ』

と。また恁うも言つた。

『神は余に與へるに一切の障害を征服する力と意志とを以てした』

と。『余は常人でない………』、終に彼はかう思ひつめるやうになつた。

然し、見えないやうにして彼の傍に立つてゐた黑裝束の「運命」はいつまでも彼の味方ではなかつた。このいまはしい神がやがてその冷酷な赤手を振ふ時が來なければならなんだ。

四

『梨は熟した』彼の留守中に、佛蘭西の共和政府と軍隊とは非常に困難な立場に陷つた。それを埃及で聞き傳へた彼は(英艦隊の司令長官がからかひ半分にそれらの情報の載つてゐる近着の新聞を彼に渡したのである)、時こそ來れと直ちに本國へ取つて返した。

彼の上陸が知れるや否や、佛蘭西の全土を傳つて、『この邦を救ふものはナポレオンを措いてほかにない』といふ暗默の叫びが、電氣の如く急速にそして鋭敏に響き渡つた。彼の通過した沿道は宛で一つの長い凱旋行列のやうだつた。寺院は祝福の鐘を鳴らし、夜の町には祝ひ火が熾んに焚かれた。この間を彼は金字塔下で偉勳を樹てた神秘的な英雄として巴里へ乘り込んだ。(彼は埃及での失敗を巧みに塗りかくしてゐた)。然し大望を持つた彼は直ちに群集(モッブ)のおだてに乘るには餘りに深慮がありすぎた。彼は自ら晦まして、なるべく歡迎會や劇場のやうな派手な場所に出ることを避けた。そして、軍隊といふ大きな威力を徹底的にその邦の政治に割込ませる手段に就て徐々と畫策を進めた。で、眞先に彼の手先についたのは例の坊主上りのタレーランであつた。總裁官の一人で冷血動物のシーイエが彼を利用するつもりで握手を求めて來た。これも古狐のフッシエが警視總監の位置にゐて相應じた。

準備はすつかり整つた。先づ第一著手として國會が巴里郊外のサン・クルウ宮殿に移された。一八九九年の十一月九月、即ち共和暦の「霧月(ブリュメール)十八日」は早朝から軍隊內が何となく騷々しかつた。早くもそれを嗅ぎ付けた巴里駐屯軍司令官のランアブル將軍は陰謀の火許を捜すために街へ出ると、丁度サバスチアナ大佐に出逢つた。で、言葉鋭どく彼を咎め

たところが、『ボナパルト將軍が貴官に逢ひたいと言つてゐます』といふ答であつた。已むなくナポレオンの旅館へ行つてみると、ナポレオンは短刀直入にかう言つた。

『將軍！貴官は共和政府の一支柱だ。貴官と余とは今日力を併せて、佛蘭西を愚かな法律家たちの手から救はんければなるまい』

『さうだ法律家を斃さう！余は貴官の味方だ』

とラファブルが答へた。そして彼はその時から一生ナポレオンに從つた。

その日のうちにサン・クルウの國會はムラアの率いた軍隊によつて强制的に掃蕩された。議員たちは窓を躍り越えて逃げた。このCoup detat（クーデター）は寧ろ一般市民に歡迎された。然し心ある少數者にとつては決して忘れえない暴擧であつた。スタエル夫人は佛蘭西國民の尊とい自由の爲めに泣いた。

ナポレオンが第一執政官として組織した政府には他に二人の執政官があつた。然し彼等はほんの飾物で、こゝにその名を掲げる必要さへ認めない。それよりも重要な役者は外務大臣のタレーランと警務大臣のフッシエであつた。同じく化けの皮を被つた油斷のならないしろものであつても、二人は種類が違つてゐた。前者が磨きのかゝつた「キッド」なら、後者のは粗製の狐の毛皮であつた。タレーランが權勢の香ひを嗅ぎ廻つてあちこちと移つて歩く狡猾さにはおのづから一種の威があつたが、フッシエは全くむき出しの惡人で、公然人を賣り、人を欺き、そして萬人から憎まれ、怨まれ、さげすまれて一生を通した。ナポレオンもこの男には時々手を焼いて、怒つたり貶めたりしてみたが、暫くすると復た重用せずにはをけなんだ。實際フッシエほど陋劣な用向に適した男はなかつたのだ。

ナポレオンの暗黒面を現はす一事實は、彼の買收政策と探偵政策とであつた。彼は大仕掛に敵軍の買收を試みた。ま

た彼の周圍はいつもフツシエの張つた精巧な探偵網を以て警戒されてゐた。かのナポレオン法典に關係した委員たちにさへ一々探偵が附けられた。彼は探偵政策の爲めには隨分思ひ切つた金を使つた。然るに面白いのは、逆にナポレオンの身の上に幾人かの探偵が附けられてゐたことである。例へば某近侍は彼の一擧一動を密告するといふ約束で、フツシエから一ケ月十萬フラン宛を貰つてゐた。ナポレオンの竹馬の友で第一の秘書官であつたブーリエンヌでさへ同一の目的を以て二萬五千フランの月手當を受取り、更に驚くべきは自分の夫の密探といふ格でジョセフィーヌが一日一千フランのお手當をフツシエに仰いだことである。

フツシエに限らず、ナポレオンの身の廻りには隨分多くのやくざな人間が隨いてゐた。然し彼は一向そんな事は頓着しなんだ。彼は人を使はずして唯だその才を使つた。苟も一藝ある者は善惡に拘らず彼に見ぬかれた。然し彼は彼等から超然としてゐた。そして決して人に迷はされるやうなことはなかつた――女にでも。實際、彼がその周圍の人からどれだけの影響を受けたかといふことは認めるに困難である。たゞ晩年になるほどそれが次第に著しくなつたのは爭はれない。

佛蘭西は今や永い革命の恐怖から免れて一陽來復の趣があつた。移住民は漸く安心して本國へ歸つてくるし、囚徒は放免されるして、社會的及經濟的の生活が新政府の宜しきを得た指導のもとに、ずん／＼と發達して行つた。

執政官としてのナポレオンの第一要務は諸外國との關係を整へることであつた。で、彼は先づ英國に和議を申込んでみたが、みごとにはねつけられた。それのみならず、英國の主導のもとに墺太利、バベリア、土耳古、露西亞、瑞典、丁抹及英國の對佛同盟が成り立つた。たゞ、露西亞のパウル一世のみはうまくナポレオンの策にかゝつて極端な彼の崇

拜者と成り終り、その軍隊を獨逸から引き上げて了つた。

ナポレオンの征墺軍は瞬く間に編成を了へた。砲兵や輜重やを含んだ大軍がアルプスの險を越えて神速に北伊太利の高原に殺到したときには全歐洲が驚愕した。彼は伊太利の救濟者として、一八〇〇年六月二日にミランの城門の前に立つた。彼が埃及遠征中に二度墺太利の手に落ちた伊太利國民は再び彼を見て喜んだ。彼等はナポレオンが埃及で討死したとばかり信じてゐた。かくて彼の第二伊太利遠征は幸先のよいものであつた。昔馴染の曠原には矢張陽が輝いてゐた。然しその下に照された軍隊は最早昔日の不規則な服裝をした烏合の衆でなくて、歐洲切つての立派な兵隊であつた。

若い頃のナポレオンは地圖の上に色の附いた針を幾本も立てゝみては策戰計畫をしたものだ。秘書官のブーリアンヌの話によれば、ナポレオンは巴里出立前にマレンゴの曠原の周圍に針を立てゝ、此處で墺太利軍と戰ふのだと言つたさうだ。然るに一八〇〇年の七月十四日に、彼はこの曠原中で不意に墺太利の大軍に出逢はした。あひにくと其前日に彼はダザイの率ゆる一隊をして別れて他の道を取らしたので、この軍隊の來援が間に合ふかどうかが勝敗の岐れ目であつた。然るに午後三時になつてもダザイの軍は姿を見せなんだ。勝敗はもう決つたやうなものであつた。敵の老將メラスは一日の戰に疲れ切つて安心して戰場を去つた。それが午後五時になつてもまだ援軍の影は見えなんだ。味方でも全く望を棄てなんだのはナポレオン一人であつた。彼は頑强に固守した。

そこへダザイが軍隊に先立つて馳せ附けた。彼は直ちにナポレオンと並んで戰の樣子を窺つたが、二人の意見はとても味方に見込がないといふことに一致した。若い二將軍は仲の好い友達だつた。

『まあ馬から降りよう。その方がお互の心がよく通ふやうだ。』

からダザイが言ひ出した。そこで彼等はさうした。そして戰の成行を見てゐた。ナポレオンの將軍たちは生死の境に

立つたとき、よくこんな物の言ひ方をしたものだ。そこへとう〳〵ダザイの軍隊が乘り込んで來た。二人は狂喜して手を握り合つて、そして馬に乘つた。半時間後にはダザイは大砲の彈丸に打たれて死んでゐた。

佛蘭西の軍隊は急に元氣附いた。白馬に跨つたナポレオンの小がらな身體が隊を縫つて縱横に馳け廻るのが見えた。

『諸君記憶せよ、余は戰場に眠るのを例としてゐる』

二時間後には佛軍は大捷を博した。果してナポレオンと其兵士とは疲れ切つた快よい安眠をマレンゴの野で貪ることができた。即夜に敵將メラスとの間に條約が結ばれて、佛蘭西は伊太利に於て失つた凡ての物を回復した。

マレンゴの驚くべき併し偉大な勝利が國民に與へた感銘は計り知れないものであつた。ナポレオンは急ぎ本國へ凱旋し、殆んど狂熱的な戰勝の光榮を享受した。

次で一八〇一年には、マレンゴの勝利及びモロオ將軍のえたホーヘンリンデンの勝利の結果としてリュネヴィル條約が結ばれ、佛蘭西の領土が増えて、歐洲は一時小康に歸した。幾千の市民は隊を造つてチュイエリー宮殿の下に集まり『ボナパルト萬歳!』を叫んだ。國民は第一執政官の職を終身官に改めて彼に報ゐた。

* * * * * * * * *

マレンゴの役につゞく若干月はナポレオンにとつて比較的平和な時代であつた。その頃の記録を讀んだことのある者は彼の身のまはりに附き纒つたオードコロンの香ひと共に、マルメーゾンの夏薔薇の香ひを想ひ出さずにはゐられない。マルメーゾンは巴里から西へ約十哩、セーヌ河畔に立つたナポレオンの別莊で、彼が第一執政官時代の氣に入りの場所であつた。そこには極めて少數の近親の人だけが集まつて、打ち寛ろぎた時間を送つた。彼の快闊な姉妹、將軍達の若い女房、奇麗な青年士官などが素人芝居をしたり、舞踏會を催したり、自由な情事を演じたりした。そこでのナポレオ

ン夫妻の生活は質素な中産階級に見るやうな慎しいものであつた。彼等はひとつ部屋で眠つた。彼の埃及遠征中にジョセフィーヌのとつた不貞の行爲さへ忘れられた如くであつた。

後庭での鬼ごつこや徒歩競爭にはナポレオンもよく加はつた。然しさうした折の團欒は他の者にとつては決して心から樂しいものではなかつた。なぜなら彼は至て氣むづかしやの危險な人物であつたから。彼は敗けることが嫌ひだつた。で、彼が誤つて芝生の上にころんだりしやうものなら、その傍にゐる者はどうしていゝかわからなんだ。

彼は若い頃から短氣で、癇癪持ちで、そして破壞的の性質を有してゐた。彼は決して聲を出して笑つたことがなかつた。彼は性質として笑へなんだのだ。即ち彼はしんから嬉々として陽氣になることができなんだのだ。彼の心はいつも苛立つてゐた。彼は暫くでもじつとしてゐられなんだ。彼は居常夥しく紙を費つた。華奢な道具は直きに彼の手で毀はされた。彼はどんなに遠慮すべき場所へ行つてもナイフで高價な机へ傷をつけた。彼は温室に咲いた稀代の草花を摘んで棄てた。ジョセフィーヌが最愛の小鳥をさへ彼は射殺した。せつかちの彼は遊獵中に誤つてマッサナ將軍の片眼を射た(その時の罪はベルチエに塗り附けられた)。

彼の氣質は至て氣まぐれで、發作的の危險性を帶びてゐた。彼はよく人との會談中に急に激怒する癖を有つてゐた。そして狂氣のやうになつて、忘れられてゐた相手の古傷をあばいたりした。その爲めに彼は數多くの人を永久に棄てねばならなんだ。外國の使臣に對してさへ彼はさういふ態度をとつたことがたび／＼あつた。一八〇三年の英國大佐ウィトウォースとの會見は有名な話柄であるが、彼はその時將に大使を毆らんばかりに激した。或人の話によると、事實毆つたのだともいふ。

然し多くの場合に於て彼の強い意志が、かうした彼の短氣を推し鎭めるのであつた。彼の眉間に現はれた神經質な獨

特の皺は、暫く間に大理石のやうな冷靜に被ひ隱された。彼自らの威嚴と利益との爲めには、彼は『いつでも獅子の皮を狐の皮と代へる』ことを知つてゐた。露西亞のパウル一世のやうに生のまゝの野性を曝らけ出すには、彼は餘りに理性的でそして意志的であつた。

マルメーゾンでこんな事が起つた。氣輕でいたずら好きな畫家のイサベイが或る部屋の前を通ると、うしろ向きになつて腰掛けてゐる一人の若者があつた。彼はてつきりそれがナポレオンの弟のルシアンであると思つた。で、彼は拔足差足、悟られないやうにそつと近づいて、兩手で強くその男の肩をつきながら、『ばあ』と言つてのぞき込むと、これはまた面と向つた怖い顏の持主は案に相違の第一執政官であつた。その時のイサベイの驚きやうつたらなかつた。憐れな藝術家はその儘夢中で庭へかけ出し、それから一目散に森の中へ逃げ込むだ。彼が漸く正氣付いて森を出てくるまでには長い時間かゝつた。然しナポレオンの方ではそんな事があつたことをば欠にもださなんだ。

また次のやうな例がある。一八〇四年、ナポレオンは英國討伐の目的を以て西班牙のブーローニュに大本營を置いてゐた。或日彼に海軍司令官のブリュウに命じて觀艦式を行はせた。然るにその日は朝から颶風の兆候があつたので、その不可能の由を答へると、彼は自ら司令官のとこへやつて行つて、血眼になつて怒鳴りつけた。ブリュウが理を辨けた諫告も容易に通じないほど彼は怒に燃えてゐた。

『結果がどうだらうとかまふことはない。直ぐ命令どほりにせよ。』

彼は恁う叫んだ。

『閣下、それはいけません。』

からブリュウがはつきり答へると、ナポレオンはいきなり彼の前に進んで手にした鞭を振り上げた。すると、相手は

きつとして劍の鞘に手を掛けた。『閣下、おつゝしみなさい。』……二人は數秒間互に睨み合つてゐた。ナポレオンが先づ鞭を下げた。次でブリュウが劍から手を離した。彼等は默つてその儘別れた。

ナポレオンの一生には溫かい友情といふものが缺けてゐた（天才は憐むべき一種の不具者である）。彼にとつては人間は驅使すべく命令すべき者であつた。それに彼には社交的の素質は露ほどもなかつた。彼は飲食の趣味を解せず、賭博に耽ることもなかつた。殊に長たらしい儀禮は彼の堪ゆるところでなかつた。彼の若い頃、殊に埃及行きの船の中などでは、彼は自分と同じ年輩の若い士官の間に雜つて戯談の言ひ合ひもしたものだが、自分の位置と年齢（とし）とが進むにつれて、彼はだん／＼嚴格になりそして氣むづかしくなつた。それには一種の政略も加味されてゐたが、彼の性癖にもよるのであつた。

彼の命令癖は一種の病氣（マニア）であつた。『指揮することは余にとつて自然である』と彼は言つた。『予の今日あるは征服の爲めである、予は征服にのみよつて今の位置を支へた』とも彼は言つた。

彼の命令癖について茲に一つの挿話がある。離婚後のジョセフィーヌは、彼の手厚い仕送りにも拘らず、とかく浪費の爲めに何時も苦んでゐた。それを知つたナポレオンは一日彼女の許に使を立てゝ嚴しくその事を戒めた。翌日彼は使の者に訊いた――

『彼女（あれ）は何と言つてゐたか。』

『陛下、皇后はお泣きになりました………。』

『なに、彼女（あれ）が泣いたと？。おまへの知つてゐるとほり俺は彼女（あれ）を泣かせるつもりはなかつた。直ぐまた彼女のところへ行つて來い。金のことは俺が可いやうにしてやるから心配するなとさう言へ。泣くなと皇帝が命令したと言

へ。」

彼の氣むづかしい性質はいつも彼の周圍に冷たい恐怖の空氣を撒き、一方彼の專制癖はいつまでもその鋒鋩を現はさずには措かなんだ。彼がその主人公となつてから、チュイエリイ宮殿の「自由樹」は一本殘らず伐り拂はれた。王朝時代の儀式がいつとはなしに復活されて、豪奢な宮廷的色彩が次第に濃厚になつて行つた。革命時代の合言葉であつた「市民」、「女市民」などの詞は彼の獨特な「革命暦」とゝもに急速に廢れて了つた。

それでもマルメーゾンの時代はまだ好かつた。後年彼が皇帝となつてからの宮廷生活ほど冷やかで不愉快なものはなかつた。長く彼に使へてゐた官女たちが、後にどれだけ當年のマルメーゾンの自由な空氣を戀ひ慕つたかといふことを知るだけでも、思半ばに過ぎるであらう。ナポレオンの周圍の人達の全注意は、最早や文字通りに「彼」の外に出でなんだ。「皇帝！」の一語は、ふだん耳を欹だてゝ待ち疲びれてゐた近侍の者を更に廿日鼠のやうに顫らせた。彼等の眼と考へとは雲行のわからない皇帝の氣心を讀むためにどれだけ費はれたか。彼は實にサタンのやうに殘酷で氣まぐれだつた。そして機嫌の好い時には、若い官女たちの秘密を發いたりして、彼等を死ぬほど驚かした。

チュイエリイやサン・クルウの宮殿では、諸外國の使臣やら國內の重立つた者やらが集まつて、極めて豪奢な儀式や宴會やが行はれてゐる間に、マルメーゾンの別莊では心安だての若い男女が集まつて、自由な戀の遊戯にふける間に――ナポレオン一人が超然として日々營んだ仕事の量はたいしたものであつた。彼は殆んど信じられないほどの仕事をした。日となく夜となき彼の努力勤勉は、彼の一生を通じて常に新しい驚異をその時代の人々にそゝつた。

彼の精力の第一の資本は彼の健康であつた。彼は一日中にほんの三四時間眠るだけで充分だつた。然も彼は晝夜の別

なく、眠らうと思ふ時に何時でも熟睡することができた。

ワグラムの戰では彼はその眞最中に、戰場で一枚の毛布を被つて二十分ほど眠つただけである。彼は或る戰のなかばに十一回も起されて命令を與へたが、然もそれが皆な正確であつた。晩年のドレスデンの役に於てさへ、彼は篠つく雨の中に廿四時間を馬背で驅け廻つたが、疲れた樣子は見えなんだ。一日四十五哩を退却するなどは、彼にとつては尋常の茶飯事であつた。

彼は小食家でそして早食家であつた。宴會で若い士官たちは未だスープを飲み終らないうちに既に立ち上る第一執政官を見て失望させられた。彼は平常はたか〳〵一杯の赤葡萄酒を乾すに過ぎなんだ。戰場では少しばかりのブランデーを用ゐた。彼の食事にはその睡眠と同じやうに一定の時間がなかつた。彼は食べたい時に食べた。然もそれは彼の要求に從つて卽時に供給されねばならなんだ。戰場では彼の跡を追ひ廻す料理番によつて、凡そ半時間毎に溫かい鳥ロースが作られた。それが或る場合は十二回も無駄になつても仕方がなかつた。

ナポレオンは馬術が下手だつたといふ定評である。さうかもしれない。然し、彼がオーステルリッツの戰の前に、五時間廿三哩平均で西班牙の山道を乘越して、誰よりも眞先に巴里へついた手並はたいしたものであつた。その時彼は幾匹かの馬を乘りつぶした。

馬を乘りつぶしたやうに、彼は人をも乘りつぶした。彼の歷代の秘書官は其の任務に堪えなんでやめた者が多かつた。一八〇三年、法典編纂の始まつた頃などは、彼は三日三夜打通しに仕事を續けて、自分は一向平氣だつたが、一處に働く大臣や秘書官は皆へと〳〵に衰へさせられた。その頃はよくサン・クルウで徹夜で會議を催したが、しまひには議員たちは疲れ切つて居眠を始めたものだ。

彼に實に爲すべき多くの仕事を有してゐた。旅の馬首が西に向ふときには、彼はいかにして西班牙を平げ、それからいかにして强敵英吉利を討つべきかを考へなければならなんだ。彼の馬車が東を指して驅けるときには、彼はどうして露西亞をなづけ、プルシアと和し、それからどうして墺太利を懲らすべきかを案じなければならんだ。巴里に駐まつてゐる時の彼の身邊には猶ほ多くの條件が堆積してゐた。閲兵、日々のやうに諸方から傷ついて歸る軍隊の再造、軍資の調達、そのほかもいろ／＼の內政問題まで、彼は一人で覽なければならなんだ。

況してその頃の彼に法典編纂を初めとしていろ／＼な內政改革の事業に熱中してゐたので、猶更多忙を極めた。『余は二十六時中働いてゐる――食事の間にも、芝居見物の最中にも、夜半に眼を醒した時にも』と彼自身言つてゐる通りで、凡そ彼ほど巧みに時間を利用したものは昔からないと謂はれてゐる。

かやうに精力の絶倫な上に、ナポレオンの頭腦の秀逸であつたことは全く驚嘆に値ひする。彼の心の働きは自由で、鋭敏で、緻密で、然かも實際的であつた。彼は天賦の事務家であつた。彼の頭腦の特色の一つはその屈曲性であつて、甲の問題から乙の問題に注意を移す際に些しの努力も要らなんだ。テーヌの言つてゐる通り、埃及遠征軍からの報告が吉であらうと凶であらうと、それが少しも法典編纂の事業から彼の注意を奪ふに足らなんだし、また法典編纂の事業が急がしいからと言つて毫も埃及に對する施設を妨げはせなんだ。『予に關係ある凡ての問題と人物とは悉く頭の中の特殊の抽出に納めてゐる、だから一事件若くは一人物の事を考へる場合には唯その抽出を引出せばよいのだ』と彼は毎々人に語つてゐた。

その當時の凡ゆる方面の學者が、ナポレオンの學識に就て言ひ合せたやうに驚嘆してゐるところから見れば、それが全く諂諛であるとは思はれない。彼の頭腦は人並優れて鋭敏である上に驚くべき記憶力によつて助けられてゐた。

殊に學生時代の勉學が後に非常に役に立つたやうである。歴史、地理、數學などを彼は好んで學んだ。その當時彼の作つた結構なノートは今も保存されてゐるが、之によつても彼の頭腦の組織立つてゐたことが能く說明される。それから後年彼の內政改革に資したであらうと思はれるやうな材料がそのノートの中に澤山あつて、古今の重要な諸國民の歷史や政體などが詳しく記述されてゐる。

彼はセント・ヘレナでグールゴーをつかまへて斯う言つてゐる。「予の成功の一部は予の數學の知識とそして凡ての物に就ての予の明確な觀念とに負ふ所が多い。予の記憶力は全く特別だ。若い頃予は三拾又は四拾以上の數字の對數を暗んじてゐた。予は佛蘭西の凡ての聯隊の士官の名を知つてゐたばかりでなく、何處に彼等が在勤してゐるかといふことを知つてゐた。猶その上に余は彼等の魂まで知つてゐた」と。

ナポレオンは或時ブーローニュから巴里への歸途に、自分の隊から離れて迷つてゐる一人の兵卒に出遇つた。そこで彼はその男が何聯隊の所屬であるかを訊いた上で、その聯隊の行程、速力などから考へて、今それが何處にゐるかといふことを敎へてやつたといふ話がある。

彼の軍隊に關する知識は實に詳細を極めたもので、報告書の如きも必ず精讀し、兵器彈藥のことから、各隊の陣地、行動は勿論、將校兵士等の個人に關する微細な點まで一々知悉してゐた。

そのほか何に拘らず場所や數字に就ての彼の記憶は驚くべきものであつた。彼はよく遠隔の地にある地方官からの報告を受取つた際、即座にその中の誤謬を訂正したりした。殊に會計上の誤りを發見する彼の能力は不思議なほどで、彼が數字に關する獨特の嗅覺を有してゐたのかの如くに見えた。或日大藏大臣のメーソン・サグインから呈出した軍資金の計算の中に二百萬フランの誤謬があるといふことを彼は言ひ出した。大臣に微笑しながら再調を約して引き下つた。然

るに骨の折れた調査の結果は、果して皇帝(その頃彼は皇帝であつた)の言つた通り誤算のあることが分つた。また他の場合に、彼は一歩兵聯隊の決算を査べてゐるうち(彼は凡ての會計に詳しく眼を通ほすのであつた)、壹萬六千フランの巴里滯在費が載せてあるのを發見した。然るに其の聯隊は嘗て巴里にゐたことがなかつた。彼は大臣を呼び附けてその事を訊した。大臣は再び微笑しながら再調を約した。然るにその時もナポレオンの方が正しかつた。

彼は何にもかも知りぬいてゐた。彼の知識は實際生活の全般に亘つて徹底してゐた。大臣も將軍も彼の下では單なる道具であり、多くの場合一種の飾りに過ぎなんだ。タレーランでさへも彼の側にゐる間は影が薄かつた。然し異常な事務家が彼の全部ではなかつた。彼はその上に天才を有してゐた。彼は事物の要領を解する驚くべき能力の持主であつたばかりでなく、本能的に大體に通ずる天眼力を具へてゐた。彼は凡らゆる物凡らゆる人を制御すべく生れた。彼の傳記者として有名なホーランド・ローズ博士の言つてゐる通り、『彼は敏狡な外交家、聰明な立法家、優勝の軍人、偉大の皇帝であつたよりも遙かにより以上であつた。彼は何よりも一個の人間として最も偉大であつた。』

(以下次號)

本論は二百三十枚の長大篇にして本號に掲載せるは其三分の一に過ぎず。次號の誌上には續稿全部を一回に掲載したき希望なるも、頁數の都合によりては今後二回に分載するやも計り難し。著者及び讀者諸君の御諒恕を乞ふ。(編者しるす)

新聞紙法改正問題

法學博士 美濃部達吉

(一)

言論の自由は一面には社會の進歩の源であり、一面には社會の秩序を紊すの禍源ともなる。之を過度に制限することは、社會の進歩を杜絕し、社會上の不平を釀成する所以であると共に、之を過度に放縱ならしむることは、社會の安寧秩序の爲に、甚だ危險である。言論の自由をして全く無制限ならしめようとするのは、固より無理なる要求であつて、放恣なる言論の害毒は測るべからざるものが有る。けれども言論の制限には常に二の大なる缺點が伴ふことを忘れてはならぬ。その一は、言論は思想の發表の殆ど唯一の手段で、而して思想の發表は人性內部の已み難き自然の要求であるから、言論を制限することは人性の要求を强ひて抑壓することゝなり、隨て社會の中に堪へ難い不平の念を釀成することである。社會上の不平は其れ自身に社會の安寧秩序の爲に危險少からざるもので、若しその不平が益益强大となり、益々社會に彌漫することゝなれば、社會の秩序を維持する爲にする言論の制限は、却てその秩序を根柢より覆へすの源とならぬとも限らぬ。他の一は、社會の進歩は常に各種の思想の刺激に依つて行はれるので、若し思想の發表を制限すれば、社會の進歩はそれだけ妨げられる虞が有ることである。言論の自由なき社會は、一定の鑄型に塡つた、傳統的の習俗をのみ固守して居る、活氣なき社會で、國民の元氣も無ければ、社會の進歩も無い。此の二の缺點は言論の制限には免れ難い結果で、言論を成るべく自由にし、之に對する制限を出來得べきだけ狹い範圍にのみ止めねばならぬ理由は、主として此の點に在る。

併しながら言論の自由が絕對に無制限であることは、如何なる社會に於ても到底許されないとすれば、如何なる程度に之を制限すべきかの問題が起る。其の問題には更に制度の問題と運用の問題との二が有る。制度の問題は如何なる法律を設くべきかの問題であつて、運用の問題は其の作られた法律を如何に運用

するかの問題である。法律が如何に寛大に出來て居るとしても、其の運用の任に當る者が、偏執固陋の我見を以て、殘酷にその法律を適用するならば、言論の自由は到底之を期待することが出來ないし、一方には又法律は可なりに嚴重な制限を設けて居るとしても、之を執行する官憲が寛容の精神を以て容易に其の法律を適用しないならば、法律は必ずしも弊害を生ずるものではない。それであるから、重要なるは制度の問題よりも寧ろ運用の問題であつて、假令現在の如き出版法新聞紙法を以てしても、若しその執行の任に當る内務當局者を始め、檢事、裁判官等が、充分に言論の自由を尊重するの精神を以て、その職務を行ふならば、或は大なる遺憾なきを得るかも知れぬ。けれども凡て權力ある者はその權力を濫用するの傾があることは、如何なる時代に於ても免れ難い所で、苟くも言論を制限すべき權力を與へて置く以上は、時として其の權力を濫用することの有り得べきことは、豫期しなければならぬ。隨て制度としても、成るべく其の濫用の弊の無いやうに、法律を制定する必要が有る。而して此の點から見て現行の出版法、新聞紙法には、遺憾とすべき所が少くない。出版法の事は求められた問題ではないから暫く之を措き、新聞紙法に付いて簡單に私見を述べる。

（二）

現行の新聞紙法が新聞紙の言論に加へて居る制限は凡そ三つに分かれる。（一）法律上の制限、（二）行政上の制限、（三）裁判上の制限即ち是である。

第一に法律上の制限とは、法律が直接に新聞紙に或る事を掲載することを禁止し、又は或る事を掲載することを命じて居るのを謂ふのであつて、其の掲載を禁止して居るものは（イ）公判に付する以前に於ての豫審の内容、（ロ）公開を停めたる訴訟の辯論、（ハ）公にせざる官の文書、公開せざる會議の議事、公にせざる請願書又は訴願書（ニ）犯罪を煽動又は曲庇し又は犯罪人若くは刑事被告人を賞恤若くは救護し又は刑事被告人を陷害する事項、（ホ）安寧秩序を紊し又は風俗を害する事項、（ヘ）皇室の尊嚴を冒瀆し政體を變改し又は朝憲を紊亂せんとする事項であつて、此等の禁止に違反して之を掲載した者に對しては、それぞれ相當に重い罰則が定まつて居る。此等の中（イ）（ロ）（ニ）に付いては別に言ふ所は無いが、（ハ）公にせざる官文書又は公開せざる議事に付いて、其の掲載を禁止し、刑罰を以て制裁として居ることは、不當であると信ずる。此等秘密の文書、秘密の議事に付いて、若し眞に國家の爲に秘密を必要とするならば、當局官憲若くは當局議員に於て、その秘密を嚴守すべきであつて、若し之が外部に洩れることが有れば、それは實に當局者自

身の責任である。自己の過失に依つて其の秘密を洩らしながら、却て之を探知し得て新聞紙に掲載した者を處罰するのは、是れ責任を他に轉嫁するもので、極めて不條理と言はねばならない。實際にも此の禁止は、殆ど無視せられて、公開せられない議事が、毎日の如くに新聞紙に掲載せられないことはない。殊に議會の委員會は法律上は秘密會であり、貴族院は實際にも委員會に何人の傍聽をも許さないにも拘はらず、委員會の議事の經過は、公然各新聞紙に掲載せられて、何人も之を怪しむ者も無く、又嘗て刑事問題となつたことを聞かぬ。即ち今日では此の法文は有れども無きが如く、殆ど實行せられない規定となつて居るのであつて、是れ軈て其の規定の不條理なることを證明するものである。況んや請願書訴願書に至つては其の掲載を禁止すべき理由は全く無い。

次に(ホ)安寧秩序を紊し又は風俗を害する事項を新聞紙に掲載したる者は發行人編輯人を六月以下の禁錮又は二百圓以下の罰金に處すといふ規定が有る。此の中風俗を害する記事に付いては別に言ふことはない。凡そ言論の取締に付いて、風俗上の取締と公安上の取締とは區別して考ふべきもので、風俗上の取締に付いては、人間の天性が若し之を自然に放任して置けば極度まで放縦に陷いるの傾向有る以上は、或る程度まで之を節制することは、缺くべからざる必要であつて、刑罰を以て風俗を害すべき記事の掲載を禁止することにも敢て異論は無い。けれども公安上の取締に至つては事頗る之と異なつて居る。現行法の如く安寧秩序を紊す事項を掲載したる者といふやうな漠然たる規定を以て、刑罰を課して居るのは、新聞紙の責任を殆ど裁判官の擅斷的支配の下に置くものであつて、新聞紙に取つては不安此の上もない規定と言はねばならぬ。眞に國の安寧秩序を紊すべき行爲ならば、法律は必ず犯罪として之を處罰すべき筈であつて、此の如き行爲を賞揚し、煽動するが如き記事を新聞紙に掲載するならば、是れ即ち犯罪を煽動する事項といふに該當し、別に其の規定が設けられて居る。其の外に尚皇室の尊嚴を冒瀆する事項を掲載した者に付いても別に刑罰の規定が有る。此等の外に尚別に獨立の條項として安寧秩序を紊す事項を掲載した者を處罰する規定を設くることは、啻に必要が無いのみならず、頗る危險と言はねばならぬ。安寧秩序といふことは、風俗の問題とは異つて、各人其の立場の異なるに隨て、各々其の意見を異にし、之を裁判官の認定に任することは、如何に裁判官の常識を信用するとしても、尚甚だ不安である。或る者より見れば、民主主義の主張を以て公安に害ありとなす者もあり、他の者より見れば、所謂國體擁護論又は神道主義の主張を以て公

安に害ありとなす者も有る。此等は凡て各人の思想と地位との相違に依つて、意見の相違を生ずるのであつて、之を一に裁判官の認定に任かせ、裁判官が公安に害ありと認めたならば、六月以下の禁錮といふが如き嚴罰に處せらるゝことゝなつては、何人も安んじて筆を取ることが出來ぬであらう。幸にして裁判官の妄斷は左程に甚しくないにしても、此の如き規定を設けて置くことは甚だ不當であつて、是は絶對に削除することが必要である。

最後に(へ)皇室の尊嚴を冒瀆し政體を變改し又は朝憲を紊亂せんとする事項を記載した者に付いては、更に一層嚴重な罰則が定められて居る。此の中、皇室の尊嚴を冒瀆する事項に付いては、固より當然の規定であつて、爰に論議する迄もない。唯此の點に付いても、裁判官の穩健なる認定に依つて、刑罰を濫にすることなく、世人をして司法權濫用の怨なからしむることを希望するに止める。政體を變改し又は朝憲を紊亂せんとする事項といふに至つては、皇室の尊嚴を冒瀆すること以外に、特に區別して規定するの必要を見出さない。否、是あるが爲に却て多くの疑を生ずる。皇室の尊嚴を冒瀆すること以外に於て、政體を改變し朝憲を紊亂すとは、果して何を意味するのであるか。若し現代の立憲政體の弱點を認めて其の改善を主張し、又は現行憲法の缺陷を信じて其の變更を鼓吹する者を指して、政體を改變し、朝憲を紊亂する者であるとし、之を處罰せんとするのであるとすれば、其の不當なること固より言ふ迄もない。日本の現行憲法が多くの缺陷あることは、少しく憲法を研究した者の何人も氣付くべき所で、其の改善を主張することは、固より當然であつて、勿論禁ずべき事柄ではない。乍併朝憲といふ文字は動もすれば憲法の意に解せらるゝ虞が有る。此の如き文字は凡て之を刪除し、單に皇室の尊嚴を冒瀆するの記事をのみ禁止し、之を處罰するを以て足れりとするであらう。

以上は法律が掲載を禁止して居る事項であるが、其の外に法律が積極に新聞紙に掲載を命じて居る事柄が有る。正誤書及び辯駁書はそれであるが、是に付いては別段言ふ所は無い。

(三)

第二に、行政上の制限とは、行政官の職權に依つて制限を加へる場合であつて、是が最も問題となるべきものである。行政上の制限は、更に二に分けて考へる必要が有る。(一)發賣禁止の問題及び(二)掲載禁止の問題是である。

(一)發賣禁止の問題は、出版法と新聞紙法とに共通な問題で、殊に出版法に付いては、總つて著作物を支配するのであるから、一層重要である。而して出版法及び新聞紙法の何れに於て

も、內務大臣に絕對の發賣禁止權が與へられて居る。即ち內務大臣が安寧秩序を紊し又は風俗を害すと認めたものは、新聞紙でも又は一般出版物でも、其の發賣頒布を禁止することが出來るので、而して此の處分に對しては、如何に其の處分が不當であつても、何等の救濟手段もなく、內務大臣の處分が絕對の權威を有つて居るのである。是は現行法の中でも最も問題となるべき點で、若し出版法新聞紙法を改正するとすれば、第一に改正せらるべき點である。

發賣禁止の問題に付いても、風俗上の取締に基く發賣禁止と、公安上の取締に基く發賣禁止を區別して、論ぜねばならぬ。風俗を害すべき出版物又は新聞紙に付いては、何等かの權力に依つて、其の發賣頒布を差止めることは、已むを得ざる必要である。其の權力を內務大臣に屬せしむべきか、又は必要なる檢閱機關を設けて、之にその權力を與ふべきかは、考慮を要する問題であるが、兎も角も何等かの權力に依つて、發賣禁止を爲すことは、必ず出來るやうにしなければならぬ。若し然らざれば、劣惡卑猥の文書圖畫が社會に横行して、風俗の墮落測るべからざるものがあるであらう。

けれども是に付いても亦二の點に於て注意を要する。一は制度の改善に付いての問題で、一は其の運用に付いての問題である。先づ制度から言へば、現行制度に依れば、發賣禁止の權は內務大臣に屬し、一たび內務大臣が風俗を壞亂するものと認むれば、それが最後の認定であつて、其の著作は如何に不朽の價値ある大著作であつても、其れ限り永久に社會から葬られ、何處に訴ふべき途も無い。しかも所謂內務大臣の認定は、其の實は一屬僚の認定である場合が普通で、此の如き重大なる實權を一內務の屬僚に與へて置くことが、果して適當であるかは、頗る疑はしい。少くとも內務大臣の發賣禁止の處分に對して不服である者は、更に適當の機關に上訴して、公の裁判手續に依つて、其の不法を爭ふことを得せしむることが必要である。其の上訴を爲すべき機關としては、差當り行政裁判所が適當であらう。固より行政裁判所の裁判と雖も、必ずしも萬全を期することは出來ないけれども、兎も角も公開の法廷に於て辯論を以て之を爭ふことが出來、又數人の裁判官の合議に依るのであるから、之を內務大臣の單獨の職權に任かせ、事實に於ては一屬僚の認定に依つて決する現行の制度に比ぶれば、遙に適當の制度といふべきであらう。

併ながら發賣禁止の問題に付いては、制度の如何よりも、殊にその運用の如何が大切である。假令現行制度の如く內務大臣に其の全權を委ねたとしても、若し其の運用を誤らないなら

ば、大なる實害なきを得るであらうが、不幸にして從來の實驗に依れば、其の運用は甚だ滿足し難いものであつた。就中最も不滿を感ずるのは、その取締の標準となる點が、專ら風紀の一點にのみ止まり、其の著作の文藝上の價値如何を考慮しないことに在る。凡そ警察上の總ての取締に於ては、常に其の取締に依つて生ずべき利害輕重を較量することが必要である。社會生活に於ての總ての事柄は、一面に於て社會に多少の有害な影響を與ふることは避け難い結果で、唯其の社會に及ぼすべき害と其の社會上の存在の價値とを比較して、其の存在の價値が其の有害の影響を蔽ふに足るべきだけに大なるものであれば、その害は社會上の必要なる害で、社會は其の害を忍ぶか又は少くとも他の方法を以てその有害の影響を除くことを努めねばならぬ。若しその存在の價値如何を考慮せず、單に風俗上有害なりといふだけの理由を以て禁止するならば、禁止すべきものは尚甚だ多い。飲食店、料理店、待合茶屋の如きより、東京市の電車に至るまでも問題となるであらう。著作物に付いても亦同樣であつて、その風俗に及ぼす影響を顧慮することは、固より必要であるけれども、之と同時に其の學術上又は藝術上の價値を考察することは、極めて必要である。學術上の著作物に付いては、當局官憲も流石に此の點を顧み、醫學上の著作物などに付いては、假令風俗上多少の惡影響あるべきものであつても、之を寬容するの度量を惜まないやうであるが、獨り文藝に關しては、從來殆ど此の點を顧慮するの形跡を見ないのは、甚だ遺憾である。『人生は短く藝術は長し』。藝術上の價値ある製作は、數百年の後までも尚能く人心に光明を與ふるに足るべきものであるのに、僅に一時の行政の局に當つて居る官僚の認定に依つて、永久に其の生命を奪ひ、之を社會から葬り去ることを敢てするのは、文化の爲に如何にも遺憾に堪へない所である。

前に言ひ殘したが、制度の改善に關して尚一の希望すべき點は、從來は出版物が發賣禁止になる場合には、その中の如何なる部分が風俗に害が有るかを指示せず、其の全部に付いて發賣を禁止することゝなつて居り、隨て單に一小部分にのみ風俗上有害な點が有る場合でも、其全部が禁止の運命に逢ふことを免れないのであるが、是は不必要な制限であつて、若し或る特定の部分が風俗上有害であるとすれば、其の部分のみを刪除して發賣することを許すのが至當である。既に印刷した出版物は其部分を截り取り、將來增刷し又は再版すべきものには、其の部分を除き又は訂正して發行することを許して、更に差支の有るべき筈はない。是は現行制度の下に於ても出來ないことではないが、制度としても、內務大臣が發賣を禁止するには、必ず

其の中の如何なる事項が風俗を害するかを指示して、禁止すべきものとなすことが至當であらうと思ふ。

（四）

公安上の取締に基く發賣禁止に至つては、之を官憲の專斷に一任することは、風俗上の取締に基くものよりも、更に一層危險の甚しいものである『安寧秩序を紊す』といふが如き漠然たる規定は、其の實は何等の標準をも示さないものと大差なく、此の如き標準を以て內務大臣の發賣禁止權を認めて居るのは、殆ど內務大臣は隨意に發賣禁止を爲し得べしといふに異ならぬ。此の如き漠然たる規定は、宜しく之を削除すべきものである。それは必ずしも公安上の取締に基く發賣禁止を全廢すべしと言ふのではないが、唯其の發賣禁止を爲し得べき具體的の場合を列記し、それ等の場合に限つて禁止を爲し得べきものと爲すべきである。

如何なる場合に於て其の禁止權を認むべきかは、輕卒には斷定し難い問題であるが、自分は、刑罰を以て掲載を禁止すべき事項と、發賣禁止の原因たるべき事項とは、同一ならしむることが至當であると信ずる。卽ち皇室の尊嚴を冒瀆する事項、犯罪を煽動し又は曲庇し、犯罪人又は刑事被告人を賞恤若くは救護し、又は刑事被告人を陷害する事項、公判に付する以前の豫審の內容、公開せざる訴訟の辯論、檢事の差止めた搜査又は豫審中の被告事件等を記載した者に對しては、一方には刑罰の制裁を定めると共に、一方には內務大臣が其の發賣頒布を禁止するの權あるものと爲すのが適當であらうと思ふ。而して其の禁止處分に對して不服なる者は、更に行政裁判所に出訴し得べきものとなすべきことは、風俗に基く發賣禁止に付いて述べたと同樣である。

（五）

（二）行政上の制限の第二は掲載禁止である。現行法に依れば、四種の場合に於て行政權に依り新聞紙に對し、豫め或る事項の掲載を差止め得べきことを認めて居る。

第一は、陸海軍大臣が軍事に關する事項の掲載を禁止し又は制限するの權である。是は戰時に於ては或は其の必要を生ずるであらうと信ずる。けれども戰時に於ては啻に言論の自由ばかりでなく、旅行の自由、營業の自由、集會結社の自由等に至るまで、平時とは異つた特別の制限を受けねばならぬのであるから、戰時に於ける制限は、戰時の非常特別法に讓り、平時から既に其の制限を定めて置く必要は無く、而して平時の法律としては、軍事に關する事項と雖も敢て其の掲載を禁止すべき理由は無い。固より平時に於ても軍機の秘密に屬することは勿論無

ないではないが、それは軍事當局者は其の秘密を嚴守し、其の外部に洩れることを防ぐべきで、若し外部に洩れることが有れば、それは當局者の責任に外ならぬ。

第二は、外務大臣が外交に關する事項の掲載を禁止し又は制限するの權である。是は軍事に關するものよりも一層其の理由に乏しいもので、國民的外交の本旨に反すること甚しいものである。

第三は、内務大臣が新聞紙の發賣禁止を爲すと共に將來に向て同一主旨の事項の掲載を差止むるの權である。自分は前にも述べた如く發賣禁止を爲し得べき場合を、風俗を害する事項其の他刑罰の制限ある事項を掲載した場合にのみ限定せんことを希望するもので、若し此の希望が達せらるゝとすれば、それ等の事項は内務大臣より差止むる迄もなく、法律に依つて直接に掲載を禁止せられて居るのであるから、其の上に更に内務大臣の差止めの權を認める必要は無い。隨て此の規定も亦削除すべきものである。

第四は、檢事が搜査又は豫審中の被告事件に關する記事を差止むるの權である。是は恐くは必要な制限であらうが、唯之を檢事の職權に一任するのは、果して權力濫用の危險が無いであらうか、頗る疑はしい。

右の外に、前内閣の下に於ける最近の實例としては、内務大臣が各地方の暴動に關する記事の掲載を差止めた例が有る。是は現行の法律にも何等の規定の無い事柄で、唯内務大臣が發賣禁止の權を有つて居るのを根據として、此の種の記事は安寧秩序を紊すものと認定し、之を掲載したものは發賣を禁止すべきことを豫め戒告したものと認むるの外は無い。固より現行法に於ては内務大臣には絶對の權威を以て發賣禁止を爲すの權が有るのであるから、其の警告に對しては各新聞紙は之に盲從するの外は無いけれども、單純なる事實の報道を以て安寧秩序を紊すものとなすのは、認定權の範圍を超ゆるもので、正しく權力の濫用を以て見るべきものであらう。

要するに、將來に向て全く或る種の事項の掲載を禁止することは、言論の自由に對する頗る重大な制限で、之を行政官の職權に任することは、甚だ危險であるのみならず、其の多くは不必要の制限であつて、唯犯罪搜査の爲にする已むを得ざる必要の場合を除くの外は、全く之を廢止するのが正當と信ずる。

（六）

第三に裁判上の制限としては、刑罰の問題と發行禁止の問題とが有る。

刑罰の問題に付いては、最早時がないから、論ずることを

するが、唯一言したいのは、從來の判決例に依ると、同一人が發行人と編輯人又は印刷人とを兼ねて居る場合には、發行人たる資格に於いての刑罰と、編輯人又は印刷人たる資格に於いての刑罰とを二重に併課することになつて居るが、是は現行法の解釋としても、當否甚だ疑しい。法律が發行人と編輯人又は印刷人とを併せ罰して居るのは、二人共同に其の責任を負ふべきものとして居るからであつて、而して共同の責任と言へば、常に二人の別の人の存在することを前提として居るのである。若し同一人がこの地位を兼ねて居れば、共同責任といふやうな問題を生ずる餘地は無く、假令二の別個の資格を有つて居るとしても、同じ人の爲した單個の所爲に對して、刑罰を二重に併課することは、道理に於て有り得べきことではない。此の判決例は宜しく速に改めらるべきものであらう。

發行禁止の問題に付いては、現行法は裁判所に於て刑罰を宣告すると共に、或る場合に於ては將來に向て全く其の新聞紙の發行を禁止するの權あるものとして居るのであるが、是は信用ある新聞紙に取つては非常なる打撃であると共に、信用なき新聞紙に對しては殆ど實效を見ることの出來ない制限であつて、之を裁判官の認定に任かせて置くのは、甚だ危險である。單に理論上から言つても、發行禁止は一の行政處分であつて、刑罰裁判所に於て決定すべき性質のものではないのみならず、實際上から言つても、現に公安又は風俗を害する記事を掲載したものに對して、其の發賣頒布を禁止することは、道理ある處分であるけれども、將來に向て全く言論を閉鎖することは、餘りに過大の制限であつて、道理ある處分と言ふことが出來ぬ。況んや發行禁止と言つても、果して同一の新聞紙であるや否やは、正確には唯題號に依つてのみ判斷し得べき所であるから、假令發行禁止の處分を受けたとしても、唯題號を變更して發行すれば、差支はないので、實際に法律の目的を達することは不可能である。要するに裁判所の宣告に依る發行禁止の規定は、一面には甚だ過酷の制限であると共に、一面には殆ど實效の無い規定で、何れにしても宜しく廢止せらるべきである。

（七）

以上數項に亘つて述べた所を要約すれば、自分が新聞紙法の改正に關して希望する所は、主として左の諸點に在る。

（一）第二十條「新聞紙ハ官署、公署又ハ法令ヲ以テ組織シタル議會ニ於テ公ニセサル文書又ハ公開セサル會議ノ議事ヲ許可ヲ受ケスシテ掲載スルコトヲ得ス請願書又ハ訴願書ニシテ公ニセラレサルモノ亦同シ」とある規定を削除すること。

（二）第二十三條第一項「内務大臣ハ新聞紙掲載ノ事項ニ

テ安寧秩序ヲ紊シ又ハ風俗ヲ害スルモノト認ムルトキハ其ノ發賣及頒布ヲ禁止シ』云々とある規定の中、『安寧秩序ヲ紊シ』とあるのを削つて、『第何條(禁止事項を列記した條文)ニ違反シ』といふやうな文句に改め、且つ第二項として『前項ノ處分ニ不服ナル者ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得』といふ意味の條文を加へること。

(三) 同條第二項『前項ノ場合ニ於テ內務大臣ハ同一主旨ノ事項ノ掲載ヲ差止ムルコトヲ得』とあるのを削除すること。

(四) 第二十七條『陸軍大臣、海軍大臣及外務大臣ハ新聞紙ニ對シ命令ヲ以テ軍事若ハ外交ニ關スル事項ノ掲載ヲ禁止シ又ハ制限スルコトヲ得』とある規定を削除すること。

(五) 第四十一條『安寧秩序ヲ紊シ又ハ風俗ヲ害スル事項ヲ新聞紙ニ掲載シタルトキハ』云々とある中『安寧秩序ヲ紊シ又ハ』の文字を削ること。

(六) 第四十二條『皇室ノ尊嚴ヲ冒瀆シ政體ヲ變改シ又ハ朝憲ヲ紊亂セムトスル事項ヲ新聞紙ニ掲載シタルトキハ』云々とある中政體以下の文字を削ること。

(七) 第四十三條『(上略)裁判所ハ其ノ新聞紙ノ發行ヲ禁止スルコトヲ得』とある規定を削除すること。

迷路に彷徨せる我國の勞働者問題

早稻田大學敎授 北澤新次郎

一 勞働運動の究極の目的

曾てロレンツ・ホン・スタインは近代國家に於ける社會運動の必須性を指摘して曰く「吾人は實に人類の狀態に著しき變化を來し、國家も之れが爲めに甚しき影響を受くべき世界歷史の最も偉大なる運動を目擊しつゝあるもので、其の感化を回避せんとするが如きは極めて迂愚にして恰も大敵に對して幼稚なる武器を以て挑戰するが如きものである」と。近時我國に於ても勞働者問題なるものが世人の注意を喚起し來つたがこは何等不思議な事でなく社會進化の必然的運命である。凡そ一國に資本主義的產業組織興り、社會に資本家並に勞働者なる兩階級の分離

せらるゝに於ては、其當然の歸結として勞働運動なるものが發生せざれば已まない。尤も其發現の方式、時期の早遲、主義思潮の體様の差異はあるも其發生するに至る過程は何れの邦國も同一である。然らば斯くの如くして起る勞働運動の終局の目的は何であるか。換言すれば、現代の覺醒せる勞働者の要求は那邊にあるやと問へば、彼等は單に今日彼等を圍繞する不合理的壓迫を排擠して物質的豐富の生活を實現せんとするのが其の根本的目標ではない。實に近世に於ける勞働運動の究極の使命は勞働者が其日常從事する勞働をして社會的意義あらしめんとする努力に外ならない。即ち彼等のなす勞働が單に其の收得する賃銀に對する反對給付たるに止まらず、社會的進步に貢獻する一要素たる事を感得せんとする慾求である。要する今日の勞働者問題は勞働者が其の自らなす勞働に歡喜と愉快を求めんとする倫理的熱望に胚胎すると云ふも敢へて過言ではあるまい。尤も現今に於ける勞働運動の主要なる具體的要求はヨリ高き賃銀、若しくは勞働時間の短縮等であるが、此等の事項は唯に其の終極の目的に達する手段に過ぎないのである。然るに世人往々勞働者問題を目して一に是れ畢竟「胃の腑の問題」なりと斷言したり、或は之れ「小刀(ナイフ)と肉叉(ホーク)の問題」に外ならないと主張し、所謂勞働者の幸福增進設備(ウエルフエヤーウワーク)若くは純益分配を以てせば此問題を解決し得べしと考へる者あるは是れ勞働者問題の眞髓を理解せざるものゝ甚しきものである。蓋し資本主義的產業組織の下に於て勞働者の所得が漸次增加の傾向を有し、其生活狀態が愈改善せられつゝあるは明白の事實である。若し勞働者問題なるものが單に胃の腑の問題であるとしたならば勞働不安の現象の如きものは資本主義的產業組織の進展に伴ふて減少すべきものである。然るに今日の如く經濟的繁榮の狀態にあつて却つて勞働者問題が益高調しつゝあるは、其主因を產業界の狀況なる客觀的現象に求むべきものとするよりも寧ろ勞働者の倫理的衝動及欲求なる主觀原因に歸すべきものであると信ずる。

二　勞働者階級の孤立

思ふに英國に其端緒を發したる產業革命の齎せる最も大なる效果は產業自由の制度起つて勞働者の人格の自由を認識した事にある。即ち手工業崩壞して工場制工業の發生するに及びては從來親方對職人間に存在した主從的從屬關係全く消滅して、勞働は一に個人の自由意思に依る事となつた。而して斯くの如き自由雇傭制度は一面に於ては勞働者の人格を解放し、其の倫理的地位を向上したが、他面に於ては勞働者をして甚しく不安定の地位に陷落せしめ、動もすれば慘憺たる窮境に沈淪せしむるに至つた。蓋し產業革命以前に於ける資本家(親方)の勞働者(職

人）間の關係は極めて親密であつて其間何等社會的の懸隔なく、家族的、情誼的親交存在し、親方は自己の配下にある職人と共に働き、寢食を等ふして、職人の利害休戚をして自己の利害休戚に一致せしめた。加るに勞働者は時の經過と共に親方の地位に昇進するのが普通であつた。斯くの如き狀態にありては資本家對勞働者間に何等社會的並に經濟的隔隙の發生する必要はなく、従つて兩者間に階級的意識の誘致せらるる理由は少しもない。尤も時には勞働者側に於て尠からざる不平不滿の存在したりとするも、其等の不平不滿は將來の希望に依りて打消されて消滅する。之れに稍類似の狀態は我國に於ける資本家と所謂會社員との關係に見る事が出來る。今日年々歲々高等專門の教育を終了して實業界に入り、諸種の工場會社に就職する者共が、（丁稚上りの事務員も大體に於て亦然り）日々單調にして無趣味なる實務に服し孜々として勤務する所以のものは、彼等の胸中に於て數年後に於ては資本家の仲間入りする光明と希望を有するからである。故に彼等日常の生活に幾多の不平不滿あるに係らず、資本家に向つて對抗運動をなす事を敢へてせず、常に資本家に迎合、追從して一日も早く資本家の地位に到達せん事を希望する。而して彼等の斯くの如き希望は從來我國の實業界に於ては多くの場合に於ては可能であつたのである。（將來に於ては之れが可能を疑問とする）之れ我國實業界に於て所謂腰辨階級なる階級的意識の發生せざる所以であつて、彼等の大部分が日々極めて退嬰的消極的生活に甘んずるものであると信ずる。

斯くの如く往時の資本家並に勞働者間の社會的關係は極めて密接にして、何等兩者間に階級的軋轢の存せず、勞働者は資本家を目して必然なる協同生產者と確信して居つた。然るに產業革命の結果工場制產業起り、大規模生產の行はるるや兩者間の社會的關係に一大變化を及ぼしたのである。即ち貨物の大規模生產の行はるゝや富は漸次小數資本家の手中に掌握され、剩さへ富の獲得は社會上の潛勢力を馴致し、次第に豪放的生活をなすに至つた。加ふるに既に述べたるが如く雇傭關係の自由意思に依りて決定せらるる事となりたる結果從來資本家對勞働者間に存在したる家族的情誼は全く消滅し、勞働者が取結ぶ雇傭關係は昔日の如く資本家對勞働者なる人と人との關係に不して勞働者對株式會社なる人と死物との關係となつた。かくの如くして勞働者のなす勞働は任意契約の結果決定せらるる一定の賃銀の反對給付たるに止るに至り、彼等の生產する貨物及其需要其物の成否に就ては何等の利害關係を有せざるに及んで、玆に於て勞働者は其の爲す勞働に對する歡喜と愉快を永遠に喪失した

のである。更に勞働者が資本家と取結ぶ勞働契約は名目は自由公平なれども其實際に於ては社會的弱者の地位にあるが爲め常に不利不公平たるを免れない。其結果勞働者は絕へず資本家の壓迫を受け、益窮境に陷り、遂に慘憺たる生活狀態を甘受せざるべからざるに及んだ。斯くして勞働者は生產上の協同者たる地位を全く喪失し、其の人格的價値すら資本家の脚下に蹂躙せられ、恰かも牛馬の如く、若くは器械の如く取扱はるるに至つた。是處に於て勞働者は社會的孤立の運命に陷つた。

三　個人「我」の反省より階級「我」の覺醒へ

偉大なる活力は無限の孤獨から發生する。產業自由制度の結果益窮迫せる勞働者は永遠に闇黑裡に沈淪する事を肯じなかつた。產業組織の變遷の永續化されるにつれて勞働者は社會に於ける自己の立場を感知するに至つた。即ち新產業制度の下に於ける自己の社會的並に經濟的地位を自省し、自己と新資本家間に離間せられたる社會的懸隔の存在せるを會得するに至つた。勞働者は又昔日の如く再び資本家に昇進する事能はず、一度賃銀勞働者ならば其の一生を舉て勞働者たるのみならず、其後繼者も亦勞働者たらざるべからずと確信するに及んで、是處に社會に於ける自己なる物の地位を明瞭に意識し始めた。而して個人我に覺醒したる勞働者は其境遇、利害を一にする他の勞働者と共鳴するは進化必然の過程であつて、利害關係を共通する勞働者は共同我を自覺するに及んで玆に勞働者階級なる階級的意識に覺醒したのである。更に階級的意識を自覺したる勞働者が新產業制度が彼等を圍繞する不合理的壓迫を排擠して、社會的廢殘の境遇を脫却せんが爲めに團結の力(マッセンマフト)を發見するに及んで近代の勞働運動の序幕が展開せられたのである。尤も勞働者が團結の力に依つて其社會的並に經濟的地位の向上を謀らんと努力するに至りしは一朝一夕になつたものではない。即ち勞働者の慘憺たる狀況に對する支配階級の同情的態度及之れが改善を主張する輿論の高調、普通教育の進展、新聞雜誌の發達、殊に民主的思潮の波及は勞働運動の發生に與つて力があつた事を忘れてはならない。而して此等の諸原因の綜合は漸次勞働者の階級我を意識せしめ、勞働者が互に一致共力し、其の團體的勢力に依つて其の社會的並に經濟的境遇を向上し、遂に其終極に於てはプロレタリー階級其物の解放を期せんとするものが勞働運動の使命である。故に現代に於ける勞働者問題は階級的意識を覺醒したる勞働者が單に其團結力を利用して其の物質的充足を謀らんとする利己的動機に基くものでなく、寧ろ社會的正義を要求する倫理的動機に起因するものである。即ち勞働者は昨今の如

き生產の社會化せられたる時代に於て單に賃銀奴隷たるに滿足せず、更に進んで生產上に於ける彼等の分擔をして社會的に有意義ならしめ、以て社會的進步に貢獻しつゝある確信を得んとする努力であるから、正しく時代の社會的良心の發露であつて最も喜ぶべき現象であると信ずる。

四　不徹底極まる我國の勞働政策

斯くの如く現代の勞働者問題は階級我に覺醒したる勞働者が其社會的生活を完成せんとする深甚の欲求に起因する文化の問題で理性的倫理的現象である。而して我國に發生せる勞働者問題は其進化の階梯の差異こそあれ、其本質に於ては毫も其の異なる處がない。然るに我國に於ける蒙昧なる官僚連は勞働運動を目して暴徒一揆の類と同一視し、極力之れが抑壓に務め、其甚しきに於ては勞働者問題研究者をも危險視して其の監視を怠らなかつたのである。然れども時の力と時代思潮には流石の官僚も對抗する事能はず、最近に於ては幾分其抑壓的政策を緩和した樣である。思ふに今日に於ては頑迷なる官僚も聊かなりとも公正なる判斷力を具備するとせば(其れも頗る疑はしいが)從來彼等の危險視したるものは我國健全なる社會進展上最も安全なるものにて、危險視したる彼等自身こそ却つて最も危險視すべきものである事を會得するであらう。而して我政府の採る抑壓的勞働政策は緩和せられたりと雖も未だ其方策の不徹底なる事驚くの外なきものがある。最近川村警保局長の言なりとして新聞紙上に報道せらるる處に依れば「我國に於ては勞働組合の發生を禁止すべき法律なきが故に自然的に勞働組合の發生するは自由である。されども之れはかの治安警察法第十七條及第三十條の規定とは何等關係なく、斯くの如き法律は目下行政官の施行上の手心を緩和するが故に少しも心配なし」と。吾人は平民内閣として世人に賞讃せらるゝ原内閣の配下に斯くの如き矛盾極まる言辭を弄するもののあるは頗る不快に堪へざるものがある。成程今日我國民は憲法の保證に依りて結社の自由を承認され居るが故に勞働者が其の自衛的機關たる勞働組合を組織するは自由なりと雖も、其の運用をなすに當りては治安警察法第十七條及第三十條の規定は妨害とならざるを得ないのである。今試みに治安警察法第十七條及第三十條の條項を見るに次の如く記載せられてる。

第十七條　左の各號の目的を以て他人に對して暴行、脅迫し、若は公然誹毀し又は第二號の目的を以て他人を誘惑若は煽動する事を得ず。

一、勞働の條件又は報酬に關し協同の行爲を爲すべき團結に加入せしめ又は加入を妨ぐる事

二、同盟解雇者は同盟罷業を遂行する爲使用者をして勞務者を解雇せしめ若は勞働者をして勞務を停廢せしめ若は勞務者として雇傭するの申込を拒絶せしむる事

三、勞務の條件又は報酬に關し相手方の承認を強ゆる事

第三十條　第十七條に違背したる者は一月以上六ヶ月以下の重禁錮に處し三圓以上三十圓以下の罰金を附加す使用者の同盟解雇又は勞務者の同盟罷業に加盟せざる者に對して暴行、脅迫若は公然誹毀する者亦同じ

是處に勞働の條件又は報酬に關し協同の行爲を爲すべき團結とは恐らくは勞働組合若は雇主組合を意味するものであらう。然らば勞働組合若くは雇主組合に加入せしむる目的を以て他人に對し暴行、脅迫し、若くは公然誹毀するが如きは不法行爲として刑事上の犯罪を釀成するものである。次に吾人の理解し難きは同條二號に關する規定にして同盟解雇(工場鎖出)若は同盟罷業に對しては暴行、脅迫、若くは公然の誹毀以外誘惑、煽動の四字を加算してる。然らば此條文の精神は同盟罷業若くは工場鎖出を其本質に於て罪惡視すべき物である事を其の前提にして居るが如く思はれる。一體同盟罷業は果して其本質に於て惡事なるや。蓋し同盟罷業は多數の勞働者が結合して雇主をして或特定の要求を承諾せしむる爲になす就業の中斷である。而して同盟罷業は勞働者が採る最後の權力手段であるがこは或場合に於ては必要缺くべからざる手段で正當なる方策である。思ふに今日の如く個人の自由意思の認識せらるる社會組織に於ては雇傭關係は之れ一の契約に過ぎざるが故に勞働者が相約して或一定の條件に非れば其勞働を賣拂かないとするは頗る正當の事で、恰かも商人が一定價を得るに非れば其商品の販賣を爲さゞると同一である。故に同盟罷業が不法行爲を伴ふか又は社會の存立を危ふする事なきに於ては、勞働者の罷業を妨害し又は之を抑壓せんと試みるは甚しき不當と云はさるを得ない。而して勞働運動の未だ幼稚にして且つ永續的組織の發達の不完全なりし場合に於ける同盟罷業は屢暴行、狼藉を隨伴したるが、勞働運動の組織化され、其の漸次發達するに從つて同盟罷業の如きものも堅實となり、其方法も秩序整然何等の暴行を敢へてせざるのみならず、其回數の如きも比較的減少しつゝある。世人往々同盟罷業は之れ少數好事者の煽動の結果なりと思惟するものあれども、其は甚しき謬見にして同盟罷業に關する苦き經驗を有する勞働者が少數の煽動者の乘ずる處となりて斯の如き擧に出ずるが如きは寧例外である。よしや同盟罷業等が少數煽動者の煽動の結果起りたりとせば、それは此等少數者が同盟罷業を創造したるものに非ずして、既に存在したりし勞働者の不平

不滿の觀念を結合して之に活力を與へたる結果に外ならない。

斯くの如く同盟罷業は其本質に於て決して犯罪視すべきものでない。從つて勞働者が勞働條件の改善の爲め同盟罷業を起すべく勸告、誘引するは何等不當なるものでない。故にこの勸告、誘引を以て誘惡、煽動として處罪せんとするが如きは社會正義上不正當なりと云はざるを得ない。尤も吾人は同盟罷業は其本質に於て正當なりとするも、之れが發生を賞讃するものでは決してない。蓋し同盟罷業は如何に其自身が勞働者の有する權力手段なりとは云へ、要するに一種の兇器であるから之を濫りに使用すべきものではない。況んや之を實行するに當つて勞働者の受くる困憊は甚大なるものあるが故に成るべく之れを回避すべきものである事は論を俟たない。之れが爲めには吾人は資本家、勞働者及公平なる第三者を包容する勞働爭議解決機關の必要を主張するものである。仄かに洩れ聞く處に依れば我政府は此點に對して考慮する處ありて目下勞働爭議解決機關を設置せんとしつゝある樣であるが之は誠に結構な事である。されど吾人の聞く處にして誤りなくんば政府の設置せんとする機關に從事する當事者は勞働者階級及資本家階級以外の第三者のみに依つて組成せらるべしと云はれてる。果して然りとせば其無法不見識の甚しきもので勞働爭議を解決するに當りて其實際に通曉せざる第三者のみが如何にして當該當事者の滿足すべき所決をなし得るか。斯くの如き道理は常識を以てしても容易に判斷し得べく、斯くの如き機關は何等勞働爭議の解決に資する事能はず、寧ろ益々紛糾に導くものであると云はざるを得ない。余は政府が斯くの如き無意味の組織にて勞働爭議解決機關を設置せんとするの報道の誤報なるを切望す。然るにもし眞に政府がかゝる有害無益なる機關を設置せんと努力しつゝありとせば吾人は政府當局者の精神狀態を疑はざるを得ない。

要之同盟罷業はたとへ其れが勞働者の有する兇器なりとするも必要缺くべからざる手段にして、これなくんば勞働者の資本家に對する總べての交渉協議は無效なる事は恰かも軍備の背景なき一國の外交の如きものである。更に同盟罷業をなすに當りて勸告誘引を必要とせざりし場合あるとするも、其罷業をして有效ならしめんが爲めには罷業者の空席を他の勞働者が代つて取らざらん事を必要とする。之れが爲めには罷業勞働者は勸告及び誘引に依りて之を爲さんとする勞働者の階級的良心と同情とに訴へてなさゞるべからず。然るに法規の定むる處に依り勞務者をして雇傭するの申込を拒絕せしむるを禁ずるが故に總べての罷業監視を行ふ事を得ざる結果を來す事となる。斯くの如く勞働運動を爲すに當りて其の最も有效の武器を所有する事を

禁じて我國に健全なる勞働組合の發生を希望するは恰も兩翼を有せざる飛行機を作成し、之れをして空中に舞上らしめんとするが如き愚擧である。然るに斯の如き蒙昧なる法規の存するが爲め其一因を爲して我國に勞働組合の發達せざりしを理解せずして治安警察法は勞働組合の發生に關係なしと主張したり。或はありとするも目下は行政上の手心を緩和し居るが故に心配あらずとするが如きは如何に我國の蒙昧なる官僚輩が勞働問題に關する理解の不徹底にして且つ不眞面目なるかを赤裸々に暴露してる。

五　勞働組合の價値と我國資本家の態度

凡そ近代の勞働者問題は勞働者の問題である。從つて其解決も亦原則として勞働者自身に依つて爲さるべきものである。而して勞働者が其自助的自治團結機關に依つて、勞働運動の使命を遂げんとする努力は誠に奬勵保護すべきものである。即ち彼等が階級的連帶(ソリダリティー)の觀念に依つて團結し、其の團體的勢力を利用して其共同目的を貫徹せんとする盡力は唯に彼等自身の向上、發達を期する上に必要缺くべからざるのみならず、資本家階級並に社會政策の根本義より見ても重大なる必須的條件である。然るに我國の資本家は今日に於ても勞働組合の設立に反抗し、斯くの如き團結の發生するに於ては勞働者は此れを以て資本家を壓迫するの具となすべしと主張してゐる。斯くの如き見解が全く謬想たるは敢へて吾人の呶々する迄もなき愚論である。思ふに現今の如き生産の社會化せられたる時代に於て尙ほ資本家が傲然として「工場は我家なり、勞働者は我從屬者なり。若し我命に從ふ事を欲せざれば工場を去れ」と命令して工場制の上に封建制度を樹立せんとする者あらば之れを許容すべきものでない。實に今日の工場は雇主の私宅には非ずして公共的社會的有機體その物であるが故に、上述の如き自我的態度を固執する資本家を寛容するは人格の權威を容認する時代精神に背反するものである。果して然りとせば資本家は勞働條件の決定を爲すに當つて何等組織的背景のなき烏合の衆に等しき個々の勞働者を相手とするよりも、組織的團結の鞏固なる勞働者の代表者と協議するは遙かに經濟的にして便宜が多い。歐米諸國に於ける百年前の資本家連は勞働組合運動の當初に於ては未だ其本質及職掌に關して正當なる理解を有せざりし結果、之が發生を妨げ、之れと協議するを拒否したりと雖も今日に於ては大部分の資本家は自ら進んで勞働組合の代表者と協議し、之れが存在を喜ぶに及んだ。然るに我國の大部分の資本家は未だに封建時代の迷夢醒めず、勞働者を遇するに器械扱を爲し、或は温情主義の如き時代錯誤的方策を以て我國に於ける勞働問題を解決せんとする

が如きは其愚昧さ加減嗤ふに堪へて居る。

更に我國の蒙昧なる官僚並に頑迷なる資本家の或る者は説を爲して曰く「我國の現時の勞働者は勞働組合の如きものは要求し居らず、要求し居らざる勞働者に對して勞働組合の設立を促すは惡事を煽動するに等しき行爲にして危險なるが故に彼等の要求する迄まつは策の得たるものである」と。斯くの如き論者は今日我國の勞働者の實情を會得せざる素人的觀察の最も甚しきものである。實に急激の速度を以て世界に波及しつゝある民主的思潮の各階級に浸潤する廣さと深さは驚くの外はない。

我國に於ける勞働者の心理狀態が最近數ヶ年殊に戰時に於てなしたる變遷は極めて顯著なる事實である。蓋し數年前に於ける我國勞働者は未だ左程深刻に個人我も階級我も自覺しなかつた。然るに歐洲大戰の開始せられ歐米諸國に於ける勞働者が各交戰國の戰爭遂行に如何程重要事項であるかを知得した。更に世界的大政治家と賞讃せらるゝロイド、ヂョージ及ウイルソンが勞働者に對する態度と其勞働政策が進歩的公平的である事を理解し、更に進んで露西亞、及獨逸に於ける勞働者の勢力の偉大なるを會得するに至つて彼等の心理狀態は一大動搖を來した。而して翻つて我國內の狀態を見るに戰爭の開始以來我國諸種の産業は意外の繁榮を來し、資本家の利益は頗る巨額に達し、或會社の如きは六割乃至八割の利益配當をするものさへ出來た。然るに勞働者が收得する賃銀はたとへ幾分增加したりとするも未だ底知らず的の物價の騰貴に及ぶべくもない。然るに巨利を博したる所謂成金連は傍若無人の豪奢なる振舞をなすに及んで、如何に宿命的運命觀に育成せられた我國の勞働者と雖も反省せざるを得ない。之れが結果は戰時に於ける同盟罷業の簇生となつて顯はれたのである。而して一度階級我に覺醒しつゝある我國の勞働者は今後も益々團結的の行動に出づるは火を睹るよりも明白な事實で、既に今日に於て鐵工間には幾多の勞働組合成立し、關西に於ける一鐵工組合の如きは其會員千人以上に達してゐる。故に斯の如き狀態に到達したる勞働者に對して或は抑壓政策を取り、或は瞞着的なる手段を弄するは頗る危險にして、寧ろ政府當局は自ら進んで我國に健全なる勞働組合の發生及運用上の妨害物たるかの治安警察法の如き有害無益の規定を撤回して以て彼等の自助的機關の進展に資すべきもので、ある。凡そ外部的壓迫による服從及訓練は決して永續すべきものでない。眞正なる永遠的の服從及訓練は自發的に湧出するものである。而して勞働者が自發的自助機關を組織し之れに依つて其自らの運命を開拓せんとする努力は無限の價値がある。我國勞働者が之れを爲す素質無しとすれば即ち已む。ゲーテは

『世に無用の人は誰れぞと云へば自らを制御し能はざるものである』("Wer ist ein unbrauchbarer Mann? Wer nicht befehlen und auch nicht gehorchen kann") と叫んだ。而して勞働組合は其の自助的機關に依つてこの無用の人を減少し、人格の完成を成就せしむるに與つて力あるものである。噫勞働組合の效果も又偉大なる哉。我國の政府當局者並に資本家は須らく反省考慮して勞働組合の本質及其の職掌を研究調査し、一刻も早く蒙昧なる時代錯誤的態度を捨て、進歩せる世界の思潮に順應する精神と態度に歸るべきである。然るに若し我國官僚にして(我利的營利心に飽く事を知らざる資本家はさて置いて)依然舊習を脱せず、其の固陋なる方策を持續せんか、やがては將に成らんとする國際聯盟の實施せらるゝや、我國は憐むべき國際的孤立の運命に陥るか、若しくは諸外國の壓迫に依つて其頑迷なる勞働政策の變更を强要されるが如き國家的不見識を實驗するやも測り難い。我官僚輩たるもの今や改むべき秋にあらずや。

六　山師的勞働運動を排す

近時我國に於て勞働問題の世人の注意を喚起するや之れを利用して自己の賣名手段と爲さんとする者や、勞働者を食物にして自己の懐中を肥さんとする山師的勞働運動者簇生しつゝあるを見る。斯くの如きものは頗る卑劣なる心事にして其罪實に死に値する。蓋し我國の勞働者の現狀に誠心誠意同情し、自己の全身を献じて我國勞働者の解放に資せんとする者にあればそは現代我國の諸種の事業中最も崇高なる社會的奉仕をなす道である。然るに自己の宗派的勢力の擴張を謀る爲めに官僚と結托して勞働者慰安なる美名の下に勞働者間に退嬰的氣分の鼓吹をなすものがある。或は頑迷なる官僚畠に成長し、其政治的生涯に失脚したる政治屋が其政治的生命の復活を謀らんが爲めに勞働者を誘引して勞働者の團結を作り之れを以て將來自己の政治的復活の梯子と爲さんとする者もある。其の甚しきに至りては資本家より多大の援助と資金を得て以て勞働者の會合を爲し以て資本家の手先となつて自腹を肥しつゝある幇間的勞働運動者もある。斯くの如き勞働運動は其目的悉く自己の爲めにするもので勞働運動上に於ける獅子身中の蟲であつて我國に於ける健全なる勞働運動の進展を阻止する事極めて大である。然りと雖も我國に於ける勞働者は此等の山師的勞働運動者流に瞞着されるべく餘りに賢明である事を確信する吾人は早晩此等の似而非勞働運動の失敗に終るべきを豫期するものである。されども此等の瞞着的勞働運動者の採る手段方法は時に頗る巧妙を極むるが故に我國に於ける勞働者たるもの須らく自重して此等の者に濫用せられざる樣注意すべきである。

今や世界は急轉直下の勢を以て進展しつゝある。而して勞働者問題は今後益々高調するであらう。從つて之れが解決策も種種論議せらるゝに違ひない。然らば産業自由制度の確立以來發生したる資本家對勞働者間に擴大されつゝある溝渠は如何にすべきか。此の溝渠に架する橋梁はあらざるか。此の罅隙を充滿させるべき何物か非ざるか。此の重大なる質問にトインビーは答へて曰く「デモクラシーこそ其の橋梁なれ」と。實に此の解答は極めて單簡なれども其の解決の極致を指摘して餘す處がない。滔々と晝夜を別たず流れて已まざる大河の如く民主的思潮は世界に波及せんとする。愈紛糾せんとする勞働者問題も其の一大主調を産業上に及ぼし是處にインダスツルヤル、デモクラシーとなつて顯はれる時に其解決の曙光を見んか。（大正八年二月十九日認む）

疾病と遺傳

醫學博士 永井 潜

（一）

一千八百九十一年十一月十二日は、醫學の歴史に於て紀念すべき出來事の起つた日である。此日ミユンヘンの醫科大學教授で近代衞生學の建設者たるマックス・ペッテンコーフェル先生が、「コレラ」の純培養液の一立方センチメートルを自分で飲まれたのである。それは決して狂氣したのでもなく、又自殺の目的でもなく、實に眞面目なる學問上の爭から起つた物であつた。ペッテンコーフェル氏はコレラを始め、種々なる傳染病の原因は、専ら流行地に於ける特別なる關係、例へば地下水の如何若くは氣候の如何といふが如き、その時その處に特殊の關係が働いて起さるるものであるといふ意見を懷いて居られたのである。然るにロベルト・コッホ氏が曩きに結核菌を發見し、續いて獨逸政府の命を受けて印度に赴き、「コレラ」流行地に於て「コレラ」菌を發見し、意氣揚々として學界に之を報告した爲めに、黴菌說が非常な勢力を得る事になつたのである。併し乍ら、ペッテンコーフェル氏は何處までも自分の主張を曲げずして、

其局遂に自ら進んでコッホの所謂「コレラ」病原菌なる者を服んで、果して「コレラ」に罹るか否かといふ事を決定しようとされたのである。其際にペッテンコーフエル氏の言はれた言葉が頗る傾聽に價する。

若し自分の考が間違つて居て、此試驗が自分の命を危くしようとも、自分は靜かに死の神の面を凝視し得るであらう。何となれば、それは決して輕率な又卑怯なる自殺ではなく、恰も國家の干城が戰場に其屍を晒すと同じ樣に、學問の爲めに一身を犧牲に供するのであるからである。生命は世の極めて大切なる寶である。去り乍ら決して最も尊いものではない。人間の人間たる所以は、理想の爲めに其の生命を快く拋つといふ點である。

試驗の結果は輕い下痢が起つただけで本眞の「コレラ」にはならなかつた。今日より之を觀ればペッテンコーフエル氏の試驗は如何にも奇矯の如く感せられるが、併し乍らその自ら信ずること篤くして學問に忠實なる熱誠は、千載の下學徒の龜鑑とするに足りる。而して又此實驗は獨り病原の探求に對して重要なる意義を有するのみならず、凡ゆる出來事の眞相を理解する上に一大指針を與ふるものであると信ずる。

（二）

凡て一事一物の生來するのは、無數の條件が一定の結び付きをした結果に外ならぬのである。因果の關係を狹い意味に又極めて近眼的に考へると、一つの出來事に一つの原因が伴ふやうに思はれるが、併し乍ら廣く且つ深く之を考察するならば、決して爾く單純なるものでなくして、無數の原因無數の條件が結び付いて初めて因果の相を現出するものである。唯其無數の原因の中最も主要なる最も密接なる關係を有するものを捕へ來つて、原因と云つて居るに外ならないのである。

然り而して無數の條件は之を大別して內外の二つに分ける事が出來る。內的條件とは一事一物が具ふる本然の性情であつて、初めから內に具有せる條件である。それに對して外的條件とは外よりして之に働き掛ける無數の關係を云ふのである。而も此二つの條件の中、近眼的に因果律を取扱ふ場合には、專ら外の條件のみが眼立つて考へられるのである。從て斯かる場合に原因として取扱はれるものは、外的條件中の極めて限られたものに外ならぬ事になる。就中外的現象を以て研究の對象とせる自然科學者に於て、特に其弊に陷るのは必然の勢である。之に對して哲學者は屢々內的條件の忽諸にすべからざる事を說いて、自然科學者に警告を與ふる事を怠らなかつたのである。殊に大哲學者カントに至つて內的條件の重んずべき關係を明瞭に力

發した。カントは唯理學派と經驗學派との近代哲學の二大潮流を批判綜合して、智識の成立を明かにすべく彼の大哲學系統を組織したのであるが、其中に從來の哲學者が言ふべくして言はざりし一新說を陳べて居る。それは何であるかと言へば、是までの哲學者は、經驗學派に於ては勿論、唯理學派に於ても亦、事物の成立關係を專ら外に求めて、萬般の現象は外よりして心即ち內に與へらるものであつて、凡ゆる原理法則は事物それ自身の具へて居る所で、心なるものは單に之を寫し出す鏡に過ぎないものと考へて居つたのに對し、カントはそれと正反對の態度を執つて、法を立つるものは外に在らずして內に在る、即ち事物其物に非ずして心であるといふ事を力說したのである。

（三）

カントの說いた此新しき理論が外物を研究の對象とせる自然科學者の手に依つて科學的の裏書きを與へられた事は、學問の歷史上頗る面白い事である。輓近生理學の建設者たるヨハンネス・ミユーラー氏が感覺生理の研究に據つて得たる事實より歸納せる感覺神經の特殊勢力に關する法則は即ちそれであつた。言ふまでもなく、各種の感覺は外界の刺戟が感覺器官に働く時に惹起せらるるものである。而して色といひ音といひ將た味といふが如き種々なる性質の感覺が起るのは、果して何に由るのであるか。外來の刺戟其物の性狀の異なる爲めであるか、將た又刺戟を感受すべき感覺器官其物の性狀に基くものであるか。ヨハンネス・ミユーラーは此事に關して研究を遂げ、其結果として感覺の相違は外より與へらるゝ刺戟に出つて起るものでなくして、刺戟を感受する感覺器官の中に具へて居る特殊の條件に基くものであるといふ事を明かにした。是が即ち感覺特殊勢力の大法則である。例へば玆に電氣がある。之を眼を働かせれば色となり、之を耳に働かせれば音となり、之を皮膚に働かせれば痛みを覺え、之を舌に働かせれば味を起すものである。即ち外から働くものは同一の電氣であつても、之を感受する、感覺裝置の異なるに從つてそれぞれ異なる感覺を喚び起すのである。次に種々異なれる刺戟を用ひて同一の感覺裝置を刺戟して見るに、常に同一の感を起すものである。例へば眼を刺戟するに「エーテル」の波動を以てするも、機械的壓力を以てするも、又は電氣を以てするも、何れの場合も皆同じく光といふ感を起すのである。即ち感覺其物の性狀を決定する物は外より働く刺戟に在らずして內に備はる特殊の關係であると言へる。獨り感覺の現象のみならず、凡ゆる生理的現象は此法則に從つて成立つて居る。例へば如何なる性質の刺戟でも之が筋肉に働くと常に運動と熱とを起し、腺に働くならば常に其腺に固有なる分泌

物を出すものである。

（四）

釋迦の言へる如く老、病、死は實に人生の三大苦痛であつて、何人も凡ゆる立場より之に關する解決を求めて已まないのである。而して自然科學者は其自然科學の立場より、此の老、病、死に對して如何なる考へを抱いて居つたかといふに、專ら外的關係のみに着目して居つた。人の知識が頗る幼稚で、單に事物の現象を感ずることを得ても思考する事を得ざりし原始人類に於ては、生命に關する解釋は專ら外物に着目されて居つたのである。人が生きて居る間は身體の何處に觸れても溫い。生きて居る間は絕えず溫い呼吸氣が出入して居る。生きて居る間は心臟の鼓動が左の胸に響いて居る。然るに人一度死すれば如何、其顏、其手、其足、依然として生時に異なる事はないが、併し乍ら、彼は今や見ず、聞かず、語らず、而して身體の何れの處に觸れても溫が無く、氷の如く冷かになつて居る。呼吸の氣は何處に行けるか闃として、其の影をも認める事が出來ない。心臟は長しへに其の鼓動を鎭めて居る。斯かる有樣を感觸して、而かも之を思考する事能はざる原始人類に於ては、人を生かすものは溫氣であり、呼吸氣であり、動悸であり、而して是等のものが身體内に宿る時は生命があるが、一度身體を去ると生命が失はれると考へざるを得ないのである。或は又夢は時間空間を超越して、身體は正しく寢床の上に横はつて居るにも拘はらず心は千里の外に遊び、若しくは死者と語るが如き出來事を經驗しては、勢ひ身體を離れて之を生かし之が魂となるべき特殊の物が外にあつて、之が身體に宿れば身體は生きて居るが、之が離れると死ぬものであると考ふるのは無理もない事である。斯の如くにして死は實に吾人の頭に太古以來心身二元の考へを深く印象せしめねばならなかつたのである。而して之れやがて哲學宗教及び科學の流れの混々として湧き出でたる泉であつたのである。

斯樣な風であるから、病に對する考へも亦外よりして一定の物が宿つて惹き起されるものと考へたのである。或は病の神があつて之を起し、或は人の靈魂の身體を離れて彷徨せるものが憑依して病を生ずと考へて居つたのである。從つて斯かる場合にありては祈禱・禁厭が病を治癒すべき唯一の方法として行はれて居る事は、古今東西其軌を一にして居る。現に未開人に於ては今尚ほ其原始的狀態を脫却する事が出來ないのである。

然り而して斯く病の原因を全然外に求むる傾向は、獨り原始時代のみならず、人の知識が進歩し自然科學の發達し來つたる時代に於ても、尚ほ依然として異る處が無かつたのである。而

かも此風潮は病原菌なる物ゝ發見に由つて愈々動かすべからざる確實なる根據を得たのであつて、即ち原始人類が漠然と病の神として恐れて居た所の物が、近代の自然科學の發達に由つて細菌なる物に具象されて吾人の眼の前に示現されたのである。

（五）

斯くの如くにして病を論ずるに方つて、外因を重んずる事は、細菌學の設立に由つて最も堅固なる根柢を得たのであるが、而かも其細菌學の進歩が、同時に又、病を論ずる上に於て、内的條件の重んずべきものたる事を科學的に立證するに至つた事は、頗る興味ある現象と云はねばならぬ。即ち前に述べたペツテンコーフエル氏の獻身的實驗は、徒に外因のみを重んじて、動もすれば内的關係を度外視せんとする當時の學風に向つて、一大鐵槌を與へたのである。爾來細菌學の研究に由つて發見せられたる幾多の確實なる事實に據て、從來の人の考へたる如く、「コレラ」菌即ち「コレラ」病であり、結核菌即ち結核病であるといふ考が全く一つの誤謬であつた事が明瞭にされたのである。即ち病理學者の注意深き穿鑿に據ると、死體の百中九十以上は體内の何處かに現に結核菌を宿して居るか、或は曾て宿したる痕跡を示して居るのである。然るにも拘らず、直接結核の爲めに死ぬ人は極めて少數である。言葉を換へて云へば、結核菌を有して居りながら結核病にならぬ人が何程もあるのである。其他「チブス」菌にせよ「コレラ」菌にせよ、それが體内に宿つて居りながら、尚且つ何等病的の症狀を現はさぬ人が何程もある。細菌學者は斯樣な人を菌攜帶者と呼んで居る。斯ゝる人は自分は病氣に成らぬから、其の病菌を有することが發見せられず、方々に交通し、到る所に其黴菌を撒き布らす機會が多いので、傳染病の豫防取締の上に最も困難であり且つ最も危險である。斯の如く同じ黴菌でありながら、甲には病氣を起さず乙には之を起すと云ふのは、即ち同一の外的條件があつても、之を受くる内的條件即ち體質の相違に因るものであると說明する外は無いのである。即ち病の起ると起らぬとは單に細菌てふ外的條件のみならず、體質てふ内的條件が最も重きを爲すものと云ふ事が出來る。

然るに更に又生物學上の一大進歩に由つて、愈々益々内因の重んずべき事を吾人に指摘するに至つた。そは何であるかと云へば、メンデルに依つて建設されたる實驗遺傳學である。「メンデリスムス」に據れば、生物の形質は何れも内に具有せる遺傳物質の關係によつて決定されるのである。而かも此遺傳物質なるものは、何處までも其本性を失はぬもので、外界の影響に由つて變化する事も無いのである。而して少くとも動植物に

於ける遺傳的事實は、此學說に依つて殆ど數學的の精密なる程度に於て解釋し得らるるに至つたのであるから、愈々以て內的先天的關係が大切なる意味を有つやうになつたのである。斯樣にして兎角極端より極端に移り行かんとする人の心は、病に對して、今や動もすれば凡ゆる關係を內的遺傳的にのみ說明して、何等の考慮を費す事もなく病の遺傳なる者を是認せんとするやうな趨勢になつて來たのである。

（六）

併し乍ら眞理は何時も中庸に位する。極端なる外因尊重の謬れると等しく、極端なる內因尊重も亦其當を得たるものではない。凡ゆる事物の生來する爲めには、前に述べた如く、內外二つの條件の合同に因らねばならぬ事は病に關しても亦眞理である。卽ち病を起すべき外因が、病を起すべき內因と結着く時初めてそれが病なる現象を惹起するのである。而して此病を起すべき內的條件に、病的體質といふ名稱を與ふるのである。此體質の變異と外界の交涉と相待つて惹起される生活現象の變調卽ち病である。而も其體質の變異にも種々なる程度があり、外的關係の働き掛ける有樣にも亦種々なる變化が有り得るから、其の二つのものの交涉は極めて複雜であるが、兎に角病を起すに至る此交涉を名付けて病的傾向といふのである。而も其病的傾向たるや、或場合に於ては外因が專らそれに重を爲し、他の場合には殆ど內因のみがそれに關係して居るやうな兩極端があつて、其間に種々なる移り行きを考へる事が出來る。例へば玆に非常に劇しい毒物が働くとか、或は鋭い刀で切付けるとかいふやうな場合には、體質の如何に拘らず、凡ての人に生活の危險を喚び起すのである。卽ち斯かる場合には外因のみが殆ど凡てを決定する事になるのである。それに反して或る種の先天性疾病に於ては、殆ど之れといふ特別な外的の原因なしに、自然に其の病氣を起すやうな場合がある、斯る場合には、殆ど專ら內因のみが病を喚び起すと言つて可いのである。

（七）

偖て病と遺傳との關係を見るに、言ふまでもなく、外因が非常に重を爲す病に於ては、內的遺傳的關係といふものは殆ど何等の意義をも有つて居ない事になる。之に對して內因が非常に大切なる關係を有つて居る病に於ては、勢ひ體質の遺傳といふ事が最も重要なる關係を有つ事になる。

病と遺傳との關係を述ぶるに當つて、先づ以て明瞭にして置かなければならぬ事は、人が屢々謂ふ「病氣が遺傳する」といふ言葉の意味である。學問上嚴密に云へば此の言葉は間違つて居

る。前述の如く病は内外の條件が相加はつて出來る一つの生活現象の變調であるから、遺傳さるるものは病其物に非ずして、病を起すべき内的條件即ち病に罹り易き體質其物である。此事は獨り病許りでなく、凡ゆる遺傳現象に於て考へなければならぬ事である。斯かる形斯かる色が遺傳したとは誰しも言ふ事であるが、併し實はその色その形夫れ自身が遺傳するのではなくして、斯かる色斯かる形を表はし得る素因其物が遺傳物質として遺傳するのである。從て「病氣の遺傳」といふ事は、正當に云へば病の内的條件の遺傳、即ち「體質の遺傳」と言はねばならぬ。

次に考へなければならぬ事は、通常人は先天性の病即ち遺傳性の病であると考へて居ることとである。生れながらにして斯かる症狀を呈して居る者は、即ち斯かる病を遺傳したのであると一般に信ぜられて居るが、「先天性」といふ事と「遺傳性」といふ事とは必ずしも同一でない。例へば茲に生れながらにして梅毒の症狀を具へて居る子供がある場合に、之を先天性梅毒であると云ふのは正當であるけれども、之を以て直ちに遺傳性梅毒と云ふのは謬りである。何となれば「メンデリスムス」の立場から云へば、遺傳とは必ず祖先より承け繼ぎ來れる遺傳物質の受授に由つて起らなければならない。先天性梅毒の子供は、生れながらにして梅毒の症狀を具へて居るのは事實であるが、其梅毒を起すに至つた原因に遡つて見ると、決して遺傳物質の受授に由つて現はれ來たのではない。單に其子供が胎内生活をして居る間に親の梅毒に感染した結果に外ならぬのである。普通の梅毒感染と違ふ點は、唯成人では胎生後に感染するのに其子供は胎内生活に於て早く已に之に感染したといふ相違があるだけである。從て斯かる場合を遺傳梅毒と云ふのは當を得て居ない。勿論先天性といふ事は遺傳性のものをも含んで居るが、今述べるが如き遺傳性ならざるものをも其内に含んで居て、其範圍は一層廣いものと言はなければならぬ。

斯くの如く一見遺傳性と見ゆる場合に於て實は遺傳性ならざる病があるが、それと正反對に一見遺傳性と見へない生活現象の變調が、實は遺傳性である場合がある。例へば「アルコール」中毒症狀の如きは、一見すれば「アルコール」中毒の爲めに惹起された病狀で、恰も全然「アルコール」てふ外的原因にのみ基き、遺傳に因るものではないやうに思はれる。然るに近時英國の有名な民族衞生學者たるピアソン氏の研究に據ると、大酒家の子孫に大酒家や精神薄弱者、癲癇等の多いのは、決して一代の間に親が「アルコール」の爲めに受けた心身の變化が子供に遺傳して起るのでなくして、實は「アルコール」に耽溺するやう

な體質其物が已に異常であつて、從て此異常なる體質が子孫に遺傳されて、種々なる心身の薄弱なる子孫を生ずるのであると云つて居る。

（八）

一代の間に生物が外的關係によつて得たる形質の變化が、果して遺傳せらるるものであるか否かは、理論上並に實際上頗る興味がある、また非常に大切なる生物學上の一大問題である。而して又此問題は病の遺傳といふ事に密接なる交渉を保つて居るのは言ふまでもない。若し一代に受けたる形質の變化が遺傳するものであるならば、人が何等かの外的關係に由つて病を起した場合に、其病的關係が後代に遺傳すべきであつて、若し然らずして一代に受けた變化が其人のみに止まつて子孫に遺傳しないとしたならば、病的關係に於ても亦、其遺傳は前に述べた如く、其の人が祖先より繼承し來たれる本然の稟性、卽ち單に病を起すべき內的條件（病的體質）の遺傳に止まるべき筈である。然り而して此大問題は、人の知る如く、ラマルク、ダアウヰンの如き昔の大家に於ては何れも、一代に獲得せる形質遺傳の起り得る事を初めより是認して其學說を立てたのであるが、ワイスマンが之に向つて始めて嚴密なる批判を下し、其事實を否定せる以來、多くの學者は否定說に贊成を表するやうになつて來たのである。併し乍ら最近に至つてゼーモン、カンメレル、サムナー、プシブラム等の諸學者が、種々興味ある遺傳的實驗を行つて、一見獲得性の遺傳を立證する事の出來るやうな事實を述べて居るのであるが、然し仔細に之を批判すると、何れも十分なる根據を有つて居ないのである。

獲得性の遺傳といふ事を嚴密に云へば、外界の影響が身體に働いて其形質の變化を喚起し、而して其變化が生殖細胞內に於ける遺傳物質に影響して、其子孫に丁度それと同じ變化を內から惹起した場合でなければならぬ。それに反して、若し外界の影響が、體細胞に働くと同時に、生殖細胞に働いて、親に起つたと同じ變化が其の子孫に現はれて來たのであるならば、外界の影響が直接に生殖細胞に働いたのであるから、それを以て直ちに獲得性の遺傳とは云へないのである。斯かる場合は之を並行感應（パラレル・インダクチオン）と呼ぶのである。而して最近の研究に由つて、一見獲得性の遺傳と看做されたる事實も、能く之を分析批判して見ると、實は並行感應である事が立證されたのである。之に關して頗る興味ある實驗的研究の一つを紹介して見よう。

最近にカーネギーの研究所に於て、タワー氏が一種の「コロラド」蟲について頗る大仕掛けの遺傳研究を多年に渡つて行つた所に據ると、溫度や濕度や光度等を變化する爲めに種々なる

變種を此昆蟲に生ぜしめる事が出來るのである。タワー氏の頗る興味ある研究に據れば、「コロラド」蟲の蛹の時に、溫度や濕度を劇しく變化すると、それから孵化する成蟲には變化が起るが、其變化した蟲を交はして出來た子には、何等其の變化が遺傳されて來ない。然るに今成蟲の狀態にあるものに溫度や濕度を變化させて見ると、成蟲其物の色や大さに何等の變化も起さないが、然し其成蟲の卵から出來た子には變化が起つて、而かもそれは後代に遺傳される事が確められた。而して外界の影響は、前の場合即ち蛹に働いた場合には、體細胞にのみ影響して生殖細胞には影響しない。後の場合即ち成蟲に働いた場合には、體細胞には影響せずして單に生殖細胞のみに影響するものである。而して前の場合の變化は遺傳されず、後の場合のみが其の影響を確實に遺傳する事を見るのである。是れ明かに遺傳の起る爲には、必ず外界の變化が生殖細胞に影響を及ぼした時に限られて居る事を示して居るのである。即ち一代の間に體細胞に外界の影響が變化を起したからとて、其獲得性が生殖細胞を通じて後代に傳はる事は不可能なる事を立證したものである。

(九)

之を病的關係の場合について考ふるに、一度內外の關係に由つて起つた一代に受けた病的變化が遺傳さるるならば、或場合には頗る不利益であると同時に、他の場合には頗る利益を發ることになるが、然し事實は決してさうでない。例へば若し人が外的影響に出つて病に罹つた場合に、それが世々代々後に遺傳さるるやうな事があれば、人間の身體は殆ど病氣の容れ物たるが如き憐むべき狀態に陷るであらうが、併し事實は決してさうではない。又一度病に罹つて免疫を得た場合に、それが遺傳されるならば、子供は先天的に種々なる病氣に對して大なる抵抗力を有つて居て頗る都合の好い場合もあらうが、事實は又さうは行かない。即ち殆ど全人類は子供の時に一度は必ず麻疹に罹り之に因つて麻疹に對する免疫を得るのであるが、此免疫性を得たる人の間に出來た子供は、やはり重ねて麻疹に罹るのである。即ち人間は世々代々麻疹の免疫を得つつ、而かも之を子孫に傳ふる事の出來ない事が能く分る。斯樣な關係であるから、所謂病の遺傳といふ事を論ずるに方つては、實際問題として、如何なる種類の病に於て專ら內因が重を爲すか、而して斯くの如き病を有する家系に於ては、如何なる點に向つて十分なる注意を拂ふべきかといふ事が必要である。斯かる立場よりして殆ど內因のみが重を爲して、之といふ特別なる外的原因無しに病的症狀を起し得るものの類例を擧げると、第一に種々なる畸形である。而かもそれには遺傳物質が積極的に變化して、例へば五本

の指の有るべき場合に六本あるとか、二つの乳房有るべき場合に多數ある等の場合と、又それに對して遺傳物質の消極的變化の爲めに、普通有るべきものが缺けて居る場合、例へば色を感ずべき性狀を現はすべき遺傳物質を缺ける爲めに色盲になる場合の如き、或は又普通血液の凝固を促すべき性質を喚起する遺傳物質があるに對して、之が缺けて居る爲めに血液が凝固しないで、少しの傷でも傷口が塞がらない爲に危險なる症狀を起す病たる血友病の如き二の場合あるが、此に何れも殆ど內因のみが大切で、純然たる遺傳病といふ事が出來る。次に考慮せねばならぬのは、內的原因が頗る重を爲しつゝ、尙多少外的關係が加つて初めて起る所の病氣で、例へば近眼の如き、精神病の如き、卒中の如き、或る種の腎臟病の如き之に屬するものである。即ち普通の人では別に害にならないやうな事が、さういふ家系の人には病を喚起するのである。例へば近眼は近い物を觀る時、眼筋の或物が縮小するに際し、眼球が押し付けられて形を變へる爲めに起るのである。近い物を觀る事は誰しもする事であるのに、或人には其の爲に近眼が起つて他の多數の人には之れが起らないのは、即ち前の人には生れ付き眼球の出來方が弱い爲である。精神病にしてもさうであつて、世の中の生存競爭が劇しくなるに連れて誰しも多少心身の過勞は免かれない。然るに精神病が多數の人には起らないのに、少數の人にそれが起るのは、即ち腦に先天的異常がある結果である。而して大多數の病氣は、內外二條件が相待つて行はるる者で、而かも其の何れの條件が重をなすかは、場合によつて相違がある。而して純遺傳性疾病にありては、疑もなく一般の遺傳法則即ち「メンデリスムス」に從ふ者であらうが、其の確實なる證據を得る爲には今後學者の努力を要するのである。色盲の如き、血友病の如きは、男子に遺傳すること多く女子に遺傳すること尠なく、而かも其の關係は「メンデリスムス」によつて立派に說明されて居る。若し是等病の遺傳が「メンデリスムス」に從ふ者とせば、疾病と健態とに於て何れが優性たるや劣性たるやを定めて、其の豫防の如きも、全然此の法則を立脚地とせねばならぬのであつて、現に或る種の病氣では此の法則の運用によつて立派に根本的に其の出現を防遏し得た例もある。

斯樣な譯で病の遺傳といふ事の研究は、一面理論上よりして遺傳問題を取扱ふ上に頗る興味を有し且つ大切であると同時に、國際問題よりして病を防ぎ或は其治療を行ふ上に於て、之れを等閑に附すべからざるは勿論、延いて民族衛生の上に大切なる關係を有つて居る次第であるから、之に關する智識を明瞭にして置く所以である、

講和會議にあらはるゝ世界改造の理想と實際との矛盾と調和

前途遼遠なるも失望の要なし

文學博士　三宅雪嶺

（一）

世界の趨勢は絶えず動き、時に緩、時に急になる。六年間の戰役で戰死七百萬、戰費三千八百億圓に上つては、隨分急激の變動を免かれず、數十年を費すところを一足飛びにするであらう。現に講和會議に議しつつある所は、如何に此大變動に處すべき乎に關するのであつて、開戰前に全く豫想されなんだ所を含み、實に永遠の平和を期待して取懸つて居る。

然し永遠といふても限りある事、獨墺露が國力又は民力を恢復するとあつては事が違つて來る。恢復するものならば、現に議しつつある所は其時までのものと假定せねばならぬ。開戰前まで世界の八強國として日米英佛伊獨墺露を擧げたが、戰役で獨墺露が除かれ、殘る五強國が主になつて善後策に從事して居る。此五つは聯合して獨墺と戰つたが、各々特別の國情があり、戰捷より受けたる結果を異にする。佛國は最も眞劍、實に死生を決する場合であつた。英國は利害上頗大なる關係があり、米國は最も善い意味に於ける彌次馬の狀態であり、伊國は國を以て大なる博奕を打つたのであり、而して日本は敵討の助太刀の姿になつて居る。それだけ善後策について考ふる所も區々になる。

（二）

佛獨の競爭は日本の歷史で源平とか甲越とか謂ふもので、常に睨み合ひ、イザとなれば殺すか殺されるかの外ない。約一世紀前に佛が獨を蹂躪し、約半世紀前に獨が佛を蹂躪し、近く佛が再び獨を蹂躪し得るの勢になり、佛の十分に滿足すべき感慨を言ひ表はせば、獨逸を屬國同樣にするにあらうが、種々の事情あつて遠慮するのである。獨佛競爭といふものの、獨は人知

增加し、佛は人口增加せず、互角の勢であつたものが半世紀程の間に優劣を生じ、佛が獨を不倶戴天の仇とし、全力を以て之に注ぐに拘らず、獨は單に佛を眼懸けず、更に英に當たらうとし、廢帝が即位した時、「朕が將來は海洋にある」と唱へた。而して陸軍を擴張するが上更に鋭意海軍を擴張し、英の海上權を脅かしさうになつた。英に於て一度海上權を脅かさるれば、日沒せざる帝國も切れ〳〵に切り離される。英本國の人民は生活をさへ保障されず、英に於ては如何にもして獨を抑へねばならぬ。佛が危險となつては直ちに自國に影響する。全力を以て戰ふの已むを得ぬ次第になつて居つた。佛が獨に對して賴みにした露が崩壞したのは、佛に取つて惧るべき事であつたが、今より觀れば英は何よりの幸である。英も獨に對して露と結んだけれど、もと露と相容れぬ關係であり、獨に對して脊に腹は代へられず、之と結んだのである。英の敵は一面に露、一面に獨、隨分難しい立場であつたのに、露が潰れ、獨が潰れ、恐ろしいものが一時に無くなり、英は新に得る所無くても、從來の世界に於ける利權を安全にし得ただけで大に有利を感ずる。新に阿弗利加の獨領及び其他を併し得れば、七百億圓の戰費は廉いとする。英の望む所は露及び獨が再び頭を擡げ己に反抗せぬ事であり、之を除いて現狀維持で不足が無く、大略現狀維持にして置かうといふに傾く。

（三）

米は之と違ひ、間接の關係は兎も角、直接に敵といふ程のものがない。露が力を獲ようと、獨が力を獲ようと、別世界の事のやうに看做し得られる。歐洲戰亂は對岸の火災である。けれども既に國富み、人多く、剩へ植民氣質で冒險性があり、世界の騷ぎを傍觀するのがもどかしい。偶々佛人が米に來り、獨の不法不正を訴へて已まず、言ふ所に根據がある。米の商船が獨の潛水艇で擊沈せらるるのは其事實を裏書きする者、獨の不法不正は捨てて置けぬ。其氣ならば獨立戰役に佛の援助を得た如く、佛を援助して獨を懲さうと勇み立つたが、利害に鋭い彼等の事とて決して利害を忘れぬ。豫ねて獨逸が商工業の競爭者たるを面白く思はず、何とか之を抑へる道もがなと考へ、歐洲で双方が必死に戰ふて居る所をば聯合國に肩を入れた。獨を抑へるのは將來の爲めに利益であり、其邊の事を忘れはせぬ。けれども獨と戰はねば國が衰へるとの惧れあるのではなく、戰はなくとも濟む。對岸から火の粉が飛んで來るのでなく。國土廣く財源多く、別段獨逸領を如何にせねばならぬといふ事も無く、獨逸を潰しただけで滿足する事が出來る。其處で講和會議に臨み、淡泊無慾正義人道を振翳し、永遠の平和に取掛る次第にな

る。佛及び英は犠牲を拂ひ、獨を抑へる事に最も力あつたが、露が破れた後戰捷が覺束かなくなり、隨分心配したのであつて、偶々米が援助し來つたので勢を盛り返した所がある。豫期以上に米兵が到來する。双方取り疲れた所へ二百萬近くの兵が渡り來つたのは餘程の强味になり、獨逸が戰捷の念を捨てたのも之に負ふ所が多い。佛及び英倶に米に感謝する所がある。其處で米が大立物になり、正義人道を振翳し、世界を改造するやうな事を言ひ出した。佛及び英に於ても何程か贊成せねばならぬ。伊は初め獨墺と同盟し、佛英と利害上の約束を以て聯合側に加はつたので、新領土を熱望して居るが、之れ亦米の主張に反對し難い。米の主張に從ひ、永遠の平和の爲めに考慮を餘儀なくせられる所がある。

(四)

所で米が正義人道を以て一枚看板になつたものの、實際如何に爲すべき乎といふ事になると疑問が多い。米は新世界に理想國を作つたやうであつて、人間を洗つて見れば、米人と英人と大いなる變りがない。三つ兒の魂百まで、アングロ・サクソンの根性は何處までも付いて廻る。實際的國民であつて、理想の爲めに一切を抛つものでない。佛國よりも實際的である。其唱へる所の正義人道は實際の利害と衝突せぬ限りに於てする。露國人は理想を追ひ、國境を問はぬやうな事をするが、アングロ・サクソンは左樣でない。英も米も現在の國家を變じたくない。英が日沒せざる帝國を維持しようとするは勿論、米も現在の國力を維持し之を發展し、世界の一枚看板を以て立つて行かうとする。競爭される恐れある獨逸の軍備を撤廢しようと思ひ、又自國に於て成るべく負擔を減ずるが爲めに軍備を減ずるの必要を感ずるが、何處までも大强國の位置を保つて行かうとする。獨及び露が國力を恢復せぬ限り、英米は軍備を縮少しやうと考へるが、現在の國境を維持し、資本を以て世界に利權を占める事を忘れない。獨逸は英米ほどの資本なく、佛ほどの資本なく、兵力を以て資本國と爭ひ、其資本の幾分かを奪ふの意があつた。兵力を措いて資本のみで鬪ふとなつては、甚だ幅が利かなくなるのである。英米は左樣でなく、兵力で爭はなくても資本で爭ふ。富豪が小商人を潰し得ると同じく、英米は何處でも大手を振つて通れる信念がある。兵力で爭はぬ限り正義人道に悖らぬやうに考へる。所が斯く資本の豐富でない國々は、資本の壓迫を感ずる事兵力の壓迫を感ずるに讓らぬ。英米の資本を以て世界を横行するは、果して正義人道に背かぬかを疑ふ。

(五)

然し講和會議で英米が力あり、佛も其爲めに特別なる苦痛を覺えず、左樣なれば夫れも可いとする。其處で佛英米の現狀に障りなく、獨及び露が潰れただけ英及び米が伸びる勘定になる。露の過激派が如何になる乎、獨のスパルタカス團と共に漸次廣く力を伸す乎、又は堅固なる勢で抑へ付けられる乎、若し其力が伸び、世界の勞働者と結んで運動するやうになれば、英米の勢が變ずる。併し夫れは何者も證明する所がない。新に變動が起り、英米の國狀を革めざる間、アングロ・サクソンが愈々有利になる。將來獨逸人及びスラヴ人が如何なる狀態になる乎、幾十年の後に新なる現象が現はれやうが、差當り英米の力が伸び、正義人道も其利害に衝突せぬ限りに於てする。併し何れも新に領土を獲るの必要がなく、利益に於て正面から競爭せぬのは其儘にして置かうとする。出來るだけ正義人道の名に背かぬようにする。

（六）

けれども當分正義人道は皮相に止まり、肉まで變化するは多くの年數を要する。骨まで變化するのは遠き將來に屬する。然し講和會議に於て正義人道を標榜し、之に準據するに勗むるが爲め、弱小國が勢に乘じ利益を得やうと企てるのがある。從來壓迫せられて居つたものが恢復しようとするのは無理もないが

火事場泥棒の如きを試むるものがある。其の爲めに折角弱國保護に有利なる事も、或は實行を遲延するやうになる事もあらう。將來更に幾層か世界の形勢が變じ、各民族平等に傾くであらうが、今日朝鮮に於て獨立を圖り、支那に於て日本の勢力を驅逐しようと言ふのは、已れ自らに好い結果を齎し得るか頗る覺束かない。將來いよ〱正義人道が實現せらるるとし、今は僅に皮相に止り、英の植民地が亞細亞人を排斥し、米の領土にて同じく之を排斥する。支那人が英米宣教師の甘言に誘はれ日本と分離するが如き、愈々白人の侮蔑を招く事となりはせぬ乎。民族自決も程度がある。自決さへせば何んでも出來るといふ程の時代ではなく、下手に自決して獨立すれば他の勢力に壓迫さるるを免かれぬ。弱國及び小國の側から考へれば、世界戰役は勝敗無くして終る方が都合が好かつた。獨墺が勝つても、聯合國が勝つても權力の均衡を打崩す所がある。互に相牽制すれば何れも橫恣に流れる事がない。聯合國の勝つたのは獨墺が勝つほど官僚及び軍閥の跋扈を見ぬ代り、資本で壓迫される恐がある。獨墺露が舊官僚軍閥を一掃し、新に何かの形に於て力を蓄へ、アングロ・サクソンに拮抗するに至れば形勢が復た變ずる。最も惡いものに喩ふれは、强盜が無くなつて詐欺取財が行はれるやうなものである。アングロ・サクソンは正々堂々と正義人道

の名に於てする。詐欺をせぬ。正直の最良手段なるを信じて居るけれども今の所正義人道が明白を缺く。誰でも安心すると云ふほどになつて居らぬ。列國及び各民族共遜に心する所なくてはならぬ。世界戰役の爲めに急激なる變動を見れど、尚ほ將來は遠く。天國は容易に地上に見る事が出來ぬ。唯一步一步之れに近附くの希望がある。餘り希望に重きを置けば失望に終る。失望してはならぬ。固より絕望すべきでない。

新舊二種の國家主義の衝突

大山郁夫

一

我等は『中央公論』の主幹の瀧田氏から、講和問題に關する理想と現實との矛盾、衝突、及び調和、といつた題目に關し、率直な意見を述べよとの註文を受けた。それに就いて第一に心に浮んだのは、この樣な言ひ廻はし方が、可なり氏の好物であるといふことである。いつの事であつたか、吉野博士がデモクラシーに就いて、之と似たやうな題で一篇の論文を、矢張り『中央公論』誌上で發表せられたことがあつたのは、多分瀧田氏の慫慂に出でたものであらう。と思ふと、右の題を與へられてさう最初にやつて來たものは、何よりも破顏一笑であつた。

けれども、この問題に關して段々考へて居ると、なかなか破顏一笑では收まりさうもなかつた。隨分と頭を抑へたり、毛を掻き挘つたり、眉根を寄せたりする必要に出くはした。さうしてどの詰まりには、一片の空想や推理だけでは、この問題に關して纏つた判斷を作ることが、絕對に出來難いことであることを發見した。同時にまた、それに對して最後の解答を與へるためには、何といつても、自分自身が豫て實感して居た講和の歸結に對する希望を照尺として、講和會議が現今までに於て擧げ得た業績をそれに比較して、その過不足を論らうて見るより外に仕方のないことも判つた。一體活物たる政治的事實を眺めるには、さういつた態度でするより外に適當な方法がないのかも知れぬ。尤も或る過去に於ける政治的事實を捉へて、それに對して是非の判斷を混へざる冷靜なる觀察を下すことは、理論上可能でなくはない。けれどもそれすら、實際上に於ては、餘程むづかしいことであるらしく見えて、その樣な事を徹底的に行つた人は、古今東西の史乘に於て、縱し絕無でないにせよ、少くも餘程稀れであるやうに思はれる。純客觀的敍述を期待して居

居る歴史上の述作に於て、どうかすると順逆論といつた主観的見解が飛び出して來たりするのは、極めて普通のことである。足利尊氏のことを書く段になると、大抵の史家は、この人物を逆賊にしたり、若しくは偉人にしたりする。『外史氏曰く』とか、『野史氏曰く』とか切り出すのは、この事を大びらに行つて居るものと見るべきである。無論、斯ういつたものは、嚴正な意味に於ける歴史的叙述ではなく、どう見ても一種の史論であるには相違ないが、併し大抵の歴史的叙述は、大にか小にか、史論を混じて居ないものは、殆んどないと言つて差支がないのである。過去の歴史的事實を我等の觀照の對象として居る場合に於てすら、既にさうであるものとせば、將來に起るべき當然の事實、若しくは事實としては、現在に屬して居るとしても、その効果が將來に於て完成せらるべき筈の事實を以て、我等の觀照の對象にして居る場合に於ては、殊にさうであるのが當り前の事のやうにも思へる。即ち斯ういふ場合に於ては、單に『斯うである』といふことを究めるに止まらず、同時にその『斯うである』ことを、『斯うであらねばならぬ』と我等が思うて居ることに對照して考察して見ないと、どうしても我等の胸が收まらないのである。少くとも我等は今、我等に與へられた題目に關する考察を述べるに際し、特に右の通りの立場を取らうと思うて居るものであることを、豫め一言して置く必要を感じる。

二

とはいつて見たものの、そこに到達するまでには、まだまだ幾つかの階段があることをも考へられる。――即ち第一に我等は、何が講和問題に關する理想であつたか、また現にそれであるかを考へて見なければならぬ。

しかし、何が講和問題の理想であつたか、また現にそれであるかの問題の前に、勢ひ『誰の？』といふ問題も出て來なければならぬ。

この問題に對しては、『人類の』と答へられるやうな氣もするが、さうとも言へないやうな氣もする。一體『人類』といふものは、ある特定の意思の持主となることが出來る程も、それ程も纏つた存在物の觀念であらうか。

我等が『人類の文明』といつたやうなことを言ふ時には、我等はよくその意味を理解することが出來る。即ち斯ういふ場合には、我等は一切の文明的設備が、人類の各員に對して一樣に恩惠を與へて居ることを知つて居るから、その意味を理解することが出來るのである。尤も個々の場合に就いて之を見れば、中には文明的設備を呪つて居るものがある。無論、斯の如きこと

を言ふものの多くの眞意が、甚だ怪しいものであることは事實であるが、併しどれもこれもさうだと斷言することは出來ない。けれども大體の方より見れば、一方に於ては、文明的設備が殆んどすべての人々に恩惠を與へて居ると同時に、他方に於ては、殆んどすべての人々が、斯ういふ恩惠を意識して居ることも亦事實である。斯ういふ意味に於て我等は『人類の文明』といつた言ひ方を理解することが出來る。けれども、斯ういふ場合には、我等は『人類』といふ觀念より先づ出發して、之を理解するのではなくて、『文明』といふ觀念より先づ出發して、それから後に『人類の文明』といふ句全體を理解するのではあるまいか。

いづれにしても、『人類の文明』といふ句に就いては、我等は文法の上よりしても、はたまた、意味の上よりしても、人類が文明の主體であることを承認する。けれども、今一歩を進めて、『文明』といふ樣な概括的な觀念ではなく、もつと細部的な特定的なあるもの。——何でも可いが、たとへば、一個の特定の林檎を取り來つて、『人類の特定の林檎』といつたと假定する。この場合に於ては、我等は無論文法の上からは、この句を理解することが出來るにしても、意味の上からそれを理解することが出來にくいのではあるまいか。少くとも、麻楂の牽强附會的な說明を用ふるのでなければ、この句を誰れにでも判るやうに說明することは出來ないのではあるまいか。

同樣に、人類をある意思の主體として見る時、我等は人類が永續的平和に對する憧憬といふやうな、ある概括的意思を持つて居るといふやうな句の意味を理解することは出來るが、もつと細部的な、特定的な意思の種類——たとへば、獨逸に對して一切の戰費の賠償を命ずる意思といふやうなものを取り來つて、それが人類の意思であるといふ段になると、我等は如何にその言ひ方を文法的に理解することが出來るにしても、容易にその意味を承認することが出來ないのである。

斯う考へて見ると、講和問題に關する人類の理想といふことが、縱し言ひ得られるにしても、その意味の範圍は甚だ狹いものになる。さうしてこの狹い範圍に於ては、『永續的平和の保障』といふだけが、講和問題に關する人類の理想であるといひ得られる唯一のものであるやうに思はれる。

講和問題に關する人類の理想といひ得られるこの唯一のものは、講和條件のすべてに關する討議の終了を待たずして、既に議定せられたる國際聯盟規約の草案に於てすら、もう全く裏切られて居る。この事に就いての考察は後段に讓るが、玆には右の國際聯盟規約の草案に對する適評とも見るべきロバート・セシ：

ル卿がそれに關して言つたことの一節を引いて見る。即ち二月十四日パリ發のルーター電報に據れば、彼は、「この聯盟規約は、未だ戰爭を廢せしむるには十分ならざれども、國際間の競爭は、此諸國民の提携に依つて防止せらるるに相違なき」旨を切言したとある。我等の當面の問題に關係のあるのは、右の引用句の前半の、聯盟規約に關する部分なのである。

三

右に述べた通り、講和問題に關する人類の理想といふと、唯單に永續的平和の保障に對する憧憬といふやうな、極めて曖昧な、少くとも概括的な意思より外に指すものがなくなる結果を呈するのである。しかもこれだけでは、到底纏まつた意見の立てやうもない。苟くも之に關して幾らかでも纏つた、立て甲斐のある意見を提出しやうと思ふと、どうしても、右の永續的平和の保障の手段に論及しなければならぬ。

然るに、斯の如き永續的平和の保障の手段となると、各國に於て千差萬別の註文があつて、到底一樣ではない。即ち先づ第一に大きく言へば、敵と味方との二つの集團が、それぞれ異つた種類の註文を持つて居ることは、日々の新聞紙上に現はれ來る海外電報だけを讀んでも、直ちに判明することであ

しかし、さういふのは、唯大別的に述べたまでの話であつて、細かく別けて言へば、敵側にしても、國の異るに從つて各各その要求を異にし、また味方側にしても同樣に、それぞれの國が、各々それぞれの要求を提げて講和會議に臨んで居るのである。

尙ほまた、右の外に、中立諸國の意向といふものもあつて、講和會議が全然それを無視して、勝手氣儘に振舞ふことが出來ないことは、特に取立てて言ふまでもないことである。而かも是等中立諸國の意向といふものも、國の異るに從つてそれぞれその種類を異にするが、併し大雜派にそれ等を「中立國の意向」として取扱ふにしても、それ等を單純に敵側の要求とか、味方側の要求とかの、孰れかの項下に置くことの出來ないことは、これまた、言ふまでもないことである。

ウイルソン大統領の提案に係る、かの有名なる講和の基礎條件十四個條は、敵味方側の諸國とも大體に於て講和の交涉に於ける討議の基礎として認められて居るものである。けれども討議の基礎として認められて居るといふことは、それが講和條件として具體化せらるべきものとして認められて居るといふこととと同一でないことは、無論の話である。さうしてその中の個個の項目に就いて、味方側だけの各國の間にも、それぞれ幾多

の異論が簇出したことは、現今に至るまでの講和會議の經過に徴しても、容易にこれを覗ひ知ることが出來る。尙ほこの事に關しては、我等は後段に於て、少しく追加的說明を加へやうと思うて居る。

四

しかしながら、講和問題の細部に關する理想の相異は、單に異りたる國々の間に存在して居るばかりではなく、ある特定の一國內の異りたる階級の間にも亦存在して居るのである。早い話が、我國に於ても、國際聯盟の成立を希望して居た仲間もあれば、その不成立を希望して居た仲間もあつた。また國際聯盟に附帶して、徵兵制度の廢止を希望して居た仲間もあれば、その存續を希望して居た仲間もあつた。更にまた、國際聯盟が成立するものと見て、それに加入することの條件として、加入國が普通選擧制度といふやうなデモクラチックな政治組織を持つて居ることを必要とする條項の設けらるべきことを希望して居た仲間もあれば、さういふ條項の設けられないことを希望して居た仲間もあつた。その他、占領植民地の國際管理のやうなものに關しても、はたまた、强制仲裁裁判制度の確立のやうなものに關しても、我國民間に常に贊否兩派の說が別れて存在して居たことは、掩ふべからざる事實であつた。

斯ういふことは、單に我國の內部に存在して居たことであるのみならず、爾餘の各國の內部に於てもまた、同樣に存在して居たことであつた。また現に存在して居ることでもある。さうして大雜派に言へば、各國內に於ける講和の理想として、資本階級的利益の上に築かれたものと、勞働階級的利益の上に築かれたものとの二大綱があつたのは大體の上より承認が出來ることである。是等のことに關して、もつと細かな區別を擧げて居た日には、際限がないでないにしても、餘程遠くにしかないことであらう。

更にこの局面を複雜にすることとして擧ぐべきは、各國の資本階級なり、勞働階級なりの講和に關する理想が、自國內に於ては兩々相反撥して居るにも拘らず、それぞれ他國の資本階級なり勞働階級なりのそれと、多くの點に於て共通分子を持つて居ることである。殊に勞働階級の講和に關する要求の中には、ロシヤやドイツに於ける過激派のそれと一致して居るところさへあるのである。この一事は、此上尙ほ一層詳細なる研究を必要とするものであるが、茲にはこれ以上に論步を進めることが出來ないのを殘念に思ふ。

五

ウイルソン大統領の提案した講和の基礎條件の十四個條は、

前にも述べた通り、敵味方の諸國に依つて、大體講和討議の基礎として認められたものであつた。それにしても、今日までの所に於て、既に各國政府が、その中の個々の條項に對して、それぞれ別々の反對論を提出して居るのである。

第一に、右の十四個條中に含まれた海洋の自由の文句は、その解釋が區々であるが、孰れの解釋を取るにしても、イギリスが現に持つて居る海上の優越權を侵害するといふ理由で、眞先に同國政府の反對に遭遇した。それだけならばまだしも可いにしたところで、肝腎のウイルソンの郷國たるアメリカ合衆國内にさへ、それに反對するものがあるといふ始末である。蓋し現在に於て、非常なる大海軍を作りつゝあるアメリカは、同時に將來に於て大商船國ともなる可能性を持つて居るのであるから、同國内の船舶業の上に利害を感じて居るものに取つては、海上の自由の制限に關してイギリスが現に取つて居るやうな政策を、將來アメリカ自身に於て取るであらうことは、決して不得策であるといふことが出來まいといふ理由があるのである。

我等は今ウイルソンの十四個條の宣言以來の出來事に關して、その時その時の新聞紙をゆるゆると參照して居る時間を持つて居ない結果として、總べての事件に關して、我等の怪しげな記憶を辿りながら本文を認めて居るといふ始末であるから、我等の論述の基礎として用ひた事實的材料を、一々正確に擧げることの出來ないのを殘念に思うて居る。實際、我等は今、疲れた頭腦を無理やりに引立てて、原稿の最後の締切間際に鞭を働かせて居るといふ、原稿生活をした人でなければついぞ知りやうもない事を遣つて居るのであるから、我等の立論の根據となつて居る諸般の事實を、必要に應じて今一應調べ直して見る餘裕をすら持つて居ないのである。しかしながら、我等が茲に揭ぐる議論は、日頃から、新聞雜誌上の信賴するに足ると思はれる記事を始めとし、その他出來るだけ多くの時事研究上の參考資料を基礎として歸納することに依つて、豫てより用意して置いた斷案を再陳述して居るものたるに過ぎないのであるから、縱し個々の點に就いて擧げんとする事實に關しては、多少精確味を缺いて居ることがあるにしても、大體の見當をひどく外づれては居ない積りである。

そこでウイルソンの十四個條中の海洋の自由に關する主張のその後の成行きを見れば、それが近來に於て全然撤回し去られたといふことが出來ないにしても、甚だしく行惱みの狀態に在ることだけは、掩ふべからざる事實である。

その外にまた、ウイルソンが高唱した經濟上の均等主義といつたやうなものも、その實現が講和會議の進行と共に、段々對

束ないものとなりつつある樣に見受けられるのである。軍備輕減の提案や、關係政府の要求と住民の利害とを考慮せる植民地の處分の提案の如きものに關しては、最近に於て國際聯盟委員會の手に依つて作られたる國際聯盟規約に於て、或る種の規定が設けられてあるが、前者に關しては、その有效性が甚だしく疑はれて居るし、後者に關しては、ウイルソンの當初の意見からは、大分懸け離れたものとなつて居るやうに思はれて居る。ベルジアムの原狀回復問題や、アルサス・ロレーンヌの處分問題は、敵國側が物が言へない程度に膺懲せられて居る結果として、比較的容易に解決せられさうであるが、ウイルソンがボルシェヴイキと相呼應して盛に絕叫して居た無賠償無併合主義は、今は無慘にけし飛ばされて、聯合側各國に於ては、最早之を口にするものが殆んどなくなつた姿に立至つて居る。更にまた、民族自決主義の主張に至つては、イギリスの印度やアイルランドに對する關係などは之を別問題にしても、その他の方面に於ても、動もすれば次第に難局に陷りつつあるのである。チエツコ・スロヴアキアとポーランドとの間にも、民族主義以外の領土上の爭點があれば、イタリアもまた、同じ點に關して不合理の要求を持つて居る。卽ちイタリアは、トレンチノや、トリエーストに關しては民族自決主義を適用することを歡迎して居るが、併し同じ國がユーゴー・スラブとダルマシア等のアドリア沿岸を取合つて居るのは、國防上及び商業上の利益の餘程混入して居るものと見ることが出來る。

またウイルソンの虎の子同然にして居た國際聯盟は、今のところその規約さへ出來上つて、將に成立せんばかりになつて居るが、それがウイルソンの註文通り、永續的平和を保障し得る種類のものとは、どうしても見ることが出來ないのである。國際聯盟に附帶する强制仲裁裁判制度は、一時撤廢せらるべき運命に在るものと外電に依つて報ぜられたが、それでも幸に講和會議に於ける各國委員の努力に依つて、兎も角やつとの思ひで取留めることが出來たのは可い。けれども、肝腎の强制仲裁裁判廷の判決を强行する手段に關しては、何等の具體的成案が設けられて居ないのである。尤も右の判決を强行する手段として、經濟的ボーイコツトの實行が暗示せられて居るが、さういふものは、多くの國に對して多大の脅威となることが出來るにしても、決して戰爭絕滅の最終的保障としての效果を持つては居ないのである。

誰の目にも、永續的平和の最終の保障の手段としては、少くとも一方に於ては徵兵制度の廢止を斷行すると同時に、他方に於ては國際陸海軍の設置を必要とするものである。然るに前者

はフランス、イタリア、及び日本の反對に會つて沙汰止みとなつたやうであり、後者はアメリカの聯邦憲法に抵觸するといふので實現を見ることが出來ない破目に陷つた。尤もフランスは國際陸海軍設置を條件としてならば、徴兵制度廢止に贊成してもいいといふ氣色を、表面上だけでも示したのであるが、これは或はアメリカが國際陸海軍の設置に反對することを見越しての言ひ前かも知れない。而して永續的平和を保障するに足る國際聯盟を最も熱心に主張したウイルソンを出したアメリカが、永續的平和保障の最終の手段ともいふべき國際陸海軍の設置に對して、先づ第一に反對の聲を擧げざるべからざる破目に陷つたのは、寧ろ悲慘なる滑稽といふより外はないものであつた。イギリスの諸新聞紙が、果して外電に見えた通り、ウイルソンも渡歐して多く學ぶ所があつたであらうと皮肉つたものとすれば、それは恐らくこの事を最も多く眼中に置いた結果であらう。

ウイルソンの十四個條中に見えた筈の露國政體の自定主義の如きも、その基礎が非常にぐらついて來たやうに見受けられる。ウイルソンの提案に係るプリンキポ會議のやうな會議に、ロシア國内に於ける各政派を召集することが實際に行はれるものとすれば、この方面に一歩を進め得るものといふことが出來るが、それにはフランスの絶對的反對がある。同國政府の反過激派熱は、極めて猛烈なものであつて、それが積極的に露國の内政干渉に手出しするまでに立至らないのは、唯單に實力の缺乏より生じて來て居るだけのことらしい。

またウイルソンの十四個條中には見えなかつたか、一時フランスで高唱せられた通りに、國際聯盟に加入する國は、デモクラチックの政治組織を所有して居ることを必要とするいふ條項は、いつの間にかどこかの空へ消え失せて仕舞つたのである。その他新獨逸共和國民に對して課すべき償金額なども、ウイルソンが當初宣言した通りに、獨逸の舊官僚政府と獨逸國民とを區分して考慮し、その舊官僚政府のみを今次大戰亂の責任者とすべしといふ主旨を徹底させる積りならば、極めて寛大に出でなければならない筈であるのに、この點に關する處罰主義は今や勝利を占めんとする傾向を見せて居るのは、聯合側諸國が當初より呼號した正義人道から言つても、大に批難すべきものであると思ふ。

六

ウイルソンの十四個條の如きは、進步主義に立脚して居ると言つても、同時にまた可なり多くの保守的分子をも包含して居たものである。それすら、右に述べた通り、頗る多くの點に於

て反對を受けて、今日に至るまでの講和會議の經過に徴すれば、講和條件がそれよりも更に一層保守的のものとなり終らうとして居るのは、抑も如何なる原因より出でたのであらうか。

我等の見る所を以てすれば、これは全く、大戰の結果として著しく强調せられる樣になつた新國家主義が、舊來の國家主義の墻壁を突破しやうと努力して見たが、實際の段になると、この舊來の國家主義の墻壁が案外に鞏固であつたために、新國家主義の勢力が稍々頓挫を來して、已むなく或る點に於て、多少不利益の地位に在るまゝ、舊國家主義に對して、一時的妥協を行つた姿を呈して居る事實を反映して居るものと見るべきである。

併し新國家主義とは如何なるものを指して謂ふのであらうか。さうして又、それは舊國家主義に對して如何なる對照を示して居るものであらうか。

我等は大戰の結果、各國民の國家觀念が幾分でも稀薄になつたことを認める根據を毫も有しないのみならず、寧ろそれがその濃厚の度を加へたことをさへ發見するのである。『勞働者に祖國なし』といふ考へが、如何に表皮的のものであつたかは、戰後といはず、大戰勃發當時の各交戰國に於ける社會主義者等の態度に依つても、十分に之を證明することが出來る。而かもそれが、一時的局面の結果であつたと思はるべきものでないことは、その後の四個年間の成行に就いても、明かに之を知ることが出來るのである。

アイルランドに於けるシン・フェン黨の革命の如きも、イギリスより見れば、國家破壞主義であるが、運動の當事者自身より見れば、一つの國家主義の現はれである。イギリスの勞働黨にしても、決してコスモポリタンではなく、どこまでもイギリスの勞働黨であつて、それ以外のものでないことを自覺して居るものであると推測し得べき根據がある。ロシアの過激派でも、ロシア式色彩を强烈に持つて居ることは、誰れの目にも認められ、ドイツの勞働者の群れもまた、著しく汎獨主義的色彩を帶びて居ることは、戰爭勃發以來現今に至るまでの同國の多數派社會黨の行動を見ても判明する。

しかのみならず、民族自決主義の如きも亦、各民族のための國粹自決主義であつて、畢竟民族的情操を基礎としたる一種の國家主義であることは、疑ふべからざる事實である。

大戰を中心として、多數諸國民が平時に於て見ることが出來ない程、敵としても味方としても、相互的に以前よりは一層緊密に接觸交渉した結果として、歷史と傳統とを持つて居る各國民が、他國民に對して各種の相異點を持つて居ることが、非常

に明瞭に呈示せられた觀があつた。斯ういふ次第であるから、大戰前より既に久しく醗積して居た民族主義が、大戰中より大戰後にかけて、更に大に勢力を得るやうになつたのは、蓋し偶然の出來事ではなかつた。

しかし唯、それだけのことならば、新國家主義は、舊國家主義に對して、幾らか深味を加へたといふだけの話であつて、別に何等の新味を加へたことにならない譯である。

併し事實上に於ては、各國民が、敵として、將又、味方として戰場に會合して居る間に、一方に於ては各國民の國民性の相異點が非常に明瞭に呈示せられたと同時に、他方に於ては、右の各國民間の相違點といふのは、寧ろ表皮的のものであつて、その奧底を深く突き詰めて見ると、そこには人類としての共同に持つて居るあるもの――それは人道的感情といはうか、それとも純眞のままの人間性といはうか、兎も角、さういふものが、その奧底に光つて居るものであることが認め得られたのではないか。若しこの事實を肯定しないと、最近に於て非常に勢力を得る樣になつた國際協調主義の傾向をどう説明することが出來やうか。我等はこの點に關して、考へ得られるだけの說明を順次に頭腦に浮べて見て、結極右の如き斷案に還元しない譯に行かないのである。

七

上に述べた通り、舊國家主義が國際的猜疑の上に立てられて居たのに反して、新國家主義は國際的理解の上に立てられて居るのである。前者の歸結は、當然征服的帝國主義であるのに反して、後者の歸結は、當然國際的協調主義でなければならない。

素より右の新國家主義の基礎となつて居る國際的理解なるものは、その素地が大戰に依つて完成せられたと謂ひ得られるだけであつて、國際的理解そのものは、また十分に具體的に實現せられて居るものではない。而かも之を十分に具體的に實現することが、講和會議の創造的使命の一つでなければならなかつた。然るに、今日までの經過に徵すれば、講和會議は、國際關係の現狀に就いて、改善的努力を隨分と行つたけれども、創造的努力に於て大に缺けて居る所がある。

今日までの所では、講和會議に於て、如何に舊國家主義の基礎たる國際的猜疑が跳梁して、新國家主義の基礎たる國際的理解が沈默したかに就いては、日刊新聞の常讀者は、幾らでもその實例を擧げることが出來る。我等はこの種の實例の若干を、上にウイルソンの十四個條の講和會議に於ける成行を論ずるに際して擧げて置いた。

しからば、新國家主義の勢力は、事實そのやうに微弱なものであらうか。我等は決してさうとは思はない。我等は新國家主義的見解は、各國に於ける民衆の精神の上に著しく目ざめつつあるものと觀察して居る。そんなら、なぜそれがもつと有力に講和會議の上に現はれて來なかつたのであらうか。また現はれて來ないのであらうか。

是に於てか、我等は講和會議に於ける各國の代表者が、各國の民衆の代表者として活躍したのではなく、各國内に於ける現在の勢力階級たる資本階級の代表者として活躍したのであるといふ見解を、或る點まで肯定しなければならない運命に陷つたのである。

八

講和に關する理想は、敵と味方との側に於て異り、また敵側に於ても味方側に於ても、國の異るに依つて異り、更にまた、同じ國内に於ても階級に依つて異なるものがあることは、前に述べた通りである。而して眞に正義人道の上より講和問題を討究するには、右の異りたるさまざまの種類の講和條件に關する希望を考慮の中に置いて、公平なる斷案に到達しなければならなかつたのではないか。然るに敗れたる獨墺側の意向は、頭から顧みられなかつた。これでは、過去に於けるすべての國際會議と何の擇ぶ所がないではないか。それだけならばまだしもであるが、聯合側諸國の要求でも、講和會議の上に代表せられたのは、各國の勢力階級の要求だけであつて、その他の階級の要求は、殆んど全然無視せられたではないか。

我等が『中央公論』一月號に於て發表した『國際生活上の新紀元と、日本の政治的將來』と題する論文に於て、國際聯盟の精神的基礎は既に形成せられて居るが、その形式的成立を見るのは、或は前途遼遠であるかも知れないと言つたのは、主として右の一點を考慮の中に置いたからであつた。即ち國際聯盟の精神的基礎といふのは、大戰の結果として、各國民の精神の上に目ざめた人道的感情に立脚する國際的協調の觀念が、各國の民衆の間に次第に廣く行き渡りつゝあることを指して言つたものである。然るに同時に國際聯盟の形式的成立を疑つたのは、現今の講和會議に於て各國を代表して居る各政治家が、果して眞に當該國の民衆を代表し得るか否かを危ぶんだからである。

國際聯盟規約の草案は、我等の豫想を裏切つて、案外に成立した。しかも案外早く成立した。しかしながら、それは幾ら善く見ても、現狀改善的努力を具體化したる國際聯盟を暗示するに過ぎないものであつて、我等の衷心より希望して居た創造的努力の中から產れ出づる國際聯盟を豫想せしめる底の物でなかつた。

國際聯盟委員會に依つて作られた國際聯盟の規約には、各國に於ける勢力階級を構成して居る資本階級の註文は、殆んど遺憾なく網羅せられて居るが、その他の諸階級の表白したる——及び表白せざる註文は、毛頭考慮せられて居ないのである。唯その第二十條には、國際勞働に關する規定を存して居るが、それが如何に曖昧を極めて居るところの抽象的な言ひ廻はし方であるかを見よ。兎に角、今日までの經過を見ると、當面の講和會議が、資本階級の利益に立脚する經濟的産業的平和——economic and industrial peace ——を作らんとして居るものであるといふ見解には、可なり多大の根據があるやうに見える。遠きロシアの彼方に於て、例のトロツキーが、底氣味のわるい嘲笑の下に白い歯を剝き出して居る光景が餘りにありありと見えて居るのは、蓋し偶然ではない。

九

今我等の前には、議定せられたる國際聯盟規約の案文を載せたる新聞紙が、淋しさうに横つて居る。その上に引かれて居る無數の朱線は、我等の當初の希望の殘骸を標識するものであるかのやうに、縱横に——併し力なささうに光つて居る。

無論、我等はこの聯盟規約に於ても、現狀を改善せんとする當事者の苦心努力の跡を認める。それ故に我等は、この聯盟規約のまゝでも、或る程度まで將來に於ける戰爭の危險を防止し得る效能のあるものであることを認める。けれども我等が求めて居たものは、その樣な中途半端のものではなかつた。我等はそれに於て、國際間に於ける永續的親善と、その當然の結果たる各國内の民衆精神の自由なる發達に對する最後の保障の徹定的に設定せられんことを希望して居たのである。も少しく委しくいへば、我等はそれに於て、少くとも國際陸海軍の設置、及び各國に於ける徴兵制度の廢止、並に有効なる制裁手段に伴ふ強制仲裁裁判制度の創始を始めとし、聯盟加入の條件として、各加入國がデモクラチツクの政治組織を有することを必要とする條項の存置せられんことを希望して居たのである。

我等が是等の諸點を希望して居た理由を詳述して居た日には、優に浩然たる一册の書物を書くことが出來るが、それは今この瞬間に於て我等が支配し得る時間と紙幅との許るさない所である。けれども最後に擧げたる聯盟加入條件の必要なる理由に關しては、茲に後日の證左のために唯一言だけでも挿入して置きたい。ウイルソン大統領を始めとし、聯合國の諸政治家は、大戰の進行中に於ては、獨逸の舊政府と獨逸の民衆とを區別して考へ、前者を以て開戰の責任者と見做して居たのである。是に對しては、吾等は全然同意を表して居た。然るに大戰

締結の今日となつては、彼等は彼等が從前に於てなした右の區別を全然忘れて仕舞つたかのやうに、獨逸の舊政府に對してこそ課すべかりし責罰を、そのまゝ今や新政府を戴いて居る獨逸の民衆の上に課せんとして居るのである。

　聯盟規約作成の當事者が、一時隨分八釜しい議論の種となつて居た聯盟加入條件の一つとせられて居たものであつたところの、各加入國がデモクラチックの政治組織を有すべしといふ條項を、一擧に葬り去つて仕舞つたのは、全く右の獨逸の舊政府と獨逸の民衆との區別とを忘れて仕舞つたことと、同一の心理狀態より出發したものである。或る特定の加入國が、デモクラチックな政治組織を有して居るのでなければ、聯盟規約に調印する政府の首腦者の意思と、その政府の下に在る國の民衆の意思とが、全然一致しない場合が起らないではない。否、過去の政治的實驗を基礎として考ふれば、さういつた場合の方が、さうでない場合よりは、寧ろ多く起り來るべき危險があるのである。それ故に、右の加入條件を葬り去つたのは、後日此點より生じ得る或る種の紛擾の可能性を增した結果となるのである。聯盟に加入する歐米の諸國家が、大體に於て既にデモクラチックな政治組織の所有者であるといふ事實は、毫もこの重要なる加入條件を葬り去つた理由にはならないのである。

一〇

議定せられたる通りの國際聯盟規約が、將來の戰爭を徹底的に防止する効果を有する最後の保障を缺いで居るのを見て、早速愉快な笑みを見せた一種の階級が、我國に於ても儼存して居ると見えて、早くも新聞紙上に於て軍國的氣分を緩めてはならないことを國民に告げて居る一種の人々がある。併し彼等も亦、餘り早まつてはならないのである。

　右の國際聯盟規約は、早晩各國に於ける民衆の審判の前に立たなければならないものである。その時に各國の民衆は、果して右の通りの國際聯盟規約を、そのまゝ鵜呑みに承認することがあり得やうか。

　イギリスの民衆が最近に於ける總選擧に對して、現在の聯立內閣に對して驚くべき多數の投票を與へたのを見て、同國の民衆が全然反動的氣勢にかぶれて居るものと見て安心するのは、早斷でもあれば妄斷でもある。戰勝に醉へる民衆が、その戰勝の酒の釀造者たる內閣を謳歌したのは、一時的昻奮の結果と見るのが正當ではないか。この昻奮狀態は、戰勝の酒の醉ひと共に、漸次に醒めて行くべきものではないか。否、現に次第に醒めて行つて居るではないか。而して彼等の醉ひが醒め、彼等の昻奮狀態が去つて、彼等が素面で嚴肅なる現實に面しなければな

らなくなつた時、彼等は果して右の聯盟規約に對して、如何なる審判を與へるであらうか。

單にイギリスに於てのみならず、その他の諸國に於ても、苟くも民衆が大なる政治的勢力を構成して居る國々に於ては、民衆は早晩右の聯盟規約に對して、ある嚴格なる審判を與へるには違ひない。さうしてその審判には、我等の推測を率直に表白すれば、直に否認的宣言となつて現はれるであらう。若しさうでないとすれば、世界は例のトロツキーの底氣味のわるい嘲笑と、その白く剝き出した齒とを、如何始末しやうとするのであるか。我國の軍閥者流もまだまだ安心すべきでなく、また我國の人道主義者もまだまだ失望すべきではない。

（八―二―一二）

世界改造の理想

――民族的自由平等の理想の實行可能――

法學博士　吉野作造

今度の講和會議で世界は改造せらるゝと云ふ。怎う改造せらるゝのか。所謂世界改造の理想は何か。改造の事業を指導すべき根本の大方針は何か。

或人は結局英米佛等二三强國の便宜のやうに改造さるゝに止まるだらうと言ふ。して見れば小國の權利は依然壓倒さるゝを免れない。それならば我々は改造の事業に向つて何等の滿悅を感ずる事は出來ない。且つ又小國の利益を尊重しない位なら、初めから大國の間にも亦利害の爭は絕滅せざるべきを以て（大國間の利害の衝突が大國對小國の夫よりも常に一層激烈である事は從來の歷史に徵して明かである）忌む可き國際競爭が依然世界の平和を脅す事は戰前と何の異る所がない。然らば所謂改造は例へば東向の玄關を西向に直したまでの事で、改造其物に何の實質的意義を認むる事は出來ない。四年半の長きに亘りあれ丈の人命を損し、あれ丈けの資財を灰燼に歸し、而もあれ丈けの緊張した氣分を以て苦戰苦鬪してやつと贏ち得た結果が單に之れ丈の事に止るとは怎うしても考へられない。況んや國際關係の一方に於て、極めて險惡を極めて居つた戰前に於て、既に他方平和熱求の念が世界の人心に極めて深く根ざして居つたに於ておや。然らば今度の世界改造の事業の奥底に横る所の理想は飽く迄も世界平和の永久的保障であり、而して之が實際の上に少くとも一歩を進める方針の上に改造の事業が立つものでは無

ければならない。無論一方に於ては各國銘々の歷史上の立場が違ふと云ふ事實は之を認めなければならない。而して此事は世界を所謂理想通りに改造して行く事を幾分妨げないとも限らない。けれども各國が各其歷史上の立場を固執して讓らないものならば、何處に改造の實を認むる事が出來るか。故に所謂世界改造の事業は假令いろ〳〵の事情でいろ〳〵に曲げらるゝとしても、其根柢に一大理想的方針の指導を看過しては之を諒解する事が出來ない。

然らば何が世界改造の事業を指導する理想的方針であるか。

世界改造の今日の事業の理想的方針を明かにするには、何が今度のやうな世界的大亂の發生を促したかを見なければならない。世界永久の平和を理想とする改造の方針は少くとも先づ戰亂を誘導せる根本的原因を除く事から導かれねばならぬからである。而して此原因は予輩の觀る所に據れば實に十九世紀の初期に根ざし、過去百年の歷史を通じて世界の各方面に蔓つた所のものである。そは何かと云へば一言にして盡くせば所謂國際競爭之れである。

十九世紀文明の最も大なる特色の一つが自由平等の發展であるといふ事は言ふを俟たない。何を自由平等と云ふかの、一見甚だ明瞭なるが如くにして實は否らざる此六つかしい問題の說明は姑く措くとして、唯之れあるが爲めに十九世紀百年間の文明が過去數千年のそれにも增して非常に深い意味を人生に與へた事丈けを一言するに止める。併しながら翻つて此自由平等の理義が十九世紀百年間の歷史の上に完全に發展したかと云ふにさうでない。固よりそれ〴〵方面を異にするに從つて深い淺いの別はあるが、總じて之を見るに自由平等は單に十九世紀に於て其發展の緒に就けるに外ならず、之が完成は將來の努力に俟たなければならない。而して其未だ完成の域に達せなかつたといふ事が、即ち見樣によつては十九世紀文明の一缺陷であり、從つて又平和を脅かせる種々の現象の原因であると云はなければならない。

我々人類の生活には個人としての生活の方面と集團としての生活の方面と二つある。特殊の集團内に於ける我々の個人的生活の方面に係はる自由平等は、所謂デモクラシーの發達と共に相當に成し遂げられた。少くとも之から益々完成の域に進むべき見込は立つた。けれども我々の集團的生活の方面即ち民族的生活の方面に於ける自由平等の理義は今日に於て未だ十分に發達して居ない。個人的自由平等を著しく高調した十九世紀初頭の世界は、一時民族的自由平等の思想にも大いに同情を傾けた

のであるけれど、其後に於ける個人的自由平等の日に益々發展せるに拘らず、民族的自由平等は間もなく所謂軍國帝國主義の爲に蹂躙さるゝ事になつた。國内に於ける自由平等の發展と相並んで國際間に(或は民族と民族との間に)此主義の蹂躙せらると云ふ矛盾せる現象を見るのは甚だ怪むべきであるが、其之を誘致せる原因を熟ら考ふれば又餘儀なき事情もある。そは十八世紀末より十九世紀初頭にかけての急激なる産業の發達は、當時の世界の人心をして愼重に其對應策を講究するの遑なからしめたからである。別の言葉を以て云へば、産業界の急變は俄かに各民族の經濟的生活を世界的ならざるを得ざらしめたが、併し斯くして世界的に産業的活動を擴張するの必要に迫られたものは或一國のみではない。そこで若し斯かる必要が急激に來なかつたならば、彼等は彼我の間にそれぞれ利害を調節する適當なる方法を講じたであらうと思ふけれども、十九世紀の初頭は彼等に其餘裕を與へなかつた。之已むを得ず彼等が手段を選ばずして所謂國際競爭に沒頭せざるを得ざる所以である。尤も同じやうな事は國内についても云へないではない。即ち産業の急變が國内に於て資本家勞働者の固定的社會階級を生じ、而かも其間の利害の調節を冷靜愼重に講究するの遑を與へなかつた事が、少く共經濟界に於て自由平等の理想的發展を阻礙し、今日所謂勞働問題てふ困難なる問題を殘して置いたからである。

併しながら此方は解決は困難であり、事實上今日尚大いに論爭せられて居るけれども、少くとも主義として資本勞働の關係をもつと公正に立て直さなければならないと云ふ事丈けは認められて居る。然るに國際關係の方になると、各國各民族各々自立の計を爲すに急なるの餘り、往々にして不當なる競爭に對する反省をすら缺く事あるに至つた。即ち或は國家の必要の前には道德法律なしと云ひ、又個人道德は之を國際關係に應用すべからずと云ふが如き說の行はれた所以である。其結果として來る所のものは、第一に強き者は弱き者を壓迫する事である。第二には強き者同志が虎視耽々として相嫉視する事である。自由平等は殆ど跡を潜めて世界は宛がら修羅の巷となつた。而して斯かる形勢は最近數十年このかた最も著しくなつたではないか。

併し乍ら斯の如き現象は自由平等の發展を主たる特色とする十九世紀新文明の兒の安んずるを得る所であらうか。我々は國家に於て初めて生存の意義を全うし得ると敎へられた。我々は國家の富強を圖る爲めには、凡ゆる犧牲を拂ふの覺悟を有すべきを敎へられた。併し乍ら個人相互の關係に於て正義公道を重んずべきの信念から、如何にして國際間に於ける殺伐なる盲目的競爭に安んじて與り得ようか。此處に十九世紀の一大矛盾が

あつた。

此煩悶の更に著しき特色は過を知つて容易に之を改め難き事である。何故なれば國際競爭が險惡を極めて居る以上、少しの油斷は即ち敵に乘ずるの機會を與ふるからである。絶對的に無抵抗主義を執つて、場合に依つては屑く玉碎するに甘んぜざる以上、國家若くは民族の一人として我々は不當と知りつゝ、殺伐なる競爭に一刻の油斷をする事が出來ない。其處で一方に痛烈なる煩悶が有り乍ら、他方に於て自らは勿論の事、他人をも促して排他的自家膨脹に狂奔せしめざるを得なかつた。斯くして十九世紀の、殊に後半は不當なる國際競爭を以て濃厚に彩られた。強い者は少しでも強きを加へて、他國を壓倒せんが爲に凡ゆる機會を利用して弱い民族を虐める。而も民族的自由平等は大勢本來の要求なるが故に、弱い者は何時迄も屈服に甘んじない。之丈でも世界には動搖の種が絶えない譯である。況んや強國其物の間に於て常に隙を窺つて他を壓倒し、あは好くば其領土を削り、又は莫大の物質的掠奪を加へて容易に再起し得ざるの地位に陷れんとする。之實に産業の急變に伴ふ已むを得ざるの病弊にして此難問を解決するに非ずんば十九世紀の文明は目出度く其結末をつける事は出來ない。而して其病弊の破綻が即今度の戰爭であり、此破綻を機會として十九世紀文明の改造による自由平等の完成が即ち今日我々に殘されたる事業ではないか。

斯の如き史的過程を透して今日の世界改造の事業を觀れば、其平和的理想は主として民族的又は國家的自由平等を確立するを根本的大方針とせざるべからざるは明白である。之れ所謂國際民主主義の提唱ある所以である。彼の革命の露國が唱へ出してから廣く各交戰國の政治家に依つて叫ばるゝ非併合主義、無賠償主義、民族自決主義の如きも亦此考の具體的に發露したものに外ならない。何れにしても今日の世界改造の理想は民族の間に自由平等の大義を實現し、以て十九世紀の文明が成し遂げ得ざりし所を成すを以て其理想的方針となすべきものである事は疑を容れないと思ふ。

尤も此方針が徹底さるゝ爲には世界の民心が全然一新せらるる事を前提とする。從來のやうに互に對手方の思惑を猜疑して居つては眞の自由平等の確立はむづかしい。而して世界の民心が一朝にして急變する事は固より望む可らざるも、然し我々は一方に於て曠古の大戰が世界の民心に異常の覺醒を促せるを疑はざるのみならず、他方に於て世界の民心は戰前既に非常な煩悶を經驗しつゝあつた丈け、何等かの突發的衝動によつて面目を一新するの素質を養つて居つたと思はるゝ。尤も各國家各民

族が永い歴史によつて得たる從來の立場に未練を殘して、有意無意利己的主張を以て理想的方針の徹底的實現に對抗しないとも限らない。例へば英吉利が海洋の自由に對して多少の異議を挾み、亞米利加が果して原料の國際的管理に同意するや否やの疑あるが如き是れである。併し乍ら此等利己的立場の衝突と調節とが講和會議の唯一の事業であるならば、我々は世界の將來に何等の光明を認むる事は出來ない。前にも述べた如く十九世紀百年の煩悶と苦鬪とは遂に何物をも産まなかつたとは考へられないのみならず、事實今日の講和會議には、否、之を中心とする世界の人心には、已に道德的活力の動きつゝあることを認め得るではないか。民族的自由平等の大義が百年間の煩悶の結果として、初めて成し遂げられたが故にそれ丈け貴いものであり、それ丈け確實なるものたらしめたいとは實に我々の痛切なる願望であらねばならぬ。併し之とても今度の講和會議で一擧に完成するとは思はない。唯問題は此理想的方針の活動と、各國それ／＼の立場による利己的主張とがどれ丈け相競ひ相讓るかと云ふ點である。假令後者が問題の第一次的解決を圓滿ならしむる爲めに相當に認めらるゝ事ありとするも、そは決して戰後の世界を支配すべき國際的理想の大勢に從ふものでない事は、我々の堅く信ぜんと欲する所である。



生活戰術

法學博士 浮田和民先生新著

□定價壹圓五十錢

□三六判總布函入

澎湃たる新思想は將に社會各般に一大影響を及ぼさんとす。著者は深遠なる學殖と高遠なる理想とに立脚し此の新社會の實相を透見解剖して以て新處世法を說く。近來の一大快著。

▽凡庸が天才に打勝つ唯一の手段
▽健康增進に必要なる心の五訓練
▽人格力量を偉大ならしむる四德
▽世の中を首尾よく渡る奧の手
▽弱者には弱者の兵法あり
▽此二大確信ある者は成功す
▽學者と政治家の取るべき戰術
▽實業家成功の積極的七大要件
▽金より尊い事業遂行の活資本
▽經營的才能の修養
▽人間力の正用
▽讀書法——(外數十項)——

新渡戶博士三大著

縮刷 修養

▽壹圓廿錢 ▽郵稅六錢 ▽三六總布 ▽六十二版

縮刷 世渡りの道

▽壹圓廿錢 ▽郵稅六錢 ▽三六總布 ▽第三十版

自警

▽壹圓七十錢 ▽郵稅十二錢 ▽菊判總布製 ▽九版出來

東京京橋南紺屋町 實業之日本社發行 振替東京三二六番

金剛一萬二千峯

大町桂月



一　金剛山と耶馬溪

富士山に登らざる者は共に山水を語るに足らずといふ時代は、既に過ぎ去つて、日本アルプスに登らざる者は共に山水を語るに足らずといふ時代となり居りしに、それも亦過ぎ去つて、今は金剛山に登らざる者は共に山水を語るに足らずといふ時節柄、我も往いて、金剛山の勝を探りたるが、人往々問うて曰く、『金剛山は耶馬溪に比して如何』と。斯る質問は素人の能く發する所にして、黒人の返答に困る所なるが、『耶馬溪と金剛山とは、其趣を異にす。比較すべき筈のものに非ず』と、素氣なく答ふるも、あまり呆氣なき次第なれば、素人にも納得の出來るやうに一通り比較して見ん哉。

耶馬溪は溪也。溪に沿うて坦々たる街道通じ、村落相望み、左右に石峯連亙す。その石峯の高さ、千尺、二千尺、高きも三千尺を出でず。木曾街道、吉野川上流の土佐街道と種類を同じうして、互に優劣あり。金剛山は山也。無數の石峯簇立して、溪流四もに奔飛す。一萬二千峯ありと稱するが、必ずしも誇張に非ず。毘盧峯中央に在りて最も高く、堂々として、群峯の盟主の觀を呈す。高さ五千四百尺、凡そ山は八千尺以上ならざれば、高山とは云ふべからざれども、五千尺もあれば、山として仰ぐに足る。毘盧峯より北に連りて、玉女峯、神仙臺、上登峯、温井嶺、五峯山あり。南に連りて月出峯、日出峯、内霧在嶺、遮日峯、白馬峯あり。東に連りて迦葉峯あり。西に連りて、永郎

峯、凌虚峯あり。五峯山より東北に連りて、仙峯山あり。東に連りて勢至峯、文殊峯、水晶峯あり。水晶峯より北に曲りて千佛山あり。神仙臺より東に連りて觀音峯あり。月出峯より東に連りて、彩霞峯、集仙峯あり。内霧在嶺より西に連りて望軍臺あり。東に連りて、七寶臺、隱仙臺あり。遮日峯より東に連りて彌勒峯あり。これおもなる支峯なるが、支峯にも更に幾多の支峯ありて、凡そ五里四方に磅礴す。

峯多きにつれて、溪流も多く、毘盧峯より西南に出でて萬瀑洞となり其下百川洞となる。西北に出でて九成洞となり、東に出でて玉流洞となり、其下神溪川となる。五峯山より北に出でて仙苔溪となり、東北に出でて千佛洞となる。溫井嶺より東に出でて寒霞溪となる。日出峯より東に出でて磐門洞となる。近時新金剛の稱あり。内霧在嶺より東に出でて曉雲洞となる。彌勒峯より東に出でて萬景洞となりて曉雲洞に合す。永郎峯より南に出でて太上洞となり、其下萬絶洞となりて百川洞に合す。内霧在嶺より西南に出でて百塔洞となり、其下水簾洞となり、更に黄泉江となりて、百川洞に合す。白馬峯より西北に出でて靈源洞となりて黄泉江に合す。これおもなる溪流なるが、更に支流ありて、瀑となり、湍となり、瀬となり、淵となり、溪流の大部分は赤壁江に合して海に注ぐ。

その海に注ぐ處に、海金剛の奇巖あり、白砂の濱あり、赤壁山を始め奇峯多く、三日浦を始め、湖水多し、溫井嶺の東麓なる溫井里には、溫泉湧き、溫井里より北二里にして長箭港に至り、更に北十里にして庫底港に至れば、叢石の半島あり。その半島全體が玄武岩より成りて、所謂材木石の奇觀を縱まゝにす。百川洞の長安寺、其上流の表訓寺、曉雲洞の楡岾寺、神溪川の神溪寺、即ち所謂金剛山四大寺を始め、山中に寺院多く、千年以前、新羅の全盛時代には、百八寺の稱あり、參詣を兼ねて金剛山の勝景を探ぐる者多く、『一たび金剛山を見たる者は、死して地獄に落つることを免る』と云ひふらされたりとかや。

二　金剛山と富士山

若しも『金剛山は富士山と比較して如何』と問ふ者あらば、余は先づ答へて曰はむ、『富士山は正々堂々の極なり。金剛山は奇々怪々の極なり』と。富士山は火山なるが、金剛山に火山に非ずして、花崗岩の山也。而かも一萬二千峯皆山骨を露出す。金剛山一に『皆骨』と稱するが、露骨に失するの嫌あれども、極めて適切也。到る處に奇巖立ち、怪石横はりて、石門もあれば、四方何處から見ても數千萬の箱を積み上げたるが如きもあり。筍の如きもあり。塔の如きもあり。屏風の如きもあり。人の如きもあり。動物の如きもあり。『金石を底とす」よ

は、渓流として稀に見る所なるが、金剛山中には到る處に之ありて、皆に金石を底とするのみならず、その金石は兩側の絶壁にも及び、而かも絶壁高く、渓も大にして長さ十數町に達せるもあり。『䃶石の瀧壺』も、小瀑には見ることあれど、大瀑には見難きが、金剛山には直下十餘丈の大瀑、瀧壺の徑五間もありて、圓形を成し、水澄めるに、底の見えざるまでの深さを有して、恰も人工にて刳りたるが如きもある也。

『皆骨』とは云ふもの丶、峻はみな松を帯びたり。一に又蓬萊山と稱するも、言ひ得て切なる哉。松は黒松の外に、朝鮮松と稱する一種の松多 。葉は五葉なるが、普通の五葉松や、赤松や、黒松やのやうに黑ずまずして、鮮かなる青色を帯び、其實李よりも大にして食ふべし。金剛山は巖の山と云へば、巖の山なるが、松の山と云へば、松の山也。又楓の山と云へば、楓の山也。楓の多きこと、天下に稀也。金剛山一に又楓嶽と稱するが實に其名に負かず。櫻もあり、躑躅もあり、自然生の蔦蘿もあり、又自然生の人參もありて、一個の價二百圓に上る。その人參を得むとして、山中に分け入るもの少からず。金剛山は天下の絶險なるも、山中到る處、人參掘り足跡を印せざるはなしと聞く。

重石の多きことも、世界無比也。三井にては出張所を温井里に置き、新豊里と千佛洞とに鑛務所と選鑛所とを置き、ただ三聖菴と仙蒼渓とにも、鑛務所を置きて、金剛山の北部より重石を發掘す。山中の寺々も、山水に風致を添へ、且つ登攀者宿泊の便宜を與ふるが、懸崖に懸つたり、深山の奥に孤立したりして、能くも思ひ切て斯る處にと、人をして一驚を喫せしむ。温泉といふ天恵もある上に、三日浦に湖水の趣を賞すべく、赤壁江に溶々たる江流の趣を賞すべく、海金剛、叢石半島の奇勝をも合せて、自然美の粋、鍾まつて、金剛の一山に在り。余は日々巡覽して、三週間に亘りたるも、なほ餘裕あらばと思ひたりき。

三　百塔洞

朝、京城を發して京元線に由り、平康にて自働車に乘換へて、夕方長安寺に着しホテルに投ず。

長安寺は金剛山の西南部、即ち内金剛の入口に在り。本堂の大雄寶殿美麗にして、前に梵王樓あり、萬水亭あり。横手に龍虹殿あり。冥府殿あり、毘盧殿あり、四聖殿あり、神仙樓最も古色を帯び、無量壽閣最も大也。なほ建物の一部に郵便局あり、憲兵駐在所あり、寺にて經營する旅館もあり。ホテルも寺の一部なるが、滿鐵の經營に係る。後に樹の山立ち、前に巖の山相連る。巖の山とても樹を帯ぶ。淸瑩玉の如き百川洞の水、門前

を流る。時恰も十月の二日、紅葉は松林と相映じて、入口ながらも、心ゆく處也。

明くれば三日也。憲兵の坂井勝次氏、ボーイ頭の柴田曜之助氏導を爲して、百塔洞さして行く。憲兵補助員の朴賢商、郵便局助手の宋憲旭、自働車助手の韓石崇、ボーイの咸泰彪の四氏も加はりて、一行すべて七人也。百川洞の右岸を行くこと一二十町にして、左岸に移り、右に折れて黄泉江を溯る。長安寺までは自働車を通ずれども、長安寺より一歩進めば全く原始的の山路也。巖の山左右に迫る。忽ち見る、巨巖溪中に孤立して天を衝く。明鏡臺と稱す。高さは二十丈もあらむ。其面扁平也。臺下水淀みて淵を成す。紅楓枝を垂れて、水も亦赤し。四面何處を見ても、巖の山也。十王峯、罪人峯、使者峯などの稱あり。

後を顧れば、地獄の門さへあり。兩巖相對して門柱の如し。明鏡の一臺を以てするも、天下無類の奇觀也。余覺えず快哉を叫ぶ。溪を渉りて右に出づれば、扁平なる明鏡臺は觀を改めて、一大石柱となる。廻りて其背に出づれば、黄蛇、黒蛇の二淵あり。右に轉じ、左に移り、巨石磊硘たる溪谷を縫ふて行く。處處に石を積み重ねて、行路を示す。前遊者の情にやと、いと惜し。

一行の中、五人までは血氣盛りの壯者にして、歩むこと早し。郵便局助手の宋氏と余とは、之と歩調を共にする能はず。余や健脚を誇りたる時代もありしが、多年經驗の結果、脚に餘裕を存し、長く續きて疲勞せざることを圖り、且つゆる〱景色を味ふの賢なるを知る。又年老いて少壯者と健脚を競ふの愚なるを知る。殊にこの日は、宋氏をして一人後に殘らしめじと

德富蘇峰先生題詩
平福百穗畫伯畫



長安寺彩虹
瀧田哲太郎藏

て、わざとゆる〳〵歩みて、一行に殿す。宗氏は早く歩まむとしても、歩まれず、喘ぎ〳〵氣を揉むさま也。それも其筈、十五歳の少年也。財産ある兩班の息子にて、郵便局の助手などになる身ならねど、其父可愛い子に旅させよの格言を實行して、わざと家より出して、浮世の風に當らしむるなりと聞く。顔を見ても如何にも良家の子也。余之を慰めて、『急ぐなかれ、僕と共に行けば大丈夫なり』と云へど、日本語に通ぜぬらしく、且つ見知らぬ余を恐るゝ心もまじるらむ。一行の影見えぬやうになれば、悲しき聲を舉げて、『あいごう〳〵』と呼ぶ。其の聲を聞き付けて、一行立止まりて待つ。少年にこ〳〵して喜ぶ。喜ぶ間もなく、又おくれて、『あいごう〳〵』を口にす。これが所謂可愛い子の旅にやと、心中に微笑す。

行きても〳〵滿目みな紅葉也。水清くして巖奇也。水簾洞の上に至りて休息し、且つ午食す。一大磐石溪身となりて傾斜す。幅數丈、長さ數十丈、溪水其面の一部を辷る。磐石はこの上數町も續き、立ちて松を戴き、凹みて淵を成す。水の辷る磐石の面に徑一尺ばかりの圓穴あり。杖を入るれば、杖だけにては底に達せずして、手までも水に沒す。『人工ならずや』と訝れば、柴田氏頭を掉つて曰く、『いや〳〵數千萬年に亘れる水の努力の結果にて金剛山の特色の一也』。

例の宗氏と余とは殿して行きしに、左方に積み重ねたる小石ありて細徑通す。『おうい』と呼べば、北方面にて『おうい』と答ふ。少し行けば、右手の溪谷にても『おうい』と呼ぶ。さては先導者が二つにわかれたり。兎も角登りかけたればとて、左手の先導者に追ひ付けば、一行皆在つて、憲兵の坂井氏のみ在らず。さては右手の『おうい』は坂井氏也。左手の先導者の柴田氏は、こなたに在りて、左の路を主張し、坂井氏は彼方に在りて右の路を主張す。補助員も郵便局の助手も後戻して坂井氏の方に就く。柴田氏には自動車の助手とボーイとが附隨す。つまり駐在所組とホテル組とに分れたる也。余はホテル組に加はりて、絶壁を攀づ。三つ四つ塔の如き巨巖の立てるを見る。百塔とは是れにやと、半ば信じ、半ば疑ひつゝ登り〳〵て峠に達す。近く右に尖峯あり。樹木を排して之に登れば、四方の眺望開けたり。この峯の上下、尖峯簇續しつゝも一脈を成して東西に連亘す。名たゝる望軍臺の尖峯は遙か下の方に在り。上にもなほ尖峯あり。東方は一帶に高山連綴し、西方は山低くして、眼界は金剛以外の山々にも及ぶ。北は溪谷を隔てゝ毘盧峯を望み、南は溪谷を隔てゝ白馬峰を望む。金剛山を四分したる西南の一部、即ち内金剛の全部、悉く眼中に在り。見る限り、紅葉黄葉山に滿ち、谷を埋めて、錦繍を布ける中に、唯一つ西方の山

中に一層あるを見る。柴田氏曰く、『正陽寺也』。

先きに相別れたる處に戻り來れば、駐在所組の連中、休息し居りて、『百塔洞を見て來りたり』といふ。駐在所組成功して、ホテル組失敗したる也、時に午後三時半、歸路は夜に入ることを覺悟して、再び相別れ、駐在所組は下り、ホテル組は上る。韓有景氏は駐在所組に加はりて、ホテル組は三人となれり。

折り〳〵は手を用ゐて、溪谷を溯れば、果して塔の如き巨巖天を衝く。覺えず奇と呼ぶ。少し行けば、又も塔巖立てり。又奇と呼ぶ。なほ進み行けば、余を除きての六人の名を書きたる木の札の立てるを見る。さては駐在所組は此處より引返したる也。我等は猶進む。絶壁溪を塞ぐ。前に見ても、左右を見ても登れさうになし。唯前面の絶壁の中に、手を托するに足るだけの一點、平らかになりて草を帶ぶ。手と足とにて攀ぢゆき、思ひ切つて手を伸ばしてその草を握みて身を持ち上げ、足を其足に托して更に手を伸ばし、一躍して漸く上る。危しとも危し。斯くて進みゆくに、塔巖幾つも立ち居りて、其盡くる所を知らざるが、草を握みたる難處は、日暮れぬ中にとて、四時半に至りて引返す。

難處に至りたるに、前向にては下られず、後向になりて、漸く足を草に下し、次に手を其草に下して、更に足を下し、恰も寸取蟲の如くし、其後は手と足とにて這ひて、漸く下る。斯くて最大難處を通り越したるも、なほ手にて命を支ふる難處は、溪中數へ切れぬ程也。傾斜の急なる、巖壁に至り、手を用ゐなかと思ひしが、何のと油斷して、足のみにて下りしに、誤つて足を失ふ。本人よりも、却つて後なるボーイ驚いて叫ぶ。余は足を失ふと同時に、兩手を伸ばし、大の字になりて、巖面に身を支へたり。ボーイを顧みて『足を失ひたるは、余の失敗なるが、足を失ひても、狼狽せずして、余の爲したる如くに、身をこなすは、旅行する者の心得居るべき事なり。君も心得て居り給へ』と云へば、唯にや〳〵笑ふ。

覺悟せし如く、途中にて日暮れたり。天に星はあれど、狹き溪谷の事とて、平地よりも暗し。一歩毎に苦心を費して、漸くにして黄泉江の百川洞に合せむとする處に來れば、人を呼ぶ聲聞ゆ。此方にても『おうい』と答へつゝ、其呼ぶ人に逢うて見れば小兒を作れたる一婦人なるが、其夫、今朝より山に入り日暮れても歸らざれば、迎ひに出でたりとの事也。余はボーイの通譯にて、斯くと知りて、そゞろに物のあはれを覺ゆ。相別れても呼ぶ聲なほ絶えざりき。

四　靈源洞

望軍臺と靈源菴へと思ひつゝ、起き出づれば、雨ふりしき

る。雲烟浮動して、山水活く。雨は厭はずと思へど、この雨に中毘盧へは行かれずとて、案内する者なし。『靈源菴は』と問へば、『靈源菴なら行くを得べし』といふにさらばとて、ボーイを案内として出づ。憲兵駐在所より李甲珪といふ補助員來り、寺の旅館より高野祥雲といふ畫家加はりて、一行四人となり、昨日の路を行く。將に黃泉江に出でむとする處にて、補助員近く前に屹立せる山を指し、『鴨巖なり、鴨に似たらずや』といふ。見れば、げに鴨に似たり。明鏡臺に至り、『能く見られよ、五本の指にて鏡を持つ形になり居れり。又上部に人の顏もあり』と補助員に教へられて、能く見れば、巖理自ら指の形を成し、又顏の形を成す。淵を隔てゝ明鏡臺と相對する巨巖の上に休息して、峯を賞し、淵を賞し、四面の石峯を賞し、紅葉を賞し、我が休息せる巨巖その物を賞して、時の移るを覺えざりき。

雨は小降となりぬ。金剛山通の高木背水といふ畫家の立てたる太標にも教へられ、昨日の溪路と別れて、靈源洞の溪流を溯り、紅葉の中を行きて、靈源菴に至る。戶鎖ぢて、僧住まず。筧の水、空しく水槽に滴る。眼界は東西十數町に及び、南北一里にも及ぶ。紅葉溪を埋め、四面の山を埋む。而かも松樹點綴して、單調を破る。風時に來つて、軒の風鐸自ら鳴る。啄木鳥一聲鳴いて、山靈あるに似たり。聞く昔、靈源禪師此處に行ひ澈して、靈源に徹底したりとかや。

午食して歸路に就く。雨霽れたり。黃泉江の古川洞に合せむとする處より左に山路を分けゆきて地藏菴を訪ふ。一僧澗邊に斧を研ぐ。他の幾多の僧相倚りて、朝鮮松の松毬（まつかさ）を碎きて、實を採る。松毬の大さ拳位にて、一つの松毬に五六十の實を有す。實はほゞ三角形を成す。生（なま）のまゝにて食ふに一種の山味あり。山僧これにて菓子を製す。金剛山の一名物也。

普門菴といふ尼寺に至りしに、老尼佛堂を開き、我等を迎へて、桃を饗す。十月の初に桃あらむとは思ひもかけず、喜んで食ひて、瞬く間に盡く。老尼更に小尼に命じて櫥より取り來らしむ。西王母の故事さへ思ひ出されて、心魂二千年の昔に飛びぬ。

・ホテルに歸りて後、金石下といふ畫家と昨日の郵便局の少年と加はりて、塔巨里の古塔さして行く。門前の萬川橋を渡れば、喬松の林也。楓もまじる。金剛山中の一景致也。近く左右に山あり。左の方なる長慶峯中の鷲巖、殊に人の目を惹く。十數町にして、向仙橋を渡ると共に、松林盡きて、塔巨里の村落あり。畑の中に、石の五重塔、頭部を失ひて立つ。千年以前の物にて、古趣あり。長淵寺廢れて跡なく、獨り此古塔のみ存せる也。

五　望軍臺

閔子爵、尹子爵、韓男爵、及び李王職贊侍の田中德太郎氏の一行と、昨夜食卓を共にし、今朝其楡岾寺さして出發するを送る。田中氏の通譯にて、閔子爵余に向ひ、『今日は何處へ行かるるか』と問ふ。『望軍臺へ』と答ふれば、『望軍臺は絕險なり。切に無事を祈る』といふ。相別れて後、ホテル主任の宮川肇氏導を爲し、高野辞雲、四方森太郎の二氏加はり、ボーイ辨當を擔ふ。一行四人也。昨日の李補助員、才氣ありて、能く日語をあやつる。我が一行を見送つて、『望軍臺で吃驚するな。睪丸に石を縛り付けて行け』とて笑ふ。閔子爵の言と意味は同じきをと覺えず一笑す。

午前九時ホテルを發して、一昨日來の黃泉江を溯る。明鏡臺を後にして行くに、一老人『チゲ』を脊負ひて、烟草を吹かしながら、後より來る。『人參を採るにや』と問へば、『テンピを採るなり』といふ。『テンピ』とは、栗鼠の類にて、其毛皮は帽子の原料となり、一匹の價十圓位もするとの事也。十時二十分水簾洞に至りて、休息する程に、その老人は白雲の奧に分け入りぬ。

一昨日誤つて登りし路より少し手前を左折し、幾度も兩手に命を支へて絕壁を攀ぢ、近く右に望軍臺を望みながら、十一時五十分、一小庵に達す。僧はあらざるが、住まへさる程に荒れても居らず。この庵を兜率とは能くも名づけたる哉、長安寺や山麓に在り。靈源庵や谷底に在り。げに此處は兜率の天也。

午食を終へて、十二時三十六分に發足す。望軍臺を望めば、高しとも高し。箱の如き巨巖、矗々として峯脈の上に孤立す。登れさうには思はれざるが、廻りて其横手に至れば、急なる傾斜を爲して、鐵鎖天より垂る。余わざと鐵鎖の助を借らずして登る。又銅線垂る。こゝはその力を借りて、絕頂に達す。眺望は一昨日登りし峯とほゞ相同じきが、その峯を眸中に加へて、內金剛の全部二度見ても、なほ新味あるを覺えたりき。

四時二十五分ホテルに歸りたるが、思ひがけずも、舊知の久保醫學博士に邂逅し、共に往いて明鏡臺を賞す。黃泉の一溪を往復すること、これにて四度也。

六　萬瀑洞

三日を費して黃泉江の奧を探賞し盡したれば、十月六日の朝、長安寺を後にして、百川洞を溯る。總督府の好意にて、憲兵余を保護することゝ成り居りて、今日は李補助員其任に當る。別に人夫を雇ひて、荷物をその『チゲ』に托す。『チゲ』は內地の脊負梯子に似たるものにて、自然の枝ある木を用ゐ、枝にて荷物を支ふるやうに成り居れり。人夫の名を問へば『鄭寶

玉石といふ。名は如何にも美なるが、此人を見れば、痩せて一目眇せる老人也。年を問へば、『六十六歳』と答ふ。李補助員の云ふ所に據れば、この人夫の如き人は幾人もありて、錢を得れば飲み、錢盡くれば借金して寺の飯を食ひ、又錢を得て又飲み、年が年中獨身にて寺に寓居すとの事也。

　鳴淵潭に送られ三佛を刻める三佛岩に迎へられ、白華菴を過ぎて間もなく溪橋を渡りて、表訓寺の七仙樓を仰ぐ。青鶴の一巣、寺を距し、降ちむとして降ちず。金剛山中の一景也。

　長安寺より表訓寺まで二十一町と稱す。表訓寺より溪を後にし、補助員と人夫とは待たせ置き、青年の一僧に導かれて木賊の簇生せる山路を上ること十二町にして正陽寺に至る。この寺は望軍臺連峯の上より二度も見下したるが、こゝに來て見れば、歇惺樓とて、山を望む樓を構へたり。單に望むのみならず、幾十となく、山の模型を一盤の上に配置して、その面に一々山名を記し、手前に一糸を垂らし、糸と模型と相合する山は、即ち模型の面に記せる名の山なるを知るやうな仕掛にせる也。般若殿には、大藏經積まれて累々たり。藥師堂六角を成して、石の藥師を安置す。彫刻精妙也。堂前に石の五重塔あり。塔頂里の塔と同じく新羅時代の作にして、稍小なる代りに、全部そのまゝに存す。石塔と並びて、石燈籠あり。こは高麗時代の作なりとかや。

　表訓寺に戻りて中食す。補助員を待つこと久しうして、漸く出で來る。その面態として熟柿の氣を吐く。歸人を作へる擔人も共に來る。之にも熟柿の氣あり。青鶴峯を左にして、石門を潜り抜くれば、香爐峯直立して、路に當り、溪水二分す。左は萬折洞にして、右は萬瀑洞也。萬瀑洞に就く。溪畔の磐石に楊蓬萊の書と稱する『蓬萊楓嶽元化洞天』の八大字を始めとし、諸處に文字を刻す。多くは姓名也。盤石といふ中にも、この磐石は、幅二三十間もありて、長さ十數町に亘す。なほ左右の高峯にも及ぶ。而して凸凹一ならず。溪水溜りて瀑となり、溜りて潭となる。實に天下の壯觀也。潭の大なる者に名あり。曰く黒龍潭、曰く琵琶潭、曰く碧波潭、曰く噴雪潭、曰く眞珠潭、曰く龜潭、曰く船潭、曰く火龍潭、都合八潭也。看て眞珠潭に至れば、右方法起峯の中腹、溪身をさる數十丈の絶壁の上に普德窟懸る。『窟だ懸る』とのみ聞きには、解し難かるべきが、普德窟とは窟の名なると共に、窟に據りたる僧庵の名也。表訓寺の僧に導かれ、絶壁を攀ぢで、窟の巷に入れば、二老僧、出ける佛像の前に『觀世音菩薩』と唱へては坐り、又起ちて『觀世音菩薩』を唱ふ。菴はと見れば、上は鐵鎖に吊され、下は銅柱に支へらる。足を運べば、菴動く。菴を出でゝ、ほつと一息つ

く。石案相擁して前にも潭あり、後にも潭あり。八潭の中央に位して、萬瀑洞の壯觀を一目に集むる處にて壯觀中の壯觀也。

上流の方に歸路を取りて、萬瀑洞の右岸に戻る。路の左に經岩あり。面積數十百坪の地を占めたるが、一二尺四方位に割目ありて、恰も經帙を積み重ねたるが如し。これ最も能く金剛山の特色を發揮して、他には見られぬ光景也。八潭の最末の火龍潭に至り、補助員の指すまゝに、左の絶壁の上に獅子巖を見上げて、げに〳〵と頷く。萬瀑洞の壯觀は此處に盡きたり。天下無類の長大磐石に、溪流の變化を盡くし、美觀を極めて、なほ飾るに紅葉を以てし、山に滿ちて山笑ひ、水に映じて水も笑へり。

火龍潭より數丁にして、摩訶衍といふ寺に至り、宿を頼む。久保博士は余より一足前に長安寺を發したるが、恰も白雲臺より下り來りて妙吉祥を見にゆかむとするに逢ふ。高木背水、佐田宗一の二氏も共に在り。余も之と共にして、往いて妙吉祥を仰ぐ。妙吉祥とは巖面に刻める彌勒菩薩の座像にて、高さ五丈もあり。背水曰く、『三十二相具備せりと云はれ居る也』。

七　毘盧峯

『明日來る』とて、補助員は長安寺さして歸れり。久保、高木、佐田の三氏も長安さして行けり。寺に僧多けれども、言語通ぜず。朝鮮の習とて、夜具もなければ、風呂も無し。僕を持たず來りたるまゝに、飯を食ひて仕舞へば、唯眠るだけ也。ソンドル餘りに暖かにして、室内恰も夏の如く、油蟲身邊に出沒し來り、錚々音を立てゝ、終宵幾んど熟睡すること能はざりき。

明くれば、李補助員の代りに、百塔洞探檢を共にしたる朴氏來れり。今日は金剛山の主峯なる毘盧峯の頂を窮め、歸りて又摩訶衍に宿るつもりにて、荷物は寺に置き、人夫には辨當だけを持たせて、午前九時二十分、摩訶衍を發す。楡岾寺への路を取り、數町にして妙吉祥に達し、又數町にして楡岾寺路と別れて左折す。時に九時五十分也。

小溪を溯る。溪水沒しては現はれ、現はれては沒す。折り折り縞栗鼠を見る。身體の大さは鼠ぐらゐなるが、頭は大也、尾は更に大也。尾と後足とにて立ち、前足にて木の實を食ふ樣、いと可憐也。紅葉黄葉の幽溪に、一種の趣を添へぬ。

紅葉の林を出づれば、右にも石峯直立し、左にも石峯直立す。溪盡きて、毘盧峯面に當る。巨石の上を飛び越え〳〵て行くに、石塊は左右三四間の幅に限られて、長く、且つ高く天に朝す。げに自然の天梯也。この天梯の外は、香檜や、松や、躑躅や、密生して一面に平らか也。いづれも矮樹にして、天梯より高くは伸びず。眺望は妨げられざるが、一度身を其中に投ず

れば、一足も行かれず。天梯に出るの外なし。さるに天梯も、自由に歩けるやうには出來て居らず。石あまり大に、且つ傾斜急なれば、絶えず兩手を用ゐざるべからず。頂上かと思ひて巨石を攀ぢては、まだ頂上ならざるに、失望すること、幾度なるを知らざりしが、先登の補助員先づ喜聲を發す。次に登りゆきし人夫も喜聲を發す。何事と問ふ間もなく、余も同じく喜聲を發す。登攀の苦盡くると共に、思ひしよりも近く漫々たる大海を見たる也。

されど、こゝはなほ毘盧峯と永郎峯との鞍部也。右折して峯を傳ふ。右は絶壁也。左は斜下して矮樹の林を成す。白樺多し。その林の木、言ひ合はせたるやうに、絶壁までは掩ひ盡さずして、人の歩けるだけの餘地を存す。傳ひ行くこと數町、少し左に轉じて、遂に毘盧峯の最高點に達す。時に十二時四十分也。

頂上は、ほゞ『へ』の字形に成り居りて、數百人を立たしむるに足る。『へ』の外側は、すべて絶壁也。內側は緩なる傾斜面に松檜密生して、青氈を布けるが如し。西に連りて、毘盧峯と共にこの青氈を圍める永郎峯が全山樹木を帶ぶたるだけにて、他の峯は悉く骨を露はし、或は立ち、或は横はりて、一萬二千峯悉く脚下に朝す。而かも峯はみな紅葉の錦を纒へり。海の最も近き處は、僅に二三里の外に在り。海金剛も五里の外に出でず。東方一帶は日本海、東南にも擴まり、東北にも及ぶ。西方一帶は八道の山々、南より北にかけて、其盡くる所を知らず。三千世界我が掌中に收まるかと思はるばかり也。

天には一片の雲なきのみならず、些の水蒸氣なくして所謂秋高の趣を遺憾なく發揮し、仰ぎ見ても氣持よし。食を終へて後、背を巖面に當てゝうと〳〵せしに、足もとに、ごそ〳〵と音立つるものあり。何かと見れば稻子也。猶能く見れば稻子は稻子なるか、幼者ならぬに、羽なかりき。

平福百穂畫伯
畫並題詠二首



(金剛山之圖)
澁田哲太郎藏

八　內金剛の萬物相

昨日と同じく、荷物は寺に置き、三人づれにて、須彌菴さして、午前八時二十分發足し、寺の裏より溪を傳うて、數町にして萬灰菴に至れば、光景頓に奇拔となりて、四面に奇巖の峯簇立す。その中に、童子岩と稱するは、如何にも童子の步行する樣に似たり。又數町にして白雲臺に登る。溪中に直立せる巨巖にて、頂は東西二臺に分る。先づ西臺の頂に立ち、次に東臺の頂に立つ。前の方は稍遠く望軍臺方面の峯々を望み、後の方は近く衆香城の峻稜を仰ぐ。金剛山中の一景也。

路を轉じて迦葉洞を溯り、兩手を用ゐて絕壁を攀ぢ、峠を越えて又峠、困頓を極めたれど、奇巖怪石應接に遑あらず。能くも斯くまで多く奇々怪々なる巨巖が集まれることゝ驚歎す。內金剛の萬物相との稱あるが、外金剛の萬物相に比して、互に優劣あり。金剛山中見逃すべからざる奇觀也。

十一時半、須彌菴に達す。僧住まさること久しと見えて、いたく荒れたり。近く鳳巖や龜巖に擁せられ、須彌峯を負ひ、凌虛峯に對す。その凌虛峯は滿山紅葉を帶びて、南北に連亙す。天に萬丈の錦幕を掛けたるが如し。午食して後、西に下り、降仙臺と稱する巨巖の下を過ぎて南に轉じ、數町の絕壁を後向きになりて、漸く下りて船菴に至る。こゝには、年若き一人の僧住めり。後に船巖翼然として立ち、前に溪水音なくして流る。眺望は西の一方のみに限られたるが、見渡す限りの溪山みな紅葉也。

一時間ばかり休息して、古木の茂れる溪谷を下る。この溪谷を太上洞と稱す。下るに從つて、溪大也。上には紅葉枝を交へ、下には溪水靜に磐石の上を流れて、微に音をたつ。山姬の仙樂を奏するかと思はるるばかり也。內圓通菴に至れば、僧三四人相集り、松毬を碎きて其實を採れるが中に、一人の老僧立ちたるままにて、何もせず、長き煙管を手にす。其衣を見れば、赤青紫黃いろ〳〵の巾を縫ひ合はせたるが、ぼろ〳〵に破れたり。狂人かとも、乞食かとも見えて、頗る異樣也。眺望開けて、見下す溪谷は樅の林に埋れたり。その林に入れば、萬絕洞の溪流あり。奇巖立ち、瀑布懸る。香爐峯に至りて、萬瀑洞と相合す。太上洞と萬絕洞と連れる溪谷は、一に小萬瀑洞と稱す。金剛山中の一景たらずんばあらず。

明日はいよ〳〵內金剛を去つて、外金剛の東南部なる楡岾寺に向はむとす。明朝を約して、補助員は長安寺に下り、余は人夫と共に、再び萬瀑洞を溯り、夕の鐘に迎へられて、摩訶衍に戻りぬ。

約したる時刻は來りたれど、補助員は來らず。待つ間に、三

たび萬瀑洞を見むとて、先づ火龍潭に至り、暫し眺望するに、未だ來らず。船潭に至るに、未だ來らず。迴潭を過ぎ、眞珠潭をも過ぎて、噴雪潭に至りし時、朴氏の來るに逢ひ、相伴うて一先づ摩訶衍に戻り、十時に至りて發足す。

三十分にして四仙橋に至り、又三十分にして白華潭に至り、羊腸の路を攀ぢて、十二時十八分高本背水の設けたる丸太の腰掛に腰を卸す。こゝは内外金剛の分れ目也。海拔四千尺、摩訶衍を距ること一里六町、楡岾寺を距ること一里三十町と榜す。七日間相親みし内金剛は楓の黄葉を以て我を送り、外金剛は樅の深林を以て我を迎へぬ。

九　彌勒峰

内霧在嶺より下ること數町、渓水の道を横切るに逢ひて午食し、渓水を掬して茶に充つ。行けども〳〵樅の深林也。連日の跋渉に手にて命を支へざる日とては無かりしが、この日は山路ながらも、手の用なくして、平地を行くが如き心地す。この行路にて始めて人夫の何やら歌ふを聞く。二時二十三分に至り、深林開けて左に近く七寶臺を望み、脚下に水聲を聞く。又も深林に入り、三時五分隱仙臺の岐路に來りて左折し、三十分にして隱仙臺上の人となる。巨巖の上、數十人を立たしむるに足る。外金剛の東南部の山々、四面を圍めるが中に、彩霞峰の中腹より十二瀑迸り出づ。凡そ十二段となり、數百尺の長さを有して深壑に落つ。隱仙臺はこの十二瀑を得て、金剛山中の一景也。

楡岾寺路に合してより間もなく、曉雲洞の渓谷に入り、九龍沼を過ぐ。水深けれども、澄みて底までも見ゆ。底の横手に、二つばかりの一大圓穴ありて、碗を傾けたるが如し。もと九つありしが、石の爲めに埋れて、今は唯其二を存すとの事也。

五時四十分楡岾寺に至りて投宿す。この寺は金剛山中第一の大伽藍也。今を去ること千九百餘年、新羅南解王の時、月氏國より來れる五十三佛を奉じて、この寺を創めたりとかや。渓山稍開けて、明月橋架かる。橋を渡れば、山暎樓あり。次に護持門あり。その次に梵唄樓あり。其奥に能仁寶殿あり。これ本堂にて、丹碧燦然たり。其前に九重の石塔立つ。宏々として、高さ本堂の軒に達す。本堂の左手には靈山殿、三聖閣、慈明庵あり。右手には、寶陀殿、十王殿、酬忠祠、華林閣、龍虹殿、御香門、義化堂など立ち連る。朝起きて、同じく宿れる總督府事務官の福田源一氏と共に、僧に請ひて本堂の扉を開かせて五十三佛を拜す。一尺内外の金佛、縦横に枝を張れる楡の木の處々に安置せられ、鐵網に封ぜらる。斯く鐵網に封じて盗み去らるゝを防ぐとの事なるが、惜しや。既に十七佛は盗み去られたり

との事也。

更に僧に導かれて、鐘閣に入る。樓に入らずして、地下に入る也。普通鐘は高く樓を設けて掛くるに、こゝは低く屋を設けて地下に掛けたる也。徑四尺の大さを有す。僧曰く『この鐘の上部潤へば、國家の大變あり。下部潤へば、寺に大變あり』。

義化堂の寶物に喜捨して後、荷物は寺に置き、福田氏の一行と共に發足し、中内院の岐路にてその一行と別れ、例の三人づれとなる。福田氏は直ちに摩訶衍に向ひ、我等は萬景洞に分け入る。間もなく、船潭に至る。萬瀑洞の船潭と同工異曲なるが、強ひて比較すれば、この船潭の景致の稍優れるを覺ゆ。船潭を右に見て、絶壁を攀ぢたる後、或は溪に沿ひ、或は溪を離れ、身は松樅の深林に沒したるも、楓の紅葉あり、楢の黄葉ありて山明か也。見る巖も、踏む石も、蘚を帶びて、純碧なること、金剛山中に異彩を放てり。

峠の上に立ちて、『あれが彌勒峯なり』と人夫の指すを見れば、巨巖峯上に突起して、笏を立てたるが如し。峠を下れば、彌勒峯は見えず。又峠を上りたれど、見えず。彌勒峯に似たる幾多の石峯を右に見、孤立せる香爐峯を左に見しが、いつしか香爐峯を後にして中内院に達す。北に巖の峯を負ふ。東西南の三方開けて、連山波濤の如し。院は人の住める樣なれど、僧あらず。『よぼう』と補助員先づ聲を張上げ、人夫も同じく『よぼう』と呼びたれど、山彦だに答へもせず。『何故呼ぶぞ』と問へば、『茶を沸かして貰ふ』といふ。『茶も湯も要らず』と二人午食す。食し終る頃、僧二人づれにて獲物の松毬と共に歸り來り、急に湯を沸かして茶を饗す。既に碎きたる松毬地に亂堆して、松子もまじる。縞栗鼠來り拾ひ食ふ。さまで人を恐れざる樣也。

中内院より彌勒峯へ十八町と稱す。重りあへる巖を傳ひゆく。香檜密生して、殆んど巖を沒せむとす。巖に手がゝりなき場合はその枝を握りて、身を持ちあぐ。一種の香氣馥郁として、人をして登攀の苦を忘れしむ。一時間半にして漸く頂上に達したるが、峯尖りて巨巖となり、さきに笏と見えたりしも、一變して一大怪獸かと見ゆ。人夫は其巖の下に至りて登らうとせず。余補助員と共に、辛うじて登りたるが、なほ深き割目を隔てゝ、最高點は三四丈の上にあり。橋か梯子かをかくるに非らざれば登られず。止むを得ず、三四丈を天に讓りて、毘盧、白馬、月出、日出、彩霞、永郎、凌虚の諸峯を望み、海金剛を望み、日本海を望む。この峯、海抜五千餘尺、一萬二千峯中の高峯に屬す。峯頭の怪奇に、途中の森林、溪谷碧巖の美を加へて、金剛山中、見逃がすべからざる碧境也。

一〇　海金剛

再び楡岾寺に宿して、明くれば雨也。總督府鑛務課の技師なる理學士小岩井兼輝氏、滿鐵管理局の小倉充雄氏、金剛山なる三井鑛山部の篠原正信氏と同連にて、高城さして發足す。楡岾寺より高城まで七里半と稱す。開殘嶺一つ越ゆれば平地にて、今日は氣楽になるかと思ひの外、天公意地惡くも我を苦しむるに雨を以てすと悲觀すれば悲觀せらるゝが、開殘嶺に上りて、紅葉黃葉の溪山に雲烟浮動するを見て、いや〳〵我を苦しむるに非ず、山の變幻を見せて我を慰むなりと樂觀す。見渡す峯峯骨を沒して、光景全く一變す。小岩井理學士腰より鐵槌(かなづち)を取り出して、巖を碎き、一小片を我に示して曰く、『金剛山は全部花崗岩なるが、開殘嶺は一變して片麻岩なり』と。又曰く、『金剛山の花崗岩は筋理多くして、縱橫自在に割るゝこと、內地の花崗岩に見ざる所也。』

百川橋を渡れば、山路盡く。左右の山開けたり。進むに從つて、山益開く。普賢洞と稱する部落に至りて、憲兵駐在所を訪ひ、憲兵の大坪菊男氏の好遇を受け、前の川にて漁したりといへる鱒を肴に、午食を饗せらる。大坪氏は高城に用ありとて、共に發足す。雨は止みたり。楡離里を過ぎて、南江に沿ふ。江の彼方に白き鳥の立つを見る。鷺かと見れば、大也。鶴かと見れば小也。大坪氏曰く、『朝鮮鷺也』。

神溪川の南江と合して赤壁江とならむとする處に來りしに、平生は小さき土橋にて間に合はせ居れど、今日の雨に水嵩俄に增して、土橋を渡りても、なほ數十間も徒渉す。水の深さ膝を沒したりき。

薄暮高城館の主人安達松太郎氏に迎へられ、高城といふ小市街に至りて、高城館に投じ、こゝにて朴補助員と人夫とに別れ、六日ぶりにて風呂に入り、蒲團の中に臥す。大坪氏とも別れたるが、小岩井、小倉、篠原の三氏は余と同じく宿したりき。

日出を看ることを約したることとて、主人に起され、導かれて小岩井、小倉二氏と共に、龜岩に上れば、夜明けたり。鳥に似て、烏よりも體は小にして尾は長く、腹と羽の中央との白き鳥、近く松の枝にとまりて啼く。その聲の大さ、烏と雀との中間にあるが、啼聲までも、烏と雀とを折衷したるやう也。『何か』と問へば、『鵲なり』といふ。平生唯其名のみを知りて、玆に始めて實物を見たることとて、一種の興味を感ず。この鳥は佐賀など、九州の一部を除きては、內地に居らず。その九州にあるは、文祿の役に、朝鮮より移し來りたるものゝ子孫なりとの事也。

東方一甲ばかりの平地を隔てゝ、海見ゆ。空も能く霽れたるが、唯海の果に、白雲亂峯の形を爲して横はる。『雲の金剛山なり』と興じあふ程に、雲の處々が上に伸び、横に動きて、將に出でむとする日の光を受け、白雲變じて絳雲となり、天人絳衣の袖々飜して舞ふかとばかり思はれたりしが、いよ〳〵雲の上に現はれたる日輪は、既にまばゆくして、瞻視すること能はざりき。

高城には、憲兵の分隊あり。朝食を終へて後、李鳳植といふ補助員に衛られ、安達氏に導かれて、小岩井、小倉、篠原三氏と共に、宿を出づ。舟にて海金剛を見むと思へど、風浪烈しくして、舟は出されずといふに、止むを得ず、陸路を取り、一里ばかりの路を直行し、後川に沿うて海に出づ。近くに巖の島散在す。松を帶びたるもあり。安達氏一巖の上に人の立てるが如きを指して、『船頭岩なり』といふ。川の口塞がれて、砂濱となる。『この川の水、昨日までも海に通じて、舟にて渡りしに』とて、安達氏いたく驚く。濱を傳ひて北に行き、立石里といふ小漁村を過ぎ、濱つきて岬に上り、又濱をつたひ、又岬に上り、海に下りて金剛門に至る。十丈ばかりの一大巨巖陸に續きて立ち、同じ大さの巖と相並びて、二巖の間に海水通ず。舟にて行けば、海金剛の入口也。その門を右にし、絶壁を左にして、前に海金剛の奇巖怪石相連り、幾列となりて、絶壁に接す。列と列との間には、怒濤亂入して、巖を嚙む。その巖尖の多きこと、金剛山の峯尖の多きに似たるを以て、海金剛とは云へる也。その巖尖は海底にもありて、波靜かなる時は、海底にも金剛山を現出すと聞く。傳へうるだけは、絶壁の下を傳ひて、怒濤澎湃の間に、海金剛の峯をいくつも越えけるが、傳へられざるに至りて引返す。金剛門の巨巖に上らば、まことの金剛山見えむとて、登らるべき場處を見定めて、右手の方を這ひ上りて、中腹に至りしに、絶壁直立して、手がゝりなし。唯右の方幅一尺ばかり平らかになりて、長さ凡そ一間に及ぶ。その一條の路を行きつむれば、絶壁立てるが、それにも手がゝりなし。前も絶壁、左も絶壁、右も絶壁也。而して前と左との絶壁は上に立ち、右の絶壁は下に深し。若し上らむとして落ちなば、一尺の狹地、とても姿勢を保つこと能はずして、海中の鬼とならむこと必せり。『これは登れず』と云へば、三井鑛山の篠原氏打笑ひて、『素人は登れざれど、我等の如き專門家は造作もなし』といふ。如何にして登るぞと見れば、絶壁と絶壁との直角を爲せる處に至りて前向きになり、手と足とは用ゐず、兩肱と兩膝の横とにて身を支へ、肩をゆすつて、すら〳〵と登りゆく。木傳ふ猿にも出來まじき業也。一同あつと驚く。『鑛山に從事する者

の何人も能する所なり。手を引かうか」とて、篠原氏上より手を伸ばす。余一人之に應じて引上げらる。生れて五十年、深山の上に、幽谷の底に、險を冒し、危を踏みて、人間の行ける處ならば、行けぬことなしと押し通したる自信、今日此時に失せて、金剛門に兜を脫ぐ。

頂上は樹を帶びて南北に長く、數十人を容れて餘あり。脚下に海金剛を見下し、天半にまことの金剛山を望む。危を冒しただけの事ありと喜びつゝ、戾りは篠原氏に足を支へられて絕壁を下り、『後の遊客の爲めに丸太でもかけ渡しては如何にや』と云へば、安達氏頷く。小岩井理學士は初より登らうともせず、例の鐵槌を相手にして居りしが、余に一片の石を示して曰く、『君の登りたる金剛門は花崗岩なるが、海金剛の巖石は石英斑岩也。』

一一　九仙峯

今日中に溫井里へ行かむとする小岩井、小倉、篠原の三氏と、立石里にて別れ、我れは九仙峯へとて、南に濱を傳ひて燧里といふ漁村に至る。こゝには內地の漁夫も住めり。區長の家に辨當を食ひて後、舟を呼びて渡る。赤壁江の海に朝せむとする處にて、幅四五町もあるが、大峰といふ島山、河口に當りて、波平らか也。舟を漕ぐもの二人、親子らしく見ゆ。一人は五十歲ばかり、一人は十七八歲の青年也。その青年髮を頭の中央に分け、くでに組みて後に垂らし、赤きリボンを掛く。內地の少女と同じさま也。『鮮靠』とて、未婚の男のする朝鮮の風俗なり』と安達氏說明す。『海坊主』と安達氏叫ぶと共に、海豹の圓顱、左舷より二三十間の先に沈む。また浮ぶかと見廻したれど、浮ばざりき。

濱を傳ひ行きて懸鍾岩に上り、近く船岩に對し、やゝ遠く鵲島を望み、楊蓬萊の書と稱する懸鍾岩の三大字の巖面に刻まれたるを見て、右手に九仙峯を仰ぎつゝ、浦外津里といふ部落に至り、稻刈る童子に逢ひて、『九仙峯へ登られるか』と問へば、『梯子を持ちゆくにあらざれば、登られず』といふ。安達氏補助員に賴みて、區長の家に往いて、梯子を借らしむ。梯子持參の登山とは、世にも振つたる哉。區長の四十歲前後と見ゆるが、補助員と共に來りて、『梯子なくとも登られる』といふ。『さらば案內する者を雇うてくれずや』と賴めば、『聽よ[illegible]る者あればよきが』とて歸りゆきしが、やがて又來りて、『我[illegible]案內せむ』といふ。氣の毒とは思へど、辭退しては登られず。これが內地の村長ならば、案內するにしても、『待つて下されと[illegible]の仕度せされば』とて、草鞋を買はする、脚半を穿くなど、手間[illegible]れど、いつも朝鮮の鞋を穿き居ることとて、いさと云へば、そのまゝ

にて、先に立ちて歩きつゝ、長き煙管にて烟草吹かす。被れる冠黒く、着たる衣白くして新也。其名を問へば、朴炳韶といふ。脚健にして、嶮坂を攀ぢても、少しも息を切らさず。峠に達して下り、轉じて左に上り、兩手に這ひて、一峯の頂に至る。唯一本の松立てり。芭蕉形に凹みたるを指して、『仙人の碁を圍みし所なり』、圓形に凹みて水湛まれるを指して、『仙人の飲みし井戸なり』、長方形に凹みて水湛まれるを指して、『仙人の浴せし風呂なり』と、區長聞き傳へしまゝに云ひ傳ふ。南麓に鑑湖を見下し、北麓に永郎湖を見下し、西は金剛の連峯を仰ぎ、東は日本海に俯す。何人も登り來れば仙人の氣持に成らずには居られざる處也。九仙峯はその名の如く九峯相連りて、高さほゞ相同じく、いづれもみな巖の山にて、頂に樹木なけれど、唯余等の登りし峯だけは、一本の松ありて、遠くよりて望みても、それと知らるゝ也。

下りて區長と別れ、高城さして歸るに、日は金剛山の彼方に沈めり。金剛山はその沈みたる日の光を受けて、一萬二千峯の折線、すべて紅色の後光を負ふ。あつと見る間に、後光消え、金剛山も暮色の中に沒す。赤壁山の斷崖の下にて渡舟に乘る。月明かになりて、江山も明か也。山名の同じきだけにても、聯想せざるを得ず。東坡が赤壁の後遊も、斯かる夜なりけむ。

二十二 瀑

高城館に二宿して、十三日の朝、高城を去り、安達氏に案内せられ、李補助員も加はりて、舟を三日浦に浮べ、安達氏漕ぎて島々を廻り、四仙亭の礎を撫し、夢泉亭の跡に淸水を掬し、金剛の石門を潜り、西南の岸上に二個の蓮花石を見上げて、安達氏は舟に殘り、余は補助員と共に陸に上る。峠にて見返へれば、安達氏なほ舟に在り。帽を振つて『左様なら』、我も帽を振つて、『左様なら』とて別る。

永郎、述郎、南石、安祥の四仙、歸るを忘れて、こゝに優遊すること三日に及びければ、三日浦と稱するなりとかや。浦の名にて海の一部なりしことを語れるが、今は數十町も遠く陸地に取殘されて、高城の東北半里の外に、一大明鏡を開く。三十六峰に取圍まれて、周圍二里もあるべく、長岬いくつとなく突出し、五六の島嶼、湖心に點綴す。海金剛と稱する處は狹けれども、この三日浦を始め、立石里の濱や、懸鐘岩や、九仙峰や、鑑湖や、永郎湖や、赤壁山や、赤壁江や、すべてみな海金剛の小範圍に屬すると共に、金剛山の大範圍に屬す。金剛山の風致、一に何ぞ豐富なるや。

一昨日の路を取り、普賢洞の憲兵駐在所に至りて、李補助員と別る。金瓶鋪といふ補助員代りて、百川橋に至るまで、なほ一

昨日の路を取り、それより摩訶洞に分け入る。百川橋より神溪寺まで一里十五町と稱す。その橋を發せし時は、午後五時十分にして、間もなく日暮る。されど、天に月ありて、滿山の紅葉は夜の錦ともならず。溪流脚下に仙樂を奏す。夜の溪路思ひしほどには危からずして、却つて詩趣身に浸む。六時半に至りて、松林寺に投ず。

朝起き出でゝ見れば、松林寺の小堂、直立せる巖峰の下と深溪の上との間に介在し、側に老松を帶びて、金剛山中の一景たらずんばあらず。導者を雇ひ、補助員も共にして、摩訶洞を溯る。峯高く、谿深く、溪に重りあへる石大にして、物凄きまでに幽邃也。

導者身を躍らして、樹に昇る。何をするかと見れば、葡萄の大さにして、無花果に似たるものを採り來りて、我に分つ。これを食ふに、其味も葡萄と無花果とを調和せるやう也。『何といふぞ』と問へば『たれ』と答ふ。行く／＼『たれ』を見付けては採り、採りては食ふ。溪身の瀧となれる處を幾度も過ぎて、十二瀑の下に達す。五日前隱仙臺の上より望みしは、云はゞ人物の社會的事業を見たる也。今はその人物の謦咳に接したる也。何となくなつかしく、紅葉黄葉をも合はせて味ひて、ゆる／＼午食し、ゆる／＼休息して引返す。

一宿して松林寺を辭し、溫井里へとて、普賢洞駐在所に戾りて、補助員は朴仁成といふ人と代り、侍郎里を過ぎて高城路と別れ、金剛山を左に仰ぎて、柳城里、花雨里などの部落を過ぐ。路傍に野生の黄菊多く、香氣人に逼る。

野に咲ける黄菊の香り身にしみて見ゆる一萬二千峯かな

一三　九龍淵

溫井里に至りて、滿鐵管理局の營める金剛山ホテルの客となる。名の示すが如く、こゝには溫泉沸き出でゝ、五つ六つの溫泉宿あり、商店あり、憲兵駐在所あり、小學校あり、三井鑛業所もありて、金剛山中の仙鄕なると共に、小市街也。溫井嶺後を擁し、觀音峯の餘脈西に連り、水晶峯の餘脈東に連りて、天地自然の屏風をめぐらす。前の一方だけ開けて、平地次第／＼に低くなり、其果に小山横はる。ホテルは他の家並より一段高き處に孤立して、居然たる溫井里の王者也。

午前八時四十分ホテルを發足して九龍淵に向ふ。ホテルの主任柏村成城氏導を爲す。憲兵駐在所より金明玉といふ補助員來る。右に觀音峯を望み、左に文筆峯を仰ぎて、兩峯の鞍部に達すれば、脚下に神溪寺を望み、天半に集仙連峯の巍峩たるを望む。金剛山中の一景也。

神溪寺に就いて休息す。一僧出で來りて、茶を獻すと共に、

由來記を示す。微笑容に滿ちて、寫せるが如し。何かと問へば、僧は筆にて『蜉蝣』と書く。朝に生れて夕に死すと聞けるは、これにやと頷く。僧また筆を執りて、『人間亦如是』と書く。余覺えず微笑す。この寺新羅法興王の時に創まりて、千六百五十四年を經たりとの事なるが、幾度となく火災にあへり。唯大雄寶殿の前の石塔は、新羅時代のまゝに殘れり。門前一株の老松も、數百年を經たるものなるべし。

神溪川の左岸を溯る。左の山壁に二瀑懸る。柏村氏水の多き方を指して、『武瀑なり』、少なき方を指して、『文瀑なり』といふ。『文は武に如かざるか』と一笑す。

右岸に移りて西に進み、左岸に移りて南に進むこと數町にして、仰止峯の巨巖に達す。北を望めば、觀音峯の峨巖天を摩し、東を見上ぐれば、世尊峯の絶壁、直立して高く且つ長く、其盡くる所を知らず。金剛山ならではと感歎す。

金剛門に至れば、うれしくも茶店あり。就いて休息す。金剛門は巨巖相支へて、自ら門を爲せる也。この門を過ぐれば、溪いよ〱幽に、巖ます〱奇也。玉流洞に磐石凸凹相連りて瀧を爲し、潭を爲せるを賞し、右岸に移りて行けば、左の絶壁より水落つ。柏村氏曰く、『これ舞鳳瀑なるが、未だ賞するに足らず。この先きの飛鳳瀑は所謂銀河九天より落つの觀を呈す』と。

言未だ終らざるに、右に一瀑を仰ぐ。問はずして、其飛鳳瀑なるを知る。水は數十丈の絶壁を飛んで、一たび潭となり、また飛んで玉流洞の本流に合す。その本流に合する處は一淵にて、本流の溪身突起して大瀑懸る。我れ瞻仰して、嘆賞すること久しうす。柏村氏曰く、『天下の名瀑に非ずや。我は最も此瀑を愛す。君は如何』と。『九龍淵を見て後、答へむ』とて飛鳳瀑を後にす。

支溪に架れる溯淵橋を渡り、本溪に下りて間もなく、九龍淵に達す。時に十二時半也。右も絶壁、左も絶壁、正面も絶壁なるが、正面の絶壁凹みて、十餘丈の飛瀑直下す。その壺瀧は徑五間もありて、ほゞ圓形を成す。凡そ天下に金剛山の溪水ほど澄み切つたる水はあらじと思はるゝに、近く瀧壺に就いて覗きても、底見えず。深きこと推して知るべし。その瀧壺絶壁の中腹にあり。その絶壁は三方より瀧壺を圍んで直立し、一方だけ傾斜して瀧壺の水を走らす。余柏村氏に向ひ、『この瀧、看るには足れども、未だ大瀑として賞するに足らず。唯この瀧壺は天下無類の奇觀也。古來九龍淵とのみ云ひて、九龍瀑と云はざるも、亦宜なる哉。君が此瀑を取らずして、飛鳳瀑を取りたるは至極同感なり』と云へば、柏村氏曰く、『この淵の上、更に八潭相連る。その八潭と合せ見て、九龍淵の奇觀はなほ一層奇觀也』。

『さらば』とて午食を終へて後、淵潭橋まで戻り、巖を這ひ木の根にすがり、漸くにして、九龍淵の上に出づ。見下せば、げに／＼、九龍淵の大磐石、瀑の落口より上は、ほゞ平らかになり、少し凹みて潭を成し、凡そ三四町の間に、八潭相連る。潭や青く、溪流や白し。天公戯れに、白糸を以て八個の碧玉を連ね、最後に垂下して一大碧玉を連ねたるかと思はるゝばかり也。後に毘盧峯を仰ぎ、前に日本海の一部を見る。左右の石峯奇を争ひ、秀を競ふ。金剛山は單に此玉流洞の一溪のみを以てするも、世界的名山也。

一四　仙蒼溪

朝鮮の牛の内地の牛より大なるとはあべこべに、馬は小にして、殆んど驢馬に異ならず。話のついでに、『乘つて見たし』と云へば、駐在所長の軍曹待熊岡一氏、『そは安き事なり』とて、三井鑛山に飼へる馬を借り乘れり。余之に乘つてホテルを出づ。而も殆んど地に達せむばかり也。歩きて共にするもの二人、曰く竹下宗助氏、曰く昨日の金組助員。竹下氏は金剛小學校の校長也。

二里にして長箭港に至る。捕鯨會社もあり、支那人の商店もあり。温井里は金剛山中の小市街なるが、長箭は朝鮮中の小市街也。三井の鑛業所を訪へば、適ま來り居れる篠原正仲氏に、思ひかけずも五日ぶりにて逢ひ、その紹介にて津田政一氏にも逢ふ。こゝに馬を返して徒歩す。軒に松の枝を吊せる家あり。竹下氏曰く、『子生れたる也』。麻の帽子を被れる者あり。竹下氏曰く、『喪に服する也』。

長箭より元山街道を行くこと十町ばかりにして左折し、流に從つて千佛洞に分け入る。途に三井の千佛洞主任なる戸上俊彦氏に迎へられ、選鑛所を見物して事務所に至り、午食して新豊里に行かむとすれば、『折角來られたることなれば、是非一宿せられよ』といふ。辭退して見たれど、『一宿せらるゝ事にならば、仙蒼溪に案内せむ。仙蒼溪の奇巖怪石は萬物相に讓らず』といふに、心動く。『何里あるぞ』と問へば、『僅々一里なるが、險しき山路なれば、往復四時間を要す』といふ。『さらば』とて三時二十分仙蒼溪さして發足す。戸上氏の外に、梶原菊治、古賀勇の二氏加はりて、同行すべて六人也。

事務所の裏手より山を登ること三十分にして峠に達す。日本海見ゆ。戸上氏曰く、『この山上より鯨の游ぐを見ることあり』と。今日は如何にと見廻したれど、見ゆるは唯數點の白帆のみ也。峠を下れば松多し。直立せる巨巖左右に相望む。仙蒼溪に下れば、奇岩益々多く、溪水潺湲として流る。『あれを見よ』と指すを見れば、巨岩の上に人の立てるが如き小巖突起せり。こゝに

も三井の事務所あり。就いて休息す。坑夫や、その妻や、その子や、珍らしがりて、來り見る。『この溪の上下は斷崖絶壁にて十丈に餘る大瀑も少なかず』といふ。圖の上にても、それと知らるゝが、如何せむ、日既に暮れたり。仙蒼溪は門に及びたるだけにして引返す。

ふと仰げば松間に大月懸りて白し。見る〳〵赤味加はる。『双龍爭玉松間月』の古句を聯想せざるを得ず。この古句は一句のみ傳はる。梁川星巖曾て『臥虎吹毛巖上苔』と付けたりとの事なるが、今日の實況に適切なりと、獨り頷く。

一時間半ばかり山上の月を踏みて事務所に戻り、同行六人の外、津田政一、香坂昌悌の二氏も加はりて、思ひ掛けずも、山上の小夜會を味へり。

食終りて、郷里の伯母の訃を耳にす。電報にて土佐より大連の國澤新兵衛氏に傳はり、國澤氏より溫井里に傳はり、溫井里よりは電話にて傳はりたる也。伯母死してよりまだ一晝夜の外に出でず。今更ながら文明の利器に驚く。我父に二姉あり。父は早世したるが、二姉は人並以上に長壽也。長なるは森氏に嫁し、次なるは國澤氏に嫁す。長や九十歲、次や八十七歲、死したるは九十歲の伯母にして、年に不足は無し。されど、一人の息子早く死して、唯一人の男孫あるが、幼にして腦膜炎に罹りて白痴也。之に反して八十七歲の伯母には三男あり。長は明治の初、藩より拔擢せられて英國に留學し、早世したれど、明治の世に先驅して、其名洋叢史上に留まる。次は海軍少將まで進みて死せり。三男は今の滿鐵理事長也。同胞ながらも、妹は都の大厦に住み、姉は田舍の茅屋に住む。余この夏三十八年ぶりにて歸鄉し九十歲の伯母に逢ひけるが、思ひもかけむや、その伯母半歲ならずして世を去らむとは。『都に來り給はずや』と云ひたりしに、頭を掉りて、『何も見たくも慾しくもなし。『唯孫が』とて、ほろりとせし樣、今もなほ眼前にあり。折りしも雨至り、風强く吹く。戶動き、屋も動く。唯ならぬ山の一夜なりき。

一五　九成洞

明くれば、雨やみ、風も勢を減じたるが、寒氣俄に加はり、秋は一夜にして冬となれり。紅葉紛々として空中に舞ふ。鳥の飛べるが如し。戶上、香坂二氏送つて山神の祠に至りに別る。十數町の急坂を攀ぢて後は、峯を傳ふ。巖立ち、松迴る。顧みて日本海を見る。浪白くして、舟は一隻もなし。路に木萩多くして幹の徑一寸に達するばかり大なるもあり。白楊の黃葉もあれば、蒙古楢の紅葉もあり。竹下氏楓葉の黃なるを指して、『いたやかへで』と云ひ、『その液は砂糖水なり』と說明す。『日陰まゝこな』と云ひて、小さき草花の萎みたるを指し、『金

剛山特有なり』と敎ふ。左の五峯山と右の仙沓山との鞍部に來りて、半天に毘盧峯を仰ぎ、脚下に新豐里を見る。一呼して新豐里に下り、三井の事務所に至れば、客館に請じて、午食を饗す。竹下氏と金補助員とは、溫井里さして去り、余に留まる。夜に入り、事務所の三浦猶平、今井榮吉、友滿安房、鳥海彌治の四氏と、晩食を共にす。『昨夜北山の山脊、屋外に一種の悲鳴を聞きしが、今朝起き出でゝ見れば、猪の頭二つ脚八つだけありたりとの報告に接せり』との話出づ。『北山は』と問へば、『君の下佛洞より越えられたる峠の少し西の方なり』。『何物に殺されたるにや』と問へば、『ぬくてならむ』。『ぬくてとは何ぞ』と問へば『豺狼の豺なり。恐しき猛獸にて、人をも害す。朝鮮の小兒爲めに命を失ふ者年に數百人あり』といふ話柄。『これがその昨夜の猪の肉なり』とて、猪肉饌上に現はる。一同驚喜して、ぬくての喰殘しを味へり。

日數つもりて、十月十九日の朝となりぬ。風靜まりたれど、寒氣强く、手水鉢の水こほれり。聞けば、零度を下ること八度也。一溪に數十の瀑布懸りて、瀑布の奇觀金剛山中に冠たりと聞ける九成洞の溪谷さして發足す。事務所より淵上學、貞廣康八の二氏、憲兵駐在所より宋啓星といふ補助員、外に金德龍といふ人夫來り加はりて同行五人也。人夫のみ九成洞の路を知れり。催氏は通譯也。貞廣氏は鐵砲を肩にす。獵を好みてよく熊を獲るとの事也。

猪の斃れを留めたる北山を右に仰ぎ、芝田といふ小部落より左折して、九成洞の溪流を溯る。磐行數町の長さに亘り、溪水その傾斜面をすべりて、一大長淵に入る。磐石の面に『九成洞』と大きく刻まれたるを見る。九成洞溪谷の奇、これより始まる。間もなく大瀑あり。又大瀑あり。又々大瀑あり。一同これはく〳〵と驚く。中に船潭もあり。金剛山中、船潭を見ること、これにて三度なるが、形似の上より云へば、この船潭、最も優れり。一々瀑を數へしに、十三ありき。高きは數十丈、短きも五六丈を下らず。這ふあり、辷るあり、走るあり、飛ぶあり、直下するあり、段を成すあり、瀧の變化を盡くし、又潭の變化を盡くし、峯高く、谷深く、奇巖應接に遑あらず。紅葉は一昨夜來の强風に散りたれど、松樹冬に堪へて、山に一層の趣を添ふ。斯ばかり多く溪身の瀑を成して一溪に集まることは、當に金剛山中に冠たるのみならず、天下稀有なるべしと思はる。

溪を離れて山を見れば、猪の足跡あり。貞廣氏銃を手にして、あちこちに分け入りたるが、銃聲を發せずして戻り來り、共に三興港に至る。こゝには僧住めり。港の側に三井の事務所あり。坑夫の住める家も四つ五つあり。一と先づ事務所に休息

す。こゝを今夜の宿と定めて、神仙導きして行く。三聖菴の僧尾し來る。長大にして、鬚髯白く、面渥丹の如し。三十分にして達す。北に近く上登峯を仰ぎ、南に少し離れて毘盧峯を仰ぐ。西に見ゆる山々は樹木を帶び、東に見ゆる山々は骨を露す。澁は稍傾斜を成して、數百人を容る。巨石處々に立つ。一巨石の面、岡き手水鉢の如くになりて、水溜まり、底深し。僧曰く『昔、金冬至とて、蓬田に住める人、こゝに來りて三人の仙人に逢ひ、仙樂を聽せられて一睡し、覺めて歸れば、下界は既に五十年を經過し居りて、妻子なく、家なく、田には蓬生ひたれば、蓬田とは名づけたる也。』

一六 新羅太子の墓

新羅太子の墓へとて、昨日の同勢にて、事務所を發し、神仙臺を左にして、南に峯を上り、下りて溪流に就く。昨日の九成洞溪流の上流也。瀧はこゝにもありて、數十丈の長瀑を三つばかりも見る。紅葉黄葉落ち盡くして、金剛山は冬の名の『皆骨』となる。處々に赤き實の果々たる木ありて、人の目を惹く。何かと問へば、僧氏『摩訶木なり』と答ふ。土に獸跡あるを見て、補助員『虎なり』と叫ぶ。鐵砲持參の貞廣氏勇んで四方を睥睨す。

あはれなり深山の奥に塚古りて虎より外に訪ふ人もなし

金剛山の一特色とて、箱を積み重ねたる如き巖に、今日までに多く見たるが、こゝにも箱巖ありて、而かも巖々にして衝の數多く、高く峯上に突起して天を衝けり。路絶えて、雜木の中を滑ること數町、一峯を下れば、眼界稍開けて、龍馬石と稱する巨巖溪中に立つ。近く毘盧峯を天半に見上ぐ。數十坪の地平らかになりて、小さき土饅頭あり。人夫曰く、『新羅太子の墓也』と。

新羅亡びし際、太子は世を避けて、金剛山の巖穴に潜みける也。今とても、金剛山の寺々に住める僧は三四百人もあるべし。さるに金剛山中を跋渉すること久しけれども、一つも僧の墓を見ず。『僧死したらば、何處に葬るぞ』と問へば、僧氏曰く『朝鮮の僧は墓なし。死すれば、燒いて灰にして、川流に棄つる也。』

墓前に休息し、午食し、火を焚いて暖を取る。いつの間にやら、人夫松毬を採り來り、碎いて一同に分つ。『鷲が』との聲を耳にして、眸を放てば、一隊悠然として毘盧峯の上に輪を畫く。

木枯に鷲をのして大鵬の一萬二千の峯を見下す

一七 萬物相

三聖菴に引返し、九成洞を經ずして直に新豐里に到り、又も

事務所に一夜を過して、金元龍といふ補助員に伴はれ、溫井嶺を越えて寒霞溪に下る。この路溫井里に通ず。左折して舊萬物相の巨巖に登る。この巨巖鋸齒の形を成して左右に連亙す。直に右に屹立せるは、三仙巖也。左も巖叉巖にて、新金剛に續く。後には資生洞の溪谷あり。前には萬物洞の溪谷あり。この二溪谷は、舊萬物相の巖脈を夾むで、寒霞溪に合す。何處を見ても、斷崖絕壁にて、石峯亂立し、奇々怪々の極致を盡くす。萬物相とは天地萬物の形象にて、造化萬物を創造するに際し、先づ此處に萬物の模型を造りたるなりと也。

萬物洞を下り、三仙巖を右に仰ぎつゝ寒霞溪に出でゝ、萬物亭に投ず。舊萬物相、新萬物相、三仙巖一帶の巖峯は、最後に筍の如き鬼面群となり、高さ數十丈、矗々として亭を壓して聳ちむとす。亭の主人下釜彌兵彌氏に迎へられ、寫眞師の岡本憑氏にも迎へられ、溫井里の補助員なる李圭瑞氏にも迎へられ、四日前長箭まで乘りゆきたる馬にも迎へられ、李補助員の齎らせる毎熊軍曹の朝鮮服を身に纏ひ、馬に跨りて、萬物亭の前に撮影す。

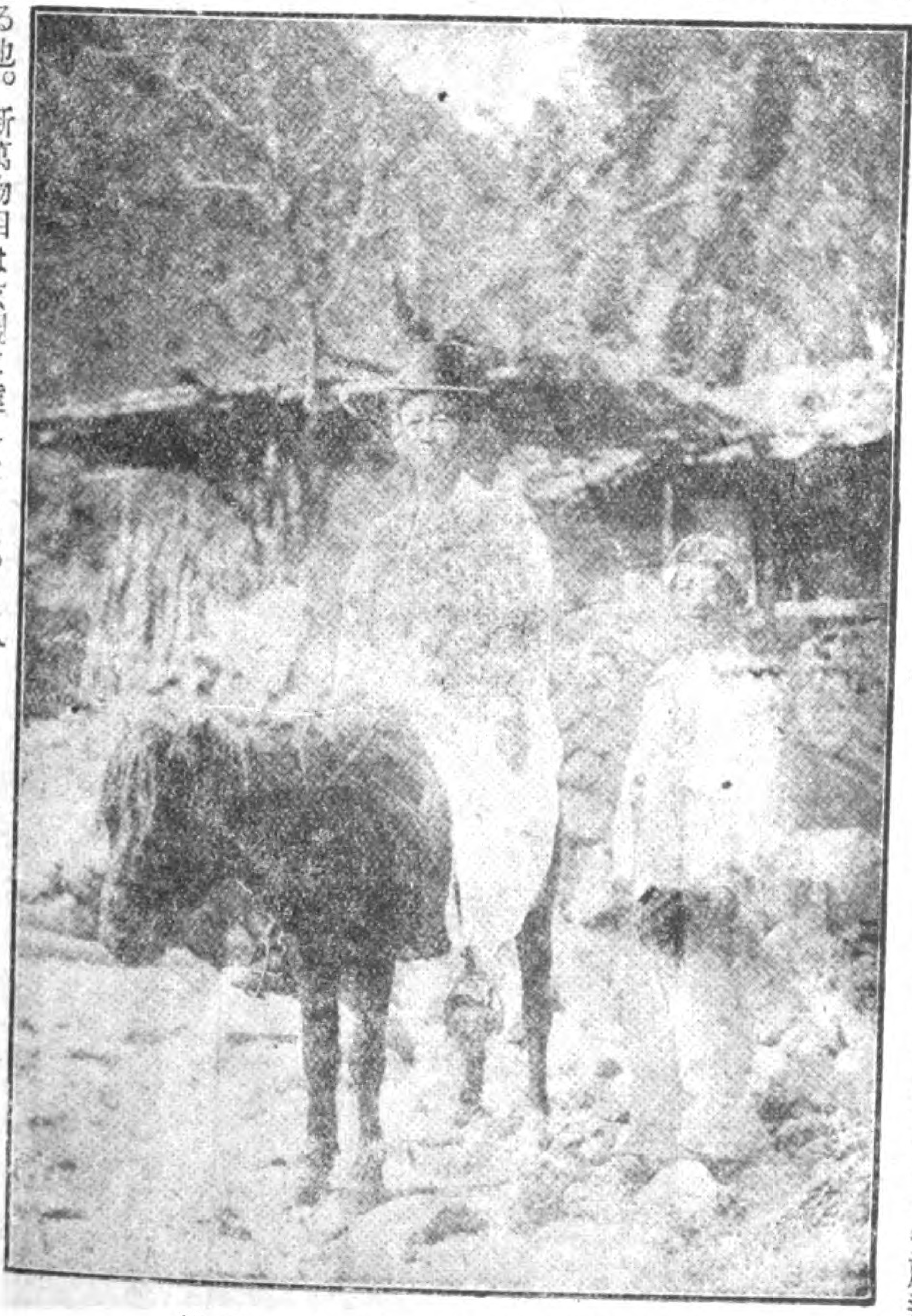
午食を終へて後、主人導を爲し、岡本氏、李金二補助員も共にして發足し、舊萬物相を左にして萬物洞の溪谷を攀ぢ、左に絕壁を遶ひ、金剛門とて、峯脈に穴明きて、自然に門を成せる處を行き拔くれば、前は絕壁也　右は一本の松に行きつまる。左に巖を傳ひて、新萬物相に至る、身は中天に在り。奇々怪々の極致を盡したる萬物相は、大に範圍を擴めたるが、なほ後は五峯山に、右は觀音連峯に、左は毘盧文珠の連峯に擁せらる。引

德富蘇峯先生題詩
平福百穗畵伯畵



(萬物相白雲)
湖田哲太郎藏

返して金剛門を下り、金補助員と別れ、北へ〳〵と絶壁を攀ぢ、峯を傳ひて奥萬物相に至る。新金剛は、脚底に落つ。勢至も、文殊も、我に朝す。毘盧峯も見え、彌勒峯も見え、日本海さへ見えて、左右また我を擁するものなし。されど五峯山のみなほ後より我を擁す。その五峯山は巖また巖、峯また峯の奥に在り。下釜氏曰く、『この奥萬物相は、余道を開きて、本年より遊人登るやうになりたるなり』と。余その奇特を賞す。且つ謂つて曰く、『舊萬物相は、云はゞ、萬物相の門に及びたる也。新萬物相は玄關に達したる也。奥萬物相は堂に上りたる也。されどこのあたりの最高峯なる五峯山に登るにあらざれば、室に入りたりとは云ふべからず。地圖の上に三角點もありて、標高四千百六十七尺と記されたれば、行かれざるにはあらざるべし』と云へば、下釜氏踴躍して曰く『さればなり、金剛山に熱心なる安藤運輸課長、昨日も見えられて、成るべく道を開きて遊覽の範圍を廣くせよと命ぜられたり。今日は日暮れむとす。明日を期して案内せむ』とて引返へす。



桂月氏朝鮮馬に乘れる寫眞

萬物亭に一宿して下釜氏に導かれ、新舊萬物相を右にして資生洞を溯る。前に五峯山を仰ぎたるが、その左の一峯更に高く見ゆ。岡本氏は『五峯山の方が高し』と云へど、下釜氏は余に荷擔す。多數の決する所とて、左の峯を目掛け、幾度も兩手に生命を支へて、漸く目的を果して見れば、や

れ失敗つたり。岡本氏の言ひし如く、五峯山が少し高し。直徑二三町なるも、峯勢一頓して傳ふべからず。下りて、上りなほさば、途にて日暮れむ。西に新豐里見え、東に溫井里見ゆるに、我れと我心を慰めて、歸路に就き、薄暮萬物亭に戻り、溫井里のホテルへとて、萬物亭を辭し、馬は李補助員に牽かせて、闇の石路を下る。二三度左の崖よりごろ〳〵小石の轉り落つる音を聞く。岡本氏曰く、『猫の歩ける也』暗さは暗し。陰風谿より起つて、物凄く思はれたるが、うれしや、月出でゝ、天地明か也。

心をば松ふく風に殘しおきて月におりゆく金剛の山

一八　叢石半島

午後八時半、六日ぶりにて、金剛山ホテルに戻り來りて、宿し居りたる安藤又三郎氏に迎へらる。萬相亭の主人も言ひし如く、氏は熱心なる金剛山の讃美者也。管理局の要路に當りて、金剛山を紹介することを力め、内外旅客の便を圖れるか、溫井里のホテルを増築し、長安寺には別にホテルを新築することに決したりと云へり。

明くれば安藤氏の去るを送り、骨休めに一日滯在して、溫泉と親めり。十月十四日の朝に至り、元山通ひの自動車は、僅々二時間にして、余を溫井里より庫底港に移しぬ。明日また元山に移さるゝことを約して、全る一日を叢石半島の遊覽に充つ。外に宿屋なしと聞き、自動車の車掌の敎へ呉れたる一料理店に投じ、舟を浮べて叢石半島を貫せむことを謀りたれど、風烈しく、浪荒れて舟は出されず。一室に籠居して、空しく怒濤の音を聞きつゝ、午食し、晩食す。主婦曰く、『去年はぼつ〳〵遊覽の客ありたるが、本年は唯御身のみ也』夜に入りて、磯部妙四郎といふ人、刺を通じて來り話す。『明朝叢石半島の上に日出を見むとす』と云へば、『そは面白し。我れ案内せむ』とて去る。料理店とは云ふものゝ、僅々二室の陋屋、主婦の外に人なし。西行法師も經驗したりけむ、余は山中の尼寺に宿りたらむが如き心地したりき。

翌早く磯部氏に迎へられて出づ。風なけれど、寒さ甚し。魔法瓶を肩にせる磯部氏より、熟柿の氣洩れ來る。『洒落なり。魔法瓶の中は茶にあらずして酒なるべし』と合點す。三十分にして達す。半島は高さ四五丈、幅數十間、長さ四五町、東に向つて海中に突出す。上は土を戴きて、草生ひたり。南方に偏して稚松叢生す。陸に接する處には喬松あり。海に接する處は、すべて斷岸となり、玄武岩柱狀を爲して立ち連る。北面は半は陸に合しても、玄武岩な俟絶えず。そこの玄武岩は横に重り、半島全部には縱に並ぶ。半島の海に臨くる處は、數十柱相合し、

半島と離れて別に孤立せるもの五つ六つあり、上より見れば、龜の甲の如し。北面にも三つ四つあり。玄武岩の奇態を遺憾なく發揮して、而かも東南に金剛の一萬二千峯を望む。東より北へかけては、日本海淼茫として天に接す。南は灣を成して、浪靜かなるが、北は怒濤岸を嚙んで、餘勢雪と散る。半島としては小なれど、玄武岩の奇觀としては偉大也。中央とおぼしき處に腰を卸す。磯部氏散點せる礎石を指して曰く、『叢石亭の跡なり』。又曰く、『世間には叢石亭として、喧傳せらるゝが、土地の者は叢石と稱し居る也』。

夜は明け放れたれど、日は未だ出です。磯部氏盃を余に屬して魔法瓶を傾けむとす。余辭す。磯部氏承知せず『貴方は酒豪に非ずや』といふ。『もとは大に飲みしが、今は全く酒を斷てりと云へば、『貴方と共に飲まむことを樂しみにして、わざ〳〵酒を持參せり。今日だけは少しにても飲まれよ』といふ。余なほ辭す。磯部氏失望せる樣にて、獨り飲む。

一天全く雲なし。海の果にも雲見えず。白みたる天は次第次第に黄味を加へ、更に赤味を加へ、黒ずみたりし海も次第々々に青くなり、鮮さを增して、天と海とは刻一刻潑剌として活動し、終に光芒一點より迸つて、うれしや團々たる大日輪、直に海の面より躍り出でたり。こゝも今は日本國なるが、日輪の出でたるあたりが神州也。萬世一系の天皇のいます處也。余は今此處に日出を見て、維新以後の大活動を聯想せざるを得ざりき。

振衣長立巨巖頭。鵲語迎晴宿霧收。一望東瀛天接水。日輪出處是皇州。

斯くて余は叢石半島の上に日出を望み、十里の外に一萬二千峯を顧みて、金剛山の遊覽を終ふ。余は天地の間に金剛山あるを感謝して止まざる者也。

最後の浮世繪師芳年

野口米次郎

形は永久に不變だがその放散する光輝の表情は一瞬間毎に違ふ——永遠性と瞬間性の偉大な表象である。彼の名は太陽——

雪晴れの青空の東をぐん〳〵登つた春の太陽はいつの間にか空の絶頂に達した。下界の人間が愚圖〳〵して居ると早や瞬間も停滯しない太陽は西へと降つて居る――間も無く日沒だ。夕燒は赤い血の如く低い西空になみ〳〵と流れる流れる。一時は燃えるやうに眞赤であつた夕燒も段々と色が褪せて行く褪せて行く――いよ〳〵日暮だ。僕の英詩の句に"The hearts of the last song and beauty, the beauty of intensity and weariness in life"一日の最後の花やかさを飾る夕燒は熱烈と倦怠の紹介である。自然は親切だ、――何んなものでも死に入る前にもう一度の光榮を盛りかへす。僕はそれを多くの場合に見た。…………

一日の行程を終つて光彩ある夕燒の幕を下ろした太陽を思ふと、僕の頭に直ぐ十七世紀の中葉に發芽して以來百幾十年と續いた浮世繪の藝術史が浮いて來る、――僕の頭の青い圓天井は年代的に並べられた浮世繪で一杯になる。拂曉のぱつと散つた光線は菱川師宣から出た。中天に君臨した太陽に比較される浮世繪師は淸長である。而して夕燒の人は誰ぞ、――一班に西洋の浮世繪研究者は國芳を以て最後の打留として居るが、僕はもう少しく延ばして大蘇芳年であるとしたい。

芳年本姓は吉岡、通稱は米次郎（僕と同名であるのも何んとなく一味の懷しさを添へる）、産れた年は天保十年で西洋の年にすると千八百三十九年である。千八百三十九年といへば英國でヴヰクトリア女王が卽位して僅に二年目、歐羅巴文藝壇で所謂『千八百三十年のロマンチシズム』が旺盛を極めんとして來た時代だ。芳年は月岡雪齋の養子となつて一家を成すに至つた。一魁齋玉櫻樓其他色々の號を持つて居る。最初に歌川國芳の門弟として畫界に入つたので初期時代の作には國芳の影響を匿くすことが出來なかつた。死んだのは明治二十五年六月九日。享年五十四。

芳年を以て浮世繪の最後の幕は降りた、――その他の浮世繪師、武内桂舟でも右田年英でも一蕙齋芳幾でも尾形月耕でもその仕事は、要するに幕が降りてから舞臺の小騷ぎに過ぎない。芳年を以て最後の幕はしづ〳〵と降りた、浮世繪の大尾を告げた、――見物人はどや〳〵と潮の如く立去る、燈火は消える、間も無く永遠の沈默と暗黑…………

僕が近頃書いた文章の斷片にこういふものがある。

一人は質問する、「浮世繪、君は何處へ行くのが目的だ」

浮世繪は答へる、「僕は何處へも行かぬ――それが僕の藝術だ。英語でいふとGoing-to-Nowhereだ。僕には明日とか將來

へ頭を向けて Somewhere へ達せんとする希望を持たない。再びいふか、僕は何處へも行かぬ、——僕の藝術は今日た即刻只今だ、僕は Spirit of Evernescence だ、消滅的流動の姿が僕の藝術の全部だ。」

人は浮世繪に「君の語る所の言葉は僕の耳には反語（アイロニー）と響く」といふ。

浮世繪は答へる、「僕の語る言葉は眞實だ。僕の藝術が Holy grail は Nowhere 以外に無い。倫敦の Nowhere を歩き廻つて The Iliad of the Metropolis を書いたはディケンスだ。僕は何處へも行かぬといふが、それは僕が行く所を知らないからで無い。僕は現實主義で瞬間の生命に生きて居る。瞬間の生命には過去も將來も無い。僕の藝術が永久に亡びないのはその生命に生きて居るからだ。」

人は浮世繪に「浮世繪君——君は……」といゝかけると、浮世繪は不愉快な顰顔を作つて、「失禮だが、僕は君の質問に對して答へることは止める。惡く思つて具れ給ふな。然し君の何處へ行くといふ目的を持つて居る藝術もあるから、それが貴問に答へるだらう、——僕は君に答へない。』

實際は浮世繪の作品中に『行先』を目的に持つた繪が少くない、否な澤山ある。豐國の役者繪の大部分はそれである。又國芳の武者繪は恐くそれである。而して又芳年の歴史繪もそれに相違無い。僕は彼等の取扱つた題材を議論する前に畫家として彼等の本質的價値を檢査せねばならぬと思ふ。又彼等が何故に斯かる題材に捕へらるるに至つたかの徑路には多分の心理的興味が含まれて居ると思ふ。勝川春章は役者繪にも又武者繪にも優秀な作品を殘した。又寫樂の藝術的名聲は役者繪一つて懸つて居る。如何な題材をも眞實な藝術とするのが藝術家の價だ。西洋では一般に二代目豐國の時代から無茶に濫用された俗悪な繪の具を光榮ある日本の浮世繪が墮落するに至つた最大原因として居る。然し天才の藝術家ならば粗末な朱や紫のなかゝら魔法を使はないと限らない、——こう考へると浮世繪の墮落は卽ち浮世繪師自身の墮落と結論して差支あるまい。彼等は何うしてそう其藝術を墮落せしめるに至つたか、——これは中々複雑な問題だ。僕は一半の罪は勿論彼等の時代精神そのものが背負ふべきであると信ずる。彼等の相手としたものは無修養でたゞもら感激的な公衆であつた。彼等は必ず無智な公衆を敎育する責任があると思はなかつた。彼等の大部分は公衆の心に適應することを上分別とさへ考へた。彼等は公衆の改造者でも敎師でも無かつた。彼等は公衆の反影たるのみであつた、——藝術家として失敗せる彼等へ生前に於ける物質的關係は何うであつたにせ

よ、豊國、國芳、芳年皆な今日から見ると失敗の人である）を取つて以て彼等の時代研究に對する生きた資料とすることが出來る理由は其處にある。僕が其點から彼等は失敗は即ち成功であるといつてもそれは決して無責任な逆說（パラドックス）で無い。大蘇芳年は豊國や國芳以上に失敗の藝術家であつたといへる。又彼は彼等以上に浮世繪最後の頁の痛ましい半面を物語つて居る。實際芳年とその時代との關係は歌麿や北齋とその時代との關係以上に遙か切實であり濃厚である。芳年の藝術的一生は實に悲しい痛恨史である、——如何に彼は不運な事情と無理解な公衆に對する勇敢な戰士であつたか。彼は怖れざる野心の所有者であつた。彼は眞に優れた多能の手腕家であつた。誰れでも彼を近年稀れに見る强健な技巧の畫人とすることを拒むことは出來ない。然し大蘇芳年は不幸の人であつた。不幸の人であつたに相違無いが僕は彼によつて浮世繪最後の幕が切つて降された事實に對して彼を祝福する。其點に於て彼は大な歷史上の人たるを失はない。僕は最後の浮世繪師として偏重に對すると同程度の興味を芳年に持つて居るものである。

重ねていふがこの芳年は不幸の人であつた、——彼は餘りに深い時代に生れた。彼は何うしてこの無慈悲な事情を開拓して一生面を創造しやうとしたか。

チャールス・リケツの歌麿論には人をして首肯せしめる評言が多い。そのなかに以下の言葉が書かれて居る、「我等は歌麿をその派の將來に完全だが危險極まる藝術の位置に置こうと思ふ。ボチセリに於ける如く藝術的衝動がそれ自身に洗錬を加へたが、また其處に一種倦怠の徵候がある。ボチセリの倦怠は感情の硬化若くは躁急の結果だが、歌麿の場合は單調な思想の聯鎖に偏向した所に歸すべきである。歐羅巴で幽婉過ぎるショオンガウエルの藝術又纖巧なツアジンゲルの藝術、共に我々をしてカと情のアルベルト・デュレルの藝術に對し用意せしめるものでは無い。しかもデュレルに彼等二人の影響を受けたものだ。それと等しく歌麿の藝術は北齋の到來に對し我々をして用意せしめない。北齋と比較すると、歌麿は原始的なると同時に頽敗的に見へる。然しボチセリ若くはメムリングの如く歌麿の藝術は誘惑的境地に降れ、彼以前に生存し又以後に顯はれた畫家が到底感知することが出來無かつた多くのものを感知して居る。この日本人には單調で且つ女性的な性情があつて形態并に色彩上洗錬の無限を傷けて居るといふ感じが、總ては多くの人をして彼を疑はしめ延いて十八世紀の日本の藝術全體を疑ふに至らしめるかも知れない。歌麿は一時代の最後に顯はれて、その時代の題材と經驗の蓄積を擧げて蕩盡して仕舞つた。」畢竟歌麿が纖

細な傳統を倒産して到達した洗錬の極致にその後の美人畫家に取つては大な重荷となつたばかりで、歌麿以外に一歩も踏出す餘地を與へられ無つたとリケツは見て居るのである。實に美人畫といふ日本の藝術の流は歌麿で以て流れつくしたものと見て大差無いのである。而してこの意見は等しく風景畫に於ける廣重にも適用されると僕は思つて居る。廣重が風景上に見出した藝術の發見と驚異が餘り偉大であつたから、人は皆な廣重の眼で自然を眺めざるを得無い譯となつた。又彼は彼と同時代の畫家をして風景畫上に於ける藝術的努力の切尖を無意識に鈍らしたに相違無い。二代目廣重として知られて居る風景畫家が大廣重の薄ぼんやりした幻影たるに過ぎなかつた理由の大部分も其處にある。然らば歌麿と廣重以後の浮世繪師(年代上の後輩でなく藝術上に於て)は何處へ行つて自分の新生面を開拓しやうとしたか? 役者繪の上でも二代目又三代目豐國の手で耕耘される所のものは悉く耕耘され盡された。歌麿廣重を先輩として産れた一勇齋國芳は不幸であつた。彼は武者繪に自己の領域を開墾し、感激的誇張で或は奏驟し或は性急な公衆の感賞心を煽らんとした。又歌麿廣重を先輩とし又國芳に對しても門人の禮を採るに至つた大蘇芳年は不幸であつた。彼は歴史繪に浮世繪の新生面を開展しやうとした。而して彼は已に墮落し終らんとする浮世繪藝術を彼が無條件で取入れた雜多な東洋的技巧の方策で救はうとした。然しそれは芳年として萬止むを得無つたのである、――遅れた時代に産れた彼はそれを唯一な賢い思慮と思つたのである。僕は滿腔の同情を芳年に捧げる。彼は不運な時代に産れた。

彼は京都の四條派へ走つて藝術を解剖的寫實から見る習慣を作つた、――然も物象の外面的態度の動きに大部分の注意を拂つたが爲めに、彼は到底藝術の創造家たることが出來なかつた。彼は心理的なバルザックで無く、潤澤な筆があつて内面から光る墨を缺いて居たロマンチシストのスコットであつた。彼の揃物として一般的に知れて居る月百姿や新形三十六怪撰を見よ。其處に物語の結末は示されて居るが決してその徑路を暗示するもので無い。其處に人物の態度の身振はあるが決してその精神的表情を思はせる何物も無い。彼自身では眞實なる藝術を摑もうとしたに相違ないが、却てそれを遠ざかるに至つた結果となつて居るやうに感ぜられる。如何に彼芳年は前賢故實を菊池容齋から學ばんとしたか。月百姿のうち『ほとゝぎすなをも雲井に上る哉』の賴政の繪(賴政は演劇的『見え』を切つて御所の段梯子の下に跪坐して居る)、或は原野の月の保昌の繪、或は又『五節の命婦』を見ると、如何に彼が容齋に背かつて高雅

なさい感傷的畫面を作ることに勉めたかゞ推察せられる。それから芳年は更に眼を轉じて南畫の山水にも走つてその簡素な描法を取入れた。月百姿のうちに『讀書の月』の子路や『赤壁の月』は所謂浮世繪衰滅時の作品で無い。月下書物を讀み乍ら歩く子路の姿は渡邊華山の人物から闊放の幾分を除いたものといふ感がある。然しこの二枚の如きは浮世繪の版畫として空前の作品で、芳年自身は或はその成功を喜んだものであるかも知れ無い。實際畫面の濃淡も可なり自由に表現せられて、空間の配合や全體的に渡つた藝術の省略も程良く出來て居ると云へる。

勿論僕はこの遲く産れ過ぎた不幸の浮世繪師大蘇芳年の生氣ある努力は多とするものであるが、果してその效果は彼の期待に添つたであらうか。僕自身の意見としては——浮世繪を主もに外面的技巧の完成から救はふとした彼は却て九大直下その衰頽を早めたとも見ることが出來る。彼が所謂浮世繪以外の諸派から學んだ幾多の技巧はその畫面を複雜ならしめたので無く、實際は單に見惡い混亂を與へたに止まつた場合が多い。彼は純な Homogenity を措いて技巧を採用したけれども、その畫面に統一性の調諧と整齊を入れることが出來なかつた。彼が古い浮世繪の時には抒情詩的な又時には敍事詩的な配色と描線から遠ざかつた結果、彼の畫面は著しく力弱いものとなつた感がある。

彼の作品の大部分は詩の領土の作者で無くて『散文』といふ新開地への移住者である、——如何にも慌しい落付かない。彼には際立つて見へる技巧上の諸性があつて、一時は『芳年風』とまで云はれて珍重がられた場合もあつたが、繊細な藝術の批評から見ると、それは自分の心の空隙を隱蔽しやうとする挑戰的嘲嗤の表情、——いはゞ歌舞伎役者が舞臺で無意味に切る『見え』以上の價値が無い、と云はねばならぬ。勿論彼の卓越した技巧は彼の感情の硬化若くは躁急をある點まで藝術化したけれども、眞實に浮世繪を救ふには精神的努力に依らねばならぬといふ點を注意しなかつた。又彼はそれに對する天賦を持たなかつた。今此處に僕の眼前に彼の一大傑作といはれて居る三枚續がある。明治十六年八月日本橋室町の滑稽堂秋山武右衛門の出版(芝櫻川町山本刀)に據つて題して『平清盛炎焼病之圖』芳年はこの繪で初めて自分の藝術を確に摑んだ實證を出した、——彼の藝術の最高潮を表現した作品と云はれて居る。如何にもこの繪は彼の藝術の長短を無遠慮に極めて露骨にさらけ出して居る。繪の中心は清盛(兩手を堅く握つて上下に振り瘦せた顏に紫紺に大な眼と開いた口の清盛は鬼界が島の俊寛に近い)で彼の恐怖を最大級で描いたものである。清盛の側に兩手を結んで祈つて居る女と心配氣に默して居る内大臣宗盛。繪の背景全部

を蔽つて並んで居る閻魔大王や鬼は或は本所押上眞盛寺所藏と聞いて居る圓山應擧の地獄變相圖の暗示から出たものかも知れない。我々はこの繪に殆ど狂的に近い動作を見て異様な印象を受けるものであるが、果してそれが眞實なる浮世繪藝術と何等の關係があるであらうか。古い浮世繪の裝飾美に取つて替はらせるに、芳年は騷々しい身振や科を以てした、――こう成ると最早や傳統的浮世繪の領域を離れた作品と云はねばならぬ。芳年は畫面に活動を入れて浮世繪の意味ある再生を期したに相違ないが、何うして藝術の衰頽を外面的から救ふことが出來やうぞ。要するに彼は新しい出產の目出度い鐘を打つたので無く、寧ろ葬式の悲しい最後の蠟燭を燃したのでかる。若しこの『平清盛炎燒病之圖』を彼の一番代表的作品だとすると、この繪こそ長い浮世繪史中記憶すべき最終の一作品と云はねばならぬ。

嗚呼大蘇芳年は畢竟自分の繩で自分の首を締めたのである、――彼が取入れた他派の技巧は浮世繪を復活せしめるには何の役にも立たなかつた。命數の將に盡んとして居た浮世繪に對し彼が何等の魔法的醫藥を盛ることが出來無つた。その實彼は浮世繪を救はふと努力して却て浮世繪を殺したものだ。

僕は悲愴なる最後の浮世繪師として彼芳年を記憶し且つ尊敬するものである。彼は過ぎた時代に產れたけれども、彼の藝術的一生は決して無益なもので無かつたと見ねばならぬ。

彼の產れた頃の歐羅巴に於ける文藝界を一瞥して見やう。はち切れさうな青春の血潮が舞臺にも書齋にも又畫室にも流れて歐洲の藝術的青年は其時代の俗物に歡喜の哄笑をあびせ掛けて閉口させた。スカーラチの藝術よりはワグネルの夫れに近い健康性の所有者なるスコットの羅曼主義を葬つて第二期に入つた藝術家は今や官能の銳感に目覺めたのである。彼等は概念的報告に對する細心な注意を捨てゝ、想像的繪畫を體現せしめることをも重要な意義と信じ從つて Local colour の藝術的價値を確定せしめるに至つた。而してその後現實主義に向つて進む藝術の本街道に歩を踏入れた。然し彼等は戰鬪無くしてこの新時代を創造したので無い、――實際彼等が古典派に對する勇ましき挑戰と突擊を考へると、肉と血で爭ふ眞實の戰爭に彷彿たる次第であつた。彼等は眞劍であつた、生眞面目でしかも熱烈であつた。又彼等はこの爭鬪に堪へる丈けの單純で旺盛な健康狀態を持つて居た。壯嚴な人生の活劇を見たユーゴ又花やかな人生の歡樂を物語つたジュマ、或は東洋趣味に又考古學に羅曼的な新發見をしたゴチュー或は又バルザック乃至メリメーの連中

に對し如何なる敬意を我々は支拂つて至當であらうか。我々は彼等の力で萎靡した人生を復活せられ藝術の新生面を展ぴろと開かれた。

眼を轉じてその時代に於ける日本を見るに、——南總里見八犬傳を終つた馬琴の後繼者にユーゴもジュマも居無かつた。その當時の日本は西洋と藝術的に沒交渉であつたが、それでも大洋の波動は山間を狹苦しく流れて居る小い川の胸にも無意識に反響するやうに、西洋の藝術的傾向と同じ一大變轉期に際して居たといふことを考へると如何にも愉快だ。然し時代の直接要求は強い若い人間を皆な政界に走らして、尊王論とか攘夷論とかに舌端の火花を散らさした。明治時代に入つても國家大變動の後仕末やら又は新時代建設の爲め中々その精神を藝術に共鳴させる譯に行かなかつた。如何なる苦痛をその頃の藝術家は堪へるべく強ゐられたであらう。橋本雅邦などが全然繪の筆を捨てゝ長屋ずまいの手内職で生命を繋いだのも其頃だ。今大蘇芳年が十年前後の藝術枯渇時代に時の出來事をあて込んで血生臭い錦繪を出して荒々しく興奮した公衆の好奇心を唆かさうとしたからとて、誰がその行爲を淸教徒的嚴肅な批評眼で非難することが出來やう。僕の手元にある西鄕戰爭の繪や『德川治蹟年間紀事』と題し伏見に敗れた幕府の武士が小舟に乘つて回陽丸に乘付けやうとする海上の三枚續や、又『天保水滸傳内藤太郎大田原に於て勢力を救ふの圖』（赤く斜に立登つた烽火の前へ瞭之傳治が血の垂れて居る生首を木隱務太郎に見せて居る）などもこの時代の作品である。勿論是等に何等の藝術的價値がある筈は無い。

何年何月のことだか明瞭で無いが芳年が年景と年晴い二人の門弟を相手に自炊生活をして居た時代に、井伊大老櫻田門外遭難圖六枚續を描いて若しこれが成功的賣行を納めることが出來ない場合には、斷然東京を後にして脫走して仕舞ふといふ決心をした。繪は出來た、——その賣行の程度を語る資料は無いが、芳年が豫期した程の成功は見なかつたに相違ない。賣れたにしても彼を夜逃げの恥辱から僅に救ひ得た程度であつたであらう。七八年前この續物が飜刻されたので僕はそれを買はふとしたが、思ひ切つ程詰らない作品であつたので買ふことは中止した。僕はその時、こんな愚作でも多少買手があつた所を見ると如何に深い印象をその頃になつても井伊遭難事件が人の心に與へて居たかゞ知れると思つたのである。

明治二十年前後から國の狀態も漸次順境に入り將來の希望と繁榮を胸に描くことが出來るやうに成つた。國の進步に對する一班人民の確信は自然に藝術を思つて來る餘裕を彼等に得せし

めた。團十郎と菊五郎と左團次の三名優を持つた舞臺藝術も再び憧憬的注意の中心點となり、假令其處に豐國時代に於ての如き浮世繪と舞臺との密接な關係は無かつたとしても、其等の名俳優と大蘇芳年との間に通しあつた藝術的同情は可なり切實なものであつたと推察せられ得る。この頃よりずつと以前明治八九年頃、芳年が描いた保昌の市原野が公衆の嗜好に投じた時團十郎は『芳年の筆意は凄し市原野』とか何んとかといふ題で一幕河新助に書かして舞臺にしたことがあつたと聞いて居る。梨園社會が美術に拂つたこういふ大な名譽を今日誰が期待することが出來やうぞ。『加賀鳶』の死神として菊五郎の成功も芳年の助言に負ふ所が多かつたといふ挿話を僕は聞いて居る、——今日音羽屋の家に芳年が菊五郎の所望で描いた糸ぽい死神のスケッチが保存されて居るに相違無い。又團十郎の活劇好み乃至寫實趣味も芳年が悉く襃賞した所のものであつた。何年のことであつたか知らぬが、團十郎が新富座で知盛を演じた時、芳年は新富座の樂屋へ毎日いつて知盛の鎧の血を出來るだけ現實的に塗つたそうであると聞いて居る。

讀者諸君は僕が芳年の作品の大部分を非藝術だと云つてのけるに躊躇しないと思ふであらう、——實際彼は多くの場合に非藝術だ。然し非藝術の間にはさまつて乾坤をぱつと貫く雷光の如き純白な藝術の小部分が彼にある。讀者諸君はそれは彼の如何なる作品かと直ぐ質問するであらう。曰く一人だけを描いた役者のポスター三枚續だ。岩倉の宗玄として描いた菊五郎——降りしきる綿のやうな雪の中で、骨ばかりの肩をさらけ出し野獸の如く爪を長く生やした宗玄は大い眉を顰め青い眼から悲劇の光を放つて居る。實にこの三枚物には藝術の Grand style がある宏大な藝術的儀容が輝いて居る、——帝王的藝術だ。こうゆふ堂々たる藝術の態度は寫樂でもそう容易に表現することが出來なかつたと僕は喜んで斷言する。又奧州安達が原ひとつ家の婆としての菊五郎の三枚續を見よ——繪の背景は眞黑でそれを拔いた夕顏、その前に起つ白髮の婆は皺だらけの左の手で出齒庖丁を固く握つて居る。更に又月下の毛剃九右衛門として彼が描いた團十郎市川三升の三枚物を見よ、——僕はこれに匹敵し得る偉大な芝居ポスターが百九十年間の浮世繪中何處にあるだらうかと思つて居る。こういふ三枚續に表現された芳年の藝術はあたりを拂つて居る。何處までもエンパイロメントを支配し切つて居る、如何にも英語でいふ Master-man の藝術だ。此等のものは明治二十三年滑稽堂秋山武右衛門の出版に懸つて居る。故に芳年が死ぬ前二三年の作品である。彼は此處に於て初めて彼自身の眞實なる藝術を發見したといへる、——然しも

う時は遲かつた。僕は前記『平淸盛炎燒病之圖』に於てゞ無く是等のポスターで芳年は一生の藝術的最高潮に達したものと確信する。

　僕は明治二十三年から五六年へ掛けて數多く舞臺の梅幸や三升を見た。僕は彼等の宛も大な動物（梅幸を麗はしい豹とすると團十郎は獅子だ）が林中を横行するやうな立派な藝術的Airを今に忘れることが出來ない。この英語の言葉は『偉大ぶる』『氣取る』『衒氣』の意味を有するが、彼等の藝術には決して觀客をパトロナイスしやうといふやうな不純な臭氣が無く、內面的人格性が音樂的に發露したものである。彼等の藝術は實に宏大な儀容の藝術であつた。非常に非良心を嫌つて無意識な行爲を絕對的に排斥した藝術だ。從つて彼等は良心的英語でいふ Conscientious の個人格であつた。實にこの意識的良心が無くて彼等の藝術のやうに其處に『宏大な儀容』があつた譯が無い。彼等の grand manner は其處から來たのだ。菊五郎でも團十郎でも皆な一種の獨裁君主（アートクラフト）であつたに相違無いが、それも Voluntas segis, suprema lex の意味で無く Judicium in concilio segis, suprema lex で藝術的智識が自然の大法の肯定を受け麗はしい氣高い意識の上に安定を持つたものと見ねばなるまい。

是等舊演劇最後の巨人は僕をして直に大蘇芳年を想はせる。上記の如き宏大な儀容の三枚物大ポスターを製作し得た芳年は必ずや團菊の如く鎖細主義を完全に離脱した良心的に大い人格の藝術家であつたであらう。團菊が嚴格な意味で最後の歌舞伎役者であつたやうに、芳年も最後の浮世繪師であつた。

　春陽三月柔かな空氣に接吻され乍ら水色青い巴里のセーヌ河畔に屋臺店張つた古本屋を漁り、偶然に珍しいメゾチントでも發見した時の心持は何に譬へることが出來やう。西洋に於ける古い繪漁りの興味と夏の凉しい晩に輕い白地の單衣をひつ掛け乍ら夜店の塵ぽい古い書物や錦繪の前に踏み込む氣分は多少たりとも其經驗の無い連中に語つた所で實際無駄だ。小十年も以前僕が錦繪蒐集に憂身をやつして居た頃、僕はある晩十二時近く人通りも少くなつた上野廣小路を歩いて、穢い古道具屋に並べてあつた芳年の美人畫三枚續を買つた。それは『今様源氏江の島兒ケ淵』彼が一魁齋時代の作品で夥しい國芳の影響を拂かれた半裸體の海人の恰好に曝露したものであつたが、彼が青年時期の緊張した藝術心の正直と愼重とに對して僕は少なからぬ敬意を彼に拂つた。畫面に塗られて居る赤（海人の腰卷や源氏と侍女の着物の上の配色）には人に嫌惡の情を煽るところがあ

る。又背景の山の線も極めて安直だ。然し北斎張りに描かれた波の間に動いて居る五名の海人（その一人は一本の白い足だけ外へ出して水中に潜つて居る）の配置に巧妙な工夫があるのを認めた。僕は彼が美人畫家としての出立は極めて有望だと喜んだ。其後僕は芳年の美人畫を蒐めたが、手にするもの悉く僕の期待を裏切るのみであつた。彼が『根津花屋敷大松樓』と題した美人入浴の三枚續も、構圖上の生氣は認められても所謂芳年式の癖性なる描線（無茶に角張つたぎくしやくした粗雜な）が眼に付いて僕の藝術心を傷付けた。

僕は月百姿の初版を蒐めた、中に『梵僧月夜受桂子』と題された祥啓でも描きそうな禪僧の繪や前記のポスターに表現されて居るやうな大膽千萬な模様美を小規模でいつた朧月夜の熊坂の一枚もある。（僕はいつやらこの『朧月夜』の熊坂を倫敦のグラフイク誌に借して復寫さしたことがあつたが、それも僕が芳年に對する微衷の證據だと云へる）然し僕がこの月百姿の揃物のなかで一番喜ぶ所の繪は『源氏夕顔巻』である、――夕顔の上品に艶麗な幽靈が薄青い雰圍氣から浮出て居る。此圖には妙に悲哀をそゝる抒情詩がある。この繪でも版に依つては隨分と詰らない出來のものもあるが、僕所藏の一枚は優秀な藝術品であると信じて居る。僕は芳年でも時には靜肅な詩境に入る場合もあつたことを私かに喜んだ。新形三十六怪撰の中には二三枚僕を喜ばせる作品が含まれて居る、――『老婆鬼腕を持去る圖』に於ける其の工合、又それに乘つて窓地に走る鬼女の顔の奇怪な表情、如何にも芳年の力強い藝術を語つて居る。僕が持つて居る彼の三枚續に、『金時のくら開き』や『護國女太平記』や又『にせ紫田舎源氏』それから『日蓮上人鵜飼の迷魂を濟度し給ふの圖』がある。僕はこの最後の日蓮上人の繪を見るといつも、若し北斎ならば何ういふ風にこの題材を取扱ふだらうかと考へないことは無いのである。芳年の三枚物中では成功的作品の一で、谷間に漲つた墨色の畫面に流れる川その川の中に起つて痩せた兩手を合せる憐れな漁師の幽靈！　一種悲痛な情を湧かせる場面である。然し其他の彼の繪に於ける如くこの三枚物にも注意せざるを得無い藝術的喧噪があるのを遺憾とする。

芳年の浮世繪を研究するものが見逃してならぬ作品は恐く明治十八年頃から二十年に掛けて出版されたであらう（根岸の直出刀）上下二枚續の揃物であらう。僕の所藏のなかに『一の谷合戰』『金太郎捕鯉魚』『八百屋お七』『平維茂戸隱山鬼女退治之圖』『清玄墮落之圖』『岩頭に起つ俗俊寛の圖』『魯智深爛醉打壞五臺山金剛神之圖』『袴垂保輔鬼童丸術競圖』や『羅生門渡邊綱鬼腕斬之圖』等がある。これ等漢字使用法の拙劣さ加減は芳

年も其他浮世繪師の大部分同様に文字の教育は不充分であつたに相違無い。魯智深と袴垂と綱の三枚は筆者の呼吸が完全に彫刻と摺に返應して（悪い意味でも又善い意味でも）所謂芳年振を無遠慮に發揮した作品である。花の入墨した魯智深の憤怒を冷然と大な口開いて嘲笑する奇怪な仁王、馬上の綱へ斜に降る壯大な暴雨と雷光との間に貪婪の威風を示す惡鬼（繪の山門の朱が褪色して作者が豫期しなかつた古色さへ出て居る）、術を使つて居る鬼童丸の周圍に飛ぶ四羽の鳥と大蛇に乗つた袴垂——何れにも歌舞伎劇的感激のクライマックスが顯はれて居る。芳年は『毛剃九右衛門』の百日鬘の毛描だけに滿三日を費やしたそうで、それを彫つた和田勇の手腕も尋常で無かつたであらう。而してこれ等の上下二枚續を彫つたものは根岸の直由とするが、これも左程和田勇に劣つたとは思はれ無い。時代につれて彫刻家も寫實に中毒されて、以前の原始的單純の潤を失つて居る。自然に繊弱に流れて古雅な動脈の味が無い。然し芳年の此等の作品を見ると繪其物と等しく彫刻も此上發達の變化が出來ぬ程度に入つて居ると思はれる。

僕は千九百十二年もずつと推詰つた頃芳年の浮世繪を抱へて倫敦に入つた。翌年に移つて早々僕は日本協會（ゼ・ジャパン・ソサエチー）の招待で『最後の浮世繪師芳年』といふ一講演をした。講演の劈頭僕は芳年の國芳門弟時代に於ける熱烈無智な西洋崇拜を語つて、『新奇でさへあれば野鄙はいつも我我の注意を第一に曳くものだといふことを知つたならば、此處に芳年が西洋藝術の秘密は Varnishing（假漆を塗る）の一點に懸つて居ると考へたからとて非難は出來ない。疑もなくそれは芳年に取つて新發見であつたに相違無い。彼はこの新案を應用して魁題百撰相を描いた。而してそれを歡迎した公衆も等しく無邪氣なものであつた。彼は上野の戰爭の繪たぞを全部ワニスで塗りつぶして西洋模擬を極端まで進めたことさへあつた』と言葉をつゞけて、暗に西洋普遍の安價な藝術の輸入が浮世繪の死を早めさせる理由の一でもあつたと仄めかした。僕の講演を司會した人は英國に於ける浮世繪研究者の第一人者エトワードストレーンジ氏であつた。所謂浮世繪の死は自然で避けることが出來ない命數であるといふ僕の言葉に彼は賛成した。僕の芳年講演は幻燈入り、色抜き構圖だけを聽衆に示したものであつたから彼に取つては九割の利益はあつた。

今この稿を書き終るに際して、僕は再び芳年の毛剃や清玄（岩倉の宗玄と書いてあるが）の大ポスターを眼前に擴げると——何處からか撥聲高い大醍醐が聞へて來るやうに感じた。略

呼こうだ！　是等の三枚物に於ける芳年の藝術は三味線情調の大薩摩に外ならない――繪の上に於ける大薩摩の表現を芳年以外誰れが紙面に漲らし得たか。一人もあるまい。芳年もまた偉大な浮世繪師であつたといふことを誰れが否定し得るか、――誰も出來まい。………

小田常胤氏の柔道改革私見を讀む

講道館四段　櫻庭武

昨春四月行はれた一高對二高の柔道爭覇戰は、延いて講道館に於いて普通行はれてをる勝負の仕方と、小田氏の教へた勝負の仕方……小田氏も講道館員の一人……との利害長短なる問題を惹起し、一時運動界並に一部社會の耳目を聳たゝしめた。余は其の試合の有樣を實見せぬが故に、兩校選手の態度について詳しく知らぬ。けれど新聞紙の傳ふるが如くんば、小田氏の教へたる二高選手は多く寢業を得意とし、相手を己が得意に陷れんため引張りこんでは寢業にうつり、足に絡みついては寢業にうつり、其有樣は觀るものをしてあまり快よき感じを得させなかつたと云ふ。そしてこの引張りこんでは寢業にうつり、足に絡みついては寢業にうつる其の方法に對して新聞紙並びに一部の人が、或る特殊の名稱を與へた。そのものは手段の如何を選ばず形式上の勝さへ得ればそれでよいものだと云ふことが暗示されてをつた。もし果して然りとせば、小田氏はニーチェの徒であつて更らに一層甚だしきものであると思ふた。しかし前述の如く余は試合の有樣を實見せず、且つ嘉納師範自ら批評について辯ずる所あつた故に、之に對して批評を加ふるが如き態度に出でず、只だ一人胸奥に我等柔道家のとるべき立場について考へたのみであつた。其後半載の間、我が柔道界は何等の波瀾なく、柔道の子は孜々として稽古に修養にいそしんだ。偶然年暮るゝに乘んとして小田氏は柔道改革の旗を翻へし、中央公論によりて其の所見を公表した。氏は自らを以つて柔道界のルーテルの如く認識してるらしい。乃公起たずんば此柔道を如何にせんとの意氣込を持つてる樣に見える。

自分は此問題について率直に意見を發表すると云ふことは、眞に柔道を愛する自分としての義務であると確信する
と云ひ
兎に角此等の明白なる客觀的事實即ち皮相形式であり、抑壓拘束である此大悲劇に對し、先覺者となりて努力し、所謂柔道修業者の胸中に蟠る或る種の不滿と憤怒とを率直に叫び出したものを見ないのは實に遺憾であると言はねばならぬ。
と述べてゐるのでも氏の意氣込の程が察せられる。かくの如き熱血溢るゝ男子の、我が柔道界にあるのは吾人のまことに力强く感ずる所である。けれど其の公表した意見に對しては遺憾ながら賛意を表しかねる。どうしても正しいものとは受取れぬのである。余は元來雜をとつて天下に意見を述べ得る程の文あるものでない。又た口によりて己が說を萬人に傳へ得る辯あるものでもない。しかし小田氏の如く誤れる考を正なりと固く信じ、之が宣傳に熱血を揮ふものを見ては到底默視傍觀することは出來ない。之れ敢へて禿筆を呵して本文を草した所以である。

先づ第一に、小田氏の意見を大體紹介しよう。……實は氏の意見はそんなに秩序あり、まとまつたものではない……氏は先づ柔道の目的を論じて勝負にありとし、柔道は勝たんがために修練するもので、之に向つて道を說き敎を論ずることは迂遠であるとした。次に柔道は今日の狀態より更らに改良發明する所がなければならぬ、しかるに現在はかくすることを許さぬ。少くとも發明工夫する者に對して、壓迫を加ふると云ふ樣な口吻を洩らしてをる。第三に、現在修業者は何れも不滿と不安に脅やかされてをる。之れ柔道本來の目的を忘れて、畸形に入つた結果だと云ひ、嘉納師範は之を默視しをる、故に近視眼なりと叫んでをる。第四に講道館に閥があつて各自を擁護せんとし、ために修業者の昇段に不公平があり、それが引いて柔道を害ふこと大であると言ひ、第五に以上の理由により各自覺醒し、以つて柔道を改造せよと述べ、最後に改造の具體的實施案として次の二ケ條を提出してをる。

第一、講道館が與ふる階級に年限を付し、或る時期の間相當の實力を維持し得ざる場合は、其階級を引下げ、又は或る特別なる名目を與へて柔道圈外に陶汰する事、

第二、審判規定を改正して、其勝負は正々堂々と相對せしめ、勝負者各自の其得意の技を封ぜぬ事、

抑も吾等若き者の惱は、常に自覺せる生を持續せんとするにある。自覺せる生とは何ぞ。己が携はる仕事が人類全體の福祉を增進するに寄與するものであり、自分の心身は他の何の仕事

をなすよりも、それに携はることが最も適當であるとの確信の下に、孜々として努むることと之れである。己が生に空虚を感じ、不安を感ずるのは自覺してをらぬからである。自覺せる生を營む大前提として、人生の眞意義はかくなりとの理解……信念……を要する。吾人のすべての行動が價値ありや否やは、こゝに根據して判斷される。柔道の目的、價値と云ふことの判斷もこゝまで溯らなければならぬ。然らざれば其見解が狹少に陷り、往々にして狹少なる部面のみを高潮し、全體の眞理を失ふ虞がある。人生の眞意義即ち最高理想を論ずることは、此の文においては餘事である。余は只だその結論だけを述べる。曰く Human nature の自由なる發展にあると。即ち吾人の天性を自由に發展せしめ、吾人の生命を完全に發達せしむるにある。すべての行動の根據は、こゝにあらねばならぬ。柔道の理想(目的)もこゝにあることは勿論である。何んでも勝さへすればよいとの誤つた考も、實はこゝに胚胎する。天性の自由なる發展、生命の完全なる發達は一代にしてよく達し得らるべきでない。この理想が身より身に、心より心に傳はつて進化しつゝあるものである。吾人の行動が此理想を達せんためになさるべきは本よりであると同時に、これに抵觸するが如きことをなすを許さぬ。たとへ明らかに胸中に意識してをらなくとも、磁針が自ら兩極を指し、嬰兒が自然に母を慕ふ如く、大局から見る時吾人の行動は之に向つて進んでをる。そして之に背くものをいみ嫌ふ。これ人間の本性に潜みをるものゝ嚴かなる命令、切なる要求である。學者は之を名づけて、道德的心性と呼んでをる。このものは吾人の胸中にあつて太陽の如く輝き、神の如く尊嚴である。我が大和民族の精華たる武士道は、實に此の道德的心性が環境に順應し、或る形式をとつて表現したものに他ならぬ。故に吾人の行動は武士道によつて律して行つて、大體理想に背くものでない。只だ當時の武士社會に適應して生じ、且つ律したものなるが故に現代に適合せぬ所あるかも知れぬ。かゝる點は本より改むべきである。否な吾人の本性に聞き武士道の缺陷を改め行くことは、ますます之を發達せしむる所以の道である。

幸にして我が柔道は、この民族の精華たる武士道を產出するに、與つて力のあつた光榮を有してをる。之と同時に武士道によつて大いに其の内容、形式を尊嚴にせられてをる。即ち本質上柔道は、武士道を產出せしむるについて大なる可能性あるのみならず、其の形式内容は大いに武士道化されてをるのである。故に之を學ぶものは單に勝負の技術のみならず、武士道をも學び得るのである。且つ又柔道は人生の理想を達する一方法

なるが故に、どうしても武士道的でなければならぬ。之れその本質上の長所より見ても當然のことゝである。柔道の貴い所もこゝにあり、柔道を學ぶものに對し極力武士道を鼓吹する所もこゝにある。本より小田氏の云ふ如く、柔道一ケの目的は勝つと云ふことにある。之には本より贊成である。其理由は前に述べたる人生の理想を達する一方法なりとの故を以つて。故に同時に Human nature の發展に妨げある勝ち方であつてはならぬことも勿論である。武士道に從つた勝でなければならぬ。良心の非難を受けるものであつてはならぬ。卽ち柔道の目的とする勝は人生の理想に合致し、之を助長せしむるものでなければならぬ。之れに反するものは惡である。此所の點について小田氏は、取返へしのつかぬ誤りに陷つてをる。之れ根本的の誤りである。それは氏が柔道の目的を勝つと云ふことの上に置き、それにのみ限をつけて大局を見なかつたが故に、理想に抵觸してまで勝つた方がよいと云ふ樣になつたからである。其の思想は次の意味の言を以つて述べてをる。

武士道は所謂島國的人種根性と、武術の修練によつて得た或る精神作用とが融合醇化し、意識せずして出來た武術勝負と云ふ目的以外の贅事にして高價なる產物である。故に武術の一なる柔道も亦眞の目的は勝負上に立脚せねばならぬ。然るにこの修練によつて無意識に得らるゝ身體の發育、精神の修養と言ふ如き第二義的要素と武術勝負術の發達とを同一品位の價値あるものとして取扱ふことは、其副產物をあまりに過重にし積りたりと言ふべきで柔道本來の目的はどうしても勝負の上にある。

之を以つて氏の武士道を以つて武術勝負術以下に見ることが明らかであらう。柔道の勝と云ふことをあまりに狹くとりたる結果。其の勝をして人生の理想に合致し助長せしむべく補導を示す武士道を、武術勝負術以下に見たのである。勝てばよい。勝てばよい。道德など鹿爪らしいことは、眞の柔道家の重視する所でない。勝てば官軍、敗くれば賊である。勝さへすれば足利尊氏となるも厭はぬと云ふ口吻である。道德は勝負術以上のものなるを氏は知らぬ。氏は破邪顯正の劍の意味を知らぬものである。こゝを熟々考へるがよい。柔道で勝負術を練ることは結局破邪顯正のためでないか。手段は目的の中に含まれる。手段たる柔道は、其の目的が大目的たる人生の理想發展と云ふ中に含まれなければならぬ。而して理想の實現は道德的生活をすることによりてのみ達せらるゝ以上、柔道に於いて道德を勝負術以上に見ることが何の不可があらう。之を高唱することは遠大なる眼識を持つた人のなすべき當然のことでないか。

其の論據には、勝負以外に勝負を論じて何程の人氣と價値を博し得たものがあるか。宗像五段の著「柔道」の如きは教育家の弊なる總てを徒らに道德的感情に支配された結果、諄々として武術として必要なき順道を云々し、之を讀了せるものをして呆然として其論旨の那邊にあるやを捕捉するに苦しましめた。鈴木初段の「柔道眞髓」又全篇通讀して其の精深透徹の卓論に驚かされつゝ何等得たるものありや。其結論に曰く、

柔道は禪と一致す云々。然り禪は森羅萬象なり獨り柔道にのみ一致するものでない。又一種の滑稽なりである。形式以上に向上せしめて柔道の價値を云々したものは皆斯ふした結論に到達する云々、

道德を云々するを教育家の弊と云ふ。順道は勝を武術に必要なきものと云ふ。禪と一致すると云へることを以つて、一種の滑稽と云ふ。氏は奇矯の言を弄して他を煽動するものか、或は道德的生活の意味を知らぬものである。之れで果して誤らざる勝を得るであらうか。昨春四月與へられた、氏の勝負法についての名稱が一種不快の印象を殘したのも今更ら尤もと思ひ合はされる。

氏の考はまだ周到でない。之れは武士道と武術勝負の關係について論じてる所で窺はれる。成る程武士道が其形體を具備したのは、大いに勝負の刺戟に負ふ所があつた。しかし之れは生れ出でた歷史である。生れ出でたる武士道は勝負を規範するに至る。氏はこゝを知らぬ。故に武士道を以つて第二義のものとした。柔道の勝をして眞に意義あらしむる武士道が、どうして勝負術以下に墮するであらうか。柔道は一手段である。その勝負術を如何に重視せばとて、人的生活を富ましむる唯一無二の道德をまでそれより輕んずることは果して正當であらうか。人生の眞意義を實現せんがためにこそ柔道も必要であれ。もしその柔道が本來の目的を忘れて單に勝負上の勝のみに拘泥し、道德を輕んずるに於いては、それこそ世に存在する價値ないと云はねばならぬ。小田氏は

勝たんがための柔道ならずば世に何の柔道存在すべきや。柔道に向つて此以上更らに何物かを說くとき、市井の賣卜者が大極を說き陰陽を講ずると一般實力なき傳導者として憐れむこと切なるものである。

と云ふてをるが、之れこそ憐れむこと切なる言である。柔道に向つて之れ以上何物かを說くとは、前文から推して道德を指してをることが明らかである。こゝの誤つてることを明白にしよう。抑々も吾人が眞劍本氣になつたときには、何等飾らず偽らざる己が表はれる。平生修養あるものは、其の品位高き眞人の

方面が表はれ、修養なく不道德なるものは、其の品位なき惡人の方面が表はれる。之れ思惟して表はすのでなくして、思はず知らず表はすのである。六尺の身が即ち肉體にあらずして、世間で云ふ所謂本性（余の前に云へる本性と異なり）の象徵になつてしまふのである。柔道の勝負に於いて眞劍本氣になつた場合も、自然に其人の眞價が表れる。平素修養なき者が手段の如何を選ばず、勝たうとするのは偶々彼の本性の發揮である。かかる者は、道德的心性の光を闇まし理想の發展に妨げある勝方をして省みない。非武士道的の勝方をして恬として恥ぢぬ。否な實は非武士道的だか、道德的心性の光を暗ましてゐるのか自分には分らぬのかも知れぬ。まことに憫然の至りと云はねばならぬ。無事修養と云ふ言は、こゝに於いて重大なる意味を持つてくる。無事なる時にあたりて修養し、人間の天性を發展せしむるにつとめつゝある人ならば、眞劍本氣の場合にあたつて自然に之が發露し、眞に人間らしい所が見出されるであらう。柔道の如き眞劍本氣になるに向つて威力あるものが、惡人の手に用ひられたらそれこそ狂者に刄物を持たせたより、尚ほ危險になつてしまふ。柔道の勝負の氣合を以つて國政にあたらば以つて大政事家たるを得べく、外交にあたれば以つて名外交官たるを得べく、以つて軍人たれば忠勇無双なるべしとは、無事修養して眞の人間になりをる人について云ふことである　勝負の氣合それは非常に尊い。吾人もし平素に於いて修養しつゝありとせば、柔道勝負なる眞面目なる時に至つて、この六尺の肉塊を直ちに天性發展の象徵となすことは難事であるまい。此時、此身は眞と云はゞ即ち眞、善と云はゞ即ち善、美と云はゞ即ち美の當體となり了してをるのだ。然らずして小田氏の如く云ふならば、柔道　佛作つて魂を入れぬ誹を免れ得ない。闇打をなし、種ケ島を持ち出すに類する卑劣漢の輩出するは明々白々である。柔道家が人格の修養、品性の陶冶等道德的方面を極力云ふ理由はこゝにある。要するに小田氏は其見解が狹少である。根本に於いて毫厘、眞に毫厘の至らぬところがある。しかもこの毫厘の隔たりが、如何なる力を以つてしても遂に踰ゆべからさる溝渠を作つた。氏よ、根本に於ける毫厘の隔たりを突破せよ。無明の暗忽ち晴れて、眞如の月の影皓々たるを見るであらう。縱横自在、活達無凝の大地は期せずして現前せん。氏はまた

近頃柔道を目して攻擊防禦に重きを置くは非なりとして嗤笑するものがある。

とて之を攻擊してをる。或る一部の間には、そんな人もあるか知らぬ。しかし之れは權威あるものゝ言でない。雜誌「柔道」の第一卷第二號にある柔道とは何ぞやと云ふ所を見よ。

柔道の修業は、攻擊防禦の練習に由つて身體精神を鍛錬修養し、斯道の神髄を體得することである。さうして是によりて已を完成し世を補益するが柔道修業の究竟の目的である。

と。究竟の目的を達せんがために、攻擊防禦の練習せよと云ふことは明である。最高權威たる嘉納師範の言の右の如きが見さるや。改革と云ふ重大なる問題を提げて、世間に認めもされない言を其の對象とすることは餘りに輕卒である。現在の柔道修業者の抱ける不安、不滿について云ふてる所は改革の理由にならぬ。覺醒せしむるための慨嘆の聲である。之れは誰しも心あるもの丶賛成する所である。氏はまた柔道を論ずることから脫線して、柔道家の或る人の悪口を云々してをる。しかもそれはかへつて藪蛇に終つた。

武士は食はずも高楊枝などいふは其意氣は壯とすべきも畢竟負惜である。實力なきに他の目的外の價値を云々する柔道家が一かどの哲學者らしき顏をするに同じだ。講道館柔道修業者にして眞に實力あるものは負惜みを云はず、哲學者らしき顏もしない。貴下は蠻的なるべき柔道家が哲學者らしき顏をするのを見たら、此人は必ず其實力なきものと思ふて多くの場合間違はないのである

と。何たる誤つた言であらう。問ふに落ちず語るに落るとはこのことか。遺憾なく氏の缺點を暴露してしまつた感がある。柔道本來の目的が前述の如き以上、之を修業するものが、淺い深いにかゝわらず一種の哲學的見解を有するに至り、且つ之を以つて柔道に結びつけてその價値を向上せしめんとすることは當然のことである。蠻的なるべき柔道家と云ふが之れ全く柔道の何たるかを知らざるもの丶言である。吾人は不敏にして人生の理想開發に向ひ大いに貢獻すべき柔道を學びながら、未だ至人の域に達せぬ。けれども自ら蠻的を以つて任ぜんがために之を學ぶものでない。哲學者らしい顏とはどんなものか知らぬが、柔道を學んだものは少くとも人間らしくなつてくるのが當然の歸結であらねばならぬ。然らずして蠻的になるならば、之れ[illegible]の業である。蠻的なれと主張する小田氏はこゝらに考をめぐらすべきである。氏は又

元來柔道は是までの或る因襲の如く一人之が發明に任じ、他の來りて以つて容喙するを許さぬと云ふことのあるべき筈はない

と云ひ

此等の人は一面新らしき發明に對してこれを輕蔑しつゝ一面に其の存在を恐怖しつゝあるは事實だ

とて恰かも柔道界においては、新らたたる發明工夫を許さぬ如

き口吻を洩らしてゐる。之れは小田氏が嘉納師範並びに高段者等に直接面談し、其の抱負を聞いたことないから起つた誤りであらう。師範並びに我等の直接教へを受けたる高段者は、一人も小田氏の云ふ如き人はない。師範は我等を其の膝下に集め、温顔を以つて更らに一層よき業を發明せよ。攻撃防禦の方法は從前通りのものばかりである筈はない。必らずや更らによき、人の知らざるものがあらう。人格の修養、品性の陶冶は本よりのことであるが、之等未墾の地を開拓しますます柔道を進化せしむることが若き人の責任であると。余等は實に此の趣旨を體して修業しつゝあるものである。我等の直接教を受けたる高段者も、常に工夫せよ發明せよと教へられた。小田氏はよく師範並びに高段者の門を叩たいて、腹蔵なき意見を交換する必要がなからうか。

昇段については、余は小田氏の云ふ如き事實を知らぬ。又閥族思想など、云ふことも知らぬ。しかしもしあるとしたならば聲を大にして其の非を攻むべきである。然らざれば柔道の發達に障害を及ぼし、自然小田氏の言ふ如きことになるからである。最後の二ケ條、即ち氏自ら稱して改正實施案なりとするものは、これを喋々論じた所の結論であると言ふてをるが、實は氏の全文の何處にも其の理由を見出し得ない。とにかく講道館柔道發展政策とも云ふべきものであらう。第一條の段を下げ、又は柔道圏外に去らしむるとは果して策の當を得たるものであらうか。元來階級は、柔道の目的それ自身でない。之によつて修業者を奨勵し、修業の程度を明らかにし、以つて進むべき方向を指示するものである。氏は實力の低下を云々するが、その實力の意味がはつきりしない。單に歩合だけのことか、又は歩合と技と及び柔道的精神との總合を云ふものなるか明らかでない。しかし余は後者を以つて實力の意味に解したい。實力を後者の意味に解するとき、その三要素の何れが最も貴いものであるか、何れが最も人生に效あるものであるかを見るを要する。しかして之は前に論じた如く精神であるのは明らかである。吾人は老年にいたれば、歩合、技等は低下するを免れぬ。けれども精神はますます立派になつて行くものと見て、大體に於いて誤りはない。現に嘉納師範も六段以上は、稽古着を着て稽古せんでも柔道に於いて進境を示すものであると云はれるのを見ても、精神の方面に最も重きを置かれ、且つ精神の進んでやまざるものなることを認めてをられることが窺はれる。六段迄は歩合を中心とすと云はれてをるのは、方便の又た方便である。小乘に過ぎない。もし實力を歩合又は技の意味にのみ解し、昇段方針も單にそこにあるものならば、氏の云ふ如く實力の低下した

るとき同時に段を下げるのに何等の不思議はない。六段以上は稽古着を着て稽古せずとも進歩すると云ふ大乘を根本に置いたとき、歩合や技の低下を以つて直ちに其人に於ける柔道的價値の低下と認め、段を下げ又は圏外に去らしむるは果して當を得たものであらうか。又た別の方面から論じて、高段者が其の歩合又は技の衰へたるを以つて後進者に與ふる害が甚大であるとするならば、彼等は進んで段を還へし又は圏外に退くのが當然のことだらう。しかし吾人は未だ往時之れに相當する歩合と技と精神的修養ありて其の階級を授けられたる人が、歩合、技等の低下したがために、後進者の修業に害を與へたのを見たことはない。否な後進者は彼等が現在稽古せずとも、斯道の先進として之を尊敬しその指導により修業しつゝあるものである。

彼等に高き階級あることは、かへつて後進者の益にこそなれ害はないのである。之等の理由により余は階級を低下し、又は圏外に去らしむるに反對するものである。但し人格の惡人化したるものは此限りにあらざるは本よりである。第二條は最ものことである。現在講道館に於いても何等得意の技を封ずる所はない。正々堂々と戰へと云ふてをる。小田氏がかゝる案を出すのは、かへつて贅事である。もし氏の言ふことが次の意味であるとするならば、氏の考は誤つてをる。即ち寢業の得意なものが己れの得意に敵を引入れんため、相手の姿勢如何にかゝはらず仰臥し、敵に攻撃を加へざるまゝ時間を徒費するときに、審判者は彼の意志を制して立つて戰へと宣する。之を目して得意の技を封じたとするならば、それは正當の見解でない。元來試合は雌雄を決せんために行はれるのである。彼れ勝つか、我れ勝つかの眞面目なる問題である。この眞面目があればこそ武士道產出の大刺戟になり得たのである。本より戰鬪にあらざるが故に、敵を殺傷することはないが、精神はそこにあらねばならぬ。然らずんば柔道の長所、精髓は根底に動搖を來すを免れぬ。眞に眞面目に雌雄を決せんとせば、相手を攻擊しまた防禦しなければならぬ。相手が立つてるのに、自分は仰臥し而して何等の攻擊を加へず時間を空費するは試合の精神でない。敵を倒さんとするものでない。破邪顯正の意味を知らざるものである。この時に審判者が立つて戰へと宣するのに何の不思議があらうか。けだし立つて戰へと云ふのは、昨年六月號の柔道に嘉納師範が述べられた如く、寢業は立業に比し價値少きが故である。況んや最初より仰臥するをや。

更に尙右の二ケ條は、氏が何等の理由を示してゐない。故に余の論も前述の理由の下に、之を不可なりとしたまでゝある。

最後に小田氏に對し大いに遺憾を感ずる點を申さう。それは、

氏が果して師弟の道を心得てをるかと云ふことである。古の弟子は、三尺後に下つて師を蔭を踏まずと云ふた。之れが眞に武道を學ぶものゝ態度である。然るに何事ぞ、氏は師範の宏大なる恩惠の下に、しかも四段に至るまで修業しながら、師範を目して近視眼なりと云ふ。しかして近視眼なりと云ふ理由は、氏自身に於いて已に獨斷的なりとする程薄弱なるものなるに至つてをや。氏は今迄柔道を學んで。ついにかくの如く非武士道的になり終つたのか。あゝ之れ柔道の罪か、はたまた氏の柔道に對する根本的誤りの生ぜしめた罪か。同じロッキー山上の雨、一は太平洋に注ぎ一は太西洋に入る。眞に戒心すべきことである。

今や五ケ年に亙つた世界の大戰亂も、狂暴なる獨逸の屈伏によつて吾等は再び平和の惠に浴するに至つた。單に戰爭のみの勝負術を云ふならば、彼は遙に聯合國の上手である。しかもかかることは遂に正義人道の敵でなかつた。吾人の進むべき道は一點の疑を入れず明白に啓示された。吾が柔道に於いても、單なる勝と云ふことの上に何物かあらねばならぬことは明瞭であらう。

我が國の講和全權委員牧野男一行は、昨日天洋丸に乘じて門出の一歩を踏み出した。ウェルサイユ會議の結果、世界の大局が如何に變化するかは未だ分らぬ。けれども今次戰爭の反動として、人道主義なる思想世界を風靡し、其結果軍備の制限等が問題になるのは見え透えてをる。戰亂に暴らされた歐洲各國は、其の創傷を癒せんため、爭ふて東洋の天地に飛躍するであらう。此時にあたり我國民は如何なる態度をとらねばならぬか。軍備制限と云ふ。しかし何時人道を破壊せんとする惡魔の表れぬでもない。かゝる時、國民擧つて彼を膺懲する覺悟を要する。柔道の本質上此方面に貢献すべきは、今次北米合衆國が二百萬の軍人を歐洲の地に送り得た重なる源因が何處にありしかを研究するものゝ首肯し得る所であらう、現役軍人を増員せしむる能はざるために、在郷軍人制度を作つた田中陸相の意を徹底せしむるとき當然そこに至るでなからうか。平和の戰爭たる經濟戰に於いても、通商貿易又は種々の業務に携はる人の身心如何と云ふことが至大の關係を持つてをる。之等の人の身心を健全ならしめ、能率を増進せしむることに柔道が寄與する所大なるは亦た明らかである。人道主義なる健全なる思想も、柔道の眞意義を解し之を正當に學ぶものゝ當然到達する思想である。我等柔道家は、世界人類永遠の福祉のため貢献する所大なる可能性を有する柔道を、何等不安を感ず何等不滿を感ぜず孜々として修練すべきである。覺醒せよ柔道家、起へよ柔道家、

卿等の仕事やまことによし、卿等の仕務やまことに重し。之を思はずして小田氏の如く單に勝負のみを見るならば、眼界狹少に失して眞の柔道を害ふに至るであらう、源泉一掬の水、之を純ならしめよ、之を淸ならしめよ。

終りにのぞみ特に一言する、小田氏は柔道の勝負に對し猛烈なる研究心を有し、熱誠なる稽古をしてをる人である。そして柔道現在の狀態に慊らずして、之を改良進步せしめんとの至情を有してをる。余は其の至情に對し、研究、稽古に對し尊敬の念を禁ずる能はぬ。只だその意見に對して到底一致しかねる。希くは氏の正當の見地に立ち歸り、燃ゆるが如き熱血を眞の柔道のために濺がれんことを。

大正七年十二月十一日稿

人形美

笹川臨風

寬政四年の著にかゝる寬保延享江府風俗志を見ると、「三月雛祭も今の如く、結構なる內裏雛は甚少き事なり、凡七八寸の次郎左衛門雛、本裝束の內裏は町には甚だ稀なり、多くは四五寸位の傾城の立人形、汐汲猩々の人形抔にて、其內下りの赤塗の練人形馬辨慶抔を並べ、蛤貝の膳具抔にて、挽椀持たる町人は、漸々指折て數へる程の事なり、雛の敷物も多くは更紗染の木綿或は風呂敷樣にて濟せし事なり、赤毛氈抔は餘程富貴分限の人の雛に用ひし事なり」とあるが勿論雛祭の盛になつたのは、江戶晩年のことに相違ない。けれど馬辨慶などを雛祭に並べたのは、五月節句とちやんぽんの氣味があつて、當時の簡便さが思はれて可笑しい。猶寶曆現來集を見ると、雛人形賣りのことを記して、「明和安永の始りでは、二月中旬より、乘物ほかい雛の道具と呼で、葛籠の兩掛にして賣來るなり、多くはおやま人形とて、丈け四五寸より八九寸に至り、汐汲或は石橋などの立たる人形、尤も禿人形、是らも持步きしが、價至て下直にて、三十二文位より八九十文を限り賣來る、是にて懸菖節句使に祝ひ遣し濟たるもの、其頃は禿人形も、價二匁位より下のものにて、尤も錦上下着などと云ふはなく、皆縮緬衣裝に縫など

あり、今に田舍には此おやま人形と云ひ多く見えける、其後に至り五人囃子裸人形は天明始の頃より作り出して、以前の雛賣は來らず」とありて猶雛菓子賣のことをも載せてゐる。雛賣は一寸風流の趣があるではないか。紅繪賣だの、元朝の扇賣だのと、今日では耳新しい行商が江戸時代には隨分あつた。枝豆賣や辻占賣でさへ凋落した今日であるから、雛賣などの話を聞くと、全く隔世の感が起る。尤も雛の賣店として十軒店などは相應に古くから繁昌したものであるが、又一方には右樣な行商さへもあつたのである。

內裏雛は甚だ稀に、汐汲石橋、おやま人形を飾つたとあるところを見ると、此等はいづれも雛の代理をつとめたものと思はれる。次郎左衛門雛は享保の製であるが、享和の頃には古今雛がもてはやされた。其他吉野雛だの、深草雛だの、稚兒雛だの、豆雛だのと其形像に依りて名を冠したものも多く、鴻の巣雛、絲谷雛、菜の花雛だのと云ふやうな鄕土風味を帶びたものも少からずある。

人形を玩ぶことは、既に藤原時代の金殿玉樓裡に於て行はれてゐたが後世のやうな奇巧なものはなかつた。其の漸くに觀るべきものは、室町の末期頃からでもあらうか。桃山の豪華は此點にまで及んで、可成巧妙なものを提供してゐる。けれど人形史上に觀るべきものの、德川期であることは云ふまでもない。操り人形あり、のろま人形あり、からくり人形あり、笠人形、碁盤人形などと、人形遣ひが流行して來ては、傀儡子の發達とともに、人形製作者も亦發達せざるを得ない。從つて奇玩の人形も亦其巧を爭ふに至つた。

どうしても人形中での冠冕はと云ふと、嵯峨人形に指を屈せねばなるまい。此點にかけては同好者の誰しも異論はない。芥子嵯峨の如き一二寸の細微なものもあるが、其大さは手頃で、七八寸位を極度とする。木彫で、彩色を施したのは如何にも美しい。金泥の盛上げは絢爛を極めて華やかである。名もゆかしの嵯峨に取つたのは、如何なる起源があらうか。角倉了以の創意になつたからだとの說もあるが、之は確たる證據がない。元祿前後の製作と見れば大差はあるまい。浮世繪を人形としたと思へば先づ間違はない。菱川宮川あたりのところでもあらうか。時勢粧を寫したものを重として、巧に彫まれ、美しく彩どられてゐる。尤も近年も之を模造するものゝないではなが、古雅を缺くのは又已むを得ぬと云ふべきであらうか。木彫と云ふ點から云ふと、奈良人形は、今に猶奈良の名物となつてゐるが、多くは能人形雛達磨鹿の類であつて、時勢粧を寫したものは殆どない。もとは春日若宮の祭典用具若くは田樂法師

の笠の飾りを彫刻したものであつたが、岡野保伯と云ふ名工が出るに及んで、彫法を一變して、今日の奈良人形の如きものを創作したと云ふことである。幕末から明治初年の頃に森川杜園が出で、刀法の妙と設色の美と相待つて、奈良人形は頓に其聲價を昂めた。岡野保久も亦奈良彫工として名手の稱を博してゐる。上林牛加が創成した宇治の茶摘人形は宇治の茶の樹を用ひて彫んだもので、所から野趣が横溢して雅致がある。

一體京と云ひ、奈良と云ひ、宇治と云ひ、地は自然美に富で、背景に多趣多様の歴史がある。嵯峨野の露は平語の涙を宿して優婉の情致が限りない。嵯峨野を分け往くと、往生院の看經、小督の彈琴、横笛の情話は綿々として今に其餘韻を傳へてゐるやに感ぜらる。春は大堰川に落花の香を浮べて、小倉山荘の秋は常へに濃やかである。萬竿の修竹を分けては、野の宮の小柴垣に古拙を掬すべく、ころ〳〵と庇に落ちる柿の實はよしなくとも、落柿舎には俳趣が深い。此名を負うた嵯峨人形は、時勢粧を寫しても、金碧の美はあつても、どこやらに優しみがあつて、盡きざる風韻情趣がある。千餘年の古都なる奈良は美術の郷であり、高雅の地である。此郷に生れ出た奈良人形が古美術好風土に負ふ所の少からぬは固より疑を容れぬ。杜園の如きは好で古彫刻の逸品を模造したものである。奈良名工の一刀一鑿が古美術の感化を受けたことは爭ふべくもない。源語に斷腸の思を寄せた宇治は、嵯峨と相對して洛外の勝地である。暮春初夏の頃、千頃の茶園に嫩芽緑を噴いて、黄檗の白壁のみくつきりと青嵐の裡に目立つて、眞紅の襷をかけた若い女が鄙唄歌ひながらの茶摘は、又なくのんびりとした悠揚の感を覺えさせる。小やかな宇治人形は、又之れ一個の郷土藝術であつて、之に對すると、箭と駛る宇治の急流を思ひ出し、鳳凰堂の輪奐を記憶から呼び起し、興聖寺、橋姫社、縣神社を偲ばせる。高碧樓、浮舟までが目にちらつくやうに思はれる。

嵯峨人形について人形中の愛玩すべきものは木目込人形であらう。木目込とは其製作から起つた名で、製作地からは之を加茂川人形と唱へる。又柳人形と云ふのは、其材料から取つた名稱であり、製作の名工の名を負はして大八人形とも稱する。木彫に巧に錦繡縮緬等の裂地を點綴したもので、此點綴を木目込（極込）と云ふのである。享保の頃に京都賀茂神社の社人高橋忠重なるものが、柳筥を作れる際に不用となつた柳の木屑を以て作つたのに初まると稱へられてゐる。一說には賀茂川堤の柳の木の根から上一尺の間の木材を以て作るなどと云はれてゐるが、必ずしもさうではあるまい。此人形は嵯峨の濃艶に比すると瀟洒なところが好い。同じく多くは時勢粧を寫したものである

が、七福神や十二支能狂言を題材としたものも少くない。其製作中には優秀なものも多いが、又平凡なものも少からぬ。今日でも模造するものが跡を絶えぬが、幕末の頃まで製作されてゐたのであつた。一體の形は小やに、其の大なるものと云つても四五寸を出ない。或點から云ふと、木屑や用にも立たぬ裂地の廢物を利用した慰み半分のものではあるが、其淳朴な處に可愛らしい、言ひ知れぬ味のあつたが爲めに、大に時好に投じたのである。

八瀬大原の霞の中から溶けて流れ出た。加茂川のせゝらぎに影を映してゐる柳の色は、そよ吹く春風に其緑の葉をなぶらせてゐる。京の大路小路を舞ひ翔ける燕は輕く其下をくゞつて飛ぶ。叡山の頂には春の雲が浮んで、河原には雪と見擬ふ布が晒れる。風もなく靜に春雨が降り濺ぐと、柳の枝は美しい女の黑髮のやうにしつとりと濡れる。瀬に音を立てゝ、水は銀蛇の如く駛り行く。京の女のほつそりした半身が傘の下から覗かれる。加茂川堤の柳は晴にも雨にも風情があつて、或時は梢に月を宿し、或時は水に影を映す。大原女は其下で長い煙管から烟の輪を吹き、與牛は其蔭で凉しい風に低く喘いでゐる。加茂川人形は其柳の木の精であるから、優しく、淸く、極めて可愛らしい。

加茂川人形の多くが小なるとは事かはつて、大小種々の形はあれど、四五尺の大きなものもあるのは、御土産人形又の名御所人形或は伊豆倉人形である。多くは裸體で、頭に被物（かぶりもの）を戴いたり、腹掛かけたり、手に小槌鯛鼓の類を持つてゐる。公家から返禮に貰ひ歸る所から御土産人形の名稱があり、公家から貰ふので御所人形とも云はれ、又大阪の伊豆倉が取次いで賣る所から、所に依りては之を伊豆倉人形とも唱へるのである。

風俗上最も參考に資すべきものは衣裳人形であらう。木彫の上に彩色して、之に衣服を着けさせたもので、其大なるものになると二尺位のもある。浮世人形の一名がある如く、最も善く當時の時勢粧を寫し出した物であるが、衣裳を着けたるが爲に、久しき年處を經たものは、自づと弊れ損じて、人形の價を減じたものが少からぬ。此他人形の形狀からして云ふと、芥子人形だの首人形だのもあり、淺草人形、伏見人形、堤人形のやうな地方的のものがあり、土ひねりもあり、張拔きもあり、練物もあつて、千姿萬態、人形の種類は少しとせぬ。いづれも江戸時代には其道の名工があつて、淸素なもの、雅致なものを作り出して、人形國は賑やかであつた。

近年と雖も佐四郎を初め、其技に達したものも少くはないが、時勢が悠長でないから、古名工のやうな逸話に富だ製作品は頗る乏しいと云はねばならぬ。セルロイドや鐵葉製のものが

盛に出るやうでは、韻致の觀るべきものゝ、少くなるは自然である。淺草の飛んだり刎ねたりも其跡を絕つて、風船や飛行機に其株を奪はれた。瀧の川の木兎なども追々滅亡する時代が來やう。時勢は容赦なく移り變つて行く。しかし人形美は今も昔も異らぬ。羽子板の似顏は下手になつても、人形の製作は相も變らず盛んである。けれどまことの人形美はやはり古製作のうちに見出される。そこで小供の愛玩物であつた人形の持主も、大供と變つて來た。して見ると之れ亦一種の骨董品取扱ひを受けてゐるやうであるが、人形に垢たの、古色だのは寧ろ禁物である。やはり美しい雅致あるものが尙ばれる。丁度浮世繪の版畫に對すると同樣に、美しく、其儘に保存されたのが上乘である。浮世繪の版畫に對して、春信美人の淸婉を喜び、歌麿美人の穠艷を愛するがやうに、嵯峨人形の典雅、加茂川人形の瀟洒なるに無限の興味を惹き起す。浮世繪は時代の背景を負ふが、人形には其物自らの絕對美以外に製作地の情調を偲ぶ。之は必ずしも人形愛好家の胸裡に起る感じではあるまいが、少くとも予だけはさう云ふなつかしみを以て常に人形に對してゐる。

說苑欄第四頁と第二十五頁にある德富蘇峯先生の題詩は

纔入金剛門一步　仙風引我我馮虛
誰知過險回佳境　佳境還如讀異書
萬壑秋酣紅映黃　削成天斧是金剛
不將雄筆鬪奇勝　故放山靈獨擅場

同じく第十一頁にある平福百穗畫伯の題詠は

金剛乃壹萬貳千峰眞佐耶可爾
靑葉能上耳眺米都留加裳
嶮峻志向津長嶺乃頂能
草押靡伎疾風吹具見由

人物評論（一〇二）

社會問題研究

の爲めに起てる

河上博士論



▽河上博士の踏みつゝある道

小泉信三

河上博士の述作の凡てを通じて常にその讀者を打つものは博士の情熱と理想主義とである。別の言葉で云へば今も失はれぬ博士の至純な青年の心である。博士の著作の何處を捜しても可い氣になつて納まつて居る老成人の俤は見えぬ。河上博士は學者中の名文家として知られて居る。私は固より此點を爭ふものではない。併し博士の著作が有つ讀者を惹き

着ける力の秘密はその自在に文字を驅使する術に在るのではなくて、實に著者その人の至純な情熱と理想主義とに在るのだと私は思ふ。而して此情熱と理想主義とは博士の經濟論に添へるに一種の高い氣品を以てする。經濟學は屢々貨殖の術、錢勘定の學、拜金の福音(マムモンゴスペル)なりとの誤解を受けた。併し河上博士の經濟論を讀んで是等の貶稱を思ひ浮べるものは恐らくないであらう。經濟學の對象は富その者ではなくて人生である。經濟學の出發點と到着點も共に人間その者であると云ふ樣な言葉は既に度々西洋人に依て繰返されて居るに拘らず、河上博士が口にする時殊に此言葉が痛切の響を持つのは此爲めである。

河上博士の「貧乏物語」は富裕階級の奢侈が如何に貧困者の窮苦を甚しからしめるかの理を具さに説明して、貧困を絶滅するの策は奢侈の抑制にあることを主張したが、之と前後して同じ説を唱へたものに元と倫敦 Morning Post (なりしかと記憶す)の金融記者で今 Economist の主筆たる Hartley Withers の著「貧困と浪費」がある。私が右に述べて來た事は此二つの書を比較して見たものには直ちに首肯される事と思ふ。此二つの書は理論的には略ぼ同じことを述べて居る。それでゐて其の讀者に與へる印象は餘程異るのである。ヰザアスも一種の達文家ではあるが其議論は要するに金融記者の經濟論である。言はばロムバアド街(ストリイト)の臭ひを脱して居ないのである。恐らくヰイザアスの書を讀んでも「經濟問題が眞に人生問題の一部」であり「經濟學が眞に學ぶに足る學問」であると云ふ感をなす者は多くないであらう。それが必しも悪るいと云ふのではない。ただそう云ふ事實がある。而して玆に河上博士の重要な特色が存する事丈けを云へば好いのである。

是れ丈けを云へば博士が傳來の經濟學に滿足されぬ理由は直ぐに了解される筈である。博士の理想主義は舊經濟學の根柢をなして居る利己心是認、營利主義是認及び必しも經濟學の本質に伴ふものではないけれども而かも其の屢々陷らんとする物質主義を許すことが出來ないのである。經濟學の利己心營利主義是認に反抗して起つたものに社會主義經濟學がある。河上博士は必ず社會主義經濟學の中に多くの望ましいものを發見されたに違ひない。而かも猶ほ今日までに現はれた處を以て見れば博士は之れにも滿足はして居られぬ樣である。蓋し今日の社會主義は人間の精神が物質的環境の産物なることの認識をその根柢に置いて居る。博士の理想主義は此説を無條件で承認するに堪えぬのである。博士も著しく唯物史觀に傾かれた時代があつた樣であるが、その本來の理想主義は再び擡頭して來て博士をして「……人は境遇を造り、境遇も亦た人を造る。乍併その何れ

が本なりやと云へば境遇は末で人が本である。それ故社會問題の解決に就ても、私は經濟組織の改造といふ事をば……根本策中の根本策とは」思はぬ（貧乏物語）と云はしめるに至つたのである。斯く社會主義にも舊經濟學にも悉く滿足することの出來ぬ河上博士が營利主義現金主義の痛烈な攻撃者でありながら而かも社會主義者の列には數へられぬカアライル、ラスキンに其の求める所の或ものを見出されたのは甚だ自然の事であつた。デイレンマと云ふのは二つの途に踏み惑ふ事を云ふのだが、私の見る所に依れば河上博士は三つの物の調和統一に苦心して居られる樣である。三つと云ふのは經濟學と社會主義と及び博士に天賦の理想主義とが是である。如何にして此三つを調和するか。之を三つながら調和する方法があるか、或は其中の一若くは二つを棄てなければならぬか。是に對する最終的の解答は未だ與へられて居ない。（樣である。）思ふに同時に此の三つの物を持たなければならぬ事が不幸でもあり幸でもある。この何れかを容易く放棄し得る人、或は始めからそれを知らぬ人に取ては問題の解決は遙かに簡單であつたらう。經濟學を知らぬ社會主義者、社會主義を知らぬ經濟學者、或は自家生得の傾向に關りなく、本に書いてある事を無批評で嚥下し得る人。是等の人人は河上博士に取つては羨ましくもあり、又羨ましくもない幸福人であるだらう。兎に角三つの物が河上博士を惱まして居る。博士が人間の道德的改善の爲めには貧乏を根絶しなければならぬと云ふ立場から出發し乍ら、その貧乏を根絶する方法如何との問に對しては道德的抑制を以て其重なるものとなすと云ふ矛盾の觀ある結論に到着されたのは此事を證明して居るかと思ふのである。

吾々の見解を以て評すれば河上博士は餘りに人間を善きもの、若くは善くなり得るものと見過ぎて居られる嫌がある。博士が富裕者の奢侈自制を以て社會問題解決の一主要方法とせられるのは此樂觀主義から出て居る。吾々は人性に是程の信用を措く氣にはなれないのである。私は曾て博士の著作を雜誌で紹介する時、河上博士の樂觀主義から聯想して、human perfectibility を確信して居たヰリヤムゴツドヰンの名を舉げた。ゴツドヰンは何等外力の强制に依らずたゞ道理の說得のみに依て平等自由なる完全社會の實現を豫期した理想家である。兎に角「貧乏物語」に於ては博士の理想主義は同じく博士の持つて居る他の傾向を壓倒して甚だ鮮明であつた。

ところで河上博士は「社會問題研究」の刊行を創められた。中央公論記者の言に從へば「近く社會問題の解決に名乘を揚げ」られたのださうである。そこで興味のある問題は博士が「貧乏物

語」で示された傾向を今後何處まで續けられるか。或は變られるならば何の方向に變られるかと云ふ事である。之は輕々に豫言すべき事ではない。併し「貧乏物語」の後に公にされた「社會問題管見」を讀んで見れば多少の推測が下されぬ事はない。實を云へば「貧乏物語」に於ても文字の表面に現はれて居る程重きを奢侈抑制のみに置いて居られるのではない樣である。前に記したギリヤム、ゴッドキンの理想を粉碎しやうとしたのはマルサスであつた。而してマルサスがゴッドキンを擊つに用ゐた武器は「人口の原則」であつた。人間の不幸は人爲の社會制度に根源すると云ふゴッドキンの說は間違つてゐる。人間の運命は自然に依て極められて居る。人口は食料よりも速かに增加する。其の結果は貧窮でなければ罪惡である。人は手を拱して其運命に從はなければならぬと云ふのが其要旨であつた。然るにマルサスは後に至つて稍々其說を改める必要を見出した。人口論第一版(一七九八年)に從へば人間の將來は全くの闇であつたが五年間の熟考はマルサスをして暗黑の中に微かながらも一道の薔薇色を認めさせるに到つた。この一道の光明が所謂道德的抑制である。人間の將來には貧窮と罪惡とが待ち受けてゐる。併し豫め此事を慮つて「道德的抑制」を行へば人間は能く自らを救ふ事が出來ぬとは限らぬ。之が人口論第二版(一八〇三年)以後の要旨である。茲で何故マルサスなどを茲に引用するかと云へば、マルサスの說が思索を重ねるに從つて變つた樣に河上博士の思想にも假に轉向が起るものとして其の變り方はマルサスと正反對の方向を指すのではないかと私かに考へるからである。マルサスは人間を物質に支配せられて身動きの出來ぬ憫れな者と考へる事から出發して「道德的抑制」を認める所に到着した。河上博士は反之「道德的抑制」の高唱から出發して居られる。而して何の方向に進まれるかと云へばマルサスが歩いた道を逆に踏まれるのではないかと思ふ。此道を踏んで然らば何の點まで達せられるか。この道の盡きる處に立つて居るものはカアルマルクスである。河上博士は果してマルクスの立つて居る地點まで到達せられるか。それとも其手前の何處かで停まられるか。それは悉く未決の問題である。(病中の爲め執筆困難にて作文意の如くならず、甚だ累を被評者に及ばさんことを虞る。)

▽河上君の人物

足立北鷗

河上君ですか、左樣……、極めて几帳面で篤學で、そして趣

味の廣い温厚篤實の人です。

△河上君は私と同じく周防岩國の人で、其お父さんは、今の町役場がまだ扱所と稱へられた頃から、永年勤續の町長さんで、能吏循吏良吏の典型として闔縣に嘖々の盛名を馳せて居たが、人と爲り非常に几帳面で、其着物の着方から歩行の仕方から執務振り應對振りに至る迄實に端嚴極まつたもので、私共は子供心に何となく氣の措ける伯父さんのやうに思ふて居た、瓜の蔓に茄子は生らず――河上君の平生好んで研究せらるゝ遺傳の理法は最も卑近に其證例を君の家庭に示して――君も亦頗る付の几帳面家であるから、若し箕裘相繼ぎて町長にでも爲られようものなら、萬事萬端お父さんそつくりであるであらうと想はれる、が何歟く時勢が違ふ、お父さんは漢學一天張の御役人であつたが、息子さんは大學へも入る洋行もする大學教授にもなる博士にも爲つた、のであるから、言はゞ出藍の譽れである、家門の光榮である、就て懐ひ出すのは、同じく岩國人の白銀伊兵衛といふ人の譚である、其人の長男が學識人格共に優秀なので、或人が路上邂逅の際『伊兵衛、貴樣は豪い息子を持つたナ貴樣には不似合の息子を持つたナ』と、褒めたのやら貶したのやら分らぬことを言つたら、伊兵衛先生幾度か叩頭して難有御座イます〳〵と連唱した、其當時私は丁度其場所に居合はして、子を思ふ親心の如何に深甚なるかを痛切に觀念したのであるが、當年の伊兵衛氏の心事は、必ず今日の河上博士の嚴君の心事であるであらうと考へる。

△私は河上君を几帳面な人だと言つた、此几帳面といふ事には色々の意義色々の方面がある、一旦或種の研學に取掛つた以上底の底のドン底迄研討し切らねば氣が濟まぬといふのも、几帳面の一種、又た一旦或種の研究に取掛つた以上他の事には餘所目も振らぬといふのも亦几帳面の一種で、此兩點は河上君が先年經濟學の專攻を思ひ立たれた以來、今日迄長の月日、自ら其活きたる證例を示されて居るが、君の几帳面さ加減は中々此んな事では納まらない、几帳面の極、物に依り事に依ると、萬事を徹頭徹尾河上式で推し通さねば氣の濟まぬ樣の點もあるやうに私には感じられる、私は先年田川大吉郎君と共に毎月一回宛雜話會なるものを開催した事がある、其席上坊主も來れば醫者も來る、實業家も集まれば新聞記者も會する、佐々木照山田中舍身兩君の如き所謂浪人組も出席すれば、江木翼柳田國男兩君などのお役人も出席した、異分子の相雜揉して方物すべからざる有樣以て想ひ見るべしである、此有樣を見たる河上君は幾度か私に對し『貴下は實に色々の人と交際をなされますナ……私は中には同席するさへイヤな人がありますす』などと言はれ

た、惡くいはゞ、狹いとも言へやう、包容力が足らぬとも言へやう、併しそれは僕等の如き雜炊黨雜駁屋の言ふ事で、君の如き几帳面の人には成る程好惡の標準が嚴密で、迚もどれもこれも受付くるといふ譯には行かぬのであらうと思はれる、自家の信條を基礎とせる道念が堅いだけそれだけ精神的分子の間隙が緊密で、到底他のものを包容する餘地がないといふ事であらうと考へられる、……今度同君の發刊せられたる『社會問題研究』の新聞廣告中に「小生一人の勞作の結果のみを掲載」云々の文字のあるのを見て、私は是ある哉是ある哉と、獨りで首肯した。これでこそ水混じらずだ、嘸隧張りとして氣持ちの好い事であらうと心窃に河上君の爲めに祝した。

△猶ほ考ふ可き他の方面は、几帳面といふ事と物の公平を愛し不正を憎むといふ事とは、精神的同一根基に在るべきものであるといふ事であるが、既に何事にも几帳面なる河上君は、勢ひ亦、不正を憎み公平を愛するの人たらざるを得ない譯である、同君が平生官尊民卑が嫌であつたり、貧富の懸隔の世相が嫌であつたり、社會問題の研究が好きであつたりするのは、畢竟皆其源を此處に發して居る、同君が自ら之を意識して居らるるや否や、又私の此推斷に首肯せらるゝや否やは暫く措き、私は確に左樣だと觀測して居る。

△私は河上君を篤學で且趣味が廣いと言つた、而して又、專門的の學問に馬車馬的だと言つた、此の廣いといふ事と專門的といふ事とは一寸矛盾の樣に聽へるが實は左樣ではない、河上君の專攻は經濟學であつて、社會の森羅萬象殆ど此學問と相關聯せざる者はないのであるから、河上君は其立脚地を離れない限り中心點を移動しない限りは、其手を四周に擴げて何事を研鑽し得るのである、否研鑽せねばならぬのである、君の該博富贍なる學殖は、其旺盛なる智識慾と廣汎なる趣味性の收穫であるのは言ふ迄もない所であるが、一つには又、當初專門學科の擇び方が其當を得て、君の三面六臂的千手觀音的の才腕を自由自在に活動せしむる事が出來た爲でもある、と私は考へて居る。

△河上君は、篤學斯の如く博識斯の如くであるから、自家の智見に對する自信力が極めて強く、容易に他人に推服しない、偶まに他人の話に輕き相槌を打つの外餘り知人の惡口は言はぬ方であるが、賛辭褒辭も亦餘り唱へない、私の耳に殘つて居るのは福田德三博士の著作戸田海市博士の言論神戸正雄博士其他二三學者に對する推稱の言位のものである、乍去、智識慾極めて深く而も趣味性亦廣汎と來て居るから、苟も研究資料たり參考資料たるべきものあらば、喜んで之を吸收せらるゝ事、恰も渇者の水

に就くが如きものがある、三四年前の事と思ふ、同君が頻りに『人類の獨り向上發展して他の動物の進步せざるは、一は道具を使用し、他は然らざるに由る……』云々と唱道して盛に手の效能を述べ立てられるので、私より一書を裁して『成る程、御說の通也、由來手を以て人間全體を代表せしむる言葉多きは畢竟之れが爲めのみ、曰く手間賃、曰く手代、曰く助手、曰く騎手、曰く辣腕家、など皆是に非ず耶、甚しきは徒步競爭の優秀者まで撰手とは呼ぶ也』など申し送ると、君は早速之を採納し又雜話の序に、貧乏柿に核多し（貧乏人に子供多し）の主要原因に就き、私より前人未發古今獨步と自信せる新學說を提出したら、君は成程一理あり歐米未だ此說あるを聽かずとて幾度か首肯された、素人の小生との應酬對談にも此態度であるから、專門家相手の切磋琢磨には私の未だ聞知せぬ幾多の好挿話があつて、屹度君の床しき裏はしき半面を映出して居る事と想はれる。

△河上君には『貧乏物語』といふ名著がある、嘗て京都へ往つた時、其宗忠神社々畔の寓居を襲ふて『貴下に貧乏などを論ずる資格はない、少くとも實驗的の素養がない』と笑ひ乍ら揶揄したら、河上君細君と聲を揃へて『有りますとも〳〵風呂錢がなくて夫婦とも暫く垢だらけで我慢した事さへあります』と物語られた、或は左樣の事もありしならん、併し之れは飯事の樣な貧乏談、骨を刺し肉を刻む樣な浮世の辛酸と貧苦の慘劇との實習に掛けては御夫婦とも全然門外漢であつて、其學力の程度は先づ幼稚園乃至尋常一年位の處であらう。

△昨年の春河上君を京都大學に訪ふたら、私を自身の研究室に引見して四方山の話をせられた、硝子越の窓外には紅紫花發きて泉石の間を點綴し、四壁瀟洒たる室內には、靑秩黃卷山と積まれて居た、平生紅塵萬丈の都門を往來して雜務に從事せらるゝ身の俄に淨化された樣な心地がして『實に人生の淸福ですナ』と言つたら『左樣、政府の金で學問さして貰ふて此上難有事はありません』と君は應へられた、而して君の安心立命自ら此裡に在りと眉宇の間に讀まれた。

△河上君は神童ではなかつた、早稻ではなかつた、小學時代よりも中學時代中學時代よりも大學時代、大學時代よりも卒業後と、漸次其成績の向上進步し來れる過去の功程より推して考へると前途尙春秋に富める君の大器晩成は必ず刮目すべきものがあるであらうと私は期待して居る。

* * * * *

△河上君の學說及研學の態度などに就ては、他に批評家があるといふ事であるから、私は玆に世人の餘り知らない方面に於て、河上君の材能を紹介して置き度い、同君は嘗て和歌に凝ら

れた事があるが、其造詣決して淺くない、小説は書かれた事はないやうであるが、若し筆を染められたら屹度第一流、間違つても第二流を下らぬと私は踏んで居る、而して同君に繪畫の天才があつて其著書中に無落款の自畫ある如きは特に圏點付きで吹聽して置き度い、隱し藝を一々素破拔いては或は河上君の迷惑かも知れんが、床の間の四角張りたる話よりも、茶の間の團欒に捨て難い情味はある、本筋は本筋、餘技は餘技だ、私は新聞雜誌などによくある文藝附錄や繪畫附錄の積りで特に此一節を此談話筆記の結末に添へて置く。

▽石川型の社會主義者

堺利彦

（一）

もう十五年ばかりも昔の事だが、千山萬水樓主人と名乘つた人が讀賣新聞に『社會主義評論』と題した續き物を書きはじめた。文章に精彩があるのと、可なりに筋の通つた理解があるのとで、我々仲間でも大ぶん評判にしたものであつた。茅原華山君が其頃に捏ねまはしてゐた『新社會主義(?)論』などとは比べ物にならなかつた。千山萬水樓主人とは卽ち河上肇君の事で、私は其時はじめて河上君の名を記憶した。

所が、其の續き物の論文が漸く結論に近づく頃になつて、よくは覺えぬが、急に調子が變つて來て、何だか變な樣子に見えた。同時に河上君が伊藤證信君の『無我苑』に投じたと云ふ報知に接した。そして彼の論文は結局、『無我愛』の宗教的說法になつて終りを告げた樣に覺えてゐる。

『無我苑』と云ふのは、伊藤證信君が當時流行の自稱神佛になつて『無我愛』を體得し、小便の出方まで變つて來たといふほどノボセた結果、(此ノボセたといふ言葉は、後に伊藤君が當時の自己を評した言葉に據る。)數人の同行と共に巣鴨の大日堂に立籠つて、傳道的行者團を作つてゐたのであつた。されば河上君がそれに投じたと云へば、河上君の當時の心理狀態はほゞ想察される譯である。

其後、河上君と伊藤君との交りは絕えなかつた樣だが、伊藤君のノボセが下ると共に、河上君も矢張り元の學者(農科大學講師?)となり、只その事件の爲に博士號を取逃したと噂されてゐた。

（二）

それから餘ほど經つて、河上君は京都大學の教授となり、取逃した筈の學位をも首尾よく受取り、經濟學者として、社會問題

專攻者としての名聲が大いに高まつた。

然し其頃まで私が河上君の書いた物を拾ひ讀になりとも讀んだのは、前記の論文の外、唯物史觀に關する反譯物と、同じ題目に關する（京都の雜誌に出た）論文とだけで、只それらの中にも、唯物的の思索と人道主義的の感情論とが、或は並行して別々に、或は矛盾しつゝコンがらかつてゐるなどと思つたのであつた。

所が近來になつて大評判の『貧乏物語』を讀み、續いて『社會問題管見』を讀み、更に最近の『社會問題研究』を讀んで、益々前記の『並行』若しくば『コンがらかり』の顯著なるを感じた。

（三）

然し右の顯著に於いて『並行』若しくば『コンがらかり』の顯著なるを感じつゝも、私は猶ほ一面に於いて、河上君の大なる進歩を認めざるを得ない。殊に『社會問題研究』に現はれた其の態度に對して、多大の敬意を表せざるを得ない。

今日の河上君は既に社會主義者である。社會主義者中の如何なる分派に屬するかの委しい說明は姑くこゝに保留するとして、兎にかく廣義に於いて社會主義者と目すべき人である。私として、河上君に對して斯樣な判定を下すのは、或は多少の（或は大なる）迷惑を河上君に掛ける事になるかも知れない。或人の如きは、河上君をして京都大學教授の地位を失はせるのは惜しい、惜しいよりも損だと云ふ。それにも確かに一理がある。然しそれもこれも成行である。又河上君も立派な男子である。大學教授としてより外に働きの出來ないほどの人物ではあるまい。故に私はモウ遠慮せずに之だけの事を云つておく。

私等の仲間に石川三四郎君と云ふがある。今はフランスに行つて居つて、時々或る變名を以て東京の新聞にも通信を寄せてゐるが、彼と私との間には昔から少し考の合はぬ所があつて、隨分よく議論した事もあるが、それにしても私は猶ほ石川君を同志と目し、場合に依つては相携へて運動する積りでゐる。所が、此の石川君と河上君との間に、よほど多くの類似がある樣に私は思ふ。つまり河上君は、我々の目から見ると、石川型の社會主義者である。

（四）

私は曩に河上君の『社會問題管見』を評してこんな事を云つた。『博士がマルクスに傾倒すること甚だ深く、從つて其の言議が社會主義的色彩を帶ぶること甚だ多く、然しながら又その道德的、宗教的、倫理的なる感情と態度との爲、微溫不徹底なる結論に到達するを免れぬ事は、『貧乏物語』に於いて既に明瞭に現はれてゐるが、本書に於いても依然として其の同じ弱點と闕

點とが錯綜して現はれてゐる。…………

『博士は義憤を有する學者に相違ない。只その義憤を力に依つて發露させるだけの決意がなく、寧ろ涙を以て自ら慰め人を動かさうとしてゐる。博士の義憤には道徳的情緒が餘りに多く、反抗的氣象が餘りに少い。…………

『共同生活と寄生生活、及び未決監の二篇は、學者的改革者としての博士の意氣と感慨とを漏したもので、「今もなほ惑ひに惑ひ重ねつゝ、としのみ不惑の數に入りける」といふ博士の「拙詠」が示すとほり、博士の義憤が消極的の涙に止まるか、或は積極的の力に進むかの境目である。………

「博士が本月の「朝日」に寄稿した「或醫者の獨語」の中に、頻りに「外科手術の必要」を說いてゐるなどを思ひ合せると、我々はほゞ近來に於ける、博士の心理の變化を推測し得るかの感を生ずる。博士の今後は誠に見ものであこ。』

（五）

私は又、別の文章でこんな事を云つた。「河上肇君が一步々々危險區域に近づいて來たのも著るしく看取される。「朝日」に出た「或醫者の獨語」など大ぶん踏みこんで書いてある。世界の形勢がこゝまで來ては、「貧乏物語」の奢侈抑制論くらゐでは、さすがに滿足が出來かねると見える。然し此人が今後何かの障礙にブツつかつた時、どこまで眞劍に戰ひ得るかは、ちよつと面白い見ものである。道徳的宗教的戰士が急に高踏して隱者になつた先例は澤山見せられてゐるが。』

（六）

右二項の如く河上君を評して來た私が、今この文に於いて更に一步を進めた評し方をするのは、最近の著「社會問題研究」二冊を讀んだ結果である。

然し私はまだ「此人が今後何かの障礙にブツつかつた時」を氣遣ふ事を禁じ得ない。「讀賣」の「社會主義評論」の中途から「無我苑」に投じたあの歷史を、更に繰返す樣な事がありはしまいか。無ければよいがと案じてゐる。

（七）

河上君を批評すると、一寸どうしても福田德三君の事が云ひたくなる。私の頭の中では絕えず此の二人物を一對にして考へる癖がついてゐる。

思想上の態度の明白な事から云へば、河上君は福田君に比して一層大膽である。然し宗教道德的迷妄を脫脚した點から云へば、福田君は河上君に比して遙かに徹底してゐる。又一個の人物として見る時、溫厚誠實なるらしき河上君は、野次性反抗性の多量なる快男子福田君に比して、到底及ぶ所でない。又其の

代り、福田君にはズルイ所があつて、そこは河上君のマジメと比べ物にならない。

然し河上君のマジメが果して大なる效果を舉げ得るかも問題であり、福田君のズルサが存外おもしろい芝居を打つまいにも限らぬ。(「不平」三月號に私の「福田德三氏を評す」といふ文が載つてゐる。其中で一寸河上君にも及んでゐる。併せ讀まるゝを得ば幸甚。)

▽萬事にエクセントリックな河上君

文學博士　瀬川秀雄

▽河上君は私と同じく山口縣岩國の產れで、年齡は私より五つ程下であらう。何でも河上君が中學を出て山口の高等中學に入る時に、私が山口まで連れて行つたのが交遊の始めであつたと思ふ。東京へ來てからも、私が同鄕人會の幹事として國の學生を監督して居た關係上、河上君も能く向ふからやつて來て、話をしたり議論をしたりしたものである。然し何方かと云へば朋友と云ふよりも、河上君は私を先輩視して居た。

▽私が初めて知つた頃から河上君は頭腦の善い學生で、又議論好きであつた。極めて眞面目な、ひたむきな、斯うと定めると一切の事を抛つて其方に進むといつた風の、エクセントリックな所があつた。議論を始めると、他人が何と云はうと決して自說を執つて枉げない人で、さうなると先輩も後輩もなかつた。一體私は學問上の議論でも穩健で、從つて保守的であつたが、河上君はなか〳〵過激な急進的な思想を有つてゐたので、われわれ二人は事に觸れては隨分劇しい意見の衝突を來たして、互に相下らなかつた事も度々あつた。然し平常は私を先輩扱ひして、いつも敬意を拂つてゐて呉れた。

▽河上君が如何にエクセントリックな性格を有つてゐるかは、「無我の愛」の心醉によつて能く現はれる。あの事件の起つたのは、學校を出て讀賣新聞に批評の筆を執つてゐた時分である。すつかり「無我の愛」に沒頭して、一切萬事を抛ち、巣鴨に孤獨な全く隱遁な生活を初めたので、知人や親戚の者が皆、實際氣が狂つたものと心配し出した。私は義弟の大塚武松の妹が河上君の細君である關係から、其等の人達に賴まれて、河上君を呼んで諄々として忠告した事がある。河上君は後自分から覺めて、又もとの眞面目な學者に還つて今日に至つたのだが、其當時の熱中し方は、全く手の着けられない有樣であつた。

▽河上君は同鄕人間には餘り廣く交際をして居ない。それに社

會問題とか社會政策とかいふやうな事を考へて居るので、國の先輩などには容れられない所がある。それに河上君の方でも其等の先輩に容れられるやうに努める所も無い。

▽前にも云つたやうに河上君にはエクセントリックな所があつて、物に熱中すると一氣呵成にやり終はさなければ承知の出來ない所がある。平生でも讀書執筆に興が湧くと徹夜などは平氣でする。今度も思ひ立つた事業だから、研究に執筆に隨分熱中する事であらうが、平生からさう丈夫でない身體を有つてゐる河上君だから、餘り無理をして健康を損ねないやうにと心配してゐる。

×

▽河上君の私的生活

法學博士　河津　暹

私は河上君と一緒に會て『日本經濟新誌』を經營いたして居つた關係から、多少は同君の私的生活について知つて居ると思ひますから、其方面の事を少しばかり申し述べたい。今度『社會問題研究』といふ雜誌を出されて其方面に於て活躍せらるる事については、私は特に御話をすることがありませんから、其方の事は避けて置きたいと思ひます。

私の河上君について感じて居る事を卒直に申し上げて見ると、一言にして云へば同君は我國の經濟學者の中では最も天才であるといふ事であります。その天才的であるといふ事は、いろ／＼にも解釋が出來ますが、私の見て居る所では、或る問題を捉へて研究を初めるといふと、殆ど凡ての物を顧みないで、驀地(まつしぐら)に其研究に沒頭して、ある處まで或はある物を得るまで行かなければ已まないといふ强味を有つて居る人である。その凡ての物を顧みないで目指す目的物に突進して行くといふ勇猛心、又其目的に突進して行くに當つて、其才華が煥發して殆ど普通の人の考へ及ばないやうな發見等を爲す事が出來るといふ點に於て、確かに天才であると思ふのであります。河上君に接した人は誰でも知つて居る事であるが、動作は極めて叮嚀な人で、會談に於ても亦極めて穩かな人であります。然るに一度筆を執るといふと別人の如き勇者になる事が出來る、又演壇に立つと是れ亦別人の如く侃々諤々の議論を上下して憚らない人である。そのインスピレーションを得た場合と普通の場合とを比較すると非常に違ふ。此點から云つても頗る天才的であると思ふ。

斯くの如き性格を有する人ですから、其意見を極めて卒直に言ふ。自分の疑ふ點も、又得たる點も、何等の忌憚も無く之を

述べて憚らない人である。それに文章から云へば極めて明快であるから、讀者は同君の考へて居る所を了解する點に於て些しもの陰翳を殘さないであらう。又一面から云ふと、其時に考へて居る事を率直に言ふから、後にいろ〳〵思ひを潜め工夫を凝して、其説が謬つて居る事を悟つたならば、前の説をば捨てる事弊履の如く、從つて改論變説は、惡い意味に於てゞなく、甚だ多くあるやうである。之が一歩一歩同君の研究の進境を語つて居るものと云ふ事が出來る。此點が同君の長所であるとも云へるが、又短所であるとも私は云へると思ふ。ですから同君は思を潜めて書齋裡に研究する方に得意がある方で、從つて其の研究の得意の方面を云へば、經濟學の思想を取扱ふか、之を除いては今度創められたやうな勞働問題の研究の如き、謂はば思想考察――ロヂックを追駈けて行く方面に得意がある。其以外に種種の調査、政策等の事を取扱はれた事もあるけれども、其方は同君の得意の境地ではないと信ずる。故に今度創められたやうな方面に於て境地を拓いて行かれる事は、願ふてもない事と云はねばならぬ。唯、今云ふが如き性格の人であるから、此研究が燃える時には火の如くでも、果して永續するかどうかについて、私は多少の疑を有つて見て居るのである。

次に同君の文章であるが、之れは私共が云ふまでもなく極めて平易、極めて絢爛で、又極めて明快である。卒然として之を讀めば一氣呵成に作られたやうに見えるかも知れないが、私の承知して居る所では、同君は比較的遲筆である。文を行るのに非常な苦心をして居らるゝ。僕と一處に雜誌を書いてゐた時などは、筆が思ふように動かなくなると錢湯に行かれると數回に及ぶことがあつたくらゐである。

尚ほ最後に同君は人格の極めて崇高な、眞面目な人であつて、其家庭も亦極めて圓滿である。その家庭の圓滿であるのについては、吾々は是非共同君の細君に敬服の言葉を捧げなければならぬ。此天才肌の同君が後顧の憂なく其境地を拓いて行けるのは、細君の内助の功が與つて大に力があるのであると信ずる。

同君の今回の事業は初められた許であるから、他日大成せらるる曉に之を論ずることもあるかも知れぬが、唯今は以上の言葉だけを以て同君の論評に代へたいと思ふ。

▽僕の觀た河上君

法學博士　吉野作造

河上君と識つたのは今より十七八年の昔である。歳は僕と大

した違ひはない。老けて見ゆるけれども、普通の人よりは、三四年若くて大學を卒業したと記憶して居る。從つて僕にとつては二年ばかりの先輩で、君が國家學會の雜誌委員として盛んに新法學士の潑溂たる生氣を發揮して居つた頃に初めて相識つた。勿論僕は其時法科大學の上級生であつた。やがて僕も卒業して同じく雜誌委員となり、河上君と共に美濃部博士指導の下に國家學會雜誌の編輯に携はり、支那に行くまで約一年半の間親しく往來した。其間に同君の學風にも接し、其人となりをも知つた。無論よく知つたとは云へないが、短日月の交際のわりには割合によく相識つた積りである。蓋し君と僕との間には專門とする方面は違ふが、何處かに何か共通な所、所謂肝膽相照す所があつたからかも知れない。

最近逢つた頃の僕の印象を今から追懷して見ると、君はよく疑ふ人であつた。どんな問題でも、先づ一旦は疑つた上でなければ承認しないといふ風な人であつた。從つて又よく考へる人であつた。然しながら根が精密に物事を刻んで考へるといふよりも、何れかといへば、よく疑ひよく考ふるといふ態度の人としては餘りに直感力に富んだといふ風に僕には考へられて居つた。從つて其頃君の書かれたものにはよく結論に於て、其着眼點に於て、多くの啓發と暗示とを受けたけれども、議論の遣り方には時に敬服しない點もなかつたではない。併しよく書き、よく談じ、とにかく囚へられざる一個の摑んでた見識を以て健闘せられた事は僕の敬服して措かざる所であつた。

尤も同君は物を書くといふ事に特別趣味を有つて居たと思はるる。文章も初めからなか〳〵達者であつた。溫潤の中に辛辣を包み、謙遜のやうでなか〳〵思ひ切つた無遠慮な所がある。濫りに人を傷けないが、又他を顧みて卒直を掩ふといふ事はない。此點に於いて君の文章は君の人となり其儘であると僕は見て居る。

が、然し當初の君の述作はどちらかといへば、餘りに學究的の臭ひが勝ち過ぎて居つた。其頃福田博士も隨分有益な研究を公にして學界を賑やかにして居つたが、同博士の論文は有名な分り難いものであつた。今は極めて平淡を旨として居らるるやうになつたけれども、今と此當時との同博士の述作を比較すると、少くとも文章の體裁丈けに於ては殆んど別人の感がある。之にかぶれたと云ふ譯では無いが、河上君の段々專門的になつて行く其頃の論文は、餘程當時の福田式になり進む傾向があつた。明治三十八年頃公にされた經濟原論(?)の如きは其最も著しき代表である。併し斯う云ふ方面は怎うしても同君獨特の得意の壇場ではない。何れにしても福田博士が陷つた――陷

つたと云つては失禮かも知れないが――誤りに當時河上君も陥つて居つた事は疑を容れない。

あゝ云ふ貴族的文體から今日の平民文學者と云つても宜いやうな所まで變つたのは、或意味に於ては君が其本來の立場に復つたものと云ふ事が出來るけれども、さう變るに就ての外面上の段階をなすものは、無我愛宗に入つた頃の同君の精神的激變であらう。君が内面的にどんな痛烈な經驗をされたか知れないが、經濟學の研究を投げ捨てゝ無我愛に依る人類の救濟に志した事は、君にとつては非常な眞劍であり、我々學友の間に於ても非常な大問題であつた。夫れから後の事は僕も支那に行つて了つたので委しい事は知らない。歸つて見れば君は再び經濟學界の人となつて居つた。而も君の所謂經濟學は最早や昔の學究的經濟學ではない。一旦無我愛の洗禮を受けた君に相應はしい經濟學となつて居つた。否、僕をして言はしむれば、河上君本來の經濟學が飾る所無く現はれて居つた。

と云ふ意味は前の經濟學が誤りで、後の經濟學が正しいと云ふのでは無い。前の經濟學は謂はゞ本の十冊も讀めば誰でも說ける經濟學である。後の經濟學は河上君でなければ說けない。又河上君にして初めて說き得る經濟學である。其議論の中には溫い血が流れて居る。學問としての値打附けに假令多少の文句はあつても、君の經濟學は其溫き血に依つて我々の實生活の何處かの缺陥に觸れて行く。此點に於て僕は君に於て少し趣きは違ふが、サン・シモンを憶ひ出さゞるを得ない。

河上君は博士であり、大學敎授である。學者として認められ學者としての批判を要求し得る人である。同君の學殖に就いても我々の間には既に定評がある。特に傳ふる如くんば最近マルクスの精密なる研究に依つて同君の學說に一段の强みと深みとを加へたとの事である。而して之に依つて同君は愈々社會問題の解決を提げて起たんとすとの事であるが、之れ實に同君にとつて極めて適當な事業である。適材適所とは此事を措いて外に無い。併し乍ら同君を僕が適材と見る所以は、社會問題に關する其該博豐富なる學殖よりも、河上博士の人格其物が自ら一個の社會問題の解決の精神である點にある。

評論

時論

法學博士　吉野作造

人種的差別撤廢運動者に與ふ

此頃民間一部の有志の間に人種的差別撤廢運動なるものが起り、或は其決議に基いて宣言書を佛國講和會議の各國委員に送つたり、或は諸所方々に演說會を開いて輿論の誘導作興に努めて居る。今日世界の各方面に於て不幸にして人種的差別の忌むべき事實あるに鑑み、殊に我々日本民族が或は濠洲に於て或は北米合衆國に於て排斥せられて居るの不快なる事實に鑑み、右の如き運動が我同胞の間に起つた事は自然でもあり、又喜ぶべき現象でもある。要するに講和會議を中心として道義的精神の最澎湃と動いて居る今日の世界に向つて此運動を開始したのは、少くとも極めて時宜に適したものと言はなければならない。

併し乍ら斯の如き運動を起すに方つて我々日本國民は少くとも此問題に於ける當の被害者たるの地位に鑑み、無用の誤解を避くる爲に餘程愼重の態度を執る事が必要である。何故なれば從來此種の運動を被害者の側から起す場合は、眞に理義に徹底しての結果たるよりも、自分が被害者であるといふ地位に附着する利己的動機から發することが稀でなかつたからである。例へば先生が生徒に向つて噓言を吐くなと戒むる。すると生徒は先生も噓言を吐いた事があるではないかと逆襲する。噓言を吐く勿れと云ふ敎訓を楯に取つて對手方に逆襲する態度は、假令自ら其敎訓に服するに決心した場合でも、自ら其主張に權威が無い。況んや多くの場合に於て此種の人は敵の武器によつて敵を苦むるの術あつて、而も自らは依然噓言を吐くことを改めざるを常とするに於てをや。而して斯う云つたやうな利己的動機に基く對歐米逆襲術は從來我國に於て決して稀ではなかつた。

今最も適切な最近の一例を擧げよう。言ふまでもなく例のモルヒネ問題である。日本の商人が法律上並びに道德上の禁令を犯してモルヒネを盛に支那に密輸入し、盛に内外の道義的神經を惱まして居る事は公然の秘密である。甚しきに至つては一部の官憲すら之に關する嫌疑を免かれなかつたと云ふものすらあつた。昨今之を取締るの必要が盛んに唱へらるゝやうになつて、事實我國官民の態度が大に改善せられつゝあるが、併し日本國民は未だ此點について十分反省して居るとは思はない。而して此點に關して事實上改善の實の擧つて居るのは在支外國宣教師等の批難が少くとも重大なる原因の一つである事は疑を容れない。然るに支那にモルヒネを密輸入をするものは一々數へ擧ぐれば素より日本人にのみ限るのではない。西洋人の中にも多少はある。すると二三の新聞はモルヒネの密輸入は英米人もやつて居るといふ風に、宛然(まる)で鬼の首でも取つたやうに言ひ觸らす。之も不義を責むる道理の聲としてならば大いに尊重すべきであるけれども、自己の反省を缺く、而して利己的動機に基く怨言としては何の道德的權威を認め難いではないか。自己に反省せざるものは兎角責任を他人に嫁する。支那は於ける排日思想の結局の根本は官僚軍閥の政治家の侵略的膨脹主義――少くとも支那人並びに在支外人から斯く見られたる――に在ることは疑なき事實である。故に支那が我々に反感を有つたといふ事實があるならば先づ自ら反省し、誤解あらば其誤解を解くべきである。之を努めずして直ちに或は支那人を不信不義となし、或は排日的英米人に誤られたりなどと罵倒するのは、少くとも客觀的に見て醜陋を極めたる態度と云はなければならない。我々は支那等に對する我國一部の議論に此意味で少からぬ不快を感じて居る。而して排日思想などの起る根本の原因は寧ろ我に在るを信じ、常に對支政策の根本的廓清を主張して已まない。而して我國の大陸發展の理想は今日までどれだけ改善されたか分らない。東洋に於ては優秀なる武力を有つて居る結果として多少の無理は云へたにしろ、一旦世界の眞中に一切の秘密を暴露されては、或は十分辯解の出來ない事が無いとも限るまい。巴里の講和會議に於て支那代表者の逆襲に逢つて、我國の特使がシドロモドロの態を示すのは、願くば内攝りの外窄みの類でなかれかしと祈るものである。

南北抗爭に於て本來旗色の惡かつた段祺瑞の一派が、外に賴る所なくして日本に賴つたのは戰時中の事である。之によつて支那は吾人の意のまゝに經營するを得べしと圖に乘るの大いに誤りなる事、否却つて國民の反感を招くに終るべき事は予輩の屢々警告する所であつた。戰爭の終結と共にいろ／＼彼に反噬

の色あるを見て彼の不信を責むるのは已に遅い。我々は再び第一頁に復り、日本國民の大陸發展の理想を立て直すの必要がなからうか。

何にしても人に向つて嘘言を吐くなと責むる以上は、先づ自分で嘘言を言はないといふ決心を定むる必要がある。人種的差別撤廢運動の如きも、理義に徹底した立場から、全然利己的動機を離れて民族關係に於ける正義の眞の要求として之を唱へるでなければ權威がない。のみならず又恐らく佛蘭西の講和會議に於ても熱心なる共鳴を得る事が出來ないだらう。

講和會議を中心とする今日の世界に最も著しく流れて居る考は、理義を正して各種の紛争を解決せんとする事である。從來國際間の問題は表面は何であつても、眞の解決の主義は銘々の國の利害であつた。利害の妥協調節といふ事の外に事實上の解決の途は見出され得なかつた。其處で國際紛議は常に頗る解決の困難なものとされたのである。若し之が單純なる一片の原理原則で、恰も裁判官が訴訟事件を斷ずるが如く明快なる裁斷に任せ得るものならば、どれ丈け世界の平和が保たれたか分らない。之が出來なかつたから今日までの世界の雲行が險惡であつた。又此險惡なる雲行に困り切つたから戰後の世界は此苦しみを繰返すまいと骨折つて居る。斯くして今日の世界には原理原則を以て國際間の問題を解決しよう、原理原則の徹底による多少の不便、多少の犧牲はお互に我慢しようと云ふ事になつたのである。之が今日の傾向であるとすれば、此傾向に合する範圍に於て我々の要求は力强いものとなる。又此傾向と共通の基礎の上に立つものとして吾々の運動に一種の世界的權威がつく。我人種的差別撤廢運動の如きも、願はくは濠洲、北米に於て排斥せられて居る民族の悲鳴としてゞなく、民族關係の正義の聲として堂々と叫ぶものたらしめ度い。

尤も濠洲に於ける排日、北米に於ける排日は、單純なる人種的差別の問題と觀る可きや否や。人種的差別の不可なる意義が明かになつても尙ほ濠洲、北米に排日を主張し得る根據は殘らないかどうか。之を他の一面から言へば、排日の事實を全然消滅せしめんが爲めには人種的差別の不都合なる事を彼等に悟らしむる事の外に、吾々自身に於て亦大いに反省且つ覺醒するを要するものなきや否や等に付いて予輩に多少の意見がある。併し今之等を一々論じて居る暇が無い。只人種的差別の不可を說く事が兎に角各方面に於ける排日問題を解決するの一助たるを失はざるのみならず、又正義の問題として極めて理義の明白たるものなるが故に、吾々は正しき理想の此の世に於ける實現の

爲めに大いに之を主張すべきである。而して此の見地に立つて正々堂々の主張を世界に向つて宣言するに方り、吾々は又常に自己反省を怠つてならない事は言ふを俟たない所である。

此立場から吾々は昨今の人種的差別撤廢運動者に向つて朝鮮統治策の理否に注目を怠らざらんことを希望せざるを得ない。今日我國の法制が朝鮮人に與ふるに著しき差別的待遇を以てせる事は隱れもない事實である。無論中には差別する事が朝鮮人の利益であり、又その希望であるものもあらう。政治上其他いろ〳〵の理由で到底同樣に取扱ふ事の出來ないものもあるに相違ない、けれども單に人種が違ふといふ事の外に何等の根據を求め難き種類の差別的待遇が全然無いと何人が斷言し得るか。一例を擧ぐれば朝鮮人の子弟は全然日本人兒童の學校から除外されて居る。怎んな山間僻邑でも日本人の兒童十人を數ふる所には總督府の補助によつて日本人の爲めの獨立の學校を作る事が出來る。朝鮮人は斷じて內地人と共同に教育さるゝ機會を有し得ない。表向の理由として怎んな事が擧げられやうとも、斯くの如きは學童問題を以て桑港當局者の非を鳴らした日本民族の公然と誇示し得べき出來事ではない。予輩は民族的正義の問題としては言ふまでも無く、朝鮮に永住する國民を教育する手段としては、早くから朝鮮人と机を列べて相親しむの訓練を與へた方がいゝと信ずる。利害の打算から云つても斯くあるべき教育問題を全然差別的に處置するのを適當の道理なるかの如くに考ふるのは、人種的差別觀以外に何所に眞實の根據を認むることが出來るか。

其他いろ〳〵の問題に就いて對朝鮮策の根本に立ち入り、人種的差別撤廢の趣意からしていろ〳〵の議論が出て來ねばならぬと考へる。之を朝鮮人自身が民族的利己動機に立つて兎や角論ずる時我々は多少の不快を感ずるが、之に對して內地人が同じく又利己的動機に立つて其の向ふを張る時に著しく反感を催さしめらるゝ。我々は朝鮮人の待遇の問題に就ては朝鮮人とか內地人とか云ふ差別を超越して、彼我兩國を抱擁する全體に亘る正義の樹立の問題として、も少し冷靜公平に考へ直す必要があるまいか。

之と同じ事は臺灣人に就いても、又日本の勢力下に於ける滿洲方面の支那人に就ても言へる事は繰り返すまでもない。

吾人が從來常に此立場を採つて公平なる同胞國民に訴ふるを怠らざりしは讀者の詳知する所であらうと思ふ。今や人種的差別撤廢の運動が起る。從來此種の運動を起すものは、甲に向つ

ては正義と公平とを求めて、乙に向つては非義横道を逞うする蛙であつた。今度の運動丈けは斯くの如き連中の利己的運動で無い事を期待し、又斯くの如きものたらしめてはならないと考へる。然らざれば道義的創造力の大いに活躍せる今日の時勢に、此種の運動の勃興した意味が分らない。我日本の國論が極端に世界の大勢に逆行するものに非ざる限り、人種的差別撤廢の運動は斷じて吾人と同一の立場を採るものでなければならない。

講和會議に對する國民の態度

今佛蘭西で開かれて居る講和會議――講和豫備會議といつた方が正當かも知れないが――は單に大亂の後始末をするばかりではない。更に世界の根本的改造を企てんとするものであるとは云ふを俟たない。單純なる講和會議でも世界の人の悉く之に注目するは怪むを須ゐないけれども、殊に今度のは世界改造といふ大問題を控へて居る所から、世界の人の注目の程度は又實に意想外に大なるものがある。そこで我國でも官民を問はず各方面からいろ／＼の人が競うて彼の地に出掛けるといふ有樣であるが、勿論中には之を機會に單純な見物をする積りで行くものもあらうが、併し大體に於ては今行つて彼の地の形勢を觀察して、以て戰後の經營に資せんとするのが主要なる目的と云はなければならない。併し乍ら顧つて斯くして派遣さるる人々、又自ら出掛ける人々の顏觸れを觀ると、予輩は今更らながら其貧弱なるに驚かざるを得ない。蓋し此等の連中の筆頭に來るものは講和特使を初めとして錚々たる政治家の一團であり、次には操觚界の名士といふやうな所謂准政治家の一團であり、之に次ぐものは實業方面の歷々である。何れも我國選り拔きの人材であるけれども、併し悉く政治經濟の方面の專門家であつて、教育家思想家即ち概して言はゞ思想家といふ方面からは殆ど一人も派遣されて居ない。此方面から觀て私は顏觸れの餘りに貧弱なるを遺憾とするものである。

今度の會議の一番顯著な主要問題は、何と云つても世界改造の事業である。之に關しては世界の人類の何人も、亦世界の國家の何國も等しく大に利害を感ずる所であるから、我々は其成行について全然受働的の立場に居ることは出來ない。換言すれば我々は人類の一人としても、又一個の國民としても此重大問題の決定に對して積極的に參與する所なければならない。今や我々は吾人の意の儘に世界を改造するの、否世界の大勢を我か

ら進んで創造するの權利を認められて居る。而して莫大な金を使つて態々佛蘭西三界まで行く程のものは、政府の役人であれ、又一私人であれ、よしんば新世界創造の事業に積極的に參與しないまでも、少くとも此新風潮を十分に理解する底の覺悟と能力とを有するものでなければならない。之が出來なくては何を以て戰後經營の大策を極めることが出來ようか。而して斯くの如き覺悟と能力とを彼の所謂歷々の政治家實業家に求むる事が出來ようか。あの連中の中には長く外國に滯在して其事情に精通して居るものはあらう。けれども今日に於て特に必要とせらるものは、彼地の社會の底の底を流るる思潮其物に對する理解である。否、今日現に世界の全體に横溢して居る所の偉大なる道德的創造力に對する共鳴である。

斯くして吾々日本國民は今日此際、此重要な問題の討議者若くは研究者として、僅かに政治家と實業家のみを送つて滿足した譯になる。之れ日本國民の世界改造の事業に對する積極的分擔を正當に代表せしめ得る所以であらうか。予輩は窃に恐る。斯くの如き現象の現はれたのも、畢竟我國今日の社會が今次の戰爭並に戰後の世界に關する精神的意義の不理解に基くものでないかと。換言すれば今度の戰爭の跡始末の主として關係する方面は依然として政治經濟であり、又戰後の經營として我々の關心すべき問題も專ら政治と經濟との方面であると考へて居るのではあるまいか。政治と經濟の上つ面の問題を處理した丈けで戰後經營の大事業は總ると考ふるならば之れ程お芽出度い事はない。

今度の戰爭が暫らく皮相なる觀察者の往々にして說くが如く、專ら政治經濟の方面から起つたにしても、講和會議に於て論ぜらる問題が政治論經濟論のみに限らない事は明白ではないか。況んや世界改造の大問題に於ておや。然らば細目の問題は何であれ、今度の會議に於て主として論ぜらるゝ所は常に深奧なる思想上の問題に觸れざるを得ない。此方面から見て如何なる人材の果して我國を代表し得るものあるかも一個の問題たるを失はないが、我々國民が一海老名彈正師、一新渡戸博士を送つた丈けで滿足し、或は送つても之に殆んど何等の重きを置かざるが如き風あるは寔に慨嘆に堪へない。

深刻なる試練を經たる歐米人に鑑みよ

英吉利や佛蘭西は勿論の事、後れ馳せに參戰してそれ程の必

要も無かりさうな米國まで、或は食糧を制限するとか、或は交通機關に異常の制限を加ふるとか、其他内外人の居住移轉などにまで非常の不便を加へなどして戰爭遂行の目的の爲めに死物狂ひになつて居つた事は、新聞などで豫て承知してをつた事ではあるけれども、此方面をよく視察した最近の歸朝者の話を聽いて、今更の如く其猛烈な取締方に驚かされるのである。

然し我々の更に大いに驚かされるのは、其施設の細密を極むる事、又之が取締の嚴重を極むる事に非ずして、寧ろ斯かる煩瑣な又嚴格なる取締が國民の生活に與ふる不便の著大なるに拘らず、殆んど何等の不平も無く立派に行はれて行く事である。顧みて日本で同じ様な事を行つたら怎うであらう。國の隅々までよく勵行さるゝを期し得ようか。此點に關しては新歸朝者の多くは擧つて確かな自信を持ち得ないやうだ。

併し乍ら我々はつ翻て何故に彼に於て斯くまで嚴しき取締が誤る所なく勵行されて行くかを反省しなければならない。予輩の觀る所を以てすれば之には少くとも二つの據り所がある。一は平素デモクラシーの精神が社會の各方面に行き瀰つて居る事で、も一つは國民教育が眞實に尊敬されて居る結果として、兒童が小學校に於て既に公民としての必要なる訓練を與へらるゝ事である。

英米諸國に於ける戰時立法が極端なる市民の自由を制限するを觀て、之をオートクラシーに逆轉したと觀るのは最も甚だしき謬見である。何故なれば斯くの如き苛酷なる戰時立法のすらすらと行はるゝ所以は專ら國民の承認に因るものであるからである。而して國民が斯かる苛酷なる取締に服する所以のものは當局者を信任するからである。否、當局者を以て自分の代表者と認めて疑はざる故である。換言すれば平素デモクラシーの精神が社會に徹底して居る故ではないか。

之と伴つて、も一つの彼等に羨ましい點は、賢良を選んで自家の意見を代表せしむる事、一旦選んだものには十分なる信任を與へて活動の自由を與へ、又其節制に服する事、選ばれた者は又其依托に背かず眞面目に其責任を盡さんと心懸くる事。此等は皆教師の指導の下に小學校時代に訓練を受くる。例へば英吉利の小學校に於て一團の下級生が一人の上級生を選んで團長と仰ぐの慣例は、即ち自ら他日公民としての選擧被選擧の訓練となる。今度の戰爭で小學校時代に團長として人を服するの經驗を積んだ者が直ちに將校に拔擢されて戰場に送られたのを見ても、英國の國民教育が期せずして忠良なる市民たるの資格を不知不識養成して居つた事が分る。而して斯くの如きは眞に見識ある良教師と相俟たなければ實行は期せられない。之には何

よりも先に國民教育の衝に當る者を物質的精神的に大いに優遇する事が必要である。此點を怠り、隨つて教育界に人材を吸收するに成功しないでは、偶々獨立の公民となつた場合の練習をやるとしても、中學校邊の發火演習や私立大學の擬國會のやうな不眞面目極まる有害無益の一遊戲に終らざるを得ない。

日本でも徒らに歐米諸國の戰時立法の成績に驚嘆する許りでなく、其因つて來る所を極めて後れ馳せ乍ら適當に之に倣ふの方法を急いでは怎うか。必ずしも眞似よとは言はない。少くも眞率なる研究を必要とする。

何れにしても歐米諸國の國民が平素難に處して屈せざるの訓練を積み乍ら、偶々曠古の大事變に際會して玆に又深刻なる一大經驗を積んで非常に心魂を引き緊めた事は、考へ樣によつては彼等の一大天幸と言はさるを得ない。同じく交戰國の一とは言ひ乍ら遠く中央の戰場から隔つて先づ格別の不便を經驗しなかつた我々日本國民は、之を幸福と認む可きか將た之を不幸と認む可きか。孰れにしても深刻なる經驗を積まない丈け、我々は戰後の世界に歐米人と相並んで相當の地歩を占むる爲めには非常な決心をするの必要がある。

中央大學學生募集

○法　科（英法 獨法）　○經濟科

○商　科　○各科大學豫科

●大學豫科の修業年限を延長して二个年とし各科入學期を四月に改め本年四月より實施す●中學校卒業者及同資格者は大學豫科及專門部に無試驗入學せしめ其他は四月二日試驗の上入學を許す●新學年は來る四月八日より授業を開始す入學者は始業前日迄に申出らるべし●學則は貳錢郵劵添附申込あり次第送付す

東京神田區錦町　中央大學

中央高等豫備校生徒募集

本校は高等學校、高等商工業學校、專門學校入學受驗者のため準備教育を施すを目的とす●新學期は來る四月八日より授業を開始す入學志望者は成るべく始業前日迄に申出らるべし●學則及各科目授業擔任講師姓名表は二錢郵劵添附申込あり次第送付す

東京神田錦町中央大學內　中央高等豫備校

萬葉集辭典

芳賀博士の序に曰く

萬葉集の口語譯は、折口君が始めて試みた企であって、それが大方の歡迎を得たことは、同君の爲めにも祝し、又それだけ祖先の歌が、今日國民に理解せられたといふ點に於ては、祖國の爲めにも喜ばねばならぬ、續いて萬葉集辭典が出た。萬葉集に關する著作は澤山あるが、萬葉集辭典といふものも、亦これが初めてである、人名地名から主要な言葉まで解說せられてゐる本書は、口譯萬葉集を離れても、亦一種の價値あるものであると信ずる。

國學院大學講師 折口信夫先生著

四六判美本一冊 定價二圓五十錢

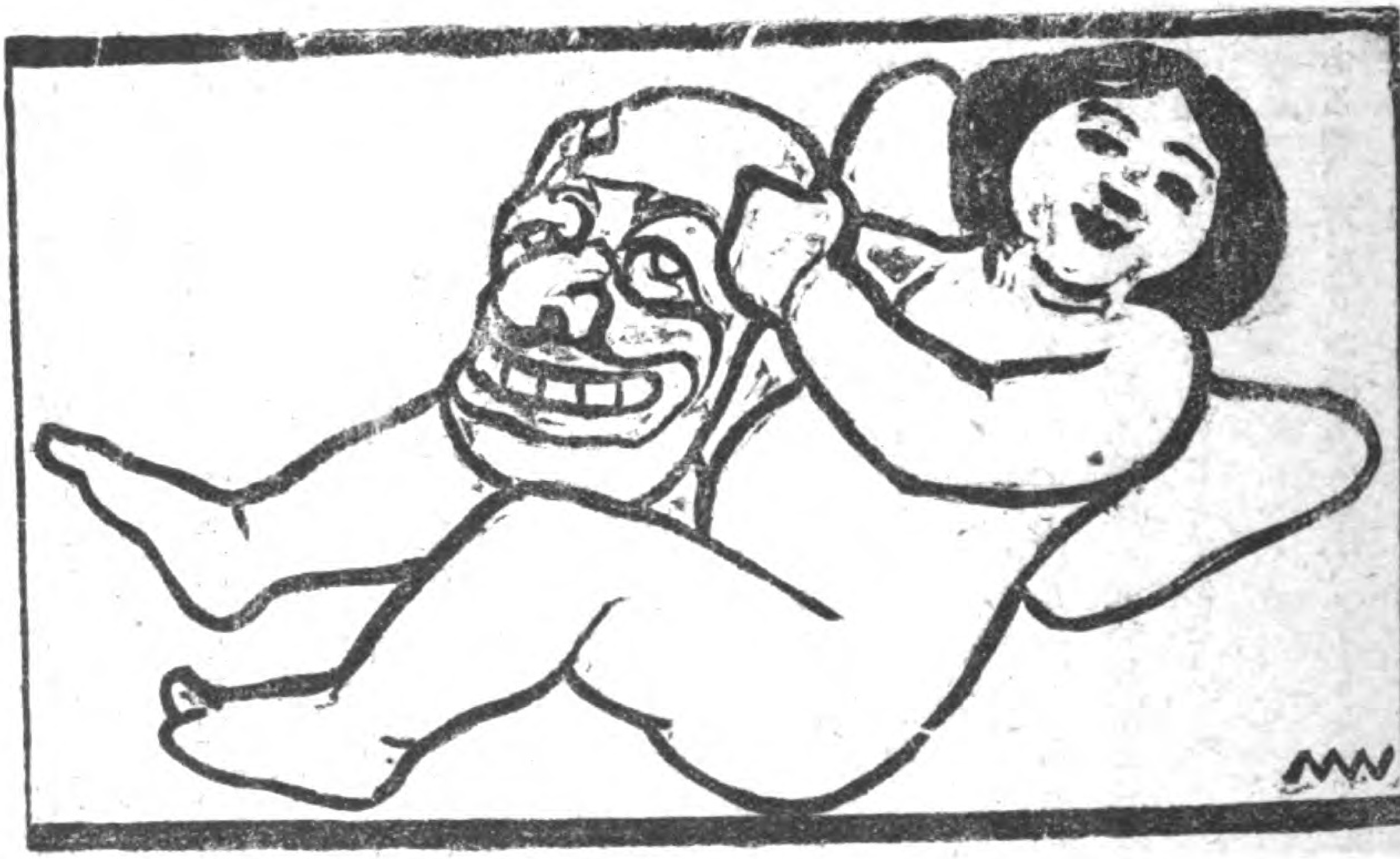
特價 三千部限 貳圓廿錢 送料八錢

- ●日本書史に於て、一新紀元を開く書
- ○本邦最初の語原辭書とも言ふべき書
- ●單語・文章の組織を、解剖的に示し、的確に文意・語意を知らしむる書
- ○文藝作品としての、萬葉集鑑賞の方針を示す書
- ●古代の土俗・傳說の記錄・民謠集としての、萬葉集の新面目を發揮する書
- ○古代の人名・地名辭書とも見るべき書
- ●王朝前期に於ける社會辭彙とも、百科辭典とも稱すべき書

東京神田小川町一

文會堂書店

電話神田三三二一六
振替東京三五一二三



葛飾文章

——童と子鴉と哥路と——

北原白秋

1

その頃、既に田園の季節も夏の眞盛りに近づきつつあつた。

*

銀泥の背景(バック)に紫と群青とのあの光琳模様の花菖蒲が、まさに葛飾の五六月を象徴したものとすれば、七八月は紅い鳳仙花と清楚な白蓮の花の季節に入(はい)つてゆく。その水々しい推移の間を、私達夫婦は先づ先づ平安な、而も至極簡素な狀態の下にその日その日を見送つて行つた。それは貧しい生活ではあつたが、少くとも私達には可なりの幸福な日常であつた。殊に新婚當時であつただけに、私達の眼に觸れ肌に觸れる四邊の風物もまた、絶えず汗ばむだ光澤紙(アートペエパア)のやうな光澤と、新鮮(なま)な生物の香氣と、濡れしづいてゆく様々の顏料の艶めきとで、恰も日にまし豐滿な女人の肉體でも見るやうに自然な而も悩ましいほどの素晴らしい發育を續けてゆくのが感じられた。それは潑溂とした、極めてまた肉感的な平原の畫趣であつた。

*

私達が喧騷な都會の熱鬧場裡から逃れて、その純朴な田園の中に身

を置いた事は、あながち詩人風に我と我が象牙の塔に立て籠るほどの自尊心が有つた譯でもなければ、あながち又、現世を厭ふ佛者の無常觀から發心した譯でも無かつた。無論、今の若さであの隱遁的な閑雲野鶴を極め込まうなぞといふ大雅な心には到底成りきれる筈が無かつた。ただ有體に云へば私は疲れ果ててゐたのであつた。永い間の根の無い水草のやうな生活から、暫くでも落ちつきたい、休息したい、さうして心の底からのびのびとした大きな呼吸がつきたいと思ふばかりであつた。それに妻は病身ではあつたし、彼女にも可なりの保養が必要でない事は無かつた。それで私達は極めて質素な密月遊(ホネームーン)のつもりで、當分のところなるべく空氣の澄むだ、塵埃と煤烟との災から少しでも離れた近郊の勝地に假の塒を定めたのであつた。

*

かうした私達の生活は初めから決して陰濕なものでは無かつた。否、寧ろ明る過ぎるほど開放的で、平民的で、また平原の牧歌的であつた。さうして日ならず私達の家庭には胴魔聲の百姓達が出入り(ではいり)したり、泥まぶれの洟滴らし共が騒ぎに來たりしだした。さうなるとお粗末な台所にも捥ぎ立ての野菜物が大きな燃え立つばかりの綠の葉並を翻したり、かと思ふと、まるで生物のやうなトマトが擂鉢の傍に轉げ廻つてゐたり、梁に吊るしたばかりの大鯰が、棚の上の四角なウキスキイ壜を勢よく跳ね飛ばしたりする事も珍らしくなかつた。

*

そのうちに青い鴉の子と乳酪色の犬ころとが、私達二人の間に割り込んで來た。さうして愈それらが、同じ家族の一員として、純眞な、而も意味の深い日常を私達と一緒に送ることになつた。

哥路(コロ)とはその犬ころのことである。

2

ある朝、可なりお洒落な私は、クリーム色のルバシカに露西亞の地主氣取で紅い細紐を前結びにし、爽かな夏帽子に、輕々と新らしい手籠を携えて、川の向うのIといふ田舍街まで、口笛吹き吹き、肉類や野菜物の買出しに行くのであつ

た。

その日はいつにも增して美くしい空の色であつた。まるで深い光と潤ひとを持つた女の眼のやうないい空あひであつた。

*

八百屋の店先には紅いトマトや、靑と白との太葱、空色のシャツ着た慈姑(くわい)、綠いろのサラダ、胡瓜、甘藍、紫の房の葡萄、それに銀の毛をかぶつた水蜜、藍や黃の南瓜、それらの野菜や果實の新鮮な香氣と色彩とで充ち滿ちてゐた。全く張り出した日覆の外側よりも却つて內側の方が明るい位に見えた。

そのセザンヌの靜物畫の蔭で、私は初めてあの小さな乳酪(バタ)いろの生き物に出會(でつくわ)したのであつた。

私は初め、おや、猫兒かなと思つた。

*

小さな乳酪(バタ)いろの生き物はちよろちよろと動いてゐた。

と、房々と垂れた棍太の尻尾が目についた、思ひきりその附け根の尻から振りきつてゐる……

——可愛いいねえ、狆ころかい。

——いいえ、犬の子。

——何ていふ名。

——ジョン。

ジョンはこの時、下積の木函の角にぶつかりさうになつたので、慌てて橫に向いた。

——何て大きな頭だ。

まるで白粉刷毛(パツフ)の毬(たま)のやうだと私は見てゐた。黃色い粉(こ)おしろいをいつぱいにふりかけたサロメのお化粧の白粉刷毛(パツフ)だ。

おお、ビアズレー。

＊

土間の口には鮮かに蔓と葉のついた舶來種の縞西瓜が轉げてゐた。一つは黄色いお尻を出してゐる…………

ジョンの莫迦々々しい大頭はまたつるりと縞西瓜へ辷りかけて、今度は外路へ走り出した。

見てゐると、小さな四つの足を小生意氣にも二十にも三十にも見せる位の迅さで、その足ばかりが一心に前へ動いてゐる。まるで足ばかしに電氣をかけたやうだ。

その乳酪いろの犬ころが强烈な光線の中で、今にも溶ろけさうに、小さな小さな塊になりかける、と、

――ジョン、ジョン。

白胸掛の肥滿女のお内儀さんが飛び出して行つた。

＊

ジョンが抱かれて來た。

傍へ寄ると、同じ乳酪いろの垂れ耳の一つがチラと淡紅いろの裏側を見せた、と思ふと、青い怜巧さうな眼がそつと此方を覗いた。

奇麗な眼、瑠璃いろの草の實。

＊

――可愛いいちやないかね。

――ねえ、旦那は犬がお好き。

――好きだとも、大好きさ。

――ではお持ちなさいまし。

あまりに無造作に出られたので、此方が吃驚したが、訊けばこの小犬はＨの菖蒲見に行つた歸りに拾つて來たのだと

云つた。誰がと云へばこの裏の鼻の大きな藝妓さんがと云ふ。そして、實は私が好きで貰つて來たのですけど、亭主が厭がりますから、可愛がつて下さるなら差上げてもよござんすといふ。

生れて間も無い小犬はもうその時から厄介がられてゐたのだ。

＊

抱いて見ると、香りの深い、溫かな、不思議な或る重みが私の兩腕を、いや私の靈魂をふうわりと壓へつけた。それは輕いやうで、如何にもデリケエトに感じられて、實は恐ろしい或る底力を感じさせる。それは全く私以外の或る一つの靈魂の重みだつた。

この深い内部からの重い微妙な身動きはどうだ。何といふまたあどけない美徳と邪毒とだ。さう思ふと、何かもう私は妖しい魔法にかけられてゐるのでないか、何かもうこの小犬がある畜類に特殊の蠱惑と魅力とを、私の靈にふりかけはじめたのでないかとさへ思はれた。

抱いてゐながら、私はまたかう思つた。いやいやさうではない。この小犬それ自身が魔法を使ふのでなくて、却つてその魔法にかけられたフエアリ、テールスの小さな銀の冠の王女ではないか。

かと思ふと、地面に思ひきり叩きつけてやりたいやうな、激しい憎惡が胸をついたり、血みどろに嬲りちらしたいやうな變態な性的快感をさへ、私は感じてゐたのであつた。

私はふいとこの手の中の犬ころをひつくりかへして見た。

縮めた兩つの後肢の間に、一つの小つちやな、白の韮花のやうなのがチヨツポリついてゐた。

——雌かな。

——ええ。寢小便して困りますよ。

八百屋の御内儀はせつせと、私の楚のついた手籠にしこたま野菜物を押し込んでゐた。

＊

十分のち、私はすでに俥上の人であつた。膝には手許の葡萄や、葱や泥まみれの馬鈴薯や肉や紅いトマトや、それにアスパラガスの鑵詰やが、みんなぷんぷんしたいい薫りであつた。それに小犬も一緒に搔き載せて、すつかり私はいい氣持になつてゐた。

歸る途々も、私は空を仰いだり、廣々とした青田續きを見渡したり、みそ萩の咲いて鷄の啼いてゐる農家の庭を差覗いたり、思はぬ麥ぼこりに咽せたり、遠くの犬の聲などに耳傾けたりした。

不思議にまた、この小犬を抱いてゐると思ふと、何もかもが清新に見え、耀いて見え、意味ふかく聽きなされた。中にも犬の聲には格別神經がピリリとした。

*

それは明治初年頃の青い硝子畫のやうな風景であつた。その空に白い雲が見え、一本の枝垂柳が見え、その下に涼しい野川の木橋や、鄙びた草葺の一軒家やなぞが青い青い田圃の中に現はれて來た。その家が私達の所謂葛飾草舍であつた。いや、その離れの二た間だけがさうであつた。

母屋には型ばかり田舍向の雜貨が並べてあつて、赤ら顏の肥つた四十五六のお内儀が、いつも長火鉢の前から通りがかりの百姓達と快活に聲高に挨拶したりしてゐる。さうした家であつた。

外庭の井筒のそばには壞れかけの粗末な竹棚があつて、まだ初夏の頃は、そのかげに紫の菖蒲などが咲いてゐたが、今は一重の鳳仙花がチラチラし出してゐた。

その前で私が俥りた時、母屋には不思議にも誰一人居なかつた。ただ大きな白猫だけが、透き徹つたラムネ瓶の前に尾を卷いて、ひつそりと坐つたきり、そのピクピク動いてゐる尻毛の尖ばかりを狙つてゐた。と。

――かあ、………かあかあ。

鴉の聲が二た聲三聲家の裏でした。

もう、お午だ。

子鴉は大喜びで私を迎へた、ぴよこぴよこ、庭の射干の蔭から跳ねて出て來た。その時私は小犬を抱いて横手の小門から恰度入りかけてゐた私自身を見出した。

鴉を見つけると、私は思はず赤くなつた。小犬を手に入れた嬉しさから、私はすつかりその子鴉のことは忘れてゐたのであつた。私はその日に限つて、ビスケットを鴉の爲めに買つて來る事を忘れてゐた。

私の足元に來て、子鴉はまたかあと啼いた。圓い頭を傾げて、可愛いい綠の眼玉を耀かしてだ。

私は手籠を野菜ごと緣側に投げ出してから、小犬を擁えた儘、鴉の前に蹲居むと、一寸片手を伸べた。

——寂しかつたかい、おい。

子鴉は私の掌の下でまた嬉しさうに翼をパタパタさした。而してまた首を突込むと私の白靴の尖を啄きに來た。

その時、強い眞夏の光線は、頭の上の泰山木の葉を透して、私の新らしい麥稈帽子とルバシカと鴉と、犬とに照りそそいだ。そこら一面がまたしんしんとした綠色の反射光で澄み亘つて來る。ただその中に、私の日に燒けた手首だけが、思はぬ紅色に光つて、ただ一つ生いきと鴉の青い翼の上で動いてゐた。

ふつと犬ころが身動きした、と感ずると、私はまた思ひ出した。子鴉にかまけて今度はまた連れて歸つた犬ころの事を忘れてゐたのだ。

小犬はうとうとといい氣持に眠りかけてゐた。それを抱き起すと、兩手でイキナリ前肢を開いて、立てた膝の上からヒヨイと鴉の目の前に突きつけて見た、どうだいいお友達を連れて來たらう。さう心の中で微笑した。

——かあよ、ほうれ。

——ぎやあ。

私が吃驚するほど鴉は驚いて飛び退つた。そして、頭を三角にすると、キツト身構へした。その兩つの眼の光。それは驚駭と恐怖とで一時にギラギラした。而もこの見馴れぬ意外の闖入者に對する、子鴉の態度にはまた既に充分の敵意をも示してゐた。

鴉の太い嘴は、この時その身體と直角になつた。

―ぎやあ。

―ヒユンヒユン。

小犬は慄へて頭の白粉刷毛を振り動かした。思ひきりお凸で鼻低の、その顔を反つくりかへるほど前後左右に捻ぢ向けやうとする、前肢後肢、身體全體が一緒に恐怖と驚駭とでわなわな縮み上る、それがまた私にビシビシ來る。

だが、まだ小犬の靈魂には他の生物に對して頑固な敵意や憎惡を持つほどの自覺はついて無かつた。まだまだ無邪氣なものであつた。

鴉の敵意は今や眞つ黑い憤然に急變しつゝある。私はキつと強い眼で鴉を睨むと、

―おお可愛さうによしよし。

顫へる小犬を抱き直すと、彼女は矢庭に私の胸にしがみついた。

鴉はと見ると、一寸私が下を向いた間に、何思つたか、緣側にパツと飛び上つた、かと思ふと、素速やく、手籠の傍に跳ねて行つて、その中から眞赤なトマトを一つを啄きころがした。自棄くそに、それをまた啄き散らした。

犬と鴉の初對面はかういふ風で、失敗に畢つた。そこには何らの情愛も相憐も無かつた、その時までは。

3

粗々しい、純眞な子供の生活、私はそれをその村に來てから識つた。深く識るとともに驚喜した。罪深い大人の私までが昔に還つた。全く童の心は玉のやうに見えた。

地蜂、彼等は全く地の中から湧いて出た赤頭の地蜂によく似てゐた。而して時とすると地面に火がついたやうにブンブン騒ぎ廻つた。

だが彼等は自由であつた、無心であつた。奔放で、粗雜で、而も全然感覺的で、活潑で、單純で、善も惡も無かつた。彼等は彼等の欲する儘であつた。美も醜も無かつた。凡てが新鮮そのものであつた。眞實ばかりであつた。

慾望的行爲、そこに何等の思慮も辨別も知ら無かつた。

彼等は食ふ時も遊ぶ時も懸命であつた。

全く一心不亂な彼等と遊んでゐると、混濁した私の頭腦までが澄み亘つて、周りから大きな圓光までが立つかと思つた。無論子供の頭からも小さな青や赤や黄や綠の圓光が盛んに燃えあがつて見えた。

近世科學の示すところに據れば燕麥にさへ背光を持つてゐると云ふ。この子供の圓光を疑ふものは眞に大日の下に遊び恍れてゐる無邪氣な子供の頭を見たがよい。彼等がその遊戲の三昧に入つた時、觀る人には彼等子供の姿は見えないで、また、ただ遊び恍れた人間の「生」そのものだけが目に映るだらう。殊にもろこしの葉はピカピカする、雀は全身光の翼ばたきになつて引つくりかへる。さういふ原始的な曼陀羅圖の中に彼等は遊んでゐるのだ。

*

子供は何事をも信じてゐた。而して直ぐ模倣した。

ある時、私は手に竹片を持つて大地をピタピタ叩いてゐる狂人の一人を見た。水が出る、水が出る。さう云つて彼はまたその竹片で大地を突つついた。畑の百姓達は皆聲をあげて笑つた。然し、信念と好奇心とに一齊に燃え上つた子供達は（彼等はイエスの奇蹟を信ずる事に於て敬虔なる聖徒以上に無心であつた）てんでに竹片を持つて、水が出る、水が出る。而して同じくピタピタと大地を叩き廻つた。農家の裏、南瓜畑の中、當り構はず叩いて廻つた。遂には私の庭の中にまでも無斷に押しかけて來た。水が出る、水が出る。ここ堀れシユツシユ。ここ掘れシユツシユ。

子供等はまた、麗日に反射する土手の傾斜面にも群がつて見えた。俳畫的に鍬をうつ頰かぶりの老農のお尻にも彼等はまた窺ひ寄つた。ここ堀れシユツシユ、ここ堀れシユツシユ。

觀てゐると全く、その竹片の尖端から、淸冽な現實の噴水がシユツシユとほとばしつて、そこらの眞つ青な野菜や茶苑や淺綠の灌木林やを突つ拔ける凉味の素晴らしさを感じずにはゐられなかつた。新鮮な田園一面の噴水！

その千條萬條の水煙！

そのすがすがしさは觀てゐるばかりでも私を蒼茫たる太古の原野に端坐した濕婆神の化現たらしめ、而も私の頭上からはまさしくまた印度ガンゲスの長流をたうたうと奔出せしめた。

＊

子供の本質的な事にも全く私は敬禮したのであつた。ある時、私はある子供に檜の葉を示した。さうしてこれが何だか知つてるかと訊ねて見た。彼は造作も無く、ふん、葉つぱだいと答へた。私はまた畑の蕪の葉を指した、

——これ知つてるかい。

——ふん、葉つぱだい。

彼は一言の下に斷定し去つた。

簡潔無類のこの答はどれほど私を恥ぢさしたか。私は改めてこの子供の言葉を、かの解剖分類のみを事とする世の科者共に傳へる。

——ふん、葉つぱだい！

＊

その子供に、私は訊ねた。

——お前の歳はいくつだい。

——おつ開きだい。

その子は片掌を頭の上に上げて、大威張でおつ開いた。

＊

私はまたある女の子に名は何てんだいと聲をかけた。その子は赤つちやけた髮の毛を振り立てて、

——馬だよお！と嘶いた。

鈍栗眼の鼻低の、垢まみれの茶つ葉と肥料の臭ひのぷんぷんする子であつた。

＊

私はまた或る日の午後、それは麗明な、光り輝くばかりの大氣の中でであつた。二人の子供が一匹の青い蛙を奪ひ合つて、懸命に喧嘩してゐた。引つ抓みあつた彼等には、もう天も地も無かつた。ただ組んづほぐれつしてゐた。たうとう、小さな子供が敗けた。而して土手から彈き飛ばされた拍子に頭を棘の中にぶつつけた。血がたらたら流れた。其奴がワアと泣くと、その血と泣聲とを聞いた大きな子供も一度にワアと泣き立てた。

青い蛙はそのとき無論路上に投げ出されてゐた。

勝つた子供が泣いた。而して占領した蛙を棄てた。この心は何か？

青い蛙は勢ひよく田圃の稻葉に飛びついた。

——ぎやあ……ころつ、ころつ、ころころ。

総かな紅い夕燒の時刻が近づいた。

＊

一人の子供が黐竿を伸ばして、ジイッと樹の上の、啼きしきつてゐる油蟬の脊中を狙つてゐた。その子供はそのとき身體全體が一心になつた。

見てゐた私の妻が、そつと私を呼びかけた。

——御覽なさいまし、まるであの子の頭からも、手からも足からも竿の尖點からもじいいと蟬の聲がするやうですわ。

ばかりか、その子供は、黄金色の大日輪の中にも大きな一羽の油蟬をじいい、わしわしわしと啼き出さした。

子供の集注力と眞實とはそれほどの恐ろしい力で突き詰めてゐた。

＊

私がどの道をとろうかと思案してゐた時にある子供が泥まみれになつて、空になつた大きな熊蜂の巣を擁えて走つて來た。私は訊ねた。

——何處へ行く。

——俺が行きたい方へ行くだ。

子供はさつさと、二つに岐れたその一方の草叢道へ駈けて行つた。後さへ振り向かなかつた。駈けて行つた跡には、ただ深い薄の葉ばかりが搖れてゐた。キラキラ夏の光にそよいでゐた。

私はハッと赤面した。

ある子供は隣の畑に生つた小さな西瓜を一つ盗んだ。而して眞紅なその肉を横ぐわえに嚙つてゐた。頰つぺたも口の中も手も胸もその漿液で眞紅になつてゐた。私はさふいふ盗みをするでないと敎へた。すると、その子の答が素敵に放膽であつた、いや眞に無心の境地に入つてゐた。

——俺食ひてえから食つてるだ。

私はまた耻じなければならなかつた。

*

私はある子供に蓮の花が咲いたら持つて來てお呉れと頼んだ事があつた。子供は蓮の花が咲くと、早速白い蓮の花だけをべとべと土泥のついた兩の掌に献げて來た。眞つ白い大きな蓮の花だけであつた。莖も葉もすつかりもぎつて了つた。ただ花だけを持つて來たのだつた。

——花だけかい。

——花持つて來うといつたぢやねいか。

子供は眼をまん圓くした。それは全くだつた。私は花をくれと云つたに違ひなかつた。

*

その子供達はいつも私の爲めにいろいろの草花を運んで來た。時としてそれを門からがさつに放り込むのであつた。その中には馬鈴薯の花もあつた。それは薄紫の生れ立ての蝶々のやうな花であつた。それから褪せかけた蜘蛛の巣だ

らけの薊の花もあつた。それはまるで山伏の鈴懸の坊主々々見たいな花であつた。その他石鹼の泡つぶのやうな花、螢草の花、藍の花や胡麻の花、様々の色と形をした花や葉つぱを爭つて運んで來たが、多くは名も知れない野つ原の雜草の花であつた。それらをまた、笹藪の陰だの土堤下だの、田圃の畔路などから搔き探して來るには、彼等も亦思ひきり泥まぶれにならねば面白くなかつた。

時には紅い粒玉の草苺を小さな掌に溢れるほど持つて來た子もあつた。黄玉のやうな銀杏の實ほどの卵や、綠玉のやうな冷たい光澤の動いてゐる卵なども拾つて來た。

その報酬として、私達の彼等に與ふるものとては些細な駄菓子や金や銀の奴元結などに過ぎなかつたが、それでも何一つ持合せの無い哀れな事も度々であつた。さうした時は、貧しい私共はただ、二人がかりて野良小僧の毬栗頭を撫でてやつたり、青蛙のやうなその水洟を奇麗に拭いてやる丈のことしかできないで、何とも云へぬ淋しい吐胸をついた。後にはふとした機緣から、私はその汚れ腐つた子供達の掌に子供達の望む儘の畫を描いてやることにした。これが好奇で無邪氣な子供達には驚く可き神の奇蹟のやうに見做されたか、その歡迎された事も亦非常であつた、それからそれが毎朝の習慣のやうになつて、彼等は學校へ行く前必ず揃つて私の處にその可愛いい掌をひろげに來た。そこで私も亦彼等の掌に、蜻蛉や雀や赤い土耳古帽の番や、蛇や蛙や蝸牛や、それから新鮮な蕪や玉蜀黍の花などを描いてやるのが何よりの樂しみになつた。さうして子供の生々としたその掌の中で私はまた私の眞劍な藝術の創造に熱注したり亢奮したりした。

さうなると子供の地蜂共も一心になつて、野の花を集めて來る、しまひには擁へきれぬほど兩腕に搔き溜めて來る、私の方でももう活ける花罎も無いので、臺所から擂鉢を擔え出して來て、それに淸水をいつぱいに入れ、そこへ眞白な山ほどの花を投げ挿しにしては、無造作に緣側へ据えたり床の間へ運んで行つたりした。

4

跛の子鴉は初め棕梠繩に片脚を固く縮めつけられて、ただぎやあぎやあ啼いてばかりゐた。その子鴉も亦生れた儘の

野生兒であつた。それが私の處に來るとイキナリ緣側の播鉢の花の中へ飛び込んだり、そこらに眞白な糞を、それは押し出したばかりの油繪具のホワイトのやうなのまでも、所構はずひり散らして歩いた。

だが、いい光澤を持つた青い鴉の子であつた。瑠璃紺の圓い美くしい頭、同じ色した軟かな胸毛、それに親翼を美々しく精密に整へてゐる一つ一つの小羽根の紫がかつた黑繻子の手觸り、それらが彼の寶鎧の鱗稜のやうに細かに重なり合ひ躍き合つて、泌々と撫で下ろすと、その溫かな內臟のほめきまでが深い彈力と精氣とを傳へて、手にほかほかと蒸つて來る、それは高貴な小公子の氣品を自らにして備へた、如何にも氣取つたいい姿であつた。けれども惨たらしいことには、その親翼も三分が一ほどば切りとられてゐて、その羽根の心の一一がまるで鵞ペン見たいにチクチクして居た。

私はこの子鴉に早速公爵と命名した。さうして粗い棕櫚繩をほどいてやり、改めて綠色のモスリンの細紐に着け代へると、恰度紅い花の開きかかつた庭の百日紅の下枝に留らせて置いた。

*

翌日、私と妻とは此の小公爵の爲めに多大の好奇と期待とを以て、ピカピカする小さな絹帽を製へにかかつた。それは胃散の圓筒に紺紙の頭をつけて漆黑の絹糸を隙間なくかがつた、光り反るばかりの如何にも高慢ちきなものであつた。だが、愈々公爵の可愛いい黑い頭に冠せることになると、此の節度の正しい小紳士は惜しいことには忽ち驚いて了つて、その花結びにした喉元の着け紐を太い嘴で引きちぎると矢庭に頭を一振り振つて跳ね飛ばして了つた。

私達はそれには腹を抱えたり落膽したりしたが、今度はまた銀まがひのニッケルの小鈴を一つ、その頸根つこに無理に結はへ着けると、その思ひがけない鈴の音に子鴉はよほど驚いたものか、それが自分の喉元に鳴つてゐる音とは知らずにたまらず庭中を逃げ廻る、リンリンリリリン、リリリン、鳴れば鳴るほどぴょんこぴょんこ駈ける、それはをかしな後姿であつた。然し公爵は流石に聰明であつた。彼は何時の間にか閑寂となつて、注意ぶかく小耳を傾けてゐたやうであつたが、氣がつくと、思ひきり嘴を顎の下に突き込んで一心にその着糸を引り張り上げる、やつと小鈴を啣えて眞上を向かうとする、するとキュッと喉首が締めつけられて、くわあくわあである、眼を白黑させる、しまひには嘴の眞ん中

にただ一つ銀の小鈴を啣えたきり、深い暗い蜜柑の木陰で、その儘立ち竦みになつて了つてゐたが。

その時初めて、鴉の口は眞赤だなと、私も驚いた。

＊

生物の本能はその食慾の目覺めから初まる。子鴉も亦絶えず食を欲しては、その眞赤な口ばつかり引き開けてかあかあ啼いた。それでゐて田螺の鎧一重でも突つきつぶす術さへ判（わきま）へなかつた。で、私が代つて丁寧に田螺や蜆を叩きつぶす、するとその殼の裏が意外に瀟洒な薄紫色の粉々に碎けて、とろりとした人間の腦味噌のやうな、澡汁のやうな肉が出る。そのひくひくと生きてゐる肉塊を指に抓むで放り投げると、子鴉は木の上でハツと受ける、その精確と巧妙さは、稚い乍らに既に靈魂の叡智と貪婪な餓鬼道の妄執とを充分に體得してゐた。

彼がまた木の上にゐてその食物を待ち構へる時の形相と云へば無かつた。その圓いあどけない頭はキツと三角に尖り、眼は恐ろしく光つて何時も火のやうになつた。

凄い無氣味な畜生だと私は思はず戰慄すると、急に憎らしくなつて、またべらべらの田螺をたゝきつけた。

私はいつもは白い飯粒ばかりを固めて放うつてゐたが、子鴉はまた人間のやうにその米の飯を喜んで食べた。

私はまた紅いトマトの肉に手荒らく拇指を押し込むと、ぐいぐいむしりながら、まるである種の女との甘い溶けるやうな接吻の快味を感じた。さうしてさう思ひながら放うりつけると、それをまた、あの小さな子鴉が大喜びでぐつと呑み込んで了つた。

眞つ青な蝗の飛び跳ねてピチピチした奴をまた叩きつけると、彼はそれこそ翼をばたばた搏（はた）いたり、があがあ啼いたり、夢中になつて矢庭に躍りかかつて來たりした。

益憎らしくなつて紅い緋色のダリヤを投げつけると、キツと嘴で受取つた、その黒い鴉の美しさと云つたら無かつた。

そして、それが食べられない不愉快な妙な惡戯的なものだと知ると、今度は兩脚で確乎と押へて、恐る恐る、また腹立

たしく、果ては自棄くそまぎれにその燃え立つやうな緋色の花瓣を一つ一つ、盡くまた嘴で引き斷つて、おしまひにはその青い花莖ばかりになつた奴を、スポツと木の上から蹴り飛ばした。

＊

然し親の鴉を知らない子供の鴉は、かうして人間から可愛がられると、さうした人間との本來でない自分の生活が全くの眞實であり、當然の攝理であるかの如くにさへ信じ切つてゐるのが、人間の私から觀ると、氣の毒にもいぢらしくもあり、溜らずまた可愛ゆくもあつた。

子の鴉は無論私達を實の親のやうに思つて甘へた。

私達もまた固い一顆のビスケツトを含ませるにしても、よく嚙み碎いて、それを自分達の唾でもつて更に軟めて食べさせた。人間の唾の味ひを鴉の子もまた自分の唾で味つて、大喜びて舌鼓をうつ。さういふ事からかけ離れた生物の間にも自然と深い情愛が移つてゆくのが感じられた。

さうなると畜生の感覺も、その自分の愛の對照物に向つては、殆ど靈的に鋭く磨かれて來るやうに感じられた。その聽覺の鋭さはまた、私がたまたま遠くから歸つて來る時など、二丁も三丁も先からとくに私の足音を聽き知つて、見えもしない藁家の日蔭からかあかあと啼いて喜びきつてゐた。さういふ時は私もまた極つて、その鴉の爲めに何かの御馳走を背廣の衣嚢に忍ばせて歸つて來るのが習慣にさへなつて了つた。

日にまし馴染みが深くなると、私はいよいよその脚の紐を解いてやり、別に飛び去るだけの親覺も生へ揃はぬので、その儘自由に鴉は鴉で遊ばせる事にした。さうなると、いよいよ附け上つて來て、私の室には躍り込む、机の上には上る、朱墨やインキ壺はさらつて逃げる、糞尿は爲散らかす、次第次第に粗暴な、そして惡戯な本然の性分を發揮して來た。私は私で腹が立つたり、小五月蠅かつたり、時としては憎々しく引つぱたく事さへあつたが、しまひには何時でもおやおやと呟やき乍ら、つい書きかけの詩の反古であちこちとそのべとべたの鴉の糞を拭いて廻らねばならなかつた。

たまには緣側にとつとと追ひ出して置いて、障子をピタリと閉めきつて置くと、今度は頑是のない赤ん坊のやうに障子を突き破る、叱るとますます調子に乗つてバリバリやる、頭を出す、始末に了へないので思はず追ひ落しに行くと、忽ち、痛いと云ふほど私の手の皮を突き破つた。

「あつ痛い、何を爲る。」

思はず手首を押へると、血がたらたら出てゐるので急に私も身構へすると彼奴のまた凄じさと來たら、全く小びつちよの鴉と思へないほどの辛辣と敵意とから、今にも飛びかからんばかりの姿勢を示して同じくキツト身構へた、その既に凶惡な芽しを爛々と滯ませた兩眼の底光りは、それは全く本物の野鴉に相違なかつた。私は戰慄し乍ら、怒りにまかせてまた此の畜生に人間の激しい言葉で叱りつけた事を、ふいと氣がつくと急に獨りで赤面するやうな事が度々であつた。

それでも、私が蒼い顏をして臥てでもゐると、子鴉もまた何かしら心細い雰氣にうたれるのか、終日翼をすぼめて私の枕元に纏はつてゐたり、おとなしく私と何かを食べあつたり、かと思うと、つまらなさうに私の汚れた搔卷の端なぞを啣えたり突ついたりした。

それは恰度、「起きておくれ、起きておくれ、」とでもせがむやうな樣子にも私には見えた。さうなるとまた可愛いいものだと私も泌々して來た。

また、かういふ眞つ晝間もあつた。

私も妻も二人出拂つて、誰一人もゐないひつそり閑とした室の中に、そつとまた二人が歸つて差覗いて見ると、子鴉がたつた獨り、紅い一個のトマトを、聲も立てずに突ついてゐた、ぽつねんとした、それは寂しい姿であつた。

その子鴉を、日が暮れると私達は緣の下の四角なビールの空函に溫かな寢藁を敷いて、いつも寢かすことにしたが、鴉はその中には寢ないで、いつも亦その函の角のところにカツキリと留つてゐた。

夜が明けると、まだ濃やかな眠りの外から、それが雨戸をコツコツコツコツと突つく、

――起きておくれようコッコッ、起きておくれようコッコッ。

それはほのぼのとした、目の醒め際の幽かな幽かな訪ひであつた、而も刻みをつけて、而も冷たい透き徹るやうな音で、泌々と突ついてはまた、深々と内のけはひに耳傾ぶけてゐるやうな、虔ましい鶏の訪ひであつた。

その時、眠の醒めた私がそつと雨戸を開けてでも見ると、きつと夜明の狹霧に濡つた靴ぬぎの上には横を向いて、竹垣の向うの青い稲葉のそよぎや吹く風の方向を森閑と凝視めてゐる子鶏の姿を見かけぬ事は無かつた。

子鶏もまた、私の姿を見ると、激しく両の翼を羽ばたかせ乍ら、思ひきり朗らかな聲で、かあと一聲啼く。

――かあ、かあ。

私もまた鶏の聲で朝の挨拶をかはした。

鶏は全く、一しきり私達の愛を専有してゐた。あの犬ころが來るまでは。

5

突然、私が見馴れぬ犬ころを擁えて入(はい)つて來た時は、まあと、その可愛いゝ白粉剃(ユッブ)毛の大頭を覗き惚れてゐた私の妻も、いざこれを飼ふとなると一寸眉を顰めて私の方を見た。それを見ると私も一寸有頂天の鼻先をへし曲げられるやうな暗い感じがした。

新らし物好きの我儘屋さん、またそんなものを擔ぎ込んでどうなさるおつもり、鶏一羽だけの世話でも大變なのに、おやおやと、その眼がキッと私をたしなめてゐるやうに見えた。

全く、私は物臭の珍らしもの好きの我儘者であつた。で自分の氣の向く時は子供とでも鶏とでも夢中になつて遊んだり無性に可愛がつたりする癖に、いざ日日の細かな面倒な世話事になると、全部妻に負はしたり逃げたり忘れてゐたりした。だからさう極めつけられると全く一言も無かつた。思はず面が赤くなつて了つた。

ではねと妻の方が折れて出た。

――鶏の方は私が御相談なしで貰つて來たのですから私が面倒見ますわ、犬ころの方はあなたが貰つていらしたんで

すから、あなたのお役よ。

——いゝとも。

——ほんとでせうね。

——ほんとさ。

——ほゝゝゝ。

お出來ならやつて御覽なさいまし、拜見しますわと、彼女の眼がまた笑つた。

うふんと笑つて私は立ち上つた。さうして犬ころを兩手で高く一緒に差上げた。面が眞赤になつてゐた。

——赤くなつた、赤くなつた。

妻の方でまた冷やかし初めた。可なり意地惡な揶揄的の眼付だ。私の面は益々赤くなつた。

實際私達の家族は皆すぐに赤くなるから困る。私の父にしてからがすぐに何かと子供のやうに含羞んで了ふのだつた。私もさうだつたし、私の弟も妹もさうだつた。それで皆で寄ると、何かで一人が赤い面をするとすぐに皆で赤くなつた赤くなつたと囃し立てる、囃し立てられると、益朱紅のやうになつて了ふのだつた。その癖皆の方でも一緒に眞赤になつて了つてゐた。

——ぢやあね、よう御座いますわ、私がみんな面倒見てあげますからね、どうせ私は赤ん坊さんのお守よ。

——難有い。しつかりやつちよくれ。

私は思はずサロメの白粉刷毛に頬ずりした。

*

その日一日私は犬ころ相手に獨りで巫山戲け散らしてゐた。而して、その赤ん坊の生物を手毬のやうにいぢくり廻したり、キヤンキヤン啼かしたりしてゐた。

——大きな赤ん坊さん、泣かずにお遊びなさいまし。

さう云つて、姥がお八つに蒸かし立ての馬鈴薯に乳酪をつけて、運んで來た。

——さあお食べ、私とお前と半分づつだよ。

さう云つて私は無闇に、ほかほか煙つてゐるその馬鈴薯を犬ころの小さな口の中に押し込んだ。犬ころは眼を白黒さして苦しがつた。

夜になつて青い蚊帳を吊つて、螢を二つ三つ散らして寢た。すると、犬ころが誰より眞つ先きにもぐり込んで行つた。青く光る螢は時折その犬ころの耳朶の毛の間に留りかけては燦々と光つて、また、私の黑天鵞絨のくくり枕に生きた奇麗な刺繡模樣を緣取した。

犬ころはその晩から安心して初めて逢つた人間の家で、同じ蚊帳の中で、同じ螢の燐光の下で眠つた。

あの眼の光るは
星か螢か鵜の鳥か、
お星樣なら拜みませう、
螢ならばお手にとろ。

私もまたすやすやとした夢の中で童の頃のあの首の赤い螢の子守唄を聽き耽けつてゐた。赤い蒸汽の船腹や黑猫の金の瞳や生膽取や風船玉やいもりや松脂のにほひや阿蘭陀時計の振子の音や水銀の玉や、刈麥のほめきや骨牌の女王や鵞鳥の卵やがまた私の夢の中に入つて來た。それはその晩終夜また祭のお囃子がきこえてゐたせいかも知れぬ。私は折々眼が醒めて、私の裾に寢てゐる犬ころの方を差覗いて見た。而してチリチリと振鳴らす小鈴の音に微かに耳を澄まして見た。

その小鈴の音こそ、庭の百日紅に留つてゐる子鴉の首環につけた二つの銀の小鈴の響であつた。子鴉はさうした夜びて蚊に羽蟲に攻められて幽かに幽かに身動きするのであつた。

翌朝私はすぐに犬ころを捕へて行つて、百日紅の下から木の上の子鴉に再度の紹介をする事にした。ほうれと抱いて見せると、上ではイキナリ嘴を固めて小犬のふつくらした横腹のあたりをコツリとつついた。小犬は痛苦と恐怖とでキャンキャン泣きしきつた。私は思はず鴉を搏く(はた)と彼は紐ながら眞逆様に轉げ落ちて宙ブラリンにぶら下つて了つた。その時、恐ろしい兩眼の憎惡と嫉妬と怨恨とが逆さに釣り下つてキツトと下を睨み据えてゐた。眞黒な逆さ頭の眼の光り。私はまた憎らしくなつて張り飛ばすと、死物狂の子鴉はぐわつ、ぎやあと叫び乍ら、いよいよぶらんこのやうに宙で躍つてゐた。紅い上枝の花びらが雨の如くまたその上にふりかゝつた。庭が眞紅になつた。

私はまた鴉がいとしさで溜らなくなつた。而して慌てゝその大揺れに揺れてゐる脚の紐を押しとどめて、鴉を木の上にそつと留らせると、彼はいかなこと、一層意固地になつて、その上の枝上の枝とのぼつて行つた、紐がくるくる枝に巻きついた。

鴉はまた首の廻らぬ苦しさから、ぐわつぎやあと上の方でほざき立てゝゐた。

で、また今度は木の根につないで置いた。すると愈自棄くそになつて、そこらの盆栽物や草花の鉢やを引つくり返したり思ふ存分踏み荒らしたりした。

＊

だが、私は暇さへあれば、どうがなしてこの鳥と獣とを仲よく遊ばしたいものだと心を苦しめてあれこれと工夫してゐたが、それは全く人間の罪深い思ひ過ぎに過ぎない事を知つた。

空を飛ぶ鳥は、全く人間ほどの邪智は持たなかつた。鴉は直ぐにその後から憎惡も怨恨も敵意も嫉妬も忘れて了つた。私がその翌る日、同じ地の上に双方の顔を突きつけて遊ばせるともう何ちらも驚きも怖れもしなかつた。兎に角その頃は雅がまだ大きかつたので、弱蟲の小犬位は何のこの小僧がといふ風に鷹揚に構へてゐた。一方何の思慮も無い無邪氣な小犬はすぐにも鴉に甘へかかつた。鴉はそれでも今は爭はずにただ五月蠅さうに首を横に向けたり尻尾を外(そ)らしたりした。小犬はますます調子に乗つて、飛びついたり、逃げたり、しなだれかかつたりした。で、ともすると鴉はコツリとした。

小犬の横つ腹をつついて置いて、そして澄ました顔をしてゐた。それでもそれはさほどの痛みもない、ただ軽いコツリであつた。

鴉ももう御愛嬌の巫山戯好きの犬ころを今はもう大目に見て許してゐたのであつた。いい工合だと私は微笑してゐた。

*

二日目にはもう何ちらも更に親み合つてゐた。

鴉が落ち散つた百日紅の花びらを嘴でふりかけると、小犬は前肢でぱつと同じ落花を弾きかけては飛び廻つた。

——さあ、散歩だ、一緒に行かうよ。

私が鴉の紐を取つて土手を歩いてゆくと前になり後になりして小犬は振り返つた。試しにその紐を小犬に啣えさせると、喜んでそれを啣へて駈け出して行つた、すると子鴉はぴよこぴよこ引つ張られて跛ひきひき跛いて行つた。私はとある駄菓子屋の前を通りすがると、初めてその店でビスケットの幾つかを買つて鴉と犬とに食べさせた。どちらも大喜びであつた。

かういふ事が二三度あつた後、鴉も犬も、すぐに駄菓子の函が目につき、飴ちよこの赤い舌出人形を知つて了ふと、私より先きに、小犬が鴉の紐を引つ張つて、その駄菓子屋に駈け込んで行つた。而してすぐに敷居の上に飛びあがつてがあがあとかヒユンヒユンとか啼き立ててゐた。店のお内儀さんはこれ幸に色々のものを彼等に賣りつけてゐた。彼等はまた通りすがりの駄菓子屋といふ駄菓子屋には一軒のこさず立ち寄つてゐた。而していつも大騒ぎしてゐた。さうして後からのそのそ行く私に一々お代を拂はしてまた先へ先へと走つて行つた。

彼らのお小つかひも並大體ではなかつた。

*

子鴉を公爵、小犬を初め私達は乳酪と呼んでゐたが、呼んでもどちらも澄ましてゐた。かあと云へば鴉はかあと返事するし、ころと呼べば犬ころは直ぐに走せ歸つて來た。やはり自然のままがよかつた。それで私達はその後は一を鴉公

一を哥路と呼ぶことにした。

＊

その後鴉公と哥路との親密は日にまし深くなるばかりであつた。鴉公が朝、目を醒ましてコツコツと雨戸をつつく、その音を眞つ先に聴きつけて、身を起すと、また眞つ先に蚊帳の中から飛び出るのはいつもあの小さな哥路であつた。而して私達の眠りの深い時、彼等は重い雨戸の外と內とで、つついたり引つ搔いたり、身悶えしたり、双方から更に深く聴き入つたりしてゐた。

私達の夢の深くなるだけ彼等相互の愛情は深くなつて行くかに見えた。私は時折、同じく目は醒ましながらもわざと彼等を苦しましたり、悲しがらせたりして、眺めてゐた。

＊

哥路は泥足の儘自由に私達の室に上り下りしてゐたが、悪戯者の鴉公は容易にその紐を解いて貰へなかつた。彼は時時その苦しさ不自由さとに耐へ兼ねたか、その嘴でいつもその脚をつついてゐた。

哥路の寢床はその頃まだ私達の蒲團の裾を分けて貰へたが、鴉公は雨でもふらなければ容易に床下に眠かされなかつた。大概彼は木の上に留つてゐた。

哥路も四五日すると、緣側のそばの流しの臺の上に寢かされねばならなくなつた。その臺の上には涼しい風が通ふし、子供達の運んだいろいろの花毛氈が敷いてあつたが、それでも初めの晩は外から啼き啼き、終夜雨戸を引つ搔いてゐた、その悲しい情けない聲は無かつた。私はまた溜らなくなつて、內に入れたり抱いて寢たりした。

それでもおしまひにはたうとう諦めたかして、雨戸の外ですやすやと可愛いいびきさへきこえてゐた。

後には双方とも一緒に床下の同じ木函に眠る事になつた。その頃はもうどちらも片意地を張らなかつた。

＊

だが彼等は流石に畜生であつた。彼等が食に餓えたら最後、もうそこに愛も親和も無かつた。親友でも何でもなかつ

た。忽に彼等は敵同志になつて、必死になつて噛みあひつき合ひした。饑えてゐない時も、てんでの白い西洋皿にその食餌は如何に豐富であつても彼等は他の食物を奪ひ合はねば承知しなかつた。而しててんでのお皿には少しも口をつけなかつた。ただ他のもののみを羨望したり占領したがつたりした。

――何といふ情けない奴どもだ、そこらの人間によく似てゐる。

私は私の妻とつくづく眼を見合せて悲しんだり憤つたりした。

*

他に對する羨望嫉視の情は、彼等の食慾以外にも容易に觀る事ができた。たとへば、鴉が細い枯木の小枝かなぞを見つけ出して來て大威張でゐると、すぐに犬の方で飛びかかつて行つた。かと思ふと今度は小犬が竹の棒でも啣えて喜んでゐると、鴉が口惜しさうにその向うの端を嘴で捏ね上げる、犬がまたそれを捻ぢ返す、遂には鴉の方で焦々して來ると竹の棒を放つて置いて、嘴でそこら一面に落葉や花瓣をふりちらす、犬はついとそれを避けて、反對に鴉の尻尾を狙つて一寸とちよつかいを出して置いて、鴉がムキになつて憤り立てて待ち構へてゐると、その間に犬の方でははつはふつて逃げ出すと、それは可笑しいほどお調子に乘つて、先づ庭いつぱいにくるりと大きい一圓周を畫いて來る、かと思ふと、一寸とまた巫山戲かかつて置いて對手が振り向く間に、きよたくさして駈け出す、また示威運動を一と周り、息せき切つて、それは面白いといふ風であつた、憤りつぽの鴉、！お跳ねの小犬！

然し、何れも木の枝や竹片が何らかの食慾をそそらぬ點に於て鴉の憤怒は恬淡であつた。小犬はもとよりであつた。要するに彼等は必死に何事かによつて遊び恍れむと欲したのである。小犬はその慌ただしく駈け廻る寸時に於ても、さも心から戯けて笑つてゐるやうであつた、而して時折彼女は彼女の愛する且は又唯一の監督者たるその主人公の顏をチラと振り仰ぐと、これ見よがしに狂ひ廻つてゐた。鴉もまたその角ばつた立往生の幾分時はさもだんまりの自雷也の如く、呪文を唱へて何かの恐ろしい眞黑い妖術でも凝らしてゐるかのやうに見えた。

田圃の青い稻葉にかの青い蝗がしやうしやうとして盛んに湧き出す頃になると、鴉の食慾も愈眞つ青になつて燃え上つた。

蝗が稻葉に湧き盛つた。然し鴉公は初めその蝗を知らなかつた。さうしてその美味であることも、新鮮な食物である事も。

初めは小供共が手に一匹づつ握むで來た。綠の鬚線の翅線の手肢を持つ生きて勢よく飛び跳ねる何物かが、彼等の手から綠色光の拋物線を畫いて飛んで來る時、鴉は非常に驚いて飛び退つた、その時その蝗はうしろの稗草の葉に飛びついて了つた。而してその葉と一緖になつて了つた、たゞその一面の草の葉のみが光り耀く鴉の背景を奧深くした。第二の蝗は飛び損つて鴉の嘴にぶつつかつた。而して目が眩んで地面に落ちた、それをおづおづと足に壓へて見た、ピチピチする、それを嘴でつつ突いて見た、甘い、素敵だ、これが初めで、蝗とさへ見れば彼は思ひきり翼を羽ばたいで、かぷと嘴を前のめりに突き出して受けた。その俊敏!

その頃、垣根越しに見渡す田圃といふ田圃は蝗採りの人達で殆ど群をなしてゐた、ある時、私の妻が、透明な正宗の瓶に蝗をわしやわしや詰め込んで歸つた。瓶ごと鴉に見せると、その喜び方と云つたら無かつた。瓶の口は小さくて一匹づつの出入しか自由にならなかつた。栓を拔くと忽ち一匹づつ苦しまぎれに飛び出して跳ねる、其奴をキツとなつて持ち構へる鴉の物凄さは寧ろ見てゐる人間さへも慄へ上るほどの眞實一點の凝念であつた。かゝぷ、その精確さも確かに本質的な雋銳さを極めてゐた。瞬く間に一匹づつかゝぷかゝぷかゝぷと嘴と、眼と頭と一齊に働かして一匹逃さず受取つて了つた。後には瓶を逆樣にして激しく振り出す、四方八方に飛びちる蝗を又、四方八方に眼を凝らして、かゝぷかゝぷかゝぷかゝぷ、その素速さ、その巧妙さ。此の子鴉がと思ふとまた私は頭へあがつた。

――おや、あれは。

――おや、ああ、鴉公ですよ。

庭の奧のとある橘の木の茂みでくるつくるつころろろろろ、くるるるるる、と暢達な、而も婉轉骨脫な、轉いらり

ゐれろの音の、アクセントのうまい、あの佛蘭西語の會話でも練習してゐるやうな、或は巧妙な役者の獨臺詞のやうないい咽喉まはしをくるつくるつところがしてゐるものがあつた。姿は少しも見せないで、ただ聲ばかしを聞かしてゐるのであつた。いや聞かしてゐるのぢやない。全くの獨稽古で自分で自分に聞き惚れてでもゐるやうであつた。見ると、それは橘の木の恰度中ほどを一面に蔽ひ重なつてゐるその青黑い厚い葉の裏から聞こえて來るやうであつた。でなければあんなに彼處だけが内から湧いて搖れるわけがなかつた。その搖れに搖れてる葉と葉から強烈な日の光は照り反され、あらゆる夏の耀きの深みへ、その聲が傳はりゆく、あの聲は何だ？私達はしばらく聞き惚れてゐたが、やつとの事で、あの聲は家の鴉公だ。

鴉はかあと啼くばかりだと思つてゐた私はこの新らしい發見に非常に驚かされたのであつた。何といふ悦に入つた聲だ、鴉はすつかり上機嫌で、自分の少しづゝ膨らむでゆく聲帶の變化を不思議がつたり大喜こびしたりしてゐるのであつた。殊にまだ鴉公は鴉仲間の複雜な言語の操縱を知らなかつた。彼は先づ自分一人で全く自分の言語を創造しつゝあるのであつた。

*

――おや、奧さん、哥路が吼えてゐますよ、まあ。

母屋のお内儀さんの快活な聲がすると私達は驚いて飛び出して見た。兎に角變なお尻をおつ立てゝはゐるものゝ、盛んに吼え立てゝゐる。

――ワン、ワン、ワ、ワン。

彼女は見るところ全く有頂天になつて躍り廻つてゐた。彼は全く躍りあがつて、手當り次第に吼え廻つてゐた。田圃の傍の河楊の葉が白く風に飜ると吼え、數珠玉の葉がその實と一緒にさららと鳴つても吼え、遠くの人聲にも面白がつて吼え、子供にも吼え、駈けてゆく自轉車にも軒端の雀にも吼え、はてはくるくる廻り出しては自分の尻尾にさへ吼え立てゝゐるのである。彼女も聲變りの時節が來た。犬族らしい犬の聲で、思ふ存分これから啼ける、話せる、

月蝕い奴は怒號つけたり、脅かしてやつたりできる、威張つてやれる、さう思ふと嬉しくて嬉しくてたまらないと云つた風であつた。私達は顏を見合せて笑つた。

——おや、おや、哥路も隅には置けぬぞ。

店の方ではお內儀の哥路にお愛想してゐる元氣な聲が、その時聞えてゐた。

——哥路や、もうお前もなア、泥棒のお番ができるやうになつたゞぞ、なつたゞぞ。

＊

6

そろそろ夏の盛りが傾く頃には、私達も愈その葛飾の土地に深い親しみを持つやうになつてゐた。而して慶ましい落ちついたいゝ心の底に何がなし物寂しいあはれさをも感じて來た。

それに自分の家のあの子鴉との情愛が深くなればなるほど、空をゆく外の鴉の啼聲までが親しくきこえ、またあの犬ころとの情愛が濃やかになればなるほど、通りすがりの野良の痩犬にさへ私達は溫かな優しい目付を送るやうになつた。子供共のことはもとより、その親達とも日にまし近しい朝夕の挨拶をかはすやうにもなつてゐた。

何かの機縁から眼が開けると、今まで無關心だつた自分達以外の鳥獸の異つた世界のこともよく靈の奥底に響いて來るものだ、それはおそらく私ばかしではあるまい。

殊に日明寵愛してゐる自分の家の鴉や犬の六感七情は痛切に私に感じられて來た。向うでもまたよく私の言葉を細かに聽きわけてうなづいて來た。

一羽は空を飛ぶ鳥、一匹は地に飼ふ獸、これを兩手に愛しむ私の心は絕えず動搖したが、それでも向うでは私一人を賴りにした。

そればかりでなく、犬と鴉とも次第に憐れみ合ひ慰め合つて、日ましに馴染みが深くなつてゆく。さうならなければならないのだ、さう鴉は心の中で獨言して思はず會心の笑みを獨りで洩らしながら、さうだねえ、私達もと妻の方を折

々振り返つた。

一つはこの世の季節がさういふ靜かな方向へ私達を導いてゆくのであつた。

その時身に觸れ肌に觸れる何物もが、私の寂いの上にまた、いゝ沒藥と香料とを降りそゝいでくれた。

*

秋が來た、私の草舍の前にもいつしかと香りの深い乾草が山のやうに積まれた。さうしてその上に啼く鴉の聲までがいよいよ秋らしく耳に徹つて來た。あちこちの玉蜀黍やもろこしは刈り倒され、野には稻の穗波が次第に黄色くなりかけて來た。椋鳥や雀が日ましにまた群れ騷ぐやうになると、時折鋭い百舌の聲までが空の向うに澄みきつてきこえる、秋が來た。つい筋向うの工夫の小屋に黄色い花の咲いてゐた絲瓜の棚にも幾つかの青い絲瓜が下つて來た。いつも裸で乳酪色のたころを抱いてくれたその家の女の子も今は單衣を着せられて、函車に乘つて、その兄の子から土手の一本道を曳かれてゆくのも見えた。蕎や稗草はまだ青々しくそよいでゐるが、吹いてゐる風はやはり秋の風らしく心を形にあらはしてゆく。それにまた私の庭の古池のうしろを過ぎて綱手曳き曳き上つてゐた野良の肥舟も今は日一日とその數が減つてゆくやうである。いゝ季節が來た。私は今安らかに凡てを愛し愛されてゐる。大きな自然の愛の中に。

と、私はある日ある親しい友達のもとへ便りをした。

*

それに、ひとりで緣側の端などに出て、しみじみとラムプのホヤでも掃除してゐると、高い夕燒の空を一羽一羽と早渡りの雁金の影さへ急いで行くのが見えたり、夕明りの稻田の遠くでまだ獵銃の音なども聞えて來たりした。

紅い緣のついた紙笠のラムプに火を照す頃になると、きつとまた村の若い百姓達が門から覗きに來た。

――唄は出來たかね。貰つて行くべたか。

それはかうした風の鄙唄であつた。

雁が啼きます、油買ひに行たら

火の見櫓の夕燒に。

月が出ました、油屋を出たら、

遠い水田の寒空に。

何かのついでに私が彼等のために在所風の草刈唄の一つ二つを作つて與へた事があつた。それが何時の間にかお極りのやうになつて、日さへ暮れると彼等が一つづゝ新らしい小唄を貰ひに來た。私が作つた唄を、私はよく茶の間の窓から障子を開けて、赤い大きい月の土手道を歌うてゆく彼等の姿に見惚れてゐた。月の光が私と私の妻とに流れて來た。

彼等は私の作つた鄙唄をてんでんに自分の野良の節廻しで歌つて行つた。

*

何もかもが、さうして平安に推移してゆく間に、私の周圍にも、また色々の哀れな事や卑い事や寂しい事やが次ぎ次ぎに殖えて行つた事も本當であつた。

夏のほどはまだ、青葱畑の小さな破れ小屋にいつも青い古蚊帳を吊りつぱなしに寢てゐた中風病みの女隱居も、いつのまにか亡くなつたといふ噂をきいた。誰一人からろくに看護もして貰へなかつた、たうとうあの人も死んで了つたとも聞えて來た。

土手下の白い老猫のやうな眼の圓い皺面の煙草屋のお婆から私は幾度となく同じ煙草の代を騙り取られた事も、時とすると激しい憎惡の一つとはなつたがそれかと云つて、その前をたゞ知らず顔に通り過ぎることは私にも妻にもできなかつた。

——お婆さん、また敷島を一つ貰ひに來たよ。

その紅い Tobacco の看板下にはつかえるほど、以前は玉蜀黍の新鮮な花穗のさきが揺らいでゐたものだつたが、いつのまにやら切り倒されて、黄になつた鳳仙花の裏の壁塀だめでは、哥路までが、何がな彼がな空腹さうな小鼻をひくつかせてはたゞ矢鱈に掻き探してゐた。いくら私が叱つても小犬はまた容易に私の傍には歸つて來なかつた。

お馬はお馬でまた、萎びた葱などを五六本擁えて來ては、狡るさうな意地汚な鈍栗眼をくるくるさした。

——これやるだよ赤ん坊のおしめにするだから、何かおくれな。

遠くの畑ではそのおふくろが、また盛んに背後から手招きしてゐた。

——さうだ、さうだ、しつかりおやんな。

お向ふの工夫のお內儀（それは不相應なほどお洒落の女だつた）は、時折これ聞えよがしにその厭味な金きり聲で呼び立てゝゐた。

——鮪のお刺身を二人前だよ、ねえ魚屋さん、鮪のお刺身だよ。

——今日はねえ、牛肉を一斤買つて來たから、お豆腐を一丁置いといておくれよ。

＊

それ位ならまだしもであつた。

次第にまた、野草の花や怪しい葉つぱや、などを擁え込んで來る子供が多くなつて來た。その中には今まで見も知らなかつた隣村の大きな惡戯小僧までが入つてゐた。さうして、日にまし貧しくなつてゆく私の門口で、騒りしなに叫ぶ。

——今日は何にも無えんだとよお、

——やあい、吝嗇れやあい。

——やあい。

——わあい。

——けちんぼう。

——肺病やみ。

——薄のろ。

——やあい。

——わあい。

私と妻とは、それを聞くと眼を見合せて青くなつた。妻はたゞホロホロ泣いた。

考へると 全體、私達が惡るかつたのだ。あんな無心な子供達に、あの芳烈な智慧の實を喰べさしたのは誰だ、誰が毎日、あゝいふ不淨の花を擁え込んで來るやうにさしたんだ。さう云へば私には言句が無かつた。

そもそもは私が越し立ての頃であつた。前の日一寸土手の野草の花の中で遭つた女の子が、その翌朝、私の生籬の向うの畔道を彼方行き此方行きしてゐる可憐なその子の姿が見えたので、何をしてゐるのかと眺めてゐると、その子がやがて私の門口に來て、小さな白い菊花植物の花束をその花だけ出した。さうして、上げませうと差し入れた。その時の女の子供は全く無心な神樣であつた。上げませう、この自分を空しくして、人に花を與に來た心、その心には何等の報酬をも豫期してゐるのでは無かつた。この大きな愛。

私は全く難有かつたので、難有うと云つて受取ると、ふと何の氣なしに次の言葉が出た。

——いゝ兒だね、いゝ花だねい、これからも持つて來ておくれよ、ね、いゝかい、

と、云つて置いて、

——いゝものをあげるよ。——と、我識らず口に出て了つた。そしてハツと思つたのであつた。

大變な惡い事を云つて了つたと思つた。さうして私は心に問ひ心に答へると、もう取りかへしのつかない冒瀆を敢てした事を感じた。子供にも濟まなかつた。

今日は無心に野菊の花を摘んだ子供が、明日はもう何がな欲しさに野に出て、何かの花を探すにちがいない、さう思うと私はまた苦しくなつた。

——濟まなかつた、許してくれ。

私はその子の後かげに、心の中で掌を合せた。さうすると、私の眼に童のやうな涙がたまつて來た。

翌朝、その子は豫期した通り、私に花を運んで來た。私はその急に大人くさくなつた女の子供の顏を見ると、ピシヤリと私の頰つぺたをぶちのめされたやうな氣がした。私は蒼くなつた。大變な事をした。然しその時はもう私はいよいよ何かをその代酬に與へねばならなくなつてゐた。私は赤い林檎を一つ彼女に渡したのであつた。

それからさういふ子が二人になり三人になり四五人になつた。さうして後には直ぐに手を差し出すほどの無遠慮にまで、私は彼等を慣らさして了つてゐた。

これではいけないと思つたので、ふと前に云つたやうにその差し出した掌に畫を描いてやつたのであつた。これは甘く幽星に當つたので、彼等も一時は何もかもその爲めに忘れて了つたが、やがてそれも何の甲斐も無いと云ふ事が私にも感じてくると、私も亦繪筆を投げ棄てゝ了つた。

私達は何氣なく遊びに來る時の彼等には何かを與へねば濟まなかつた。然し、子供等はまた決して何氣なく慕つて集るのでは無くなつた。私達に何にも無い時、彼等はさうして叫ぶのであつた。

私の子供を愛する心は却つて子供を損つてゆくのであつたか、さう思うと私にも何とも云へぬ暗い影が襲つた。

――薄のろ、

――しみつたれ。

それが興じると、あの小さなおつ開きまでが、飛びかゝつて何かを私から奪い取るが早く、すつ飛んで行つた。而して振り向き振り向き赤んべえをした。

――馬鹿旦那やあい。薄のろ。

*

鴉もいよいよ意地汚くなつた。何かを食べ殘しては、生籬の下や木の根に埋め埋めした。さうしてそこらの落葉を一枚二枚と嘴の尖でその上にふりかけて置いた。

あの無邪氣過ぎる位だつた哥路の奴までがまた、それをまたいつのまにか模倣し出した。

だが、鴉は矢つ張り愚鈍であつた。後には自分の脚の付け紐の下にまで匿くして歩いて行つた。無論紐も動いてゆく、吝嗇な鴉の餌は丸出しになる、それを小犬が後ろから飛んで來て一口に頰ばつて行く、それでも鴉は御存知ないのである。鴉はさうして匿くした端から端から忘れて行つた。小犬は端から端から探して行つた。

然し、彼等はもうお互に成人しつゝ互にまた尊重しつゝあつた。而して彼等にはまた彼等相當の禮節と品位とを備へて來つゝあつた。だから彼等は最早や以前の通りには彼等の食餌を互に掠め合はなかつた。ただこつそり鴉が匿すと、こつそり小犬がほぢくり出して行つた。

――なあ、お前達仲よくしておくれよ。

私は後には私の掌の上に白いつゝやかな米の飯を盛り、白い牛乳(ミルク)をかけて、兩者の間にさあと差し出した。

――さあ、お食べ、喧嘩するんでないぞ。

鴉と犬とは兩方から珍らしがつて首と嘴とを差入れた。チユウチユウ、パクパク為出した。それは穏かな安心しきつたいゝ姿勢であつた。黒と薄黄との生き物。

嘴と鼻とが私の掌を次第に強く粗らく突つゝいて來た。私の掌がだんだん動いて來た。だんだん動きが深くなり、だんだん痛く、だんだん擽ぐつたくなつて來た。この溫かさ、このなつかしさ、この鼻息。

私の眼からはもうぽろぽろ涙が流れてゐた。

*

だが、その頃から鴉の樣子が次第に變つて來たのも事實であつた。

彼は地面(ぢべた)へピツタリと留つてゐる時でも、時々急に身づくろひして、また元の姿勢に返ると、鋭く光り出した兩の眼で四邊(あたり)をキツト見廻はすと急にまた兩の翅翼を後ろに精一杯に擴げた。而して首を前のめりに、尻毛を高く持ち上げると、今にも飛び立つけしきをした。力が滿身に滿ち漲つた。驚破やと思ふと、またぐたりとして元に返つた。また身をすくめて羽根ばたきするとまた尻尾が地面(ぢべた)に垂れて了つた。その專に賴みに思ふ翅翼はつい先日私達が再びブツリブツ

り切り揃へたばかりであつた。

鴉は飛ばうとしてゐる。

私はふつとその姿勢を覗くと思はずわなわなした、何とも云へぬ莊嚴な力が私の頭上を壓へつけた。

木に留つてゐる時でも鴉は最早や低い下枝では遊ばなかつた。高く高くのぼつて行つた。飛べぬ鴉は、而してその木の頂點までものぼりつめた。而して碧い碧い空の一方ばかりを、たゞ凝つと眺めてゐた。

——かあ。

突然木の上の鴉公が振り返つた。而してたちだちと後退りをした。

——かあ。

子鴉はまた目を圓くして、その一方を仰いでゐた。而して思はず翼をバタバタさした。

——かあ。

ふと、私も振り仰ぐと、其處には、その草屋根には、驚くべし、一羽の黑い大鴉が鍵形にカキツと留つてゐた。而して哀れな子鴉を見下してゐた。

子鴉はこの時、初めて、おのが同類の姿を見、初めて同じその啼聲を聞いたのであつた。

子鴉はまた飛んで出さうにバタバタした。

*

哥路の小犬もまた變つて來た。

いつのまにか、彼の胴體は長く伸び、兩の耳は深々と垂れ、尻尾は序々と白狐の寶珠のやうに地に曳きずつて來た。而して毛孔の底から一本一本に今やつやつやと光と潤ひとを帶んで來たその全身の毛並は、最早や既に童くさくない黃花大蒜の艶めきと深い獸の腋臭とを滲ませて見えた、するとまた彼女の顏容も何時となく一個の犬族らしい風采になつてその乳脂色の眉間から鼻筋にかけて、白いひとすぢの鼻白粉をつけた、如何にも美々しい雌犬の姿となつた。その

美しさは本性の小柄なだけに、一層深みがつき、また一層可憐でもあつた。而して全身のたぶたぶと垂れた毛の重さから、絶えずよたよたとした足取りで、倒れさうに駈けずつてゐた。

さうなると彼女もまた決して凝としてはゐなかつた。たとへば彼女の全身が何時も眼であり耳であるかの如く、沈潜した深い靈魂の底から眼を瞠て、聽耳を立てゝ、或る何ものかをたゞ凝と待ち構へてゐた。室内にゐて私達の傍に横座りにその四足を投げ出してゐるときでも、彼女の耳朶はヒクリと顫り、急に面をあげ、瞳を或る方に据ゑつけてゐる——さうした事が次第に度重つて來た、と、驚破と身を起して、また聽耳立てると、イキナリ狂氣のやうになつて飛び出したり吼え出したりした。

さうした時はまた必ず、同じ犬族の誰かゞ家の外に同じ姿勢でこつそりと忍び寄つて來た。色々の種類の犬が遊びに來た。すると哥路も飛びかゝつて、それらの大きな犬の頭に前肢でしがみついたり、くるりと身體を廻らしては、その横耳に噛みついたり、逃げ廻つたり追つかけたりした。

而も彼女は小びつちよの癖に隨分生意氣で、器量自慢で、權高で選好みであつた。彼女が路上を楚々として運歩を運ぶ時には色々の毛色の雄犬がまた彼女の尻根を嗅ぎ嗅ぎ何處までも何處までもくつついて來た。どんな雄犬もまた彼女を見つけると尾を振りきるほど振つて來た。何處の雌犬もまた彼女を見ると恐ろしく躍りかゝりながら吼えついて來た。彼女も必死となつてとがりかゝつて行つた。然し多くの雄犬は大概彼女の味方であつた。それだけ他の醜い貧相な雌犬どもがまるでヒステリー患者のやうに逃げ逃げしては引つ返し引つ返し吼え立つてゐた、息せき切つて顫へてゐた。

時とすると、哥路の高慢ちきが、大きな白熊のやうな雄犬を縁側の下に何時迄も何時迄もつくばはして、澄まして私達の傍に寢そべつたり、甘へたりしてゐた事もあつた。

この小びつちよ奴、いよいよ本物の雌犬になるな、

私はまたさう思つて、折ふし駭然とすることがあつた。

＊

或る、雲行の怪しい、而して稍蒸々する薄明の頃であつた。私は夕餐をすましてから、白い藤豆の花の横をI河の土手へ抜けやうとすると、とある農家の水溜の前に、何か紫の哀れな花が暮れ殘つてゐるのを見かけた。立ち寄つて覗いて見ると、それは五月のあやめの花であつた。あやめが今頃咲くのは不思議だと眺めてゐると、其處の顔馴染みの十二三の娘の子が出て來た。その子はもう一人前の農家の女らしく青脚絆に青手甲をして、その背戸口で、今脱いだばかりの菅笠をはたいてゐるところであつた。

——あやめだね。

——えゝ。あやめですよ。

——どうしたんだらうね。

——返り花でせうよ。上げましやうか。

——えゝ、どうぞ。

娘がお持ちなさいましと云ふので、私が手折つて、難有うと出かけやうとすると、

——哥路(コロ)は。

と、云はれて振り返ると、何時もは必ず蹤いて來る筈のその哥路がその晩は影も姿も見せなかつた。

土手へ上ると、河を見渡した櫻の木の下に、大きい粗雜(がさつ)な寢臺（それは兵營から拂下げの安ものだつた）が一つ据ゑてあるきりで、その下の百姓小屋の姉と娘の女の子が、たつた二人その中に、仰向けに寢て、何か歌つてゐたところだつた。

——どうしたい。

——お星樣數(かぞ)へてるだよ。

姉の子が答へると、妹がふゝんと笑つた。

二人の女の子は眼をまん圓にして、險しい雲間の星月夜の燦々と動くその高い空の上ばかり眺めてゐた。

何處やらを夜風がさわさわと通つて行つた。

――おや、稻妻が。

――何でもねえだ、いつでもやつてるだもの。

妹が悄へると、姉がくるりと腹這ひになつて、さて兩肱突いて、河の向うの遙かの丘續きの上で、時折薄く閃めく遠稻妻の雲の明りを見守つてゐる、と、妹の方が、まだ仰向きながら兩足をばた〳〵さした。

――哥路はどうしただい、先生。

――哥路かい。哥路は來なかつたよ。

――何處にゐるだんべい。

姉の方がまた振り向いて、凝つと薄明りの私の草舍の方を眺めてゐたが、

――あれだ、あれだ、彼處にゐるだ。

どれと私も透かして見ると、ゐた、ゐた、向うの土手の薄の穗の穗かげに眞白いものが二つ組んづほぐれつ毬のやうに巫山戲合つてゐる、あれがさうに違ひなかつた。

――呼んで見べえ。

――呼んで御覽。

――哥路よ、哥路よ。

哥路ウ、と私もまた一聲二聲呼び立てると、ふつとその白い毬見たいなのがほぐれると、一つが矢庭に今飛んだ人靈のやうに轉げて土手を馳け下りて來る。

――來ただあ、來ただあ、哥路よ、哥路よ。

二人の子も手を拍いて喜ぶと、哥路はまた哥路で息せき切つて、はつはつと喘ぎ乍らその土手を馳け上ると、思はず

私の膝に飛びかゝつて來た。

女の子達が寢臺から二人とも赤ちやけた髮を一緒に俯向かして手を伸ばすと、哥路はまた、その手に、寢臺の脚に蹤りかゝつた。それを姉の手が攫えて引つ張り上げると、すぐに頰ずりしたり高く兩手に持ち上げたりした。小犬はまだ息をはづましながらそれでも嬉しさうに彼の子のするが儘になつてゐたが、それでも時々私の方を、あの賢しい青い眼でチョイチョイと振り返つた。

雨がポツリポツリ降り出して來た。さあ、歸らう、哥路、と呼んで

——お前達もおやすみ、感冒でもひくといけないよ。

——うん、俺も寢べえ。

姉が無造作に寢臺から飛び下りると、妹も一緒に飛び下りた。

——鴉公はどうしただ。

——鴉公かい、鴉公はもう寢てゐるよ。

——明日トマト持つて行つてやるべえか。

——おゝ。

これが別れの挨拶であつた。

*

家の門口に歸つて見ると、鴉公は黃色いカンナの花の蔭の大八車の上に、餘程眠たかつたと見えて、コックリコックリ首を上げ下げしてゐた。

——おや、まだ寢なかつたのかい。

人間同志に話しかけるやうな言葉が、その時またふと私の唇から出た。さあ、もう寢るんだぞと云つて抱いて下ろすと鴉は吃驚してかあと啼いた。

――かあぢやないよ、もう寝るんだぜ。

私が後から笑ひ笑ひ追つ立てると、半醒半睡の子雅はうとうとゝたゞ寝呆けて彼方へコツ、り此方へコツ、り、ぶつかりながら、ぴよこぴよこ縁側の下へ入つてゆく、と、コトリと自分の巣の木函の角に飛んで留つて、直ぐにもう閑寂として了つた。

――哥路、もうお寝。

まだ遊び足らぬ小犬を、その儘外に閉め出しながら茶の間へ歸ると、茶の間では妻が一人つくねんと何か紅い毛絲を長い針で編み編みして、爐傍で淑やかに俯向いてゐた。

洋燈は明るかつた。私達はそれから、番茶を煮立たして、折柄蕭々とふりそゝいで來た秋雨の音に耳傾けながら、鴉や犬の話、子供達の話、貧しい生活の話、この村の人達の話、親達の話、さては色々の精神上の虔ましい正しい話、星の世界や鑛石共の話、それからそれへと何時知らず夜を更かしてゐたが、ふと、妻が顔をあげて、私と眼を見合せた。

――あれ、何でせう、一寸。

外では、いつのまにか細かな夜雨の音が止んで、今はたゞ木の間の茂みや軒端や葭簀から時たま落つる太い雨の露雫の刻みと變つてゐた、而して何かゞチ、と鳴いた。

私達は思はず眼でうなづき合ひ乍ら、さて洋燈を持つと、立ち上つて、縁側の雨戸をそつと一枚開いて差し覗いた。と、明るい灯の光が濕つたばかりの暗い夜の大氣を流れて、末廣に明ると、おゝ、其處には驚く可き虔ましい青い世界が雨に濡れて、而もそれが俄かに差しかけた灯の火照に驚いて、青い露と露と青い葉と葉と、細々と一粒ごとに一葉ごとに生きて顫へて耀き出したではないか。チ、とまた何かゝ鳴いた。

凝と洋燈を差しつけると、ゐた、ゐた、それは廢れ果てた古池の上、枝垂柳の青い簾を背後にして、一枝差出た、花も散つて今は涼しい緑の葉ばかりになつた秋の百日紅に、濡れみづくの黄色い小鳥が一羽、小さな琥珀の生きた玉のやうに留つてゐた。その小鳥は思はぬ灯の光に一時は驚いて飛び立ちさうにしたが、また幽かに身づくろひし乍らチ、と鳴

いた。而して横ちよに向き直つてまた幽かな靜止の姿に移つた。而してその周圍の眞闇が圓く青い幻燈のやうに透き徹つて、その中でまた小鳥の小さな瞳がチラチラと灯光を宿して見えた。可愛いゝ繭の中からでも生れて來たやうな小鳥であつた。

――泊りに來たのだらうね。

――えゝさうでせうね。

――寢かしてやれよ、そうつと。

私達はまた身を屈めて、椽の下を覗きこんで見た。

――睡てゐるよ、仲よく。

――まあ、哥路も。

――うむ、いつのまにか眠つたと見える。

その鴉公が留つた木函の中には、哥路がまたすやすやとその敷藁の上で眠つてゐた。その投げ出した前肢の間には、何處から、何時のまに啣えて來たか、小さな首と胴ばかりの活眼人形がころがつてゐた。而してその傍には私がさつき差し入れて置いた紫の花あやめがちりぢりに裂き散らしてあつた。

其處にはまた鴉と犬との安らかな鼻息が幽かに互に搖れ合つてゐた。

私達はまた幽かに雨戸を閉めた。

夜風がまたさらさらとそよいで行つた。

そしてまた、閴寂となると、また遠い廣い田の向うで老いほけた蛙の聲までが、ぐぐぐ、ぎぎぎときこえて來た。

いよいよ秋が來たなと私は妻に聲をかけた。

*

そのあくる日のお午であつた。

碧い碧い大空の下に、廣い野の、とある白い何の木の花かの傍で、人間の小さな子がひとり、兩手を兩の眼に當てゝ躰をかぎりに、心ゆくまで泣いてゐるのを私は見た。私は頭を撫でゝ、どうしたんだと云つた。何が悲しいのかと訊ねた。

——何だか知んねえやい。

子供は十本の指の間から、また新らしく涙をぼろぼろ滾しながら、明るい四方を見廻した。さうして急にまた啜りあげた。

——何だか知んねえやい。

さう云はれゝば、おゝ子供よ、私も何にも知らないのだ。

私は改めて大空を見た。その碧い圓天井を。而してまた吾身の周りを見た、果しもない野や丘の起伏を。その向うを見れば、向うからは煙が幾つも上つてゐた。それがみんな動いてゐないものは一つも無かつた。私はまた足元を見た。白い木の花に泥蜂が動いてゐた。その泥蜂が動くたびごとにその木の花も散るのである。

おゝ、子供よ、私も何にも知らない。

讀賣新聞と講和問題

我が讀賣新聞は、巴里に於ける講和會議の形勢を、細大漏らさず、讀者に報道するに全力を傾注し、倫敦、巴里、紐育各方面の大通信社と連絡を取りつゝあるのみならず、曩に通信員として、秋元俊吉氏を牧野男爵と同行せしめ、且つ巴里に於ける數名の講和關係有力者に通信を委囑し居れば、此の前古未曾有の大會議の情况が、手に取るが如く、讀賣新聞紙上に顯はれ來るべきは、本社の確信する所也、而して

讀賣新聞社長　秋月左都夫

讀賣新聞社主　子爵　本野盛一

今又茲に兩氏渡歐し讀賣新聞の爲に講和會議地に於て大に通信の筆を揮はんとす。我社讀賣新聞紙上に、如何に講和會議の有力なる通信の掲載さるべきかに就ては、是は大に讀者諸君の御期待を冀望する次第なり。尚ほ本野子爵夫人は、歐洲婦人界の近情に就て通信せらるゝ筈なれば、是亦た大に我が婦人附錄に光彩を添ふるならんと信ず。伏て大方の御購讀を冀ふ。

▼定價一部金二錢五厘一ヶ月前金六十錢二ヶ月前金一圓七十・六ヶ月前金三圓卅錢▲地方定價（郵税共）一ヶ月前金七十錢三ヶ月前金二圓六ヶ月前金三圓九十錢▲郵券代用一割増▼振替東京六一二番

廣告掲載料　▼五號活字十五字詰一行金七十五錢▼雜報欄金二圓

東京市京橋區銀座一丁目
讀賣新聞社

電話　京橋
編輯　三九五番・七〇二番
營業　七〇一番・七〇三番
※用　七二五番
用　二二六四番

文學博士坪內逍遙氏新著

逍遙劇談

文壇の泰斗逍遙先生近來意氣益々昂り、茲に內外劇文學に於ける最新の研究結果を發表せらる。何れも苦心の長論文にして劇文學の精髓を說破せるものなり、劇に志す人々は勿論、廣く文學を愛する人々は本書を繙讀せば啓發せらるゝ所必ず大なるべし。本年文壇に於ける最大收獲の一は即ち本書也。

四六判總クロース美本
定價壹圓九拾錢 送料八錢

工學士中澤臨川著

新しき科學

菊版箱入クロース本
定價金二圓送料內地八錢其他二十五錢

最近非常なる速力を以て發達を遂げたる科學を社會の有ゆる諸階級に該しめんが爲め著述せられたるものにして物理化學の職に關係ある人は勿論、一般新智識を養成せらるゝ人士又特に教職にある人々に對しては無二の好參考書たり。本書は或る一面に於ては近世科學發達史とも稱すべく汎く江湖の愛讀を俟つ。

米國哲學者ゼームス著
文學士太田善男氏譯

信仰の哲學

天才的哲學者ゼームスの傑作ウイルツーベリィブを譯したるものにして民本的個性的代表名著也、世界の新趨勢に眼さめたる人は是非本書を一讀せられよ。

四六判箱入クロース本定價壹圓六十錢送料八錢

發行所 東京市麴町區飯田町一の二 株式會社 天佑社 振替東京一〇一二八 電話番町一一七九番



哥路

山本鼎

哥路のわすれがたみは、皆健かに大きくなつた。ふろは出版業のY氏に貰はれ、ぱろは畫家のK君に、はろは親の住家に居殘つて母の名の哥路を續ぐ事になつた。三匹共雌で、はろが長女である。彼れ等が母を喪つた時は、まだ眼があいてゐなかつた。護膜の乳首からミルクを吸ひ習ひ、やがて皿のなかの乳を舐るやうになつた頃、はろから先に、とんと向日葵の種のやうな眼を開いた。母の腹に顏をうづめ、或は乳首を啣えたまゝで寢入つたりした彼れ等は、寒さに鳴きながら互に重り搔きわけて、いつも箱の隅に一と塊となつて睡つた。其頃、私はふといはろとぱろの陰部が血に滲むで居るのを見て、其原因を解しかねたが、それは彼れ等が、彼處を、探り當た母親の乳首と思ひ違へて、互にはげしく吸つたためであつたのを知り、それをさせぬために、たえず氣をつけて、幾度か引はなしたり打つたりした事がある。

今、はろは前脚を束にのべて蹲り、尻尾を振りながら私を見あげて其撫を待ち構へて居る。兩親の毛色を交へ承けた黑勝の三毛で、賢さを眼と耳に現し、育つにつれて母ゆずりの神經質を示して來る彼れ

は、不幸であつた母親と同じに、主人の我儘な愛撫のためにいつとなし動物の自然の性を奪はれる事であらう、が、併し、決して母親哥路のやうに薄命ではあるまい。哥路の多くの受難は、私をして、飼犬に對する人間の不合理な愛憎を反省せしめ、そして、はゑのために家畜としての安穏なる生を保證せしめたといふものである。實に、以下記述する哥路の半生は、むしろ私の懺悔を意味するものとも云へるのだ。

○

大正六年には、私は、家と妻とを有つた。妻は、詩人三原氏の妹のちゑ子である。ちゑ子が、私とまだ許嫁の間であつた五月の或朝、伸で、しら茶色の背の低い小犬を連れて來た。それが哥路なのであるが、其時彼れは産れてから十月目位であつた。田舍から東京へ來たばかりで、人にも物にも怖て尾總を緊く尻につけ、ちゑ子と私のあとばかり蹤け廻つた。彼れには其頃、地面と疊の上の區別がなく、庭から裏口へ座敷を驅けぬけたり、土を掘つたよごれ足で蒲團の上に踞むで居たりした。私は大好きだし、下女のくにも可愛がるので、あの大塚窪町の小さな借家の庭と內とを、彼れは、遊び馴れた利根川べりの野良でのやうに恣に驅けまわつた。彼れは、私が外へ出る時でも、くにが出る時でも、茶の間や椽の下から球のやうに飛び出て來て何處へでも蹤いて行つた。或時は錢湯へ蹤いて來て、裸體になつた私を愕いた顏をして見て居た。或時は床屋へ蹤いて來て、伸した私の脚の間に踞みこみ、廻り椅子と一しよに廻されて居た。或時は又、遠く田端まで蹤いて來て、畫室に伴はれ、モデル女が脫ぎ置いた着物の上に半日睡つて居た事もあつた。ちゑ子が來ると彼れは狂喜して迎へた。身を屈し、尾を振り、首を彼の女の足元にすり寄せて愛撫を求め、又歩むさきを、吠えながら跳ね躁つた。平和すぎる處に醸される無聊とか、どちらかが笑顏をするのを待つて消えてしまはうとする低氣壓などが二人の間に作られる時、哥路はいつでも役にたつた、が、特に此頃は必要であつた。婚約の期間に、ちゑ子は、單に間の惡さのために、大塚の家を訪問する事を好まなかつたさうであるが、私も、ちゑ子を待ちまうけながら、彼の女の足音を聽くと忽ち氣樂さを失ひ、紛はれた快活でちゑ子の無口な羞に向はねばならなかつた。彼の女の兄と私とは、心の隈も知りぬいた仲であるが、ちゑ子との馴染は婚約以來の事で、二人の愛情は、相對して居る時に一番憶病になるのであつた。

其處にいつも哥路が利用された。例へば、彼の女の膝へ哥路を追ひやつたり、哥路に湯を使はせるといふので、思ひかけず彼の女の裸がけの姿を見たりする事などであつた、自分等ばかりでなく、いくにも不在がちの主人の留守を哥路に慰められた。命令したり、食はせたり、鼻を舐めさしたりして、己れの唯一の被征服者としての小犬に、愛を傾けた、まつたく、あの時分の哥路は、誰れにも愛された。私の父は、犬を座敷にあげる事を手紙で難じて來たが、其後、大塚の家に滯在して居る間に、父と同じやうに哥路が寢そべつて、父の見て居る新聞紙の上へ顏を伸べて居るのに『哥路、何を讀むで居る』、なんかと云ひかける程になつてしまつた。思へば、哥路は、あの頃、幸福の絶頂に生活して居たのだ。テリヤ特有の怜悧と敏感とに、狆の柔順を加へた彼れは、飼主の熱愛を喚ぶに充分であつた。滿身しら茶色の毛なみは、都會に移り住むで頓に光澤を增し、殊に、豐富な尾總の麗はしさはまるで高價な狆のそれのやうであつた。私はそれを手に掬ひ、指に梳き、又頰を拂はせたりして愛美したものだ。後に話した事だが、犬等の豐麗な姿は、犬の青春を示したものであつた。いや、寧ろ、胎兒を營養しつゝある生理上の富饒なる運動を示すものであつたのだ。處が、私は當時それを、哥路の娘ざかりを證するものとした、そして、狂ほしく哥路に集る雄犬を防ぐのにずいぶん骨折つた。豈はからんや、哥路は葛飾を去る時、既に母となつて居たのである。

○

夏の終りの頃、私は犬と下女とを伴つて大塚から田端へ轉居した。動坂から道灌山へ通ずる狹い坂路に沿ふた二階家で、住み古した、間取りの陰氣くさい家であつたが、櫻の梢越しに、盆地の人家を瞰瞰し、遠く、午后の陽に煙る本鄕臺を望む二階の廣濶な展望がよかつた。庭には、裂だらけで水のもたない叩土の泉水があり、それを堀つた土を盛り上げたのだと思はれる築山に、二三株の躑躅花が植えてあつた。坂に面した方は、梅、桃、櫻等の黑い幹で蔽はれ、其根元に脊高く山吹が繁つて居た。又一方には、笠のやうに枝を擴げた一本の女松があつて、密叢する葉面の明るく軟い綠は、二階から見下す目に、五月頃の芝生を思はした。此家で私は婚儀前の多感で閑な時日を送つたのである。

哥路は、いつとなく常態を失つて居た。あまり驅け廻る事もなく、食ひ物をいつも皿に殘した。私の口笛に身を起し

て蹤いては來ても、先きを驅る元氣はなくて、舌を吐きながら背後に隨つた。是等の變調を、私は胃病のためと解したが、其頃彼れに木虱がたかり出したので、其せいもあらうかと、注意深く彼れの體中を探り、血に膨れた黑豆のやうな大きな木虱を幾疋も取り除いてやり、下駄でつぶしたのであつた。處が、哥路は懷妊して居たのである。私がそれを認めた時はもうお腹が大きかつた。試みに乳房を絞つて見ると、どれからも白く濃い乳の粒が湧き出した。私は其時、思はず「哥路!! じやうだんぢやないぞ」と叫んだ。そして兩手で彼れの顏をおこして見つめ、相恰の一變して居るのに呆れかへつた。實に、其眼は憂鬱にうるみ、瞼のみが險しく引緊り、鼻腔の周圍と眼の緣の毛が疎らに拔け落ちて紅い肉の色に隈取られて居るのであつた。私は厭な氣持になつて彼れを椽から抱き下し、放逐するやうに庭に突きやつた。哀れなる犬は、尾を股に挾み、去りかねていつまでも私を見あげて居た。其いぢらしくも疑ひ深い眼つきは、却て私の嫌惡をかひ、彼れは其日以來、永い事、主人の寵を失つてしまつた、抱き上げられる事もなく、名さへ呼ばれずに、椽の下の輕い土を堀つて、晝間も殆ど其處に蹲つて居るのであつた。私は、哥路の最初の性交として、良い犬を掛けやうと思つて居たので、それがために、大塚此方、凡犬の肉迫を嚴戒して來たものを、思ひの外に彼れははや、臨月に間もない母體であつた——私は此矛盾に、吹き出したいやうでもあり、腹立しくもあつた。加ふるに、哥路の其後の素振りはすべて私の氣に入らなかつた。彼れは、いゝくにの呉れる骨も、私の與へるビスケツトも、不性不精に嗅いて見て喰はなかつた。そして、野良犬のやうにあちこちの掃溜を漁り歩いた。今迄は、私の聲を聽いただけで椽側に飛び上つて來たものを、私の姿を見るとこそ〳〵と椽の下に這入つてしまつた。其くせ、臺所口でも開いて居ると、こつそり座敷へ這入り込んで、隅の方に盜人のやうに蹲つて居た。私に見つかると、横目で不安さうに見るが、傍へ進んで聲を勵たてゝも彼れは容易に立ちあがらうとしなかつた。いゝくになぞがそれを抱き出さうとすれば、身を堅く傾て歯をむき出すのである。いゝくには恐れて、三度々々無言で彼れに食をあてがつて居た。哥路が、木虱に攻められて惱むのを見て、私は、屢々尻込みする彼れを日向に引き出しては、木虱狩をした。首のまわりに喰ひ込んで居る、紫色の疣のやうな其虫を除く事は出來ても、指の間に一とつ〳〵團になつて喰ひ入つて居る其あくどい粒を拔き取る事はむづかしかつた。私は實に、

夜々、木虱と惡胆とに苦しむらしい哥路の唸に惱まされた。――或朝の事であつたが、私が雜洗に水をとりに勝手へいつて見ると、流に哥路が腹匐ひになつて唸て居るのに會つた。哥路々々と呼ぶと、彼れは顔を擡げたが、そのとたんに自身の脚首へ唸つて噛みついた。私はそれを見ると木虱を取つてやる氣になり、哥路を其處へ仰むけにして、片脚を手にとつた。哥路は怖れと怒りを含むだ眼で私の手元を見て居たが、私が指を開いて木虱を摘むと同時に、彼れは鋭い悲鳴を發して私の手の甲へ噛み付いた。私は愕いて手を引いて見ると、皮が傷ついて血が滲むで居るので、カツとして哥路の頭を打つた。其とたんに彼れは又、打つ手の指に噛みついた。そして跳ね起きざま、次の撲拳を外して外へ遁れた。私は怒りと惧れに驅られて、すぐと彼れを追つて出たが、彼れは全く恐怖に身を縮め、尾を地に下げて、後ろざまに血走つた眼で私を守りながら、垣をくゞつて、其時空家であつた隣家の暗い軒下に佇て居た、私は、ともかくも傷の跡を火鉢の灰で消毒し、それから哥路をだまし／＼捕えて、紐で口を縛り、くにに俥を命じさして、直ちに本郷の家畜病院へ走つた。私の惧れは、哥路が狂犬になつて居るのではないか、といふ事であつた。もし、さうとすると、まづ哥路を撲殺しなければならないし、己れも豫防注射を受けねばならないから、獸醫の診斷を求める事を急いだのであつた。大きなタオルにくるまれた哥路は、私に抱かれてじつとしたまゝ、たゞ血線を吹いた險しい目を見張つて居た。獸醫は最初に哥路の眼を檢め、次に心臟を聽診し、それから口の紐をはづして口中を檢めた。其間哥路は實に素直にして居た。獸醫の診擦によれば、哥路は懷姙のために胃を害し、併せて憂鬱症になつて居るらしいのであつた。私に豫防注射を要するや否と云ふ事に就ては、獸醫は單に、『要心のためにやつておくのもよいでせう』といつた。

私の、哥路を厭ふ情は、卒に惧れの心に轉じた。飼主の私に噛みついたといふ其險さは、どうやら狂犬の徴候のやうにも思はれて、私は其痩せすゝけた小さな孕み犬をつく／＼持てあましてしまつた。とにかく、當分床下の柱に繋いでおき、私は豫防注射に通ふ事にした。近くに居た三原は、知らせを聽いて、ちゑ子と一しよに驚いてやつて來た。皆、椽側に立つて、其時、椎の木に繋がれて居た哥路を見下して少時無言で居たが、やがて、ちゑ子が憐愍の情に迫られた面持で、庭へ下りて彼れの傍へ行き、『どうしたの……哥路』、と云ふと、哥路は顔を揚げ傷しく毛のぬけ落ちた寒さうな

尻尾を、少しばかり振つて見せた。

○

哥路は、育ての親の三原の手元に引取られる事になり、其處で初産をした。産が重くて、三匹のうち一匹は死んで出た。二つの仔犬は目が開くと間もなく上野の森へ捨てられてしまつた。哥路は、屢々近所の兒供達に嚙みつき、其苦情を聽く度に、三原は苦しい不安に襲はれた。哥路を、野廣い田舎に捨てにゆこうといふ話は、三原と私の間に幾度か決せられたのだが、ついぐず〳〵して居るうちに、哥路は二度目の姙娠になつてしまつた。これには三原も辟易して、肥汲みに來た百姓に理由を話し、金を少しばかり添へて、哥路を貰ひ歸へつてもらつた。三原の夫婦はそれでほつと安堵し、私もちゑ子も、再び、平和で遊びぐさの多い田舎の生活が哥路に與へられた事を心から祝福した。ちゑ子は其頃、もう田端の人であつたから、毎日のやうに、二人の間に哥路の噂さが持ち出された。『哥路は市川の藝者屋に産れたんだつて云ふじやないか、それが詩人に貰はれて、それから畫家の飼犬になり、とう〳〵オワイ屋の犬に零落てしまつた。——まるでサツホーのやうだ。』

『ほんとに、オワイ屋の犬ですのねえ、可哀さうな哥路さん………でも、きつと百姓犬に大事にされますよ、哥路は器量よしですもの。』

『あいつ、氣位が高いし、東京から來たといふので、例の眼つきでじろつと見て澄し込む事だらう』。

『あの横目、——ほんとに憎らしい顔をする哥路だ、板橋で兒供にでも嚙み付かなければよう御座いますがねえ、嚙みつきでもすると、今度は殺されちまいますよ。……撲られて、哥路は逃げて歸つて來やしないかしら』

まさかに、哥路が、目の前に戻つて來やうとは知らう筈なく、二人はこんな噂を云ひ暮して居たのであつた。然るに飄然として哥路は田端の庭に戻つて來たのである。

それは、春の初めの事で、病むで寢て居るちゑ子の枕元に私が雜誌を讀むで居た、或曇日の午後であつた。くにの代りに來た千代といふ小さい下女が、「あらツ、奧さん哥路ですよ」と下から叫んだので、私も、寢卷のまゝのちゑ子も飛

の處へ出て下を覗くと、實に哥路が、青草の萌え初めた庭の面に、尾を棹つて立つて居た。ちゑ子が、哥路や〳〵と呼ぶと、彼れは仰向きながら、右左に走つて側へ來やうと焦た。私は千代に命じて飯と水とをやり、ちゑ子も下りて來て玉子を割つて與へた。彼れはすべてを、夢中のさまで名殘りなく喰らひ盡した。見ると、彼れには、首に首輪もなく腹も、胸も、尾の先も、長い毛が乾いた泥と共に縺れ下り、眼のふちは涙と脂に汚れて、一見宿なし犬のやうに醜くはあつたが、尾總の繋つて居る事にも、健かに濕れた鼻面にも、彼れが既に、哺乳の業を終つて、再び、彼れ自身の營養に立戻つた事が證されてあつた。併しながら、眼は、なほなんとなく險しかつた。私は、哥路の戻つて來た事を眞から迷惑に感じた。哥路は遠く逃げて來たのではなく、板橋の百姓も同じく彼れを持てあまして、動坂上の、三原の引越した跡へ捨て去つたものだらうと私は觀測した。實は、私は其頃、新しい生活の煩瑣に獨り苛立つて居た。それは豫め覺悟はし、すべて、身から作つた惱みではあつたが、私は唯々、靜に仕事に耽り度くなつて焦つて居た。單に、自分を肥すためにのみ、時と金と、精力とを用ひ度かつた。曾て自分が經驗した事のない程來客に閑靜を破られる事を怕れたりした。三十六の歳まで、要するに、自由を意味する處の、放浪と孤獨に馴れて來た自分は、その無責任と、寂寞の味ひを決して忘れる事が出來なかつた。とはいへ、家庭を作つた事を悔む氣は少しもなかつた。むしろ、田端の家の領域に、出來る限り閑靜な雰圍氣を作つて其處に籠り度いと云ふ事をたえずちゑ子に訴えて居た。ちゑ子は、夫の此の希望に對してむしろ、夫の性向が徐に係累の繁雜を生むでゆく事を私かに嘆息した。そして、折々、夫の眼の底に暴れかへる癇癖を寂しく眺めて居たのであつた。私は、哥路に就て、當時、ちゑ子にこんな事を云つたさうである。『僕は、哥路の事など知らんよ。仔を産まうと、人に噛みつかうと、すべてお前が始末する氣なら飼つて置きなさい』と。彼の女は、哥路に向けられる私の不興を惧れもしたが、反感ももつた。哥路が二階に居る吾々の話聲を慕つて、狹い梯子段を、困苦して一段々々登つて居る其足音に、私は不憫を催さないではなかつたが、ちゑ子が、『あ、哥路ですよ、あなた。又哥路さんが登つて來る——哥路や、大丈夫かい?!』などと、病床から愛撫の言葉を加へるのに對して、私は、『あんまり猫つ可愛がりはおよしよ、どうしたつて、何處へ捨てなければ困るのだからな、それに、犬が二階の梯子を登つて來るといふ

變ちきりんな話があるものか。あいつ、又、障子を破つて這入つて來たんだらう』なんかと、辛辣な言葉を吐いたものだ。私は無論、哥路を飼ふ氣は有たなかつた。哥路の昔の、愛す可き敏感は、慘惡な神經質にかはり、賢さは、食を盜み愛を疑ふ處に現れ、柔和は又、極度な恐怖心と變つて居るのだ。私は生物の、夫等の醜い表現を親しみ愛する事は出來なかつた。愍みすら、哥路の、晝夜を分たず、見知らぬ人々に向つて咲えしきる、とげとげしい聲を聽いては持ちこたえられなかつた。それに哥路は、なほ、嚙付く癖を有つて居たのである。哥路はやはり捨てられねばならなかつた。で、東京近郊の、大川を越へた彼方に捨てやうといふだけ定められて數日をすぎた。ちゑ子は『哥路は賢いからきつと拾はれて可愛がられるでせう』と、信じて居た。私も、自分よりはずつと犬好きで。そして氣むづかしくない年寄にでも拾ひ上げられる事を願つた。さて、捨てるといふ段になると、私は尻込みした。そして、丁度、私の家に宿り合した、舊友のI君に、ずるずるに其役を押しつけてしまつた。I君も請合たものゝ、やはり厭だと見えて、ぐずぐずと亦五六日たつた。だが、とうとう、薄命な哥路の捨られる日は來た。其日は、風のある曇日であつた。哥路は、朝から皆にいろいろと劬はられた、千代は三度も飯をやり、ちゑ子は平生哥路の好むパン菓子を買つて來て喰はせた。午后一時頃でもあつたか、脊廣に半袴を着けたI君は、庭へ廻り、私から受取つた麻の細紐を哥路に結びつけて『じやー行つてくるよ』と一寸帽をあげると同時に口笛を鳴して哥路を伴つて出ていつた。何も知らない哥路は、勇むで先きに立つて出た。其後に、ちゑ子も、私も、味氣ない情に閉ぢられて、言葉少なに夕暮れとなつた。其處へI君は歸つて來た。庭へ立つたまゝで、

『哥路を捨て來たよ。赤羽根の渡しを渡つてね、川口村へ連れ込んでさ、あつちこつち歩いた上句、煉化燒場の土手の上に奴がぼんやりして居る處をまいてしまつた。何だかいやになつちまつたぜ、――僕は君、これから一寸横濱へ往つてくる、失敬!!』

と、云ひすてると出て行つてしまつた。二人は、てんでんに、哥路の運命を想像して沈默した。やがて、ちゑ子は、私の因業（エゴイズム）を難ずる面持で、「哥路に惡い處は無んですよ……」と云つた。さう云へば、哥路に惡い處はない、併し、彼れに

對する私の愛情を、卒かに冷してしまつたものは何だ？ それはたしかに明瞭な事實で證す事が出來る。だが、私が哥路に向けた愛撫と嫌惡とは、一體、神の意思にかなつたものであつたらうか？、どうも、それは不合理な愛憎であるやうだ、とはいへ、直接に自分の心を動かした、あの美と醜との印象を何とする？。と、私は其時、ちゑ子に反問の眼を差しむけ同時に、無情を遂行した云ふ可らざる不快のなかに彷徨したのであつた。

○

それから、丁度十日目の正午頃、宛も、野晒の藥束のやうに灰色に萎むだ君が哥路は、川端の家へまた〳〵歸つて來た。まるで、何かの因縁のやうに、其日、小田原から出て來た三原の兄が、私の家へさしかゝる坂の下の三つ辻で、驅けて來る哥路に出會つたのださうである。私は、其時不在であつた。外から戻つて、いきなりちゑ子にそれを告げられた時、空氣を感ずるばかりに驚いた。そして、すぐ縁端に出て、哥路を呼むだ。哥路は臺所の方から出て來て、私を見きわめると、尾を掉つて寄つて來た。私はそれを抱き上げて、「哥路、もう決して捨てないぞ」と、彼れに誓つたのである。

其日の晝めしは、丁度I君も來合して、哥路の奇蹟に對する談で賑つた。ちゑ子は、亢奮と、葡萄酒の醉とに顔を火照して、

『わたし、ほんとに愕きました。兄さんが、「ちゑさん、哥路だよ哥路だよ」と、お仰つて、這入つていらしつた時には、ハツと思ひました。だけど嘘だと思ひましたの。………どうして道が分つたでせう？、哥路さんはこない』と云つた。

三原の兄は又、

『僕も愕いたよ、哥路のやうな犬が來るな、と、一寸立止つて居たら、それが哥路だつた。哥路!!といつたら、僕に飛びついて來たよ』と、云つた。I君は、

『僕は、哥路が歸つて來て居やうとは思はなかつたね。哥路の奴、僕には尾を掉りませんよ、「此人が置きざりにしたんだな」と、いふやうな顔をして居ますよ。僕は哥路に會て、氣まりがわるくなつちまつた』と、頭を掻いた。

『アハッハッハッ、とにかく、恨まれるのは君さ、さしづめ、君が、哥路の仇役さ、合憎、哥むしやな顔が當はまつちまつて居るしね』と、私がそれに應へたので、皆笑つちまつた。最後に、私は、

『ちゑ子も安心するがいゝ、僕は哥路を一生飼つてやるよ。今度は、ほんとに、哥路に對して氣まりが惡くなつた。十日の間の、哥路の艱難はどんなものだつたらう、まるで、奴の胸や腹は肉を失つて、干鱈のやうになつて居るじやないか。何しろ、田端から汽車で赤羽根へ運ばれてさ、荒川のむかうの川口村へ捨てられたのだからなあ。それにしても、あの廣い河をどうして越えたらう。僕は多分、汽車の鐵橋を渡つたのだらうと思ふが、ちゑ子の云ふやうに、渡船へ乗り込んだのかも知れない。あいつ、なか／＼怜悧だし、人に劬はられる風だからね……人間は我儘だよ。僕は大塚に居る時分は、ずいぶん、哥路を可愛がつたものだ、田端へ來て、哥路が知らぬ間に孕み犬になつて居たのに、すつかり興を冷してしまつたんだ。それには、I君、こんな挿話があるのさ。或日、彫刻家のFに會た時に、哥路の事を自慢して話すと、そんな美しいテリヤなら、俺の處の爺さんに掛けさしてやらうか、といふのさ。Fの處の爺さんといふのは、栗色のすばらしい卷毛で、犬屋が五十圓も包むで種取りに來るといふ、大した犬なんだ。處がもう年寄（體は小さいがね）なので、容易に種が止まらないのださうだ。——とにかくそれに掛けやうといふのだから、僕は大悦びで、掛ける場所も、日も定めて、家へ歸つて、椽側で哥路をいぢりながら、『哥路べヱさん、しつかりしてくれよ、お爺さんだけれど、すてきなお相手がきまつたんだぜ』、なんかと、からかつて居て、ひよいと、腹を見ると君、いやに膨むで居るじやーないか、まるで、それは、くつゝけた様な話さ、そこで、はじめて僕は、哥路の懐姙を發見した次第なんだが。もう其時は、乳房も太り、立派に哺乳の仕度が出來て居たんだ。哥路は處女である、と、僕は信じきつて居たものだから、そんなになるまで僕は氣が付ずに居たんだよ。三原の兄もひどいや、掘物を僕にくれたんだものね。とにかく、それから、僕は哥路が厭になつちまつたのだが、勿論哥路は、段々醜い姿になつていつたし、惡阻やなにかのために、陰氣な變な性質になつて、しまひには、僕に噛み付いたりなぞしたものだから、とう／＼捨てられるやうになつた次第なんだ。哥路に言はせれば、『わたしが、神事に従つて居るものを、人間は勝手に嫌つたり打つたりした』と云ふたらうよ。僕は、

さつき哥路に、誓つた事さ、決してもう捨てません、とね、哥路の生涯は、もう安全だ……一つ、哥路のために、決定せられたる良き運命を祝さうじやないか』。

こう語り終つて一同と乾杯した。

此夕、私はちゑ子と共に、哥路を伴つて、彼れの爲に、首輪と鎖とを買ひに出た。私の心に哥路に對する愛の蘇つた事は、哥路の幸福であると同時に、私の幸福であつた、寧ろ家庭全體が其爲に調和した。哥路の、險しく又憶したやうな樣子は相不變であつたが、それが少しも苦にならなかつた。唯哥路が彼の事以來、いよ／＼用心深くなつたのを不愍に思つた。吾々は、よく哥路を伴つて出たが、彼れは振りかへり／＼して、決して主人より二間と先きへは走らなかつた。戯れに、二人が物陰に身を隱しでもすると、强いては搜さずに、さつさと家の方へ戻りはじめたものである。座敷へ上り込む癖はなくなつたが、それでも時折、玄關の障子を破つて、梯子段を登つて來た。さういふ場合は、たいてい、下に人影が見えない時で、つまり、二階に居る吾々の側へ來たいのであつた。

其うち、又ぞろ、彼れ等に交尾期が周つて來た。大塚の家と違つて、田端の家は、四方が荒れ亂れた枳殼垣であつたから、犬共の侵入を防ぎやうはなかつた。私は、やはり、哥路を凡犬に委す事がいやだつた。庭に這入り込んで居る犬を、物干棹でひつぱたいたり、二階から鐵槌の手裏劍を飛ばしたりした。其時、哥路に集つて來た雄犬は四五匹で、其なかに、一匹栗毛の宿なし犬が居た。そ奴が最も、執念く哥路を挑むで居たが、遂に征服したのを知つた時、私は無性に腹が立つた。彼れ等は、千代やちゑ子が叱咤したのでは、いつかな動かなかつた。私の姿を見ると、哥路の傍から逃げ退きはするが、木の蔭や、垣根の外を、精悍にだくを踏みながら、唸りつゝ歩き廻つて、容易に立去らなかつた。殊に、赭と白との大きな斑犬は、私に攻勢をさへとる時があつた。彼の宿なし犬の栗毛は、そ奴のために、屢々嚙み伏せられて居た。犬の戀は命懸けだ、といふ事は聞いて居たが、私は、吾が哥路の騎士達が、晝夜をかけて、私の家の周圍に、苦鳴を發しつゝ捲き起す、其爭鬪のすさまじさに呆れかへつたのである。氣の弱い哥路は、雄犬共の包圍のなかに、食を絕し、夜も殆ど睡らずに、熱した舌を吐いて居た。哥路は自分と同じ位の大さの黑斑を一番好いた。其犬は、私の

姿を見ると、尾を掉つて近づいて來て、足で頭でも撫でゝやると、横倒れになつて四つ足でじやれついたりした。彼れは、立派に首輪で飾られた主人持であつたが、哥路を見守つて、幾日も食ひに歸らなかつた。哥路を戸の內に隱して置いた夜などは、彼れは其戸の前に蹲まつて朝を待つて居た。おかしいのは、ちゝ子が心配して、時々食を與へたのが緣となり、其後永い間、彼れが哥路と同棲して居た事である。神は、此交尾期に於て、哥路に、黑斑の仔を二匹に、栗毛の仔を一匹産ましたのであるが、それがために哥路は、憫れにも啞となる程の苦難を負はねばならなかつたのであつた。

○

此年の夏を、私達は信濃の長倉村に暮した。其處は、淺間山麓の、落葉松林の間に拓かれた小規模な避暑地で、輕井澤の繁榮の蔭にかくれて、世には廣く知られて居ないが、溪流に臨むで、地主の經營して居る、沸し湯の溫泉宿や、製材所などがあり、其周圍の小山の落葉松が伐り拂はれた跡へ、ぽつ〳〵と別莊が建てられて居る――夏の夜はよく、濃霧の底に埋めらるゝといふ、高原の或窪むだ地域なのである。私は一時田端の家をたゝみ、哥路も伴れて、七月十二日に其處へ往つたのであつたが、高崎あたりから烈風になつた天候は、吾々が沓掛驛に下車する頃は暴風雨に轉じて居た。私は、春以來、とかく病弱であるちゝ子を、風雨の揉み碎かうとする、かうもり傘のなかに庇ひながら、吹きさらしのプラットホームをぬけて待合室へ這入つた。其處には、溫泉宿から迎ひの人が來て居たので、其人達に荷物の事を托して、自分は、後尾の貨車に積み込まれた筈の哥路を見にいつた。見ると、雨のしぶきの烟をなして跳ねかへるプラットホームの遙か先の方に、黑い、犬の箱が唯一つ置かれてあつた。私は駈け出して其處へゆき、恐怖して縮こまつて居る哥路を受取つた。哥路は、襲ひかぶる風雨を、這ふやうにして耐えながら、私の駈け戾る後に續いて走つた。私達は、其風雨のなかを、更に山の方へ、十八丁ばかりも、嶮惡な道路を行かねばならなかつた。で、驛前に待つ、星野溫泉の迎ひの馬車に、荷物と共に乘り込んで出發したが、驚くべき馬車の動搖の度に、二人の面上へ落ちかゝつて來る、大きな鞄を私は片手に支へ、一方の腕では又、恐れて車外に飛び出さうと、もがく犬を抱きしめて居ねばならなかつた。其上、大峯を驅け下つて、山峽に碎けるすさましい風の叫びや、其合間々々に、耳近く轟々と漲る川瀬の音に脅かされ通したの

である。

溫泉場は、母屋を正面に、兩側へ、事務所、浴場、別莊なぞが建てられてあり、大きな池が二つあつて、澤山の鯉が其處に放たれて居た。私は前からの注文で、其水に面した別莊の下座敷二間を占領する事が出來た。着いた日は、雨に掻き消されて、其處からは母屋さへよくは見えなかつたが、翌朝の眺めは私を悦ばした。星野の領域は、落葉松の密林に蔽はれた低い山々に取り卷かれ、唯、西南にやゝ濶く開いて、其處に、草津街道に沿ふ豐饒なる林區と、遙に、甲武山脈の雲の光りにぼかされさうなのを見る事の出來る、左に溪流を擁した、山懷の庭のやうな所なのであつた。

私は、此避暑地に、私に就ても、哥路に就ても、又ちゑ子に就ても、澤山の思ひ出を有つて居る。私は、丁度骨牌の一枚々々を打ちおろすやうに、夫れ等の思ひ出の片々を次に列べていつて見たいと思ふのであるが、悲しいかな、哥路に屬するものだけは、殆、黑札なのである。

○

哥路は夜の間、上り口の狹い土間におかれたが、其處へは落着かずに、私共が、朝、起きて枕元の障子を開けて見ると、きつと其處の椽側へ來て寢て居た。初めのうちは、時々障子を破つて、座敷へ顏を出して睡つて居たものだ。戶が開けられると、勢ひよく外へ飛び出すが、決して遠く遊ばなかつた。母屋の方にも、エスといふ、黑毛の、頗る無邪氣な獵犬と、其エスにいぢめられるのを歡むで居た當歲の狆犬(一匹共雄であつた)が居たのに、最後まで、夫等の同族と哥路は馴染まずにしまつた。丘の上の別莊の奧さんで、ばかに犬好きな人があつて、まめに魚の骨だの菓子だのを持つて來てくれ、哥路の姿を見れば必ず呼びたゝて御機嫌を取つたが、其人にも哥路はなか〳〵近寄らなかつた。彼れは殊に、兒供を厭つた。兒供達は又「あの犬は恐いよ、ぢきと喰ひ付くよ」と、云つて遠くから石を投げつけたりした。一たん失はれた彼れの食慾は、少しつゝ戾つてくるやうであつたが、懶げに終日日蔭を追ふて移り、そして時々、魚の腸のやうなものを吐いた。又、急がしく草原へはいつて、鼻で掻き分けながら何か探して居る事があつた。夫等は、すべて姙娠を證する惡阻の徵候であつたので。私は、哥路が、きやしやな身を以て、休む暇なく、生殖に奉仕し、段々に體力を亡ぼ

してゆくのを眺めて氣の毒でならなかつた。

○

溫泉場の上に展つて居る草野へ、私は、度々哥路を伴つた。襯衣一枚のなりに、鍔の廣い麥藁帽子を冠り、洋袴のかくしにパン菓子などを忍ばせて、それを道々哥路に與へ、自分も喰ひながら、あの、夏草の花の咲き亂れた、草津街道が流れのやうに其央をよぎつて居る、濶い緩かな斜面を散歩する事を好むだ。必ず小さな繪の具箱を携へてゆき、何時見ても氣に入る、東方の、落葉松山を寫生する事にして居たが、私が其處へ行くのは大てい午後であつたから、きつと風が出て來て、盛んに雲を動かし、野を、山を、さまざまな彩と形に染めわけて見せた。時には、大きな雨雲がさしかゝり、草の汗の蒸されるなかに、一としきり、氣持のいゝ雨の粒をうける事がある。さういふ時には、私の愛して居る山の肩に必ず虹が描かれるのであつた。哥路は私が、草のなかに座つて寫生して居る間、私の膝に凭りかゝつて睡る事もあるし、近くの草叢に何かを見つけ、慌しく地を搔いて居る事もあつた。特に紅の冴えた撫子とか、稀に咲いて居る野生の百合の花などを見つけると、私はどんな深い草叢にでも踏込んでいつた。哥路も續いて飛び込みはするが、彼れの脊が低いために、あらゆる草の葉尖で顔を突かれるので、段々おくれてしまい、全く私を見失ふと、街道まで引かへして心配さうに待つて居た。或時、朝早く此處へ花を採りに來た事があるが、哥路は其時、露に濡れて、顔も腹も水を浴びたやうになつて歸つた。

○

ふと浴場の裏手の丘の上へ登つたら、靜かな午前の陽を浴びた、赭肌の淺間が、眼一つぱいに跨つて居た。山巓の、朱い斷面を現したあたりから、金色の淡い煙が無限に湧き出して、青空へ、匂ひのやうにまさつてゆく。——私が、それを飽かず眺めて居た時。哥路も、同じ方に顔を向けて飽かず眺めて居た。

○

或日、だしぬけに雷雨に會て、製材小屋へ逃げ込んだ事があるが、其時哥路は鋸屑の池へ轉げおちて、鋸屑だらけにな

つて歸つた。

○

午後の陽が照りかへして、額が火照るほどな、峙つた草山の腰を、半日に二度位、落葉松の丸太を積むだトロリ（あの邊ではトロツコと云はない）が通るが、或日、其トロリの軌道について深入りした事があつた。幽邃な山塢の響は聽えても、溪には下れず、木影もないので、歸り路には人も犬も、昏倒しさうになつた。其時、私は、廣く砂土の現れた處で、だいぶ上の方ではあつたが、木苺の實の片手に一杯位もなつて居るのを發見して、大いに悅び、すぐ樣其處を這ひ登つた。哥路も眞似して這ひ登つたが、兩者共、する／＼と辷り落ちて、とう／＼苺はとれなかつた。やつと、水のある處まで歸つた時、哥路はいきなり其處に腹を浸して居た。

○

二人が、午後から、私の親達の住む大屋驛へ行つて、翌日歸つた事がある。星野を出る時、二人の後を追はないやうに、一たん哥路は柱へ緊かれたが、ちゑ子の同情でまたほどかれ、彼れは沓掛驛へついて來て、吾々が列車へ乘り込む後から素早く飛び込むで、腰掛の下へもぐつてしまつたのには困つた。私は勿論、抱き出して追ひ歸した。ちゑ子が室から見守つて居て、「あ、哥路さんが歸つてゆきますよ」といふので、見ると、驛前の坂になつた廣場を哥路が尾を地に曳いて、星野の方へ走つて居るのであつた。だから、私共は、哥路が一と筋に別莊へかへつた事と思つて居た。處が、翌日歸つて聞くと、哥路は其晩の十一時頃に歸つて來たといふのである。哥路の歸りが遲いので、夕方星野の俥夫が驛の方へ搜しに行つてくれたさうで、其時、郵便配達の小供や、馬車屋などに聞いたといふ話を綜合して見るに、哥路は汽車の走つた方角に、夜までも走りつゞけて又立戾つたのであるらしい。彼れは、此後も、吾々が大屋へゆく時には必ず送つて來た。そして、賢しくも、私達が改札口を出ると、すぐ引つかへしていくのだつた。或時は、吾々が馬車で行くのを追つて來たが、身重な彼れは、思ふやうに駈けられず、だん／＼と馬車から遠のくので、途中で馬車を止めて賢ひ、追ひついた彼れを抱き取つて又馬車を駈らした事もあつた。

○

一と頃、毎日のやうに、夕飯前の時間を、私は、ちゑ子と前の溪川へ下りて、石の上を傳つた遊むだものだ。哥路も負けずに、大きな岩石を這ひ登つたり、流れを飛び超えたりしてついて來た。併し、吾々が、落葉松の幹を渡した危い橋のむかうから、わざと、はげしく彼れを呼むだ時には、哥路は急湍を覗いて、悲しい聲を出して焦るばかりで、とう／＼渡つて來れなかつた。高い岨の下に、流れの廣く澱むで居る處があつたので、私が、哥路を二三歩水の中へ持ち込んで放したら、彼れは少し流され氣味に、でも、巧者に泳いでむかうの岨下に這ひ上つた。滑稽なのは、それ以來、水の近くで私が抱き上げると、すぐ四足を宙に搔いて泳ぐ形をする事であつた。

○

製材所の上の崖端に、布と棒とで日よけを造つてもらつて、私は大きな畫布を、かれこれ五十日も其處へ擔ぎ出したが、あの時の日課は樂しかつた。朝飯をすますと、涼しい仕事着になり、私が、片手に、長い畫架を椅子にさし込んで擔ぎ、一方の手に、大きな畫布を提げて前にたつと、ちゑ子が、筆をさした調色板と、テレピン油の壜を持つて從ひ哥路が其後先に駈けて、一同、草上の畫室に出張るのであつた。私は、其處で、「溫泉路」と題した、街道、矮屋、植林地などを容れた、散文的な風景畫を收穫したのであるが、自分の筆から逃げかゝる自然を險しい顔になつて追かけたり、觸に愉快な律が生じてひとりでに口笛を吹いて居たり、卷煙草を吹しながら畫面の氣に入つた一部分に眺め入つたり、蹉跌なく一日の仕事を終へた滿足さに、畫架の下に脚を伸して睡つて居る哥路を抱き取つて、一しよに草の上へひつくり返へつたりするのであつた。仕事の終る頃にはちゑ子が別莊から迎へに來た。そして、來た時のやうな行列でかへるのであるが、丁度其時分に、驛から郵便配達の小僧がやつて來るので、手紙の一と束を其處で受取る事か出來た。晝飯を腹一つぱい喰べたあとで、寢そべつて、其日の手紙と新聞を讀む事は、二人の大いなる愉みであつた。その新聞紙を顔に冠むつたまゝ、一睡を貪る事は更に大になる私の樂みであつた。食後の二時間ばかりは、私も、ちゑ子も、哥路も午睡をやつた。目が醒めてから、私は更に小さな畫を描きに出る事もあり、ちゑ子が寫生をして居る背後の土手に

上つて、其處の樹陰で雜誌を見たりする事もあつた。八月も半ばをすぎると、朝夕は冷えびえとして、暮れ方からよく霧が捲いて來た。落葉松の下葉は、いつか煙草色に染められ、野は、其歲の終りの花に飾られた。哥路は、だん／＼身重になつた。食欲も健かになり、乳房も膨むで、漸く、產期の近づいた事を示した。吾々の後に從いて步むのも懶氣と見えて、たいてい家のまわりの日陰に、大きな腹を横にして寢て居た。其母らしい寢ざまを見ては、ちゐ子も、私も別莊の奧さんも、其頃二階を借りて這入つたN氏の夫人も、共に、間もなく產れやうといふ仔犬の話に興がつた。

○

或夜更けに、二人は、どさり、――といふ變な物音に目を覺して、だまつて顏を見合せたが、續いて聽える板を搔きむしるやうなさわぎに、「あつ、哥路だ」と云つて跳ね起きて椽側へ出て見ると、哥路が横倒れになつて、四足をもがき、目を引きつつて、口から夥しく泡を吹いて居るのであつた。私は、これは斷末魔だ、と思つた。水を取つて來て口へ注ぎ込まうとしても、歯を強く、くひ緊つて居て駄目だつた。其うちに痙攣はおさまつたが、今度は全身を、ぴくり／＼やつて、くい合した歯の隙から、泡と共に鈍くかすれた唸きをたてるのであつた。二階からN氏の二人も寢卷のまゝで下りて來たが、皆、どうしやうもなくて、唯、苦しむ哥路を圍むで見て居た。少時すると、哥路は倒れ／＼して、暗闇の方へ三尺ばかりも步き、又鋭い痙攣に打ち倒され、泡をながして呻き苦しむのであつた。私は蠟燭の火をよせて、彼れの體中を檢めたが、何處からも血は出て居なかつた。周圍にも別狀は見えず、唯、ねばつた泡の、引ずり搔きまわされた跟が、階段の下にも夥しくあつて、其處には小便も流れて居た。哥路は、まさしく階段の上から墜落したのである。田端の家でのやうに、一段々々登つて居るうちに、腹の重さを考へなかつた彼れは、度を失つて俵のやうに轉げ落ちたのであらう。――やがて、哥路は、よろけながら立上り、少しばかり水を飮む事が出來た。そして、やはり暗い方へゆかうとするので、私は彼れを長い細引で柱へ繫いで置いて、皆々寢床へ引きとる事にした。哥路は、其夜中、紐の長さのゆるす限りをこと／＼と音をたてゝ馳け廻つて居た。其の不穩な脚音に睡つかれないちゐ子は、眉をひそめて、私に、「哥路は氣が違つたのではないでしやうか」と云つた。翌朝も、哥路は幾度か怖い痙攣に襲はれた。吾々

が、これを捕むで、動はらうとすると、却つて傾さがつてよろけながら、人の居ない方へ數步行つて佇つて居たが又步き出して、彼れが暑さの盛りに捌りあけた側の横手の其穴から、椽の下へ這入つていつたつきり、いつまでたつても出て來なかつた。

哥路は、翌朝になつても姿を見せなかつた。二人は不安になつて、彼れの這入つた穴の處で、彼れの名を交り〳〵呼むで見たが、出て來なかつた。私は腹這ひになつて、穴に耳をつけて見た、が、哥路の氣息すらも聽き取れなかつた。哥路の噂を聞いていろ〳〵な人が見舞に來てくれた、皆、哥路は椽の下の奧深い處で死んで居るだらう、と云ひ合つた。私達もさうらしく思つたが、やはり、日に幾度となく其穴に口を寄せて名を呼むでみた、又水を容れた茶碗をその口元にさし置いたが、水は翌日も其まゝになつて居た。二人は哥路の死を考へて、食事の時も、散步の時も、哀感に囚はれ、幸かに彼れを失つた身邊の淋しさを語り合つた。處が、哥路が椽の下へはいつてから丁度四日目の午後であつたが、ちゑ子は、例の穴に哥路が鼻面を出して居るのを見て、慌しく私に知らしたので、急いで行つて見ると、彼れはもう引つ込んでしまつて居た。併し吾々は、彼れが生きて居た事を知つて急に元氣づき、どうかして彼れを引き出して、玉子なりと水なりと飲ませやうと、長い間、穴を見張り、或は羽目板を外して、椽の下へ首をさし入れて呼びたてたが、哥路はなか〳〵姿を現さなかつた、だが、其明る朝、私は、穴の口に哥路が首を出して居るのを見つけて、ちゑ子にそれと告げた。ちゑ子が急いで、砂糖水と攪いた玉子を作つて來て與へると、彼れは、玉子を半分ばかりすゝり、砂糖水は皆飲むでしまつた、私が其處から引き出さうとするには哥路は堅く尻込みしたが。二人が頭を撫でゝやるのを煩さがりはしなかつた。哥路が身づから、久しぶりで、椽の下を出て來たのは、其日の午後であつた。げつそり瘦た顔は涙によごれ、舌を吐いた口もとからは涎をながして、よろ〳〵と吾々の居る椽先に歩いて來たのであつた。見て居るに、彼れは神經痛に惱むらしく、時々、半面を苦しく蹙めては、片脚を折まげて顫えた。哥路はそれから二日ばかりの間、日に一度か二度は、穴から出て來て、與へられる玉子と砂糖水を飲み、そして少しづゝ體力を恢復していつた。哥路の腹のなかに、胎兒が死むで居るだらうとは、皆の考へる處で、私は、其死兒を流產してしまはない事には、哥路の痙攣は

なほるまいと思つた。處が、間もなく、哥路が、無事に分娩したのを見て、吾々ははじめて、あの時に哥路が、腹は打たずに、強く腦を打つたのである事を悟つたのであつた。そして實は其時まで、哥路が啞になつてしまつた事にはちつとも氣が付かずに居たのである。

○

いち子が東京へ歸らうといふ前日は、二人共大屋へ行つて、翌朝歸つて來た。歸つて見ると、哥路が仔を産むで居た。

『牧さん、産れましたよ。ほら、こんな可愛らしいのが』

と、N氏の夫人が、重ねた袖のなかに抱いて居た一匹を見せた。それは、白と黒の斑で、鼠のやうに動いて居た。他の二匹は、一寸栗毛の混つた白と、黒斑とであつた。彼れ等は、藁を敷いたビールの空箱のなかで、親のお腹に埋り込み、側目もふらずに乳を吸つて居た。いち子も私も、哥路が一匹も死兒を産まなかつたことを意外に思つた。朝奈掛へ着いた時、迎ひに來て居た馬車屋の小倅が、『奥さん、犬が仔を産みましたよ』と告げると、私はすぐ『産むだ――何匹だ、生きて居るかい』と訊いた。『生きて居るとも、せつこうよく乳を飮つて居まさあ』といふ答をきくと、二人は心から嬉しくなり、乳の出の少なさうな母犬のために、雜貨店へ立寄つてミルクを買つて歸つたのであつたが、哥路の乳の出は思ひの外多く、三匹の仔犬を養ふに充分であつた。其日は二人共、哥路の箱ばかり見て居た。自分等ばかりでなく、N氏夫婦も、山の別莊の奥さんも、宿の女中達も、其頃、下の四疊へ宿つて居た私の知り合の畫學生のT子さんも、皆其處へ集つて、交りがわり仔犬を持ち出しては、椽側を這はしたり、小指を吸はせたり、懐へ入れたりして面白がつた。哥路がお産をしたのは晝間で、庭の櫻の木に長い紐で繋いで置かれた時の事であつたさうだ。T子さんは、其時の様子を、

『私が、お飯をくれやうと思つて櫻の木の處へ行つて見ますとね、哥路が地べたへ一匹産み落して苦むで居るのです。櫻の木をぐる〳〵廻つたものだから、紐が短くなつて首が締まるんですよ。ですから、紐を解いてやりましたの、それから、あとのを産むだのですが、三匹目のはなか〳〵手間がとれて夕方までかゝつて居ましたの。私、産む處を見度い

と思つて、ずいぶん注意したですのに、とう／＼産む處は見せませんでしたわ」と話した。

ちゑ子が發つてしまうと、私は思ひの外淋しさを感じた。蹤いて來る犬もなく、一人で朝めしを掻つ込んで、崖端の畫室へ出かけ、とつくにアルスの神に捨てられて居る、已れも亦倦き果てた畫面にくりかへし拘泥して、潔くない半日を送らねばならなかつた。其境遇で、仔犬をおもちやにする事は唯一の私の慰みであつた。藁のなかに落して歩く昆蟲のやうな金色の糞が可愛らしかつた。丙者に齊路の乳房を採みながら、驚く可き活潑さを以て乳首を啣へて引つぱる樣子が可愛らしかつた。急に母犬に立上られて、三匹共に乳房を啣へたまゝで吊下る格恰も可愛らしかつた。細い伽羅蕗のやうな臍の緒を藁の間に、いつか落して居たのも可愛らしかつた。唯、不安なのは母犬の樣子であつた。彼れは、むしろ仔達を煩さがり、箱のなかに臥るのをいやがつて、ぢきと飛び出してしまつた。全く啼かず、唸かず、或時は、何物か求める風で數歩の間を小走りに、右と左に驅けて居たり、或時は又、夢見る樣に佇むで、人が動はれば避けて去り知らぬ顏をして居る時には近寄つて來たりした。そして、とう／＼、冷えびえと雨の降る朝、突然見えなくなつて、一晩中歸つて來なかつた。これには私は困つてしまひ、仔犬等は又箱のなかに啼きつゞけた。N氏の夫人と、T子さんと、私とで一匹づゝ受持つて、ミルクを溫めては、タオルの端や筆の尖にそれを浸して口を開いて絞り込んだが、なかなかうまくゆかなかつた。小指につけて吸はせると、焦つて痛い位に吸ひ込むだ。夕方私は、宿の主人に頼むで、脊掛驛へいつて三つの護謨の乳首と、管とを買つて來てもらつて、それで吸はせやうと骨折つたが、乳首が彼れ等の口には大きすぎるのと、腹の立つ程焦つて、吸ふよりはむしろ噛むやうな事をするので、それもまたあまり成功しなかつた。其夜は三人共仔犬等のために睡むれなかつた。寒からうと云ふので、三人が一匹づゝ、綿や、タオルにくるむで懷へ抱いて寢る事にしたが、もがき出して決して靜まらず、頻繁に尿と糞とをやらかすのに僻易してしまつた。深更に、三人は乳を飲せに廊廓へ集り、互ひに、此、ひねり餅のやうにたよりない小さな生物の、思ひの外の活躍に持てあます事を語り合つた。そして手提籠に綿や艦を厚く敷いて、三匹をそれに寢かす事にしたのであつたが、吾々は徹宵彼れ等の悲鳴のために安眠する事は出來なかつた。

翌日の暮れ方、宿の年寄が、雨に濡れしよぼれた哥路を捕へて來てくれた。「何でもお晝頃、哥路が料理場に這入つて來て、豚肉を貰つて喰べて居たと申すので、氣をつけて居ますと、只今、ひつよと、納屋の處へ行つたら雨の中にぼんやり立つて居たので、すぐと捕へて來ました。何でも、馬車屋の小僧は、お晝前に、脊掛路の原つぱで哥路を見かけたといふのですが、奴、或は藥草を探しにいつたのかも知れませんて、』といふ老人の言葉であつた。吾々は、哥路の歸つて來た事を深く歡むだ。『仔犬達よりは僕等が助かりましたよ』と、云つて安堵した。そして、ずつと、細引で繫いでおく事にした。お七夜には、三匹共、いたづらな人間によつて、夫れ〴〵命名された。いづれにも、哥路のろの韻をふまうといふので、私は長女をはろとつけた。次女は、額にお婆さんのやうな皺があるといふので、N氏の夫人がばろといふ名にしだ。三番目は、不良少年の栗毛が極といふので、T子さんによつてふろといふ名を與へられた。ふろとばろとはろとは、眼が明かなくとも、既にめい〳〵に異つた天賦の氣質を示して、命名者等の無聊を充す日々の糧となりながら、極めて幸福に育つていつたのであつた。

○

九月の五日に、私は哥路の親兒を携へて上京した。ちゑ子が借り置いてくれた家は、元の家の近くで、田端軒といふ小さな西洋料理屋の裏手にあつた。私は着くと、何より先に、犬の箱を庭へ持込んで、すぐと哥路を出してやつた。驚いたのは仔犬等が、母犬にはげしく踏まれたと見えて、半死半生になつて居た事であつた。殊に、ばろなぞは、腹にびく〳〵脈を搏つのみで起き上りも出來なかつた。哥路は又、恐怖の面持に目を見張り耳をたてゝ、箱から出されるとすぐ椽の下へすくみ込んでしまつた。私は哥路を引き出して牛乳をのませ、それから哥路を横に臥して、仔犬に一つ々々乳首をふくましてやつた。すると、ふろだけは、すぐとかぶり付いて急しく吸ひ初めたが、他の二匹は吸ひつゞく元氣も見えなかつた。無論、私は其二匹は死ぬものと見た。そして、母犬に對する怒りが湧き上つて來て、『馬鹿奴!! 仔を踏み殺す親が何處にある!!』と、哥路に向つて怒鳴つたのである。併し、思ふやうでもなく、翌朝、仔犬等は、打連れて僅かに乳を吸つて居た。ちゑ子は、こう乳を吸はれては哥路が痩せてしまうだらう、と云つて、玉子や、スープを振

舞つて、母體を劬わつて居た。

二三日すると、私も、ちゑ子も、其家の住み心地の惡いのに耐えられなくなつた。そして、急に、家を日暮里にときめて、すぐと引越しにかゝつた。引越しは手早く捗つて、正午頃には最後の荷車を送り出し、私は近所に挨拶をすますと、淺い染馴の家には何の未練もなく、寧ろ、すがすがしい氣持で俥を日暮里の新居に驅つたのである。

來て見ると、日暮里の方も手廻しよく片づいて居て、座敷に茶ぶ臺が出され、其上に鰻丼が列んで、お燗が添へられ、晝飯の仕度がすつかり整つて居た。庭を見ると、犬の箱があつて、仔犬共が三つ共首を伸して這ひ出さうとして居た。私は其時、ハツと、哥路の事に氣が付いた。そして、急しくちゑ子に、

『哥路はどうしたい』、

と訊いた。

『………あなた、お連れになりませんでしたの？』

と、彼の女は反問した。

『連れて來るもんか。お前が哥路を俥で連れてくる筈だつたぢやーないか――忘れたんだね』。

『え、さうでした、だけど、わたしが、仔犬と一しよに哥路も連れて來やうとしたら、あなたが、別々に連れてゆけ、と、お仰つたんですもの、それに、早くゆけ、早くゆけ、とお云ひなさるし、其處へ丁度俥屋さんが來たもんですから慌てゝ、こつちへ來てしまつたんです。………あなたがあつちをお出になる時に、哥路は見えませんでしたか？』

『見えなかつた、併し、お前が出てから、臺所の處に來て居たよ……僕も其時、自分が一しよに連れてゆかうと思つて居て、いざ出かける時に、あいつの姿が見えなかつたもんだから、つい、忘れてしまつた――困つた事をした、ともかく、すぐと行つて見て來る。』

こう云つて、私は、まだ門の處に居た、俥に飛乘つて、田端へ引つかへして見た。そして、裏木戸から庭へ這入つて、限なく探したが見えなかつた。私は又、戸締のしてある表口の處に、長い間佇むで、彼れが尋ね戻つて來ないものでも

なからうと、待つたが、それも空しかつた。私は、不吉な豫覺に氣も沈み、何となく狼狽した氣味で、往來の四方に目を配りながら、日暮里の家へすごすご歸つて來た、見るなり、ちゑ子は

『哥路は、……駄目ですか？』

と、泣顏をして訊ねた。

『駄目だ、きつと、奴め、近所へ一寸遊びに出掛けて居て、戻つて見ると、空屋になつて誰れも居ない——さては、又置き去りにされたな、と、夢中に外へ走り出して、其處ら中を驅け廻つて居るんだらう。……一體お前が惡いんだよ』。

『だつて……あなたが、私の出た後で、哥路を見たとお仰るぢやーありませんか——そんなら連れて來て下さればいゝのに……』。

『……哥路が不運なんだ、今度は、いくら哥路でも、此處が分りつこはない』。

『え、それは無理です、けれども、あつちの家へ探しに戻つて來るかも知れませんねえ、今度は私が見にいつて來ます』。

『む、さうだ、僕も夕方、又行つて見る』。

往つて見たちゑ子は、空しく歸つて來た。私も、夕方から出掛けて、田端の向ひの氷屋の店先に腰掛けて、二三時間も、あたりに目を張つて居たが、白い犬すら見えなかつた。田端軒の神さんは、お客の代る度に訊いてくれたが、『そんな犬が、暮れ方、田端の停車場の橋を渡つて居た』と、いふ人もあるし、『その犬だらう、さつき學校の橫丁で見受けたつけ』などといふ、手がゝりのない答へばかりだつた。

それからの一週間ばかりは、ちゑ子と、私と、千代とが、交り々々、時間を分けて、田端軒の近邊を廻つて歩いたがとう〳〵哥路には出會なかつた。

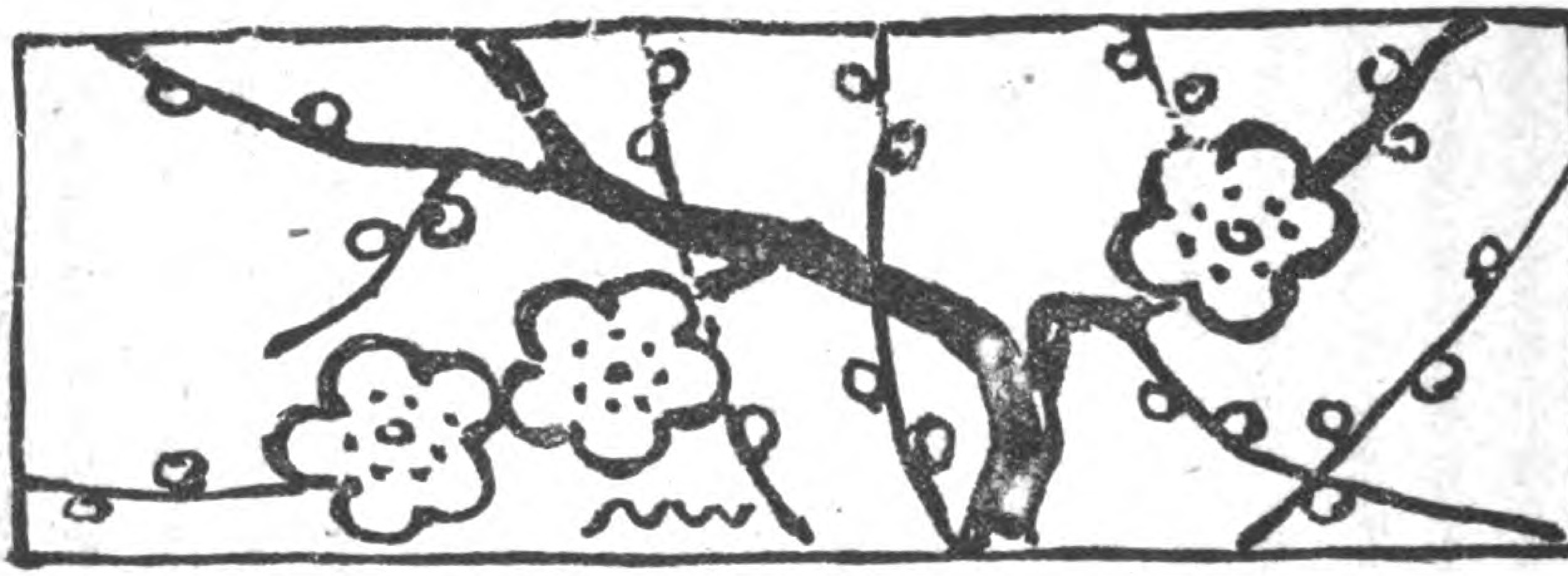
それから、十日たち、一と月たつた。ちゑ子は針仕事の手を休めて、嘆息するやうに。

『ほんとに、哥路はどうしましたらうね。死んだでせうか』。

と、私を見あげた。私は、

『多分、殺されちまつたらう。吠えない犬は狂犬と思へ、といふからね。それでなくとても、哥路の近來の風は狂犬じみて居る。……………可哀さうな犬さ。さんざん不幸な目を見た上句、やつと、こちらが、あれの生涯を請合てやると、今度は、ほんに一刻の錯誤で、永遠に會へないわけになつてしまつた。……………運命だね』。

と、答へた。(八年二月十九日)。



畫舫記

谷崎潤一郎

此れは本誌先月號に載せた蘇州紀行の續稿である。其の積りで讀んでくれるやうにちよつとお斷りして置く。

天平山と云ふ山は、山と云ふよりも山の模型と云つた方がいゝくらゐに可愛らしい。勿論東京の愛宕山ほど小さくはないが、武州の高尾山なんかに比べればずつと低い。麓から見上げると、たつた一本の峰が筍のやうにすつくと聳立して居るだけである。其の筍の表面のところどころに奇岩怪石がひつ着いて居る。形はいかにも仙骨を帶びて居るけれど、全體が玩具のやうに小規模である。此の山に向ひ合つてもう一つ同じやうに可愛いゝ山がある。突兀としたのと圓々としたのと形に於いて趣は違ふが、可愛らしさから云へば奈良の三笠山にも似て居る。私の佇んで居る麓は、ちやうど此の二つの山の谷間にある幽邃閑雅な一境地であつた。紅葉は山の上よりも寧ろ其の谷間の方に多い。さうして日本の楓樹とは大分枝振りを異にして居る。太い、幹の眞黑な、ぶつきらぼうな豪壯な大木が、此處彼處に柱の如くぽつりぽつりと立つて居る。其の幹の縁に紅葉が紙を刻んだ如くちらちらと着いて居るのである。從つてあたりが一面に眞赤になるやうな陽氣な景色ではない。却つてしつとりと落ち着いた、わびしい感じのする紅葉である。時候が暖かいので、まだ充分に赤くなり切つては居ない代り

に、茶褐色を帶びた清澄な葉の色と、鐵のやうに黒い幹の色との對照が頗る美しい。其の細やかなきらきらとした葉が、一つ一つ數へられるほど鮮やかに、風に吹かれつゝ神經質に顫へて居る。幹から落ちて、くるくると舞ひながら、矢の降るやうに音もなく散つて行くのもある。宋の范仲淹の爲めに建てたといふ天平山白雲寺の白壁は、其れ等の楓樹の間に見え隱れして、山の麓を取り圍んで居る。しかし案内者の女將は、例に依つて其の寺には一顧も與へず、歩くより外に仕事はないと云つた風な樣子で、傍目も振らずにどんどん山へ登り始める。

「あそこにお寺があるやうだが、あれは何と云ふお寺だね。」

私はわざと空惚けてから尋ねてやつた。

「さやうでございますね、あのお寺は何と申しますかね。みんな此處のことを天平山と申して居りますが、……」

案の定案内者は此の寺の名をさへ知らない。

「山の上へ登ると何があるんだね。」

「別に何もある譯ではございませんが、大層見晴らしがようございます。」

こんな事をにべもなく云つて、女將は委細構はずに登つて行く。私は故意にゆつくりゆつくりと、坂の中途から時々四方を展望しながら行く。女將の影はいつの間にやら見えなくなつてしまつた。

中腹よりはやゝ頂上に近い所に白雲亭がある。門を這入つて廻廊を幾曲りする。廊の左には山を刻んで石を疊み、さゝやかな庭を圍つてある。岩の間に「吳中第一水」の名ある泉が湛へられて、「雲冷泉清」とか、何とか彼とか泉の清冽なのを讃へた文句が、其處ら中の石の表面に彫り附けられて居るけれど、その實水はちつとも綺麗ではない。多少の青味を帶びて、垢の溜つた風呂水のやうに濁つて居る。廻廊の衝き當りの客堂の入口まで來ると、がやがやと云ふ人聲が聞える。例の團體見物のお客樣が中で晝飯を喰つて居るのである。堂の内部は二た間に仕切られて、窓の向うに遠く靈巖山の塔を見晴らして居る。洋服を着た若い人々がテーブルの周りにごたごたと立つたり据つたりして居る間から、奥の部屋に行儀よく鎮座まします二三人の夫人令孃方が見える。支那へ來てから盛裝の日本婦人を見るのは始めてなの

で、私はちよいと好奇心に惹かれて臆面もなく團體の中へ割り込んで行つた。夫人の一人は可なり氣持のいゝ、上品な趣味とすつきりした顔立ちとを持つて居た。南京で支那美人を味はつた後ではあるが、――さう云ふ種類の女と比べては失禮かも知れないけれど、――かうして見ると日本の婦人も滿更惡くはないと思つた。

私よりも一と足先に來て居た女將は、茶を運ぶやら辨當を配るやら大いに斡旋の勞を取つて居る。お寺の坊さんが大きな藥罐に湯を持つて來て、土壘の中へ注いで廻つて居る。昨日私を案内した番頭も居る。その外にもう一人、紺の背廣に鳥打帽を被つた、支那語の非常に流暢な、十七八の子僧が居る。辨當のお餘りが貰ひたさにうぢやうぢやと寄つて來る駕籠舁きや苦力どもを相手にして、此の子僧何か頻りと肩を怒らしつゝ威張り散らして居る。

「此れは私の伜でございます。まだ十七でございますが、此の通り體が大柄で腕節が強くつて、支那人と喧嘩をしたつて負けた事なんぞは一度もございません。あんな強さうな苦力が五六人でかゝつて來ても、此の子僧一人にかなはないんでございますよ。それに支那語の上手なことゝ云つたら、支那人と間違へられるくらゐで英語の方も一と通りはしやべれるもんですから、お客樣方がほんたうに重寶がつて居らつしやいます。此の子僧が一人居れば外の案内者を多勢連れたよりもずつと安心だと仰つしやつて、何處へ行つても引つ張り凧なんでございます。」

無愛憎な女將は、その時だけ特別に丁寧に説明してくれる。

「ハヴ、ユウ、シガレツツ?」

と、子僧は早速番頭に向つて英語を使つた。

「プリース、ギヴ、ミー、ワン」

と云つて、番頭からスリー、キヤツスルを一本貰つて其れをすぱすぱやつて居る。女將の言葉に半分掛値はあるとしても、血色のいゝ、活潑らしい、氣轉の利いた少年である。しかし此の子僧のやうに、十七八の時分から支那人を犬猫の如く取り扱ふ事ばかり覺えて、それで一と角の豪傑になつた積りの日本人ばかりが、支那に澤山入り込まれては支那も隨分迷惑だらう。とは云ふものゝ、此の子僧が小生意氣なのは勿論親が惡いのである。

「日本人を儲けさせるのはようございますが、支那人に金をやるのは一文でも惜しうございますから、」

と、先刻鄭龍昇きと談判する時に女將は云つた。私は其の言葉がひどく癪に觸つた。そのくらゐ日本人同志の爲めを思ふなら、もつと宿屋の設備をよくして、少くとも支那の宿屋より居心地よく泊まれるやうにしてくれたらいゝではないか。私の經驗したところでは、言葉の不便さへなかつたら、支那人の旅館の方がどんなに經濟で、どんなに親切で、而もどんなに清潔だか知れやしない。(尤もこれは南方だけに就て云ふのである。私は後で氣が付いたが、南方ならば支那人のホテルにも大概一人や二人ぐらゐ英語を解する男が居る。たとへ片言でも英語が分れば、支那人の宿屋へ泊つた方がいくらいゝか知れない。經費から云つても半分以下で濟む。日本の宿屋の不都合な事はいづれ何かに書く積りだが、此處で少しばかり餘憤を洩らして置く。)まさか支那に居る悉くの日本人が、「支那人に金をやるのは一文でも惜しい。」と云ふやうな、淺はかな了見でもあるまいけれど、折角遊びに來てもさう云ふ野卑な同胞に遇ふ事は、あまりいゝ氣持がしない。此の女將なぞは女だから仕方がないとして、先づ男子から支那人に對する態度を愼重にして欲しいものだと思ふ。

瀏館の連中が引き揚げた跡で、私は獨り悠々と辨當箱を開いた。窓の外に見える靈巖山はぼんやりと青く霞んで居る。傳説に依ればあの山に昔館娃宮と云ふ宮殿があつて、其處に西施が住んで居た。彼女が花の晨月の夕に琴を彈じた琴臺の跡もあると云ふ。

　　館娃宮中麋鹿遊　西施去泛五湖舟

と云ふ「聯芳樓記」の中にある蘇臺竹枝曲の文句が想ひ出される。五湖とは太湖の事であつて、あの山の頂に登れば、比叡山から琵琶の湖を瞰下すやうに展望する事が出來るさうである。西施と云へば、歴史上の人物の名であるよりも、私には何だかお伽噺の中に出て來るお姫樣の名のやうな氣がする。お伽噺のお姫樣としてより外に、私は西施の事蹟を知らない。其のお姫樣の故郷がつひ眼の前にあるのかと思ふと、日本歴史の古蹟を訪ねる場合とは違つて、非常に遠い夢のやうに遙かであつたものが、急に近くへやつて來たやうに感ぜられる。ほんたうに不思議な氣持がする。

此處から靈巖山までは一里半ばかりだと云ふ。行つても見たいけれど、歸り路の運河の方がやつぱり私の心を惹くので、又今度來た時のことにする。

「さあ、そろそろ參りませう。」

と、女將は私を促しつゝ白雲亭を出て、例の如くすたすたと山を下りて行く。今迄無心に山上の風光を眺めて居た私は、再び少しく依怙地(いこぢ)になつて、路の中途から獨りでふいと白雲寺の境内へ這入つた。さうして行きがけに見落したお寺の内部を一つ一つ、馬鹿丁寧に見て歩いた。それほど値打のある建物でもなささうであつたが、無責任なる案内者に待ちぼけを喰はせてやるのが、ひどく痛快でならなかつた。三十分以上も手間取つた揚句、山の麓の表門から悠然と出て行つて見ると、女將は遠くの方で忙然としながら轎籠の前に立ち盡して居た。それで私はちよつと溜飮が下つたやうな氣がした。支那へ來てまで、そんなに依怙地にならなくつてもよささうなものだけれど、どうも性分だから仕方がない。

ところが餘り依怙地になつて私は飛んだ失敗をした。先(さつき)から三十五六の背のひよろ長い男の乞食が、悲しい聲を出しながら根氣よく私の跡を追つかけて來る。どうかすると私の前へ廻つて、地べたに膝を衝いて、悲しい聲を一層悲しくして兩手をさし出す。あの轎籠舁きの婆さんが、坂路を上る時に發した悲鳴とそつくり同じ調子である。「支那人に金をやるのは一文でも惜しい。」と云ふ女將の主義に楯をつく積りで、私は其奴に二錢銅貨を投げてやつた。乞食は喜んで行つてしまふかと思ひの外、其の二錢銅貨を恨めしさうに視詰めながら、猶も頻りに悲しい聲で哀願する。何か斯う歌のやうな節をつけてくどくどと繰り返しながら、前よりも一層猛烈に私に追ひ縋つて來る。果ては垢だらけな穢い手で私の外套の裾をつかむ。此れには聊か閉口して、

「馬鹿!」

と、思はず大聲で怒鳴りつけた。

「二錢やつたら澤山ぢやないか。一體此の乞食は何をぺちやくちやしやべつて居るんだね。」

そこへ女將が飛んで來たので、私はかう云つて尋ねた。

「二錢で不足だと云ふのではございません。此の二錢銅貨は通用しないから、一錢銅貨に取り換へてくれろと云ふのでせう。もうこんな奴に一遍でもお金をおやりになつたら、後から後からと多勢乞食がやつて來て、うるさくつて仕樣がございません。なまじつかおやりにならない方がいゝのでございます。」

から云つて、女將は例の主義を唱へながら、それでも自分の財布から金を出して取り換へてやつた。が、さすがに女將は金をたゞやるやうな主義に外れた眞似はしない。金をやつた代りに、高い所にある紅葉の枝を一二本取つて來させて、やつと腹が癒えたと云ふやうな顏つきをする。

歸り路の駕籠は小娘の方が前を擔いで、婆さんは後へ廻る。よつちらよつちらと舁いで行くので、路の細い所へ來ると、後ろから追ひ着いた驢馬の馬方がもどかしがつて早く早くと催促する。以前の畫舫の待つて居る水邊の碼頭へ着いたのは午後三時頃であつたらう。子供が五六人うぢやうぢやと船の傍に集つて、船頭夫婦と話をして居る。村の子供かと思つたら、其のうちの三人は我々と一緖に船へ乘り込む樣子である。彼等は船頭夫婦の子供なのであつた。こんな子供が私の船に乘つて來たのを、往きには全く氣が附かなかつたが、何處に隱れて居たのだらう。女將は宿屋から持つて來た日本の菓子を出して、其の子供達に分けてやつて居る。暫く岸に繫いで置いたせいか、船の中には蠅が夥しく群つて居た。船はそれ等の蠅を乘せたまゝ、睡い堀割の波を搖がせて動き始める。

もと來た路を二三町漕ぎ戾つて、こんもりとした木の下蔭をくゞり拔けた時分に、左方の運河へ曲つて行く。兩岸は雜草の生ひ茂つた平地である。往きに盆石のやうに見えた山が、此處から遠望すると、後ろ向きに獅子が蹲伏するやうな形をして居る。右側の陸地の草原を切り開いて、別莊を造るのだか墓地を造るのだか、大工が盛な普請をして居る。崖の緣に碼頭を築いたり、立派な石の牌樓を積み上げたりして居る。其の少し先につやつやとした眞黑な壁の家が見える。運河は其處から右手へ折れ曲るのである。

曲ると直ぐに左に方つて遠く虎丘の塔が見えた。今朝吳門橋を通る時に、橋の下から遙かに望まれたのが、再び姿を現して來たのである。塔が彼處にあるとすれば、私の今過ぎつゝある運河の位置も大概推量する事が出來る。我々の船

はやがて程なく楓橋の下へ出るのであらう。淸水の塔が京都の附き物であるやうに、虎丘の塔は蘇州城の附き物であるとも云へる。一昨日始めて汽車の窓からあの塔を眺めて以來、昨日も今日も私は始終あの塔を見つゝ歩いた。蘇州の西北の郊外に出れば、あの塔の見えない所は殆どない。此に於いて想ひ出すのは、度び度び引用するやうではあるが矢張りあの蘇臺竹枝曲の一節である。――

虎丘山上塔層層　夜靜分明見佛燈
約伴燒香寺中去　自將釵釧施山僧

此の詩を咏じた薛蘭英蕙英の姉妹の家は、恰も此の運河の川つゞきなる城外の西閶門のほとりにあつた筈であるから、「虎丘山上塔層層」と云ひ、「夜靜分明見佛燈」と云つたのは、蓋し實際の叙景であらう。姉妹が居た頃には夜な夜なあの塔に燈明が點ぜられて、其れがきらきらと靜かに瞬くのが遠くから望まれたのではないだらうか。それとも塔の傍にある雲巖寺の燈火が見えたのでもあらうか。一體蘇州には此の塔の外にも靈巖寺の塔、報恩寺の塔、それからまだ名の知れない塔が二つや三つはあつたと思ふが、蘇州に限らず支那には塔が非常に多い。日本のやうに平べつたい家の屋根ばかり並んで居るのとは違つて、それがいかばかり附近の情景に趣を添へ變化を與へて居る事であらう。夕ぐれなどに、とある町へと志して田舍路を歩いて來る時、或は汽車の窓に凭つて目的地の近づいたのを眺めつゝある時、遙な平原のあなたからいち早くも我等を迎へてくれるのは塔である。「あゝ彼處に塔が見える。もう彼處が町なのだな。」と思ふ。さう云ふ場合、塔は云ひ知れぬ懷しさを旅人の胸に與へるのである。

岸には、ぽつりぽつりと家の數が少しづゝ多くなつて來る。何處かで鷄の啼き聲がのんびりと聞えて居る。私の行く手には又してもファンタスティックな曲線を描いた石造の鼓橋が、一つ二つと現れて來るのであつた。最初の鼓橋の手前には一二艘の船が和やかな午後の日を浴びて、居睡りでもして居るやうにゆつたりと水に浮かんで居る。一艘の船には洗濯をした着物が干してある。もう一艘の方は苫を懸けて、その上へ一杯に白菜をならべて居る。その橋を通り拔けると、第二の鼓橋が七八町先の靑空の中途に、虹の如く橫はつて居るのが見える。橋の中央の、弓なりに反つて居る弧の

頂邊に、日向ぼつこでもして居るのか、一人の人影が塔の如くぢつと動かずに佇んで居る。其れは黒繻子の服を着た通りかゝりの男が、私の船の近づいて來るのを待ち構へつゝ、欄干に凭れて川の面を瞰下して居るのであつた。右岸の袂に、瓦が堆く積み上げてあつて、傍に一人の女がうづくまりながら竹籠を編んで居る。左岸には一軒の露店があつて、何を賣つて居るのかと思つたら、棚の上にタオルだのタワシだのブラシだのが並んで居るらしい。此の邊はちよいとした村になつて居るのであらう。兩岸には茶館だの、肉屋だの、鍛冶屋だのゝ店が、隙間もなく立ち並んで居る。それ等の家は一様に川の方を背中にして、後ろ向きになつて居るのだが、多くは運河の上へ張り出しのヹランダを拵へ、水と家との關係がいかにも親しみ深く造られて居る。水は家を浸さうとし、家は水に戯れようとして居るやうな、どうかすると、壁作りの家が運河の中に直に浮いて居るやうな感じをさへも與へるのである。茶館や肉屋には、晝間だと云ふのに五六人の村の男らしいのが入り込んで居る。鍛冶屋の店からは、槌の音がカチン、カチンと靜かに優長に響いて居る。村はづれの右角に竹屋があつて、竹筏が幾艘も店の前に繋いてある。われわれの船が其處へかゝると、一人の男が急いで店から駈けて來て、堀割の通路を塞いて居る筏を、力一杯に岸の方へ寄せ付けて居た。

竹屋の角から畫舫は右の運河へ曲る。――

「もう直きに寒山寺でございます。」

と、先から手持不沙汰で控へて居た女將が、忘れて居た案内の役目をふと思ひ出したやうに、間の拔けた聲で云つた。

「はゝあ」

と答へたきり、私は猶ほも一心に川の景色を視詰めて居る。女將は退屈で溜らないと見えて、折々何事をか話しかけようとする。

「上海の方へおいでになりましたら、どうか前どもの本店へ入らしつて、是非一度お遊び下さいまし。彼者では料理屋をいたして居りまして、藝者も抱へてございますし、すつかりもう日本流にやつて居ります。」

私は腹の中で「糞を喰へ」と思ひながら、相變らず木で鼻を括つたやうに、

「はゝあ」

と答へる。女將は張合がなささうな顏をして、袱布の袖を搔き合せながら欠びを嚙み殺して居る。

と見ると、七つか八つになる女の兒が二人、右舷の石崖の上に彳みながら、青磁の瓶を水に浮かべて、それがどんよりと漂うて居るのを、餘念もなく視詰めて居る。向ふからは一艘の船がゆるやかに漕いで來た。船の上で黒い物がもくもくと動いて居るらしいので、何かと思つたら其れは鵜飼船であつた。兩側の舷に五六羽づゝの鵜が止まつて、翼と首とを長く伸ばしつゝ、我れ我れの畫舫と擦れちがひに悠々と通り過ぎて行く。左の岸には横腹を眞紅に塗つて、頭の方に白い眼玉を着けた、鯛の形をした船が泊まつて居る。川筋の正面には又新たなる鼓橋が、優しい姿をして我れ我れを迎へて居た。橋の頂上には、其處にも同じやうに人影が彳んで居る。今度の男は片手に鳥籠を持つて、眞赤な服を纏うた子供を從へて居るのである。

橋をくゞれば、右側の桑畑の繁みの中から、寒山寺の甍がちらちらと覗はれた。寺を間に挾んで前後に重なり合つて居る二個の鼓橋の、先の方のが昨日見覺えのある楓橋に違ひなかつた。われわれを此處まで運んで來た堀割の水は、楓橋の彼方で丁字形に交叉してゐる運河の水と一つになつて、閶門外の市街の方へ押し流れて行くのであらう。

先(さつき)から、河岸傳ひに我れ我れの畫舫を曳いて居た船頭は、やがて綱を手繰り寄せつゝ楓橋の上に馳せ登つて、今その下へ來かゝつた船の中の女房の手に、すばやく綱を渡してやつた。

「山茹行」「俱眞興」

と朱で書いた四角な提灯が、橋の左の家の角に吊る下つてゐる。寒山寺の對岸には支那には珍しい小松の林が連なつて居る。艫の方を振り返ると、夕日がもう靈巖山の塔のほとりに沈みかけて居た。(完)

追記

以上の記事は、わづかに蘇州の運河の風趣の一端を寫生したに過ぎない。私は前號にお斷りして置いた父の重病と云

ふ事情が、未だ取り除かれない爲めに、蘇州の美しさを玆に充分に紹介する餘裕のない事を憾みとする。そこでせめても、「聯芳樓記」の詩文を左に引用して、此の紀行文の不足を補はうかと思ふ。なぜかと云ふのに、「聯芳樓記」に載つて居る蘭蕙姉妹の蘇臺竹枝曲ほど、あの美しい水鄕の氣分を切實に云ひ現はしたものはないからである。——

姑蘇臺上月團團　姑蘇臺下水潺潺
月落西邊有時出　水流東去幾時還

門泊東吳萬里船　烏啼月落水如烟
寒山寺裏鐘聲早　漁火江楓惱客眠

洞庭金柑三寸黃　笠澤銀魚一尺長
東南佳味人知少　玉食無由進尙方

楊柳靑靑楊柳黃　靑黃變色過年光
妾似柳絲易憔悴　郞如柳絮太顚狂

一綰鳳髻綠於雲　八字牙梳白似銀
斜倚朱欄翹首立　往來多少斷腸人

四月一日

中央公論

發行

春期大附錄號小說豫告

▼陽春文壇第一の壯觀▲

志賀直哉　菊池寛

芥川龍之介　廣津和郎

里見弴　成瀨正一

谷崎潤一郎　正宗白鳥

▼本誌獨得の光彩▲

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町	東京堂
同　神田區裏神保町	上田屋
同　京橋區銀座三丁目	東海堂
同　京橋區元數寄屋町	北隆館
同　京橋區西紺屋町	良明堂
同　日本橋區本石町	至誠堂
同　本郷區本富士町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同　北區東梅田町	立盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同　四條西洞院	前田大盛社
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

○定價　金四拾錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾錢但支那を除く）

冊數／國別	內國	外國	
六冊	金貳圓四拾錢	金貳圓八拾八錢	以上郵稅共
十二冊	金四圓八拾錢	金五圓七拾六錢	

▲但し新年號春秋二期附錄號臨時號は各倍冊に付普通號二冊の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金六圓八拾錢外國は金八圓拾六錢の割となれども頁數の都合にて臨時變更することあるべし。

送金注意

一 誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし

一 振替貯金**口座は東京三十四番なり**

一 郵券代用は謝絶す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを拒まず

一 代金引替小包の取扱は一切謝絶す

一 集金郵便の便法を利用せらるゝ方は、**坐ながらにして誌代の拂込**をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし

一金一圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢（集金委託料及送料共）
一金拾圓迄　金八錢

但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌を發送せず

一 受領證請求は必ず返信料を要す

大正八年二月廿八日印刷納本
大正八年三月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　管谷憲治
印刷人　高木酉三

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地
中央公論社
電話（長小石川一四四／小石川三四二〇）
電信略號コウロン

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
秀英舍第一工場

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可
大正八年二月廿八日印刷納本

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE CHUO KORON SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 6,80; Single copy 40 sen including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter



東北振興會主催

東北名産品陳列會

本會はその第一會を大正六年五月に開きまして非常に好評を得たのであります、今回は其第二回で東北即ち青森、岩手、宮城、福島、秋田、山形六縣の特種名産品を集めて、三月五日から二十日迄開會致します。

東京

三越呉服店

中央公論三月號（第三十四年第三號）